

奇譚クラブ

1960年 1月号



1月号

撮影会兼読者座談会
「緊縛モデル撮影風景と女体責の種々相について」語る
司会 辻村 隆

奇譚クラブ

昭和三十五年一月号

1

昭和三十四年十二月二十日印刷（第十四巻一月号）
昭和三十五年一月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十四年十二月二十日印刷（第十四巻一月号）
昭和三十五年一月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

限定版

SADo 特集 3号

定価 ¥ 350.

お申込先
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
天 星 社
振替口座大阪第五〇〇四二番

待望のグラビヤ増頁断行。超デラックス版遂に誕生!

「縛り芸術」の醍醐味を満喫して頂くために、ここに完成した豪華版S特第三集は写真、絵画、文章の三者が渾然一体となっており、その中のいづれの一つをとってもマニアの琴線をかき鳴らす神妙不可思議な魅力を発散し、一たび手に入れたなら絶対に手放すことの出ない貴重な稀少版中の稀少版です。

収載項目の紹介

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1 蛇倉幽閉 | 9 深夜の逆吊り | 17 鼻責地獄 |
| 2 防水服の恐怖 | 10 ムチ打ち開始 | 18 猿ぐつわと煙 |
| 3 股裂きの実験 | 11 美容体操 | 19 森の中の晒 |
| 4 水責め倉 | 12 拷問台 | 20 愛人の危機 |
| 5 哀れな強力 | 13 烙印のX字架 | 21 山小屋異聞 |
| 6 俵吊り | 14 ロック責め | 22 流腸室の女体 |
| 7 持久戦法 | 15 箱詰美人 | 23 白い実験動物 |
| 8 女体裁判 | 16 苦悶の舌吊り | 24 美畜訓練師 |

「狂い咲く稀花特選集」

(グラビヤ写真 百四十八張収録)

- | | | |
|----------|-----------|-------|
| ○佳看一尾 | ○哀美抽出 | ○花坂道子 |
| ○狂花の戯れ | ○応接間の稀態 | ○悦子 |
| ○タイルの冷感 | ○脱し得ぬ拘束 | ○悦子 |
| ○厚遇の座席 | ○苦痛への階段 | ○悦子 |
| ○共通の戦き | ○押込められた艶肢 | ○悦子 |
| ○華美受難 | ○レインコート | ○悦子 |
| ○流れ落ちる美線 | ○ひとばしら | ○悦子 |
| ○友情の表現 | ○泥まみれの青春 | ○悦子 |
| | ○白蝶の不安 | ○悦子 |
| | ○美貌の憤悶 | ○悦子 |
| | ○スポーツライト | ○悦子 |

- 傑作サド読物(挿画・挿入写真多数)
作・塔婆十郎
「地獄の無法地帯」
挿画・薄れい子
- ▽拷問倉庫
 - △女の積荷
 - △おもわぬ嫌疑
 - △吊り責め小屋
 - ▽肉体の太鼓
 - △狡猾な笑い
 - △連綿遊戯
 - △鳴る生太鼓
 - △かけのある男
 - ▽吊り責め地獄
 - △酷使される女
 - △吊り責めの松
 - △脱出計画
 - ▽地獄谷の悲鳴
 - △深夜の椅子責め
 - △仲間の裏切り
 - △悪徳の最期
 - △鼻責め乳首責め
 - △凄絶木馬責め
 - ▽緊縛フオートと緊縛モデル夜話
 - △全盛期前の緊縛フオート口絵
 - △緊縛モデルの素顔
 - △全盛期の緊縛フオート口絵
 - △緊縛フオートと緊縛モデル

☆懸賞愛読者原稿募集☆

規定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで(四百字詰)
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千元以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻希望の方は返送料同封下さい。
- 九、発表に支障のある個所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいいたるものがあるものです。物いわざるは腹ふくめるのとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。

【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

【映画、雑誌、通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

【レポート】 新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フオートを贈呈する準備がござります。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通応募、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

本誌御購読の榮

- 一月份(1冊) △送共V 二百円
- 三月份(3冊) △送共V 六百円
- 半年分(6冊) △送共V 千二百円
- 一年分(12冊) △送共V 二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておりますので、購読御希望の方は直接発行所宛お申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型緊縛写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方へは発売の都度販重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行済の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

奇譚クラブ 定価 二百円

一月号

昭和三十四年十二月二十日印刷
昭和三十五年一月一日発行
編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
発行所 天 星 社
電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座大阪第五〇〇四二番

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の少額のものを利用下さい。宛先は必ず書留ではつきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のものは品切となりましたので御承諾願います。

限定版特別号の第二弾 マニア瞠目の書!

緊縛写真と緊縛画集

定価 五百円(送共)
略号「緊縛」

四馬考緊縛画集 (25枚)

- | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|---|---|---|----|---|---|---|---|---|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 回 | 水 | 女 | 奴 | ア | 生 | 白 | 物 | ル | 人 | 素 | 女 | 女 |
| 転 | 責 | 学 | 奴 | ク | 埋 | い | 置 | シ | 間 | 晴 | 体 | 体 |
| す | に | 生 | 風 | ロ | め | い | 小 | メ | 燭 | し | は | 耐 |
| る | あ | の | と | バ | の | け | 屋 | カ | 台 | き | 美 | 久 |
| 女 | う | 嫉 | い | の | に | の | バー | の | 会 | 会 | し | テ |
| 体 | 美 | 妬 | 責 | の | 刑 | え | 怪 | と | 長 | 長 | 玩 | ス |
| | 女 | め | | 訓 | | | | 赤 | | | 具 | ト |
| | | | | 練 | | | | ん | | | | |
| | | | | | | | | 坊 | | | | |
-
- | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 |
| 吊 | 電 | ト | ヤ | 女 | 狂 | 遠 | 淫 | 三 | 鞭 | 女 | 浴 |
| し | 気 | ラン | キ | 体 | 気 | 慮 | 虐 | 醜 | の | の | 場 |
| 責 | 責 | ク | を | の | の | は | な | 女 | 御 | 悦 | の |
| め | テ | 詰 | 入 | 荷 | 復 | い | 美 | の | 馳 | 虐 | 悦 |
| の | ス | の | れ | 物 | 讐 | ら | 容 | 走 | 走 | 虐 | 虐 |
| 美 | ト | 裸 | や | る | | ね | 師 | 走 | 走 | 虐 | 虐 |
| 女 | | 女 | | | | え | | | | | |

素晴しき写真集 (84葉)

- 序曲「手吊り」のポーズ
第二章 逆手吊と足吊
緊縛感のクローズアップ
拘束女体の経過
股間縛り競艶
麗しき果実列
狂っただ果実
晒し者なんだワ
腰巻の乱舞曲
女の飲ひ八態
-
- きあ、どうでもして
陳列された女体!
忘られぬ豊満美
黒蛇のふんどし獄
女のサポータ
吊り人形の哀歎
断然、これは凄いの
女囚第14号籠り通る
(計 八十四態)

臨時増刊 限定版 悦特 No 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号第二集(略号「悦特第二」)

巻頭の四馬孝画、緊縛絵画から始まって、百十六葉に亘る特写グラビヤ写真、本文の昭和二十八年本誌掲載の傑作サド読物と全巻息もつかせぬ充実した、S一週倒の編集により二百頁を擁う妖気は、必ずや皆様を完全に圧倒することでしょう。

四馬孝緊縛画集

- ◎柱背負い
- ◎深夜の水浴
- ◎喰込む縄
- ◎あんよは上手
- ◎捕われ人
- ◎椅子縛り
- ◎水道責め
- ◎答打ちの果

悦姿態特選集

- ◎淫瀧のポーズ
- ◎しずかなる受縄
- ◎はかなき悶え
- ◎美囚第十四号
- ◎羞姿晒陽
- ◎悦びの一刻
- ◎綾なす白縄
- ◎乱れさく哀花
- ◎柔肌の喘ぎ
- ◎荒縄と美貌
- ◎未知の驚き
- ◎悦虐狂奏曲
- ◎絹川文代
- ◎花坂道子
- ◎田中芳代
- ◎絹川文代
- ◎愛川悦子
- ◎浜本喜美
- ◎三木敏子
- ◎絹川文代
- ◎絹川文代
- ◎平野笑子
- ◎絹川文代
- ◎岩井知子
- ◎大塚啓子

往年の好読物集

- ◎造形美術
- ◎艶肌の拘束
- ◎ロープ・ブラジャー
- ◎妓の影
- ◎凌辱の幻想と期待
- ◎僕の記録
- ◎くすぐられるよろこび
- ◎キヤメラ愛好会
- ◎被虐の愛情
- ◎責苦
- ◎アブノーマル・ファンタジー
- ◎変の字問答
- ◎マダム紅鶴
- ◎哀艶責め場絵断
- ◎蜘蛛と蝶々
- ◎由紀子のお仕置
- ◎聖面の誘惑
- ◎花坂道子
- ◎絹川文代
- ◎愛川悦子
- ◎泉 辰之助
- ◎古川 裕子
- ◎黒井 珍平
- ◎山本 百合
- ◎岡田 咲子
- ◎若林 啓子
- ◎竹谷 十三
- ◎岡田 咲子
- ◎浮家 鷹三
- ◎野村恵美子
- ◎岩 広志
- ◎飛田 良二
- ◎大川由紀子
- ◎近見 啓

奇譚クラブ 復刊第五十三号 新年度 号 目次

四馬孝傑作集 私人刑室……………四馬 孝・画
 撮影会風景ボーズ集(モデル・船典子)……………辻村 隆 撮影
 映画にあらわれた緊縛シーン……………提供・田辺啓二
 大映「紅あさみ」……………毛利 郁子
 東映「喧嘩 嘩 嘩」……………大川 恵子
 東映「小天狗霧太郎」……………女優名不詳
 責給 操り人形……………滝 れい子・画

異説・平手造酒「孤 剣」……………植村 奏……………18
 創作「謎の緊縛フオート」(その四)……………久留木 栄……………28
 告白 洗腸器とともに(後編)……………栗瀬 長……………36
 映画通信 最近の映画・縛りシーンから……………嵯峨美也子……………38
 マニアの観察「縛りの類型」……………牧 高志……………40
 特高拷問史……………庄田美起夫……………42
 創作「こけし妻」……………三条卓史……………46
 秀緒の日記(終)……………藤山秀緒……………56
 「冷血記者のメモから」幟死屍体……………南方佳男……………60
 考察 腹を切る事(三)……………折伏下男……………64
 連載第三次元小説「影 の 国」……………雪俊 遙……………66



ミス奴隷宣言……………鷹取仙吉……………86
 現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正……………89
 プラボーSADO特・第三集……………難波武雄……………92
 話の屑籠……………辻村 隆……………94
 レポート「夫婦善哉」……………S・好 久……………98
 懸賞募集(告白と手記と体験)原稿入選作品
 告白の記II振袖と後手への偏執II……………田村清彦……………100
 見聞記「地獄の釜」……………正木真竜……………106
 創作三十郎の恋……………蒼野 礼……………108
 お仕置を求める乙女……………藤川力行……………119
 愛好者の記録……………あま・あつひ……………122
 沼 正三だより……………沼 正三……………124
 映画通信 秋の縛られ女優達……………大河原珠樹……………128
 「懸賞愛読者原稿」入選作品
 呪法切支丹吟味……………小河内 澤……………130
 マゾヒズム百景……………馬場好男……………146
 撮影会兼読者座談会
 「緊縛モデル撮影風景と
 女体責めの種々相について」語る……………148
 続 者 通 信……………164

限定版特別号 第一弾ノ

「緊縛フォトアラベスク」

略号(あらべすく) 特価五百円(送共)

△収載内容△二十六項目 写真七十七葉

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 鏡……………愛川悦子 | 14 奔放な肢体大塚啓子 |
| 2 銘花二輪…花坂道子 | 15 鏡台と腰巻花坂道子 |
| 3 鉄 鎖…大塚啓子 | 16 腰巻と鏡台花坂道子 |
| 4 諦 観…大塚啓子 | 17 奇妙な休憩絹川文代 |
| 5 庭園にて…絹川文代 | 18 田代悠子表情集(二) |
| 6 謎の微笑…田中芳代 | 19 脱がされた高手小手 |
| 7 田代悠子表情集(一) | 20 亀甲縛り…愛川悦子 |
| 8 誇る脚線美田代悠子 | 21 吊責折檻…村井知可子 |
| 9 この足どうかしら? | 22 立木縛り…村井知可子 |
| 10 裏と表と…愛川悦子 | 23 豊 醇…愛川悦子 |
| 11 落陽の丘…愛川悦子 | 24 乱れ髪三景大塚啓子 |
| 12 ポリウムの花園 | 25 椅子と絨緞愛川悦子 |
| 13 緊縛感の綾大塚啓子 | 26 姐上の美鯉絹川文代 |

(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

臨時増刊号

略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百十円(送共)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

- | | |
|-----------|----------|
| ☆密 質 倉庫 | ☆地下室の苦行 |
| ☆悪魔のような女 | ☆苦 悶 |
| 「春美の受難記」 | ☆吊 し 責 |
| シリーズ 四点 | ☆乳 房 責 |
| ☆新品第一号 | ☆人間フープ |
| ☆嫉妬の鬼 | ☆檻 禁 |
| ☆奴 隷 船 | ☆アクロの訓練 |
| ☆妙 な 吊 責 | ☆捕われた商品 |
| ☆雨中の引廻し | ☆犬 の 訓 練 |
| ☆奈落のリハーサル | ☆女 体 晩 馬 |
| ☆鼻責めテスト | ☆夜 な が し |
| ☆黒目鏡の女 | |

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

- | | |
|-----------|-----------|
| 絹布と絹肌(田中) | 仇姿黄八丈(絹川) |
| 飾り人形(大塚) | 縄さばき(浜本) |
| 台上的賛(絹川) | 挑発の笑(絹川) |
| 若妻の秘美(花坂) | 被 髪 襲(花坂) |
| 白い若鮎(田中) | 深海 魚(田中) |
| 麗 囚(絹川) | 哀れな賓客(絹川) |
| 三面 鏡(愛川) | 豊 胸(愛川) |

【興趣尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フォトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画八猪大人の御乱行、強制女体浣腸器△

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

定価三百円(送共) 略号「悦特」

△悦虐小説傑作集△S的作品のエッセンス

- | | |
|-------------|---------------|
| 雌 獣 の 手 記 | 呪 虐 の 旅 役 者 |
| 妻 は 縛 ら ず | 悦 虐 の 旅 役 者 |
| 夕 の 朝 顔 | 長 期 刑 |
| 続 ・ 囚 主 | 私 の 思 い 出 |
| 私 の 主 題 | 片 耳 伝 奇 |
| 色 奴 隷 の 手 記 | 縛 ら れ た 妻 以 前 |
| 女 奴 隷 の 手 記 | 地 獄 絵 行 脚 |
| 受 難 難 | 鉄 格 子 の 中 に |
| 怪 奇 曼 陀 羅 教 | |

△グラビヤ緊縛写真△百十四葉の傑作

- | | |
|---------------|-----------|
| 妖 精 (ニンフ) | 首 シ ュ ミ ー |
| 三 ツ 葉 葵 の 横 顔 | 放 間 謀 成 心 |
| 誘 拐 致 | 三 処 責 敗 |
| 木 洩 れ | 黒 タ イ 念 |
| 夢 路 | 観 黒 |
| 競 花 | |

△四馬孝画責画集△口絵△

白 魚 の 悶 え 宙 に 踊 る
苦 悶 の 前 奏 ア ク ロ バ ッ ト
鉄 鎖 の き し み 濡 れ る 朱 唇
籠 の 白 鳥 土 蔵 の 花

私 刑 室

手枷、足枷、首枷、彼女は長い間中腰のままで、土牢の中に放置されていた。湿気を帯びた土の冷たい感触が、ぞくぞくと足の裏から全身に伝ってくる。あゝ、なんというムゴイ拷問であろうか。





撮影会風景 ポーズ集 (その一)

△モデル……館 典子▽



辻 村 隆 撮影



撮影会風景 ポーズ集 (その二)

△モデル……館 典子▽



辻村 隆 撮影

『映画にあらわれた緊縛シーン』

大映 「紅あさみ」

毛利 郁子



提供・田 辺 啓 二

東映 「喧嘩鷹」 大川恵子



東映 「小天狗霧太郎」 女優名不詳

操り人形

「やいやい、お前ぐらの身体がありや、これ位のことでこたえて、たまるけえ」足首から手首へ手首から頸へ、そして縄は頭の中を通して前額部から天井へ引き上げられている。「さて、これから、どこへムチを当てゝやろうか。」

滝 れい子・画





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1960年新年号

(第十四卷 第一号 通刊第百三十三号)

異説・平手造酒



風の章

フツと、浅い眠りから覚めた信海は、闇の中で聞耳をたてた。
 歎くような呻くような男の声が、断続して微かに伝ってくる。

(またうなされておいでになる……)

そう思うと、胸が妖しく鳴りだした。

信海は、そそくさと起きあがると、手燭を持って、登音をたてぬよう離れへ急いだ。

顫える手で手燭の火を行燈に移すと、明るくなった部屋の中の光景を信海は、はばかりような視線で疑々と瞞めた。

平手造酒は、布団の上にのぞけるようにし

劍

こけん

孤

奏

榎村

青木 審・画

て、うなされ続けていた。掛布団は跳ねのけられ、寝巻の裾前は乱れて、毛深い脚がまるだしになっている。はだけた胸もとには、脂汗が胸毛の間に玉をつくっていた。月代を伸ばした蒼白な貌は苦悶に堪えるように歪んで喰いしばった唇の端から 高く低く呻吟が洩れていた。

信海は、己の心をおぞましいと思いながら

激しく昂まる心を抑える事ができなかった。しかし、このままだつまでも眺めていたいと思う気持ちにうちかかって、造酒を揺り起した。「ああ……。信海殿……。拙者はまた、うなされておったのか……」

「は、はい。大層お苦しそうでございましたから——」

「忝い。イヤ全く、そなたには、いかい厄介をかけるのう」

「いいえ、滅相もございません。さ、寝巻をお着更えなさいまし」

信海は、次の間の押入れから、さっぱりと洗濯された寝巻と下帯を取りだすと、造酒に手拭を渡した。

瑞円寺の離れに、病の身を養う平手造酒であつたが、剣で鍛えぬいた体軀は、瘦身ながら筋肉の一つ一つが固く締り、櫓の木のような強靱さをもっていた。さすがに蒼みを帯びた皮膚には、全身隈なくといっていいくらい剛毛が荒々しく生え、その精悍さは動物的でさえあつた。

信海は、そんな造酒を見ていると息が塞りそうになるのだ。煩惱解脱の修行の身がと、己を激しく戒めてみても、一切を是空と悟り

切るには、信海は余りに若すぎた。

「外は月夜のようなだ——」

おびただしい寝汗を試ってサッパリすると造酒はボソツと云った。

「はい。真昼のような明るさで」

「雨戸を少し開けてもらおうか。部屋がこもっているようだ」

「かしこまりました」

信海が雨戸をくると、月の光が水のように流れ込んだ。その横顔が何か想いに沈んでいるように見えて、信海はわけもなく胸が痛んだ。

「アノ、お寒くはございませんか？」

「ム？ナニ、大丈夫だ。暫くこのままでいよう」

「さようでございますか。では御用がございましたらいつなりと——」

「ああ、もう寝んでくだされ、造作をかけ申した。拙者は勝手にいたすから」

信海が去ると、造酒はドサリと胡坐をかき臉を閉じた。

「栄次郎……」

想い出してならぬ名が、我知らず唇をついてでる。夢だったと判ったいまでも、前髪立

ちの美少年の姿が、仄白く浮く庭の萩を掻きわけてそこに現れるかと思われた。

（強すぎる！……）と千葉周作を歎かせた。

平手造酒は、天性ともいえる異常なほどの剣技から、忽ち師範代の地位についたが、自然それは先輩や同僚の嫉視を買うことになって彼は孤独の中に己を置くようになった。造酒は、剣こそが友であり恋人でもあると思っていたが、ときに淋しさを感じないでもなかった。

そんなとき造酒に接近してきたのが、千葉周作の次男、栄次郎である。栄次郎はまだ襦袢ながら、千葉の小天狗と云われる腕もち、上背のある一派な体格は、前髪立ちが相応しくなくらいで、美少年とはいっても、濃い眉の下の涼しい眼許には猛々しさが潜んでいた。

（栄次郎の剣法は平手ばりだ）という風評も嘘ではなく、彼が剣の師として最も尊敬しているのは、父周作よりも平手造酒のほうであつた。

ある日。平手造酒は栄次郎の、たつての頼みを断りきれず、いきつけの小料理屋「川辰」

の座敷へ案内した。

窓の障子を開けると、欄干のすぐ下には大川の水が、ひたひたと寄せている。

「かような場所へお連れしたことが知れたら千葉先生のお叱りを頂くは必定、破門されるやもしれませぬナ」

「赦せ。私は、どうしてもそなたと二人きりになりたかったのだ」

「二人きりに？……まあ、とにかくお坐りなされ。ここは大きな店ではないが、静かに飲めるのが取得でしてな——」

小女が顔をだし、

「アノ、いつもの通りで」と訊いた。

「イヤ。今日は酒はいらぬ。飯だけでよい。

何かみ、つくろってナ」

と云いかける造酒の言葉を制するように、

「平手氏。遠慮はいらぬこと。酒を注文するがよい。私は相手はできぬが、酌ぐらいはできよう」

と、栄次郎は微笑してみせた。

小女は酒肴を調べて運んで来ると、心得顔で、すぐにさがっていった。

「酒というものは、女の酌で飲むものではないのか？」

と栄次郎が不思議そうに訊く。

「イヤ、拙者はいつも独酌でやる事にいたしております。

どうも女の酌では脂粉の香が移って、折角の酒がまずくなりますからナ。ハハハ」

「では、今宵は私が酌をしてやろう。どうじゃ？」

「とんでもないこと！ かりにも先生のご愛息にそんな真似はさせられませぬ」

それを聞くと栄次郎は、銚子にかけようとしていた手を引っ込めて、

「私にはそれが淋しいのだ。

成程、私は千葉周作の息子、そなたは門弟に違いない。しかし、我々は友人ではないか。

もっと隔てのない交りをしてもいいと思う……」

と訴えるように云った。

造酒は、不意に太刀を打ち込まれたような狼狽と緊張に



思わず鋭い眼付きで栄次郎を見据えたが、視線が合うと、まばたきをして眼を逸らし、

「では、注いでいただこう」

とグツと盃を突き出した。

二、三杯たて続けにあおる造酒の様子を、好ましげに眺めていた栄次郎は、一寸膝を正すようにしてから、

「平手氏。実はそこもとに折入っての頼みがあるのだが――」

「何でござるか――？」

造酒は妙な胸騒ぎを覚えながら、まだいくらか幼さの残っている栄次郎の紅い唇をじっと瞞めた。

「私と真剣勝負をして貰いたい」

「何、真剣勝負？」

さすがに造酒の顔色が変わった。

栄次郎の剣は師範代が三本に一本は取られる技倆である。真剣勝負となれば、どちらが傷ついても破門はまぬがれないであろう。いやヘタをすれば、どちらかの命が失われるかもしれないのだ。

（やはり何といってもまだ子供だ。無謀にも程がある）

そう思う一方、造酒には払いきれぬ誘惑が

あった。

道場でたった一度だけ、造酒は栄次郎に打ち込まれたことがある。その瞬間に感じた不思議な心の疼き、それを陶酔と呼んでいいかどうかは判らないが、それが造酒の胸に蘇ってきたのだ。

「即答しなければなりませんか？」

「うム」

「承知つかまつりました」

満足げに頷く栄次郎の顔を、酒に潤んだ眼で捉えながら、造酒は。

（俺ははじめて人を愛しく思った。俺はそれに運命を賭けるのだ！……）

と腹の中で呻くように呟いた。

水っぽい春の空は、暮れなずむように微光を湛えていたが、上野の山内には、鬱蒼たる樹木の影が黒々と沈んでいた。

平手造酒と千葉栄次郎は、その静けさの中に凝って対峙したまま、凝固してしまったかのようにみじろぎもしない。二本の白刃が不気味な光を放っているだけである。

栄次郎の若々しい額にはうつすらと脂汗が浮き、その眼にはやや焦りが現れてきた。造酒

は、栄次郎の構えの内に隙を見出しながらも、対手が打ち込んでくるのを待っていた。それは、いわば逡巡であった。

（何の迷いぞ！……）

造酒は己を叱咤したが、妖しい妄想を消すことはできなかった。

「ヤアッ！」

永い緊張に堪えきれなくなったのか、栄次郎が不意に捨身で打ちかかって来た。造酒の軀は殆んど動いたかには見えなかった。しかし、二人は同時に血を流していたのだ。相打ちであった。

「お見事！……」

造酒はガラリと刀を投げだすと、栄次郎の肩を驚愕みにした。むきだしの男の激情が、造酒の腕から栄次郎の背に伝わった。それまで辛ろじて堪えとめていたものが、一時にドツと流れたす思いで、造酒は犬のように呻いた。

そして、いつか闇が、すべてを塗り込めていった。

書院の窓には朝の陽射しが明るく照り映えているが、千葉周作の前に平伏した平手造酒

の胸中は、さすがに暗澹としていた。

「平手。わしは誰よりも深くそなたを愛していた。その心にいまでも少しの変りはない。だからこそ涙をのんで、今日只今、そなたを破門するのだ。このままおいては、そなたも、それから栄次郎も破滅するであろう。判ってくれるな。このうえのわしの願いは、そなたに真直ぐ世の中を渡って貰いたいことだ。そして、またの日もあるということを忘れるなよいか」

そう云って周作は眼を閉じた。頭も上げえずにいる造酒の頬にも、涙の痕が幾条も流れ落ちた。

雲の章

「平手様。行水の用意ができました。ごさいます」

風呂はいけないが行水ならばという医者の方許しで、信海がわがことのように喜び早速、庭先に用意したものだった。

「忝い——」

書見していた平手造酒は、ニッコリすると

縁に立って来て帯をといた。

夕風が立ちそめていたが、外はまだ充分に明るい。

信海は、眩しいものを見るような視線を造酒に当てながら、

「お流しいたします」

と云って、寄り添うようにソツと背後へ廻った。

三カ月程前、笹川の繁蔵が付き添って、身内の若い者の背に負われて運ばれてきた平手造酒は、身動きのできぬ重病人であった。

「看病は信海にさせましょう。男手じゃが、よく気のつく者だで心配はない。しかとお引き受け申しました」

住職の慈海が繁蔵にそう云っているのを聞いたとき、信海は半ば当惑した。

博奕打ちの用心棒といえ、聞いただけでも薄気味悪かったし、そんな種類の侍には質のよくない人物の多いことも知っている。

繁蔵達が帰っていくと、信海は病室に定められた離れの障子を恐る恐る開けた。

仰きに身を横たえた造酒は、眠っているのか軽く瞼を閉じていた。その貌は痛々しくやつれてはいたが、何か研ぎ澄まされたような

静けさが信海の心を捉えた。

牀の汚れを拭く為に造酒の寝巻を脱がしたときの、愕きとも怖れともつかぬ感情をいまも忘れることができない。刀身のような造酒の体臭（信海は刀身を嗅いでみたことはなかったがそんな気がした）は、信海の求道心を雲らせる妖しさを持っていた。

日に一回、造酒の寝汗を拭く仕事、信海には何よりも楽しみになった。熱い湯で固く絞った手拭で、丁寧に拭き潔める。造酒は赤児のように、信海に任せきってなすがままになっていた。

行水を許されるようになった造酒に、信海の世話することのできるのは肩先と背中だけだった。造酒が恢復するにつれて、次第に遠い存在になっていくようで、信海の心は暗く沈んだ。

生垣の向うに人影がさしたと思うと、小腰を屈めて入って来たのは繁蔵の乾分の伝吉だった。

「オヤ？行水をお使いになっっているんですかい……」

「これは、伝吉か。如何いたした」



61

「いいえ。用はねえですが
ネ、親分の云いつけで一寸
お見舞に——」

「それは痛み入る。ま、こ
っちへあがれ。拙者もいま
あがるところだ」

造酒が立ちあがって水を
拭きはじめると、伝吉は無
遠慮にジロジロと眺めなが
ら、

「成程ネ。剣術の先生とな
るとてえしたもんだ。あれ
だけの大病をしても、少し
も痩せねえんだから」

「ハハハ。拙者は骨太だか
らな。それに筋肉が締って
いると、それ以上は痩せん
ものとみるナ」

「そうですかねエ」

信海は、できることなら
伝吉の眼を塞いでしまいた
かった。それでまだ造酒が
拭き終らぬうちから着物を
手に取ると、自分の蔭に造

酒を陰すようにして立った。

夜毎降るようだった虫の音もいつかすがれ
て、霜をみる朝もあるようになったが、平手
造酒の容態は一進一退であった。

「今日は大層に冷えるな」

「はい。急に冬になったようでございます」

「早いものだ。ここへ厄介になってからもう
幾月になるかな……」

感慨深げに造酒は声を落した。

「こんな日は、お寝みになっていたほうがい
いのではございませんか？」

「イヤ、余り寝てばかりおってはお体がナマに
なる。それに今日は気分もよいのだ」

「では、お火を——」

信海が火鉢の火を掻きおこして出ていこう
とすると、障子の外で伝吉の声がした。

「ウウ、寒い寒い。今日は滅法冷えやがる。

先生。どうも永いことご無沙汰をしやしたが
お加減は如何で？」

そう云いながら、もう障子を開けて入って
来ると、伝吉は膝を揃えて坐り、

「先生。今日は耳よりな話を持ってきたんで
すがネ」

「何だ？」

「へへ、女ですよ」

「女？女がどうかいたしたのか？」

「うちの親分がね、いい娘を世話しようって
ンですよ」

「何のことだ？」

「イヤだなア、先生も。つまりですよ。先生の病氣も別嬪の看病を受けりやア、はかばかしくもいこうってもンじゃアありやせんかネエ、そうでげしょうが——」

造酒は思わず苦笑して、

「ご好意は千万忝いが、この件だけはお断りいたす。親分にはそなたかよしなに伝えてもらいたい」

「へい……」

と伝吉は、ポカンと、暫くは口を開けていたが、したり顔にボンと膝を打つと、

「判りましたよ、先生。先生には想うお人があって、それで他の女には眼もくれないってわけですね」

「馬鹿を申せ！」

我にもなく呶鳴るように云ってしまつてから、造酒は、まの悪るそうに

「赦せ。拙者としたことが大きな声を出して

しまった。拙者にはな、そんなものはない。

劍一筋に生きる身にとって女は無用だ。いや邪魔だ。判ったか」

「へい。そういうもんでござんすかね」

伝吉は、造酒の云っていることはよく判らなかつたが、神技とさえいわれる造酒の手練を思い出すと背筋が寒くなった。

その夜、造酒はどうしても眠ることができなかった。昼間の伝吉の一言が、耳の底に、こびりついていて離れないのだ。

（『先生には想うお人が——』『拙者にはそんなものはない——』俺は嘘を云った。俺はいまでも栄次郎を想っている！……）

忘れようと努め、忘れたつもりでいた栄次郎の面影が、再び造酒を苦しませはじめた。

突然ガバと布団を蹴って跳ね越した造酒はもどかしげに寝巻を脱ぎ捨てて下帯一本の姿で庭にとび下りた。忽ち膚を噛む寒氣だがそれにも飽きたらず、井戸端へ回ると氷のような水を頭からザブツとかぶる。それを数杯繰り返しているうちに、いくらか気持は鎮まつたが、栄次郎の面影を消すことはできなかった。血走った造酒の眼が、フト落ちていく荒縄を見つけた。それを拾うと水に浸け、

呻くような声と共に、己の皮膚を打擲する。

痛烈な痛みが一瞬痺れるようにすべてを忘れさせた。しかし、自虐によって栄次郎を忘れようとする造酒の心裡に、栄次郎に対する被虐欲が仮面をかぶって潜んでいたのだ。打てば打つほど、苦痛とはうらはらな快感が襲い、栄次郎に鞭打たれてのたうちまわる己が姿の幻影が、それに拍車をかけた。何ということだ！……）

造酒は慄然として縄を投げ捨てると、崩れるように地面に坐り込んだが、途端に咽喉の奥に覚えのある不快な徴候を感じ、続いてスウツと血の退いていくようなめまいがして、思わず手を前についた。

（しまった！）と思ったがもう遅い。激しい勢いで突きあげてくる血塊に抗しきれず、造酒は身をよじるようにして咯血した。両手を前についたまま四、五回、血の泡を吐いたが気管の蠕動は止まず、粘度の増した血塊が多量に排出されようとする度に窒息しかけ、全身の力を振り絞っては、やっとのことで吐き出す。

（苦しい！……）

死にも勝る苦悶に、造酒は芋虫のように転

り廻りながら夢中で土を掻き撚った。

「平手様！如何なされました。しっぺりなさいますし。お氣を確かに！……」

跣足で駆け寄って来た信海が夥しい血に仰天しつつ、血まみれになった造酒を抱き起こそうとしたが、矢継早に咯血する造酒の躰は海老のように跳ねて、信海の力では押えきれない。

「信海殿。背中を、背中を擦って……く……く……」

涙の滲んだ眼を上げると、造酒はまた激しく咳き込んだ。

雲の章

信海の献身的な看護の甲斐あって、平手造酒の病状は日増に軽快に向かったが、そんな或る日、慈海が病室を訪れた。

起き直ろうとする造酒をおしとどめると、

慈海は穏やかな笑を湛えながら、

「平手殿。あなたは心の内に深いわだかまりを持っておられる。イヤ、お隠しになるには及ばぬ。それでは癒える病も癒えぬというも

のじゃ。どうじゃな。仏にお縋りしては無理とは云わぬが、起きられるようにでもなったら、ときには本堂にも出てみなされ。わしも及ばずながら力になりましょう」

そう云われて、造酒には返す言葉もなく無言で頷くだけだった。

半月ほどすると咯血もおさまり、ときよりは造酒の姿も本堂に見られようになった。

勤行のひとつときを、遠慮して須弥壇からずっと離れた位置で、冷い畳に肅然と端坐している造酒の尖った肩先には、ひく淋しげな影があった。

前のほうに坐っていないながらも、信海には造酒の姿が見えるようで、

(お痛わしい……)

と胸の中で呟かずにはいらなかった。

「信海殿。拙者には、所詮、仏は縁が無いものとみえる——。もはや煩悩の塊である拙者には、運命のままに流れていくより道は無いようだ」

悟道を極めた者のように端然と座して、愛刀則宗の鞘をはらい、微光を吸って息づいていいるような刀身を凝ッと瞞めながら云う造酒の言葉に、深くうなだれた信海は、造酒の為

に何もできぬ自分が恨しくも悲しかった。

風呂の水を汲み込んでいた信海が、誰かの呼ぶ声に顔を上げると、喧嘩支度の伝吉が、辺りをはばかりように立っていた。

「一体どうしたんです、伝吉さん。そんな恰好で——？」

「シッ！ 先生はいなさるだろうね？」

「はい」

信海は急に胸騒ぎを覚えて立ち竦んだ。

「アノナ、すまねえが、この手紙を渡して貰えてえんだ」

「それはようございますが、お逢いにはならないので——」

「急ぐんでナ。逢っちゃいらねえんだ。それに、逢わねえほうがいいんだよ——じゃ、頼んだぜ。アバヨ」

伝吉は信海の手に握らせると、バタバタと逃げるように駆けだしていった。

「なに、伝吉がこれを——それで彼奴は帰ったのか？」

「はい。先生には逢わぬほうがよいと申してすぐに——」

信海が行灯を近寄せると、床の上に起きな

「おった造酒は慌しく手紙を展げたが、しまいまでは読まず、よろめくように立ち上ると床の間の大小を掴んだ。」

「信海殿。身仕度をしたい。用意を頼む」

「は、はい。でも……！」

「グズグズしてはいられぬ。一刻を争うのだ！」

「ど、どちらへおいでになるのでございます？ そのお躰で——」

「詳しいことは話しておられぬ。飯岡の助五郎が、笹川一家に殴り込みをかけて参ったのだ。親分を見殺しにはできぬ！」

「あなたさまのお立場は判ります。でも、そのご病身では——！」

「いいや、拙者はどうでもゆかねばならぬのだ」

「お願いでございます。どうかおとどまりくださいませ！」

信海は必死だった。いま造酒をやったら生きて帰ることはおぼつかない。闘う前に体力が参ってしまうだろう。如何に達人でも不死身ではないのだ。

信海の言葉も耳へ入らぬように黙々と身支度をととのえた造酒は

「信海殿。これが今生の別れとなるかも知れぬ。酒が一杯所望じゃ」

「ではどうあっても——」

「うム」

病氣以来、断っていた酒である。立ったまま一息にあおると五臓六腑に浸わたった。

「——さらばじゃ」

その声を聞いたとき、造酒の姿はもうそこになかった。

魂が抜けたように呆然と立ちつくしていた信海は、ハッと我に返ると徳利を土間に投げ捨て外に走りでた。

寺の裏門を駆けだした造酒は、近道をとって田の畦をいき街道の土手を這い上ったが、もうその頃はひどい息ぎれを感じていた。しかし、一息ついていゝるまはない。ボツと遠く夜空を焼いている炎を頼りに駆け続けようとしたが何かに躓いて造酒はバツタリ倒れた。歯がみをして起き上ると、乱れた裾が脚に絡みつく。ヨロヨロとして再び転倒し、もがくようにしてまた立ち上る。気のたっている造酒は、少量の咯血で胸許を汚しているのも気づかなかった。

二、三間走っては転びかけ、少しいって

前にのめりして、気ばかり焦っても仲々道ははかどらない。造酒はやおら着物を脱ぎ捨てると下帯一本になり、抜刀した則宗だけを右手に握ってまた駆けだした。身軽になるといくらか駆けるのも楽になり、やがて明神の境内から潮騒のようにあがる喚声が耳に入ってきた。

それほどまでに平手造酒を駆り立てているものは何なのか。繁蔵への義理もある。だがそれだけではない。生涯に一度の夢に破れ、尊敬する師からは破門され、あまつさえ不治の病にとりつかれた絶望か。或いはまた死期の迫ったのを知った彼は、畳の上で便々と死を待つよりは、たとえ对手が博徒なりとも、剣で死ぬるのを欲したか。

宿命というには余りに悲劇的だが、それが何か激しいものに全身をぶっつけていきたい衝動であつたことは確かであろう。

「親分はいるか。平手造酒、助勢に参った」
忽然と現れた血と泥にまみれた造酒の裸形その異様にも悽愴な姿だけで、一時は飯岡方の氣勢を削いだ。

「先生！ 決して来ておくんなさるなと書いた筈ですぜ。それに、そのお姿は……！」

愕いて駆け寄った繁蔵に、造酒はニッコリとして、

「こんな助勢では心許無かるうが、拙者も力の限り闘う。みんなにも元氣を出すよう云ってくれ」

「へい、そりやもう、先生が来てくださりゃ百人力で！」

事実、敵方のひるんだのに反して、笹川方は造酒の出現にふるえた。

体力は衰えていても、忽ち三、四人を斬り倒した造酒の剣は冴えていた。しかし、木の幹に身を支えて血を吐くのを見た飯岡方は、「ナニ、いくら平手が強えからって、病氣にやア勝てねえ道理だ」

と造酒一人に攻撃を集中してきた。

だがそれとても造酒の敵ではない。肩で喘ぐような息をしながらも、造酒の切先は電光のように閃き、またたくうちに屍の山を築くのだ。はじめて造酒の恐ろしさを知った飯岡方は算を乱して敗走しはじめた。

「追え！ いまだ。追いつちをかける！」

造酒の声に勢を得て、笹川方に勝ち誇った喚声があがる。

「伝吉。先生を——」

繁蔵は闇の中に灰白く浮かんでいる造酒に心を残しながら、伝吉に顎をしゃくって走り去った。

造酒の上体がユラリと傾いたと思うと、朽木を倒すように地面に横たわった。返り血を浴びてはいるが、どこにも傷を受けた様子はない。だが彼の命数は既に尽きようとしていた。造酒は静かに手足を伸ばし、亭々と聳え立つ杉の梢を仰いだ。土の冷さが快よく身内に浸み入ってくる。

「平手様ッ！」

狂気のように信海が造酒にとりついたとき固く結ばれた唇が微かに動いて、

「栄次郎どの……」と呟く声が洩れたが、信海には聞えなかった。

音もなく降りだした雲が、息の絶えた造酒を濡めるように濡らしていく。

信海は、いまこそ何のためらいもなく、声を放って鳴咽した。

少し離れた木の蔭に立ちつくした伝吉は、左手で片手拝みをする、

「畜生オッ！……」叫びざま、笹川勢の後を追って横っ飛びに駆けていった。(完)

編集部だより

◎「新年」という語は、人をして何か事改まらねばならぬかの如き語感あり。新入社の編集助手T君「新年号」として独り大いに張切っていたが、別に変らぬ部の編集態度にいささか不満そうであったところ、「一般大衆誌とは趣きが違う」との編集長の一言に俄然活眼、大いに悟るところがあった由。

◎連日到着する投稿を分類、整理に大わらわのY君、突然、腕を組んで「フーム」と思い入れの体。何事？といふかると、おもむろに曰く「同テーマのものをよくもこれだけ多くの人が書けるもの」と。さすがの猛者も今更ながら読者の熱心？さにタジタジの格好。

◎後を断たぬ読者からの「自粛」に関する不満のご注意。原稿検討の際の諸君削除の場合はいかにも辛そう。沈黙黙考の末思い切って、という表情。ついでながら編集部のお言葉一言、曰く「縛情は色情に非らず」

創

作

謎の緊縛フオート (その四)

久留木 栄

消えた中村婦警

だが事件は全くの偶然から大変な方向に発展した。それは敏腕な婦警、中村美美子が姿を消したということなのだ。それは上田記者にも池田巡査部長にも当代の名捜査課長、柏木警部にも想像のできないことであった。

たしか日曜日の暖かな昼過ぎだった。中村婦警は、そう記憶している。卵色のブラウスにオールラウンドの水玉模様のフレアースカートという警官としては割に派手な私服で目抜き通りを歩いた。何となく上田記者に会いたくなくて下宿を訪ねた帰りだった。わずか一時間ほどの語らひだったが美美子の心は非常にうわずっていた。二人だけになると、何かしみにした幸福感に酔える。——いつしかそんな雰囲気を作っていた。

このしなやかな二の腕、ふくよ

かな胸の張り、軀のすみずみにまで異った息吹きが感ぜられる。ささやかな血液のたぎり生れて初めての気持。これが恋というものか。独りで顔がほてる感じだ。そして町の中を一人で歩くのでさえ、はずかしいように思えるのだった。

そんな感じにとらわれていると時だった。美美子は道端に一人の老婆がしがみこんで苦しんでいるのを発見して思わず近寄った。職業が職業のせいばかりでない。美美子是不幸な人を見逃しにすることの出来ないような女に属していた。そこにワナがかけられる。美美子はワナがかけられているということを全然、気づかなかった。

老婆は地味なツムギのお召を着た老人で、黒い毛糸で編んだ古風なしやれた手下げを持っており、一見して上流階級のおばあさんと思われた。細い、しなやかな手で細い瘦せた足首を押え、痛そうなそぶりで道端にしがみこんでいる。生爪でも剥がしたのであるうか右足の白足袋の拇指のあたりに血がにじみ苦痛で青くなつた顔のこめかみの処に、うっすらと汗がにじみ出ている。

「どうしたの？おばあさん」

「それがあなた、アツツツツウ、痛つ。ああ

痛かった。ほらこの石を蹴とばして生爪を剥がしましたのさ。まったく老寄りの冷水とはよくいったものですね。オオ痛い」

老婆は、よろけながら立上ろうとし美美子の助けをかりた。そして美美子の肩に手をかけ歩き出そうして又、道端にうずくまった。

老婆は太く長い溜息をついた。

「困りましたわ、おばあさん。どこへいらっしやるおつもりだったの？」

「公園へでもとね、思っていましたのに。それがこんなことになって、あなた、こう痛くはとてどこへも行けません。すみませんがお嬢さん自動車を呼んで下さいませんか。もう孫の家に帰ります」

老婆は、見物がてら町の目抜き通りを歩いている中、つい足許がお留守になって小石につまずき足首をいためたというのだ。

「じゃ、ハイヤーを呼びましょうね」

美美子は、あたりを見回すと、すぐ近くにいたハイヤーに手招きした。その自動車は白のナンバープレートをつけていたが、とっさのことでもあり、美美子は、うっかり見のがした。美美子は訳を話して運転手に協力を求めた。

「よごんすとも。送りますよ」

運転手の力強い声に励まされ、美美子は老婆に肩をかしながら話しかけた。

「お孫さん、どこにいっしやいますの？」

「それが町の名を覚えてないんですよ。なにしろ忘れっぽくなってしまってますね。なんでも孫が、橋のきわの三栄商事といえはわかるって」

「三栄商事？」

運転手も美美子も聞きかえした。

「ええ、東の方です。それがわからなかったら、川の音、とかいう喫茶」

「ああ、それなら知っていますわ。映画館の近くですわね。ほら、セントラルとかいいた」

「ええ、なんだかそんな……。ところで、あなたはこれからどうなさいます」

「あら、私？。私は映画でも見ようと思っっていますの」

「そう、じゃ私と一しよに車に乗って下さいませんか。ネ、私を送って下さいよ。そうして下されば本当に大助いですよ」

老婆は手を合わせるようにして懇願したので人のいい美美子は断わることが出来なかった。老婆を助けるようにして座席に座ると、車はスーッとスタートした。

しばらくして車がタバコ屋の前に来た時、急に運転手は車をとめた。

「すみませんが、ちょっとタバコを」

と彼は車を降りてタバコを買いにいった。その時、老婆は黒い手提からチョコレートを取り出していた。そして紙を破ると中味を二つに割り、一つを美美子に差し出したのだ。

「お一つ、どうです。おいしいですよ」

「あら、すみません」

美美子は食べないのも悪いと考え、根が好物のチョコレートだけに別に怪しみもせず、微笑を浮かべながら食べてしまった。しかし、これは重大な失敗であった。チョコレートには恐しい眠り薬が仕込んであったのだ。

運転手の帰りが遅いなあとと思っているうちいつしか美美子は老婆の膝にもたれ、ぐっすりと眠りこんでしまった。老婆はニヤリと笑い、その上にコートをかけた。間もなく運転手が帰ってきて再び車は走り出した。

「全く理想的な誘拐だね、あねこ」

「バカな娘だよ。フッフ、このかわいい寝顔いまに驚くわよ」

「バカナ娘といや、あの女学生！ あの娘の奴、まずい死方をしたものだ。ね、あねこ。警察が動いているそうですよ」

「なあに、間抜けな警官どもに何がわかるものか」

老婆は意外にも若い声を出した。敏腕婦警が膝元でねているとは知らず、二人は思わず成功にほくそえんだのだった。

男は辰、女は例の支那服の女の変装だった。辰は自動車のスピードを上げながら話しつつ

けた。「あねこ、こんどはどうするつもりです？」

「どうするって、わかってるじゃないか。これまで随分集めたけど、みんな玄人だからね、玄人は、やっぱりダメね。モデルには向かないわ」

「じゃ、この娘はモデルに……」



英子
重

「そのつもりだよ。辰、玄関におつけ。怪しまれないように手をかしな」

車は、いつしか玉水パチンコホールの前に着いていた。すでに張り込みの警官が遠くから目を光らしているとも知らず、二人は中村英美子を両方から支えるようにして二階の喫茶川の音の中に消えた。

その時、英美子の手からハンドバッグが落ち、コンパクトがコロコロと路上に転った。老婆姿の女が、すぐそれに気づき、ひよいと拾い上げると、そのまま後を追いかけるように消えた。

川の音に入った二人はマダムに会釈した後で、入口の近くにある個室のボックス・ルームに入ると顔を見合せてニヤリと笑った。辰がソファーを引き除けるようにして手を壁の一隅につつまみ秘密のレバーを操作すると奥の壁が音もなく割れ秘密の通路が出て来た。

二人は英美子をかかえ、その通路を通過して地下室に消えていった。そのあとで、水を盆に持ったマダムが注文とりに個室に入ったが、すでに

三人の姿はそこになく、もちろん通路もしまっていた。マダムは水を置き、しばらくしてコーヒを三つ持って来た。その時、例の男と女の二人は、すでにそこに帰ってきていた。マダムは、ゆっくりとソファに腰を下した。

「理想的な結果だったのね。金ねえさん」

「そうよ、マダム。ちょっと綺麗な顔立の娘さんなのよ。辰が嬉しがってね、これは仕込み甲斐があるって張り切っているのよ。マダムもあとで見にいらっしやい。今夜から早速はじめようと思っっているのよ。最初が大切だから、うんとしほりあげておなかなくちゃね。」

辰、王さんに連絡して例の女どもを早目に引取りにきてくれるようお願いしないか。いい加減、退屈しているようだから、早く船積みした方がいいと思う。それから、あの娘のことは王に黙っているのよ。あいつ女にはダラシがないんだからね。辰、わかった？」

「ええ、あねご。じゃ、早速……」

辰はそういうと、そそくさと部屋を出ていった。

老婆姿の金という女とマダムの田中香代はしばらく話し合っていたが、やがて二人連れ立ってボックスを出ると、金はゆっくりと往来に出て、それから車を拾って三栄商事にの

りつけた。ここは第二の隠れ家だった。そこで彼女は一転して若いタイプピスト風の女に変わると、悠々と喫茶「川の音」に現れた。マダムとボソボソと話したのち、カウンターの中に消え、やがて女給の一人になりすましていた。

美美子が行方不明になったという報が警察に伝わったのは、その日の日の夕方である。美美子がパチンコ屋につれこまれて四時間ほど経ってからである。

余り帰りが遅いというので家人が上田記者のところに問合わせて問題になった。

そのうち張り込みの警官から、若い女が一人、不自然な姿で連れこまれて出てこないという報告がもたらされた。報告を持ってきたのは新任の経験の乏しい巡査であったので中村婦警の顔も知らなかったが、服地の状況から判断して中村婦警であることがほぼ判ったのだ。

そして直ちに捜査本部に関係者が集り対策が協議された。

「なに、中村婦警が眠ったような駄つきだったと？ フーム」

柏木捜査課長は珍しくポーカーフエイスを

しかめ厳肅な顔をしたが、直ちにニヤッと笑った。

「ばかめ、やっと尻尾を出しおったか」

彼の声は、いかにもしてやったりという風に聞えたが表情は、けわしかった。

「上田君、この行為をどう思う」

「さあ、どうって？……」

「全く偶然か故意かということだ」

「そりゃ、偶然でしょう。故意だと考えてみて、それにのるような美美子さんとは僕は思いません。もし故意だとすると何等かの連絡があるでしょう。連絡がなければ偶然ということになります」

「偶然か——偶然とすると、これはむづかしいぞ。これが中村婦警でなかったら全くわからず仕舞いということになりかねなかった。そういう点では正に天佑だ。だとすれば、勝負は一両日ということになる。とに角、中村婦警がどうされているか——あの中のどこにいるのか、それを知ることが問題だ。だが敵に知られてはまずい。とにかく今夜は客に化けてパチンコ屋に張り込むことだ。上田君は知らぬ顔で「川の音」の客に化けて下さい。そして情報をとらえるだけとらえ、それでもし行方が知れないようなら、あすの晩、夜襲をか

けよう。それから、この前の話では、かれこれ十人近い女が溜まっている勘定になる。それをどうして運ぶかということが問題だ。それには、このパチンコ屋だけでは駄目だ。このビル全体いや、パチンコ屋と隣あわせになっている日東商事をも一緒に疑っていいのではないかと思う。日東商事は第三国人の経営する貿易会社で主に鉄鋼原料の輸入、肥料の輸出などの南方貿易が中心だが、聞くところによると社長の王は香港に支店をもっている。相当派手に密着をやっているという話だ。してみると、このパチンコ屋と表裏一体かもしれない。そのつもりで警戒網を一そう厳重にしてくれ」

柏木捜査課長は一息ついて又、考えこんだ。

その夜、上田敏雄は酔客のふりをして、一人の女を連れて、川の音に現れた。娘は美子、美子の妹の佳代子だった。姉のことは話さず心配している妹をなぐさめるためにと断わって家から連れてきたのだが、そこは警官の妹何か感ずるところがあったとみえて、いかにも恋人のように振舞っていた。

敏雄は入口に近い小さな丸いテーブルに腰かけ、何げないそぶりで佳代子と話し合っ

いたが、ふと床の上にこぼれている小さなピンを発見した。彼はそれを手にとってみた。そして無言でそれを佳代子の方に差出した。

「覚えてるかい？」

と敏雄は小声で聞いた。

「いいえ、何の記憶もないわ」

「そうか、駄目だなあ。お姉さんは私服のときは、いつもひまわりの木のブローチをしていたらう。それが今日に限ってしていなかったんだ。それでおかしいなと思って僕が聞いたら、びっくりして胸をさすってみたんだ。そしたらピンばかりになっていた。すなわちお姉さんはそのピンを外して無造作にポケットにしまったが、たしかに、これだぜ。全く偶然というものだ。すると、ここで何あったということになるが、僕はとも第一番目のボックスが怪しいと思う。佳代ちゃん、この周囲はみんな敵と考えていいよ」

「おどかさないでよ。ただでさえ、こわいのに」

「いや、本当だ。だが今日は、この程度だな。どうも、いい発見をしたらしい。ようし、あす僕が一つ大芝居をしてやろう」

敏雄は成算ありげに佳代子の耳許で、そうささやくのであった。

その頃、美美子の身の上に第一回目の危機が訪れていた。

美美子は地下室の小さな部屋に閉じこめられていた。昏々と眠っていたのも束の間、美美子は直ぐ目が覚めた。そして「しまった」と思って飛び起きたが、もう遅かった。さしもの美美子も、呆然としてなすすべがなかった。

二坪ほどのコンクリートに囲まれた部屋は全く飾りものもなく深閑と静まりかえり、天井に空気抜きと蛍光灯があるだけで完全な留置場といえた。しかし留置場と違うところはボソボソ話し声が聞えることと、手にかかる何物もないこと、それに片面が扉になっていて明らかにそこから投げこまれたらしいとわかること、それくらいだった。

美美子は驚きもし呆れもしたが、さすがに取乱すことはなかった。そして静かに考えめぐらしはじめていた。

その時である、隣の話し声が、ピタリと止み、騒々しいわめき声や泣き声が聞えはじめたのは。美美子は一体、何事がおこったのかと思わず、きき耳を立てた。美美子は、わめき声の意味を掴むのに我を忘れていた。そん

な芙美子に、いきなり罵声が飛んできた。
「こら、バカモノ。やっと気がついたか！」
その声に、はっとして振り返ると、そこ
に人相の悪い男が二人と、綺麗な女二人が立

っていた。それを見て思わず身をすくめた。
「何を、何をするんです。私をこんなところに
連れて来て」

芙美子は気丈に抗議した。



英多
画

「芝居さ。ちょっと芝居をやっても
らうだけだよ。なあ、万吉」
背の高い方の男がいった。

「そうとも辰兄い」

その名を聞いて、はっと芙美子は
思いあたった。

「こいつ等が例の男たちだったの
か」

そう思った瞬間、怒りがぐっと押
し寄せてきた。燃えるような怒りの
目で二人を睨みつけ、芙美子は無意
識のうちに身構えていた。

「おや、抵抗するというのはかい、お
嬢さん。それは面白い。若い女が暴
れ回るといのは前代未聞の芝居だ
ね。どうだい、ふふふ。それとも大
人しくするといえ、ここから出し
てやってもいいがね」

辰は、ゆっくりとパイプをくゆら
しながらそういった。

悪党だけに、ちゃんとつばを心得
えているのだ。芙美子は、この戦いは完全に
自分の負だ。下手に抵抗するだけ野暮だと思
った。それに自分が相手を知っていると覺ら
れるのは、いかにもまずいという自覚も僅か

ながらもどってきた。そして、うなだれた美
美子の目に大粒の涙が湧いてきた。

美美子は思わず床に泣き伏した。

「今度は泣き落し作戦か。だが泣くのはまだ
早いぜ。立ちな」

辰は、そういうと万吉の方をしゃくった。

えたりと万吉が美美子の肩に手をかけた。そ
の途端、美美子は立上ると無意識に彼の体
に手をかけ彼の体を振り回していた。不意を
つかれた万吉は思わずよろめいて、したたか
壁で頭を打った。

「おッ！ やるじゃないか。これはこれは顔
に似合わず、大人しい娘じゃなかったって訳
だな。これじゃ存分、いじめ甲斐があるとい
うものだ。今の技は送り足ばらいか。たいし
た技だ」

辰が、にくにくしげにいった。万吉は頭を
かかえていた。

美美子と辰は、これでともに立ち向うこ
とになってしまった。二人の目と目から火花
が飛んだ。

「どうやらこれは俺の出番だな。どうだ、
俺と一戦まじえるかな。それとも話し合うか
な。万更、バカでなさそうだから俺たちの考
えぐらいわかるだろう。ここで勝目のないこ

ともな。どうだ。今の一撃は大目にみてもや
ってもいいぜ」

辰は、さも無抵抗の娘をなぶるような口調
でいった。美美子は辰を睨み、唇をぐっと噛
んでいた。

無気味な一瞬が過ぎていった。万吉と辰と
を比較するまでもなく、美美子は敗北を認め
ないわけにはいかないからだった。

「向うをむきな」

辰が命令した。そう命ぜられると美美子は
仕方なく、いわれるままに壁にむき合った。
悲しみが、どっと押しよせた。

「手をうしろに回すのだ」

辰が万吉をしゃくった。万吉は麻縄を受け
とると、鮮かな縄さばきで美美子の両腕を縛
り上げていった。

手首から首、二の腕と、しめつけられる縄
の痛みを感じて、再び、ハラハラと美美子の
目から涙がこぼれおちた。

「こん畜生！ 思い知ったか」

と小声でつぶやきながら万吉は、腹立ちま
ぎれに力のかぎり縄をしめ上げたので、美美
子は思わずアッと悲鳴をあげたほどの苦しみ
であった。

縛り終ると、辰は縄尻を例の女に渡した。

（あねこ、これからどうしましょう）

「そう、引導わたししてしまいな。お前は縛ら
れた可愛いペットにされて二度とシヤバには
帰れないとね」

「じゃ早速、撮影室へ行きましょう」

辰と万吉は美美子を邪慳につつくと、引き
ずるようにして、その部屋を出た。そして廊
下に出た途端、美美子は「あっ」と驚いて立
止まった。

「おや、どうしたの？ ああこいつらのこと
なの。心配しなくていいのよ。こいつらはこ
うすることが希望できたんだもの。お金がた
つぷりもらえて、いい職業にありつくように
香港に輸出されるのさ」

縄尻を持っていた女がそういった。美美子
は、まぶしいものを見る思いだった。それと
同時に体中が、わなわなとふるえた。悲鳴は
これらの女だったのかと、はじめてわかった。
そこそこに横たわっているのはまるで人形
のようにされた女だった。今も一人の女が金
切声をあげて抵抗していたが若い二人の男の
ため、みるみるうちに人形のようにされてし
まった。

「何人目かね」

「七人目です、あねこ」

「あと三人だね」

「そうです」

「じゃ、もうちょっと様子を拝見しようか。」

このお嬢さんの教育に役立つだろうからね」

「そうですね、あねこ」

辰は、うす笑いを浮べていた。

人形のようにされた人間。芙美子はその哀れな姿をまのあたりにみて、自分の縄目も忘れて心が凍りつくようだった。

二人がかりで先ず手錠を腕にはめる。それから腋の下をくすぐり、悲鳴をあげる口をこじあげ金具のついた猿ぐつわをはめるのだ。

すると、悲鳴は忽ち掻き消され、涙とうめき声だけになるのだ。それから足首、膝、腰、

と三カ所を皮の尾錠でとめ、腕の手錠を外し太腿についた尾錠に手首を固定する。こうし終ると、まるで一種の棺桶のような箱に無理につめこみ蓋をするのだ。

女たちは、こうして香港まで運ばれるのであるのか。あとで話を聞いた処によると、酸素ボンベをつめて送れば二週間ぐらいは平気だそうだ。

だがそのときの芙美子は、そんなことを理解するほどの余裕はなかった。ただ震えながらそれを眺めていたに過ぎない。

「いうことを聞けばね、こんなことにはならないのよ。ね、あんたの場合は」

もう一人の女がはじめて口をきいた。

「あら、優しいわね。ママさんは」

「だって可愛そうなもの」

「その可愛そうが怪しいのよ。いじめるときは、すごく残酷なくせに」

「あら、あれとこれとは別よ。うんといじめるために優しくするのよ」

「ホホホホ、こわい人ねえ。さあママさんもお待ちかねのようだから、こちら芝居をはじめようよ。辰、早くしな」

「はい」

辰と万吉は又、邪慳に芙美子をつつき出した。いまからどうされるのかと思うと芙美子は吐を決めてはいるものの、さすがに不安でならなかった。そして明るいシャンデリヤの一面に輝く部屋に連れてこられたとき思わず例の緊縛フオートのことを思い出して、心に戦慄を覚えた。

「ああ、私があのような写真のモデルにされる……」

咄嗟に芙美子は運命を覚った。運命の糸というものは何という皮肉なものだろうか。

すでに後手に縛られたまま、芙美子は真中の鉄柱に縛りつけられた。それをみながら、しきりに二人の女が何かと話し合いをしている。その声は芙美子には聞えなかった。すでに二の腕はしびれあがって感覚もなくなっていた。そこに新たにかけられる縄は、不思議と新鮮な感じを呼び起すのだった。

「どうやら芝居の意味がおわかりのようですね。貴女のお気に入るまで写真をとらせてもらいますよ。貴女は一生のうち二度とこんな経験はないでしょうし、まことに楽しいことです。……私は誰れでしょう。緊縛フオートのヒロイン、謎の花子です。……というわけですよ」

女がゆっくりと呟くのを芙美子は、うつろな心で聞いていた。ただ泣くまい泣くまいと努力していた。

芙美子の頭の中に、ふと逞しい敏雄の顔が浮んだが、それはたちまちにして消え、芙美子の中のもう一人の彼女が次第に緊縛に堪えられず、自らの意志に反して悦虐の泥沼におちてゆくようであった。

しびれ切ってしまった為か、痛いはずの縄目が奇妙な感覚にすり代って、恐怖と不安に混濁した脳の一隅から、例のいまわしいフオートの幻影が踊り出して来た。



第七章 家庭医学書の収集

——十六才——

その頃、雑誌の附録、家庭医学書等にある浣腸記事を、私は見のがさなかった。

婦人雑誌の夏の号には、必ずといってよい程、小児病の早期手当が、疫痢に対する家庭応急手当法がみられ、それがお定まりの、まず浣腸である。時には浣腸の図版、あるいは写真が紹介されていた。

家の者が読み終り、物置に屑屋行きとなつてはうり込まれるのを待ち兼ねるように、そして私はその頁だけを切り取りに行った。ス

告 白

浣腸器とともに

(後 篇)

栗 瀬 長

クラップは五枚、六枚と増えていった。従つて中学の半ばでは、こと浣腸にかけてはいっぱしの智識をもつことが出来た。

グリセリンと水半々で二〇〇〜三〇〇CC、五％石鹼液、或いは食塩水三〇〇〜一〇〇〇CC 蟻虫には酢で毎晩浣腸、等どれをみても同内容であったが、又、何度読んでも、何枚同じようなスクラップが出来ても、楽しさはいや増すのであった。

もう既に色あせたものも、戦中、戦後の悪い紙のもの、何れも思い出の種として保存してあるし、これからも何かにつけて、増加してゆくであろう。

第八章 旅先にて

大学を出てから私は所用で時々地方に出かける。行く先々で、招待或いは接待のない夜は、私はつとめてホテル旅館の一室にとじこもり、私だけの楽しみに酔うのを常とする。

たまたま、山陽から山陰を廻った時のことである。その日は何も予定のないのを幸いに久々に早く宿にもどり、途中の薬局にて求めたハート十字浣腸——そこにはイチジク浣腸はなかった。——を改めてしげしげと眺めたものだ。

細くすんなりとのびた嘴管、フツクラと丸

いポリエチレンの容器、その中にはグリセリンが充滿している。振ると僅かの空気がポコポコと鈍い音をたてる。この小さな可愛いものが、結構私を苦しめ、ひきつけるかと思うと、奇妙な愛着が一層かきたてられる。

入浴、夕食の終るのも待ち遠しく、夜のとばりのおりるとともに、私はしばらく振りにゆっくりと施薬できた。しかし連日の疲労のためか、気分が納まるとそのままぐっすりと眠りこんでしまったのだ。容器の後始末もしないで……。

さて翌朝——もうかなり陽は高かった——眼が醒るなりトイレに立ち、そのまま何気なく洗面を済ませて部屋に帰ると、サア大変。氣を利かせた女中さんが床をあげ、きれいに部屋の掃除も済んでいるではないか。勿論、枕元に放り出しておいた二箇のハート十字浣腸の空容器もなくなっている。女中さんは、あの空の浣腸器を何とって片づけたことであつたらうか。——朝食をかきこむのもどかし、私は殆んど顔もあげ得ず蒼惶として宿を出た。

「又ぞうぞ……」と、玄関に並んで送り出してくれた三人の女中さんの内、誰かが私の秘密を知っている筈である。心なしか、三人と

も薄笑いを浮べていたように思えたのは、ひがみてあつたらうか。私はハツキリと書いた宿帳の住所氏名が、今更のように呪われてならなかった。

第九章 子供に浣腸

昭和二十七年に私は結婚した。そして翌年長女をもうけたが、この子が二才の折、知人宅に遊びに行つてのこと。

疲れたのか喰べ過ぎたのか、とにかくその子が夕刻になって急にひきつけを起した。

始めてのことで、私も家内も大いに慌てさせられた。しかし、とっさに私の頭に浮んだ応急手当、ひきつけには安静と先ず浣腸。

薬局へとんだ私は、大人用二箇のイチジク浣腸を買い求め、早速に施薬した。我が子ではあつたが、自身以外の者に対する初めての浣腸であつた。

続いて長男が出生。この子も今年はまだ五才であるが、先日、幼稚園から帰るなり、お腹が痛いといひ出した。家内の言によれば二三日お通じがないらしいという。それではと、グリセリン浣腸二〇CC。

これが私の子供への二度の経験。そのお陰か、大事に至らずに済んだのは結構なことだ

つたが、私自身に苦しい体験があるだけに、子供達には絶対必要と感ぜない限り施薬を控え、家内にも出来るだけ避けるよう注意してあることを、ここに附言しておく。

第十章 家内とともに

最後に家内のことを少し書いて、私の浣腸の歴史を終りたく思う。家内は二人の子供をもうけてから以後、女性の常として時々便秘をする。二日も通じがないと、美容上からも氣になるらしい。

「ねえ、二日もお通じがないのよ」
こうくればしめたものである。

「浣腸してやろうか？」

私はこともなげにいう。

「いやだア、羞しいもの。」

「羞しいことなんかあるものか。なんだ浣腸ぐらい」

そういいながらも、私は、胸がワクワクしているのを押しかくす。

「でも……」とかなんとかいっている内に、私は愛器をとり出し、グリセリンばかり五〇CCを装填する。妻は一〇〇%グリセリンとは露知らない。私の軽いサディズム。

「もう利いてきたワ」

施薬すれば、忽ち効力を發揮することが判
っているながら、私は冷静にいう、

最近の映画、縛りシーンから

嵯峨美也子

秋には映倫の規約が改められ、エログロ
は追放されようとしているが、この傾向に
抵抗しているのが新東宝作品。

とくに「九十九人本目の生娘」は、エロ
・プラス・グロの妖気活劇篇であるといえ
よう。妖刀にまつわる奇々怪々な事件で、
先祖に捧げる刀剣一振を作る毎に、生娘を
いけにえにして生血を流すという異色篇で
ある。

見せ場は何といっても、東京の女給鈴木
三重子に扮する三原葉子が、その舞草族に
さらわれ、水車にしばりつけられて、水責
で痛められた上に、生血をとられる場面
であらう。曲谷守平監督らが、「ハダカにし
た上で、しばって吊すというのだから、何
だかいじめているみたいで……」と困った
由だが、当の三原嬢は、「仕事のうえのこ
となら大丈夫です。チットも痛くありませ
ん」とキッパリいい切ったそうである。し

「五分は辛抱しなさい、効果がないう」
「でも、ああ苦しい。ネ、あと何分？」

かし、セットとはいえ滝壺の水を浴びせら
れ、荒縄で後手に縛られ吊るされた——五
分間以上も——ときには、「苦しい」とは
いかなかったが、さすがに顔をマツカにし
て、作りものの洞窟にかけこんだという。
(水車縛り、逆さ吊りは宣伝スチールだけ)
この作品では、矢代京子らも木に吊るさ
れたり、松浦浪路が野性の女に扮して捕え
られたりする場面もある。

他の最近作では、新東宝の「復讐秘文帖」
で、カムバックの池内淳子の武家娘千浪が
縛られ、猿ぐつわをはめられてカゴの中に
入れられたり、矢代京子の娘お縫が拐わか
されたり、新東宝の女優達はよくいじめら
れる。また「水戸黄門とあばれ姫」では、
小畑絹子の手裏剣お龍——実は龍姫——は
捕われの美女達を救い出すが、そのために
捕えられてゴウ間を受ける。毛利正樹監督
はどのように美女小畑絹子を拷問するか。

「なにいつてるんだ。子供だってもつと我慢
強いよ。まだ二分だ」

家内の身を固くして必死に忪えている態を
静かに見下しながら、チョット憐れに思いな
がらも我身に置きかえて、何か悪の楽しみと
いったようなものを覚える。

私の声だけの制止を振り切って、苦しみか
ら逃れ出して来た家内は、晴々とした顔付に
戻っていい出した。

「アナタにもお流腸してあげましょうか」
「どうして？」

「だって、私だけ苦しむなんて不公平だワ。
どんなに苦しいものか思い知らせてあげる」
「そうかネ、では体験してみるか」
「ヨウシ！」

と、妻は力んでみせるが、用意するのは私
だ。グリセリンと水とを半々に割って三〇C
C、しかも、常日頃馴れているのだからかな
わない。

相手が妻であり、しかもスポーツのような
気安さはあっても、やはり子供の頃からの苦
しかった記憶が一時に蘇ってきて、思わず顔
の赤らむのを覚える。だが、この場合の効力
は薄い。

「さあ、五分間よ」

時代劇の東映が、製作方針の変更のためか、縛りシーンも通り一遍になったのは、我々にとってはいささか残念。

市川右太衛門の「喧嘩鷹」は、かつての阪東妻三郎の「天狗の安」の焼直しである。阪妻のときは入江たか子の芸者お静が悪親分に捕えられ、土蔵の中へ長襦袢一枚にむかれて、柱に荒縄で縛られ責められた。だが、今度の作品では、大川恵子のお静は着物の上から、きっちり四巻程の縄がかけられるが、おとなしいもので、色気もソッケも感じられない。

大友柳太朗の「三万両五十三次」でも、縛りシーンが一つもなくたよりない。

その点、松竹の「姫夜叉行状記」で、スパイに入った佐乃美子の腰元お松が、荒れ寺の中で長襦袢姿にむかれ、柱に縛られ責められるシーンは、その演技といい、悲鳴といい、仲々迫力があつた。そのシーンの後にも、縛られたままで連行されていた。

「七人若衆誕生」の石子責めといい佐野美子はよくしばられている。松本錦四郎の相良多聞が両手を開けた吊り責めを見せてくれたのは一つの収穫だった。

東映でも新人女優は売出しによく縛られるとみるのはヒガ目か。——片岡千恵蔵の「大岡政談・千鳥の印籠」で、大岡越前守

の娘といわれる中里阿津子が、人質に捕えられ、おびき寄せるための「吊るし責め」に遭う。両手をキッチリ後手に、足まで縛られて吊り上げられてゆく。そして天井へ吊るされたまま隠されるのだが、一寸痛そうだった。

また、東千代之助の「長七郎旅日記・魔の影法師」でも円山栄子の武家娘深雪が、かわかされ、手を後手にねじあげられたりするし、最後は、丘さとの女スリお駒が大砲の生きた標的にされる。大木にくくりつけられるのだが、緊縛の感じはない。

大映では、五味康裕の「薔薇記」が楽しみである。雷蔵の丹下典膳の妻になる千春——SKDの牧香都美が披露——がラストで悪者に襲われ、柱にしばりつけられて猿ぐつわをかまされる。伊藤大輔の脚本だけに、森一生監督がどのように演出するか。犬を殺した罰のハリツケ、逆ハリツケ、石子責め、水責めなども、スクリーンに現われる。

最後に日活の小林旭の「銀座旋風児」で白木マリが裏切りの情婦として椅子に縛りつけられたが、迫力があつた。また新東宝の作品「十代の曲り角」では、新人女優が後手縛りで逃げるシーンがあつたが、ハッキリしなかった。

妻が勝誇ったようにいうが、私には五分はおろか十分でも平気だ。

「あなた、少し変ネ。鈍感なのかしら？」
「いや、意志の問題だ。君が大層なだけサ」
などと、勝手なうそぶきをみせながら、やおら起き上る。それでも、その頃には、かりなの腹痛を感じていたのであった。

エピソード

今夜もまた、家族の寝静まった後、私はただ一人で書類の整理に私室で机に向っているのだ。手もとには、愛器と、夕刻、秘かに買い求めて置いたグリセリン五〇〇CCビンがある。久しぶりに生一本でやるか、腹一杯にグリセリンを吸い上げた浣腸器は、二倍の長さになって、冷たく螢光灯の光に映える。

一寸苦しいかな、ニヤリと笑う私。形容し難い苦しさ、サツパリした事後の爽快さ、ホッとした虚脱感の交錯する妖しい感情等々。

こうして、イルリガートル、グリセリン、イチジク、と、私は一生、浣腸器とともにあるであろう。喜びも悲しみもいって気障であろうか。でも事実、その日一日の不快も静かに冷たく光る浣腸器に接する時、一切がほのぼのとしたものに転化されてゆくのを、私は不思議と感ずるのである。——了——

マニアの観察

縛りの類型

牧 高 志

由来、コレクション・マニアなる者は、何かにつけて比較することを怠らない（ものらしい）。特に心ない人格者達から変態と呼ばれる責めと縛りの愛好者は昔なら行李一杯、

今でいう、たとえ畳一帖位の書齋であろうと人知れず蒐集したであろう処の物件を必らず整理、分類するものだが（場合によっては焼却することもある）、脚本ストーリーに劃期



的な優秀作が現われない限り、似て非なる、またその反対の作品はすぐ見破る眼力と、すどい頭脳の閃らめきを持っている（のが普通である）。寒いのにわざわざ出なくともわが家のテレビ劇場で、例の二十分連続演劇に野村胡堂作の「銭形平次捕物控」がある。見方によっては三島謙の八五郎が主演のようにもなるが、野村先生独特の美文学的な責めが必らず何処かにリズム・カルに挿入されていてひどく楽しい捕物芝居を展開する。その中で先般「二人浜路」という色っぽい一篇が放送されたが、脚色は兎も角として原作が発表されたのは確か戦争前であり雑誌、オール読物に神保明世の挿画で、当時の読者を簡単にノックアウトした読切物。先ず、その片鱗を紹介してみよう。

「美しき乳姉妹」

それは八五郎が口を極めて讚美した替え玉の娘でした。いよいよと責めする気になったものか、燃え立つような赤い扱帯でキリキリと縛り上げ、嫁入道具の夥しく取散らした中、簞笥の引手にそれを結えてあったのです。ドカドカと入る三人の姿を娘は顔をあげて怨

めしそうに眺めました。が直ぐまた眼を伏せて、きかん気らしい唇をキッと結びました。ガラ八が、すっかり有頂天になって手持の語彙を総仕舞にただけあって、悩ましき情景の中に据えるにしましては、この上もない妖艶さでした。

「どうしたことです、これは？」

平次は娘と用人の顔を等分に見比べた。

「この娘が怪しいとでも思わなきや——」

右内は苦り切っているのです。

「それは？」

「見も知らぬ人間が、明日は祝言というお嬢様の代りになっていたり、何んか仔細を知って居そうな婆やが殺されて、首に巻いてあった細紐がこの部屋から出た品だったり、疑えばいくらでも変なことがある。殿様がこの娘を責めて見ると仰しやったのも、無理はあるまい」

「御尤もですが、こんなにひどく縛っちや可



哀想です」

と原作は娘の責めを婉曲に匂わせて逃げているが（捕物作家の元老である胡堂先生は縛りと責めの比類なき愛好者であるが故に、音楽レコード蒐集に一まず逃避されて居られるものと愚察する）。

挿画担当の朋世画伯の方は後手の処は判らぬが中程度の呵責さで縛り上げている。長襦袢一枚で横倒しにされては蓋し裾が乱れるのが当然であろう。処が雑誌はそうであろうとも、公開性のあるテレビ（映画でも同様）では緋縮緬の長襦袢一枚という訳には参らなく

なって、御覧の通りの有様。類型という名の研究にほど遠い演出。キリキリ処か、手前持ちの後手でお茶を濁している（らしい）。

善意に解釈して両腕が後ろに廻わされて、顔をうなだれたあたりを買って辛うじて及第点という処であろうが、こんな例は他にも随分多い。ただ、買物をして多額の釣り銭を貰った時のように原作以上の演出なり絵画が現われたりすると、マニアは地上で天国以上の喜びにひたるものである。

私は、ここで類型の巧拙を論じようと引例したのではなく、同じ物が現われるものなら旧作を凌駕するものを演出して貰いたい。それには時代こそ変れ、縛り——（女の）を置いて他に求むべくもないとまで信じている者であるが、映画の映倫、芝居の検閲といったち関門をくぐっているようでは地上の楽園への路は、ほど遠いことであろう。

さもあればあれ、今日もマニアは巷を歩き妖しきネタを（たといそれが酷似の類型物であろうと）漁って、独りほくそ笑むことである。……御苦勞さなことである。

（完）

特高拷問史

庄田美起夫

か本音をはかない。

女を風呂へも入れさせずに監禁して、もう二月になる。顔も洗わせないから、近くへゆくだけでムツとする甘酸っぱいような女臭がまつわりついてくる。

人工的な香料や化粧品は勿論少しも使わせないのだから、脂汗と垢にまみれて、全く野性の女にかえっている。しかし、さすがは若い女のことだけあって、そんなに汚れきっていないながら、女の生地のままの美しさがにじみ出ているのが、むしろ哀れだった。

ズロースとシュミーズだけは許しているが洗濯をさせないから、汗のしみが地図のようにひろがっている。トイレへ行っても手も洗わせない生活を強制しているが、女はなかなか

そこで業をにやして、少し責めてみることにした。相手が若い女だけに、あまり残酷な身体に傷のつくようなことは出来ない。といって、この原始生活の強要という手だけでは一向に、らちがあかない。

今まで、こんな不自由な生活こそ強いられたいが、訊問の時は別にひどいこと一つされるわけではなかったが、一步拷問室へ身を入れて、そこに並べられたいろいろの道具を見て、さすがにハッとしたようであった。来るものが来た、といったように覚悟をきめた表情だった。

令は二十三、肉づきがよく、シュミーズの胸がはちきれんばかりに膨れあがっている。「もういゝ加減に本音を吐く気にならないか

いえば普通の生活に戻してやる」

「し、しらないんです。何にも……」

「うそつけ、さあいうんだ。いいか、その気持のわるい下着も清潔なものと換えたいだろう？」

「本当にしないんです。ゆるして」

女の表情に深い絶望と哀願が交互に走る。

こんな女がと思う位、おだやかな丸顔をした女だ。

「今日は少しいためつけられるんだぞ。それが嫌だったら、いえッ」

「私は何にも……」

全部いいきらぬうち、女は忽ち両手を揃えて紐で括られ、天井から下っているロープに結びつけられた。ロープが引きたくられると女の腕は爪先立つように伸びきった。腋毛が

こまかくふるえている。刑事はその一本をつ
まんでピツと抜いた。

「イイッ」

痛みをこらえる女の呻めき。又一本、ピツ

ピツ。

女は右肩をガクガクケイレンさせた。

「こんな事位じゃないんだぞ、今日は」

刑事は隣室へ入ると二人の同僚を呼びいれ



た。そして女の腹に角力に使うまわしを一卷きまいた。パラリとシユミーズが下されたがその両脇には、太いまわしの端が伸びて、それぞれ二人の男の手ににぎられていた。

「いいか、丁度力のバランスを保って引っぱるのだぞ。いくら強く引っぱってもいい、俺が止めるというまでやるんだ」

そして、女の顔をのぞき込んでいった。

「いいか、苦しいぞ」

「ああ、ゆるして、ゆるして下さい」女は両手を上に吊り上げられたまゝ、身体をゆすぶって哀願した。

「白状すれば今でもゆるしてやる！」

「しらないんです。私………」

女が全部いい終らない中に、まわしは両方から、ぐっと力をこめて引っぱられた。女の胸中に喰い込んだ巾広の布は、そのまま女の胸をぐいぐい、へこませて喰いこんでいった。

「ウワーツ、ク、クルシイ、ユルシテ……」

女は気狂いのように両脚をばたつかせた。

そのばたつかせた足先が刑事の脛に当たった。

「こいつ」

刑事は男たちにまわしをゆるめさせた。そして腰にはさんであつた紐をぬくと、女の膝の上あたりを荷物の様にしめあげて括った。

「これで膝から下だけしか自由にならなくなる。あんまり身動きも出来ないようだ」と面白くないからナ」

再び女の胸じめがはじまった。

大の男が二人して渾身の力でしめあげるのだから、たまつたものではない。女の腹は上と下の二つに分れ、蜂の胴のように細くなつていった。

血行が止つて、その部分は真白になり、上半身は真赤になった。

「キアア、イ、イタタ、イタイヨウ……………」
ウ、ウ、ウ……………クルシイ」

女は上半身をゆすり、膝から下をばたつかせた。男たちは、じりじりと徐々に力を加えていった。

「グ、ググクッ……………」

女の口から、よだれがタラタラと流れる。もう下半身と上半身にわかれた身体をつっぱるだけである。

「ウーム、ウ、……………ウーム、ウ、ウ、ウ」
まるで獣のように呻めき、よだれを流す。

しぼられた胴は、もう四十センチあまりになつていたのであろうか。細い、細い、指がまわるように細い。その上と下がぶかっこうにふくれて、キンキンに張りつめていゝる。

女がのけぞる。足が宙にういた。

女の身体は、まわして胴中を支えられていゝるだけになつたのだ。刑事はもっとしめ上げるように命じた。

ぐ、ぐぐぐ、と肉がしまる。

ゲ、ゲゲゲと女は口から吐いた。

「イタイーツ、ウアア、イタア……………ウ、ウ」

激烈な悲鳴、女の下半身は紫色になつてくる。

「もう少しだ」

ギューと布がきしむ、細い、もう女の胴をくいきるようになった。

「ヒエーッ」

女は吐いて失神した。合図をしてゆるめさす。女は両手で身体を支えていた。胴中はいれずみしたように内出血し、所々すりきれて血がにじみ出してきていた。

女の胸がひどくあえいでゐる。ロープをほどくと、汗まみれになつた女は、くずれるように、その場にのびた。

二

「そこへ寝ろ」

いわれて女は真青になつた。知的な瞳が大きく恐怖に見開かれ唇をグツとかみしめた。肩で大きく息をし、膝がガクガクふるえていゝる。上品な顔立ちの二十四、五の美しい女だ。つんととりすました様子が見えるところが難といえは難だ。縞の瀟洒なツーピースを着ていゝる。タイトスカートの腰が、いたいたしい位細い。

「いうことを聞かないか！」

どなりつけるような憲兵伍長の声に、女は思わずギクッとして床の上にひざをついた。かかえあげるようにして、うしろに立っていた兵長が台の上にねじ伏せる。

「うつ伏せではない、あおむけだ」

女は本能的に身もだえ足をバタつかせた。右のハイヒールがすばとぬけて部屋のすみどころがる。形のよい足指の先がそりかえる。

「イヤ、イヤイヤ」

その台は手術台のように黒光りするレザーが張つてあつて、人の字型に女の身体を固定するベルトがついてゐた。二人の男に押さえつけられて、女は忽ち台の上に張りつけら

れてしまった。首に一巻き、乳房の上と下に一卷きずつ、腰は自由でせまいタイトスカートのひざから下を思いきり二つに裂かれて、絹のストッキングの足首が、いたいたい位嚴重にベルトでしめられていた。

両手は肘から下が自由であった。女はおびえたように目をすえて身体を固くしていた。一体これから何をされるのか、スーツやスカートの男の手がかかるのを彼女はしきりにおそれた。

「さあ、Kはどこにいる。いえばすぐに許してやる。いわないと……………」

「しらないんです。何もしらないんです。本当です。」

「まあいいさ、そのうちに、自然といたくなるだろう」

男の手は、女の足首にかかった。残されていた左足のハイヒールがぬがされた。と、思うと、忽ちこまねずみのように動きまわる男の指先が、ストッキングの足のうらをこそぐり出した。

「イ、イ、イッ……………こ、こそばい……………ワ、ワ、ワワワ……………ウ、ウ……………」

すぐさま女の口から、ものすごい叫喚が上った。顔を真赤にほてらし目を吊り上げて、

僅かに自由になる身体の部分をゆすつてもだえている。

くすぐりは、ますます執拗につづく。まるで女の苦しみを喜ぶかのように、足のうらの柔かい肉を、うすいナイロンの布ごしに、指がはいまわった。

「ムムム……………ウアア、ウアア……………ヒイ、ヒイツ、ムツ……………」

女は自由な両手の指でステイルのベッドをしきりにかきむしった。顔面は真赤に紅潮し汗が玉のようにふき出る。あまりあばれるので、タイトスカートのすそが、だんだん、ほころびてきた。

女は首をあげ息をつめたかと思うと、くすぐったさにたえかねて放心し、ガツンと頭を床にうちつける。少しでも苦しみをさけようと足の指先をちぢめたり、内ら側に屈めたりする。だが、足のうらのくすぐりは冷たく執拗につづく。

「アアッ、カンニン、フウッ、フウッ」

冷汗が女の腋の下や、ひざのうらがわをズクズクにして衣類にしみ出てくる。やるせない女の体臭、それが女のつけているウガビンの匂いとミックスして、何だか、この凄惨な拷問をなまめかしいものにしていた。

「ヒエーッ、ヒエーッ。ユルシ……………ウウッウフ……………ヒエー」

とうとう真青になった女は、唇をガクガクけいれんさせて失神した。それにもかかわらず表情は笑ったように歪んでいた。

「伍長、この女、大分まいっていますぜ」

ニヤリと意味ありげに笑って、女の胸のあたりをのぞきこんでいた兵長が顔をあげていった。

「まだまだ、もう一責めやってみろ」

じっと女の悶絶している有様を眺めていた伍長がいった。そして、女の両ほほに往復ピントを喰らわした。高い音が鳴って、女のほほが掌の形をくっきりとつけて赤くなった。

「ムーッ」

女の足のうらにたいするくすぐりを再びはじまった。くすぐりによって意識をとりもどした女は、くたくたになった自分の肉体が、まだ責められているのを知った。忽ち胸のあえぎが旧に倍して激しくなってきた。

「ヒエーッ、ヒエーッ、ヒエエエ、ク、クルシイ、クルシイ……………」

女の絶叫がひきつるように地下室をふるわせ、いまにもはりつめた弓のつるが、プツンと切れるかのようにひびいた。

深い入江を持つこの島には、海神を祀る神社があつて、景勝とあいまって連日、相当の観光、参詣の人々を迎えている。棧橋から、ずっと両側に沢山のみやげ店が並んでいる。その賑やかな町並を左に曲って細い道をとると



ろと登った処に、一軒の小さなこけし売りの店がある。

店と云つても間口、一間半、右の三尺が入口で、左の一間は道に面して古い造りの低い硝子戸棚があり、それにこの家で作ったこけ

三 條 卓 史 作並画

し人形が二十組ばかり並べてあると云つた程度の、店とも云えない程のちやちなものである。

その三畳ほどの店の間に、これも塗りの剥げた机を置いて、その前に、お浪はこけし人形を並べて、しきりに筆を動かしていた。年の頃は二十八、九か。その顔に白粉気はないが眼鼻立ちの整った中にちよつと勝気な相を持った女である。

彼女は、やがてこけしの顔を描いていた筆を搁くと立って奥との境の襖を開けて

「裕ちゃん」

と奥へ声をかけた。

奥の部屋は四畳半、その次が二畳の板の間の台所、その台所の奥に五坪程の土間があつて裕之の仕事場になっていた。

お浪は草履を突っかけて土間に降り、裕之の仕事場へ入って行った。

「裕ちゃん」

その仕事場の入口でもう一度呼ぶと、小型の木工旋盤に嚙り付くようにして材料を削っ

ていた裕之が、

「なんだい、姉さん」

と云って頭を上げた。

お浪より十才位若い、少し痩せぎすな、色の白い青年である。土間の一方には、こけしを作る原木が薪のように縄で束ねられて五、六束、置いてあり裕之の腰掛けている左側の四角な竹籠の中には、既に削られた、こけしの胴体が幾十か投げ込まれていた。

「わたしや、これから丸三屋さんへ人形をとどけて来るから、その間、店の方を気を付けてお呉れ」

「丸三さんは、今からでなくちやアいけないの？もう二十本ばかり削ったら一段落つくんだけど……」

「ええ、でもそろそろ夕方近いから、序に廻って夕飯のお菜も買って来なきやならないしこれから出掛けて来るわ」

「そう。じゃア、早く帰ってお出でよ」

「わかってますよ。」

お浪はそう云うと、モーターのスイッチを切って、前掛けの木屑をバタバタ、とはたいしている裕之の俯向いた横顔を、意味あり気に見て、やがて又、店の間へ出て行った。

「姉さん、今夜も行くの？」

遅い夕食を終って箸を置いた裕之は、お浪の方をちょっと眩しそうに見ながら訊いた。

「ええ、仕方がないわ。十五夜なもの」

お浪は汚れた茶碗や皿を空いた鍋に入れながら、裕之の顔を見て、ちよつと笑った。

「早や、あれから一年近くもなるのに。もう姉さんは行かなくてもいいのじやないの？」

「だって、司教さんが来いと言われるのだもの。行かない訳にはいかないわ」

「いくら司教さんだって、あんまりしつこいと思うよ。」

「でも、裕ちやんがあんな事を仕出かしたんだもの。司教さんの言われるようにしてお詫びをしなきや、仕方がないじやないの」

「あれは僕がやった事だから、僕を打つなり叩くなりして責めたらいいだ。僕のかわりに姉さんに罪の償いをさせるなんて、あんまり酷い」

「酷いッて言うけど、姉さんは月に一度ずつ満月の晩には司教さんの所へお詫びに行っているだけよ。次の朝は夜の明けないうちに家に帰って、何も変った事はないじやあないの」

「変ってるよ、姉さん——姉さんは僕のため

に犠牲になっているんだ。僕は小さい頃から犬が好きで好きでたまらなかった。この島へ来る以前は、いつも犬を飼って貰って可愛がっていた。だがこの島では、犬を飼ってはならない事になっていた。犬は、この島の鹿を逐うからだという。でも僕には、犬への愛着が断ち切れなかった。大野の町の友達から仔犬を買って来て、こっそりと飼っていた。その成長した犬が、僕と姉さんの留守の間に綱を切って裏へ飛び出し、司教さんの家の子供さんの脚へ咬みついてしまったのだ。あの時姉さんは驚いて司教さんの家へ飛んで行ってお詫びをしたね。その時、司教さんは——傷は大した事はないッて、ただ禁制を犯して、ひそかに犬を飼っていた事はいけない事だ。これを島の人知ったら姉弟は、この島には居られなくなるといったんだってね。そしてお詫びの印に、毎月十五夜の晩に新らしいこけしを一個ずつ司教さんの家の祭壇に供えれば、このまま大目に見てやろうといわれたんだ。姉さんは、ほんとうにその夜は司教さんの家の祭壇の前で、一晩中、拝んでいるだけかい？」

裕之は、疑い深そうな眼で姉の顔を見た。

「ええ、そうよ」

お浪は伏眼勝ちにそういったが、その声には何となく力がなかった。

「司教さんは僕の落度をいいことにして、姉さん呼びつける口実にしているんじゃないの？」

「何だって？」

ずばりと心臓を突き刺すような裕之の言葉に、お浪は愕然として弟の顔を見返したが、直ぐそれを打ち消すように、

「変な事を考えるんじゃないのよ、裕ちやん。だって司教さんのお家には、奥さんや女中さんがいらっしやるのよ。もうそんな事は考えないで、早くお風呂へ行ってお出でな。わたしも片付けを済まして、裕ちやんと入れ違いに行くからね」

そう云うと、なおも納得の行きかねている風の裕之の視線から逃れるように、鍋を持つと台所へ立って行った。

「ああ、好い湯加減だ。さア、背中を流して呉れ」

木の香の匂う新らしい湯槽から、ざぶりと出て来た堤司教は、洗い場の櫓の腰掛へどっかと腰を据えた。五十がらみの、どっしりとした体軀の持ち主である。

「はい」

妻のお幾は、湯桶とタオルを持って司教の後へ廻った。『流し着』と名付けた、薄いピンクのナイロン地で、衿や身頃の腰から上は着物と同じで、袖はワンピースのフレンチのように肩から腕をすんなりと現わし、裾は膝の上までのタイトのスカートのように、ぴたりと包んだ服を着ている。

「その服、よく似合うじゃアないか」

司教は振り向いて、今夜初めて着たその妻の姿態を、じろじろと眺めた。

「あら、そんなにご覧になっちゃア、いやですわ」

年は三十五、六か、歌麿の浮世絵の女を思わせるような面長の、上品な顔が急に赤らんだ。そして

「ねえ、あなた。胸が苦しいの」

と、縋るような眼をして言った。

「氣持がひきしまって、かえっていいだろう」

「でも、お夕食前から、ずっと締めているんですもの。それに今夜は、なぜか、一層きつようなんです」

「ふーん、そんなかい？どれ一寸拝見しようか」

「あれ」

「そんなに衿を合わしちやアいけない。膝をついて、両手は後に組んでいなさい」

司教の言葉が命令のような言葉つきになると、お幾はもう甘えられなかった。

湯気の立ち昇っている広い浴室の中で、お幾は思わず眼を瞑った。

司教は、お幾の流し着の衿を両手で掴むと容赦なく、ぐいと胸を引きあげた。一寸ほどのナイロンのベルトが、彼女の純白のブラジャーの真上を横一文字に引締めて、上下に深くくびれている。

「丁度、締め加減がいいようじゃアないか」

彼はそういいながら強く引締めているそのベルトをグイと引絞るようにした。

「ああ、あなた。そんな……」

お幾は、思わず眼をあけて司教の手首に両手を掛けた。司教はそうした妻の姿を、心から、いとしいと思った。

二人共、遅い結婚ではあったが、結婚以来十年後の今日まで、お幾は夫の司教に対していつまでも花嫁のような羞じらいを失なわなかった。子供を一人生んだとも思えぬ若々しい彼女の肢体は、ここ二、三年来、極く自然に馴らされてきた司教の責めに、一層の艶め

かしさを増して来たようであった。

「この宮の祭神、市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）は嫉妬の女神様であるから、この神に仕える身が、いかに夫婦とは言え、余り睦まじくする事はお喜びにならない」

司教は巷間の云い伝えを妻に聞かせて、初めの中は、ほんの形式のように妻の手を縛った。それが度重なるにつれて中年女のお幾はいつのまにか、司教から新らしい責めを期待するようになっていた。しかし彼女は京都の格式のある寺で育った女だけに、そうした気持をはしたなく口に出しては言わなかった。そしていつも彼女の眼が、そして素振りが、つつましくはあるが無言で夫へ伝えていた。

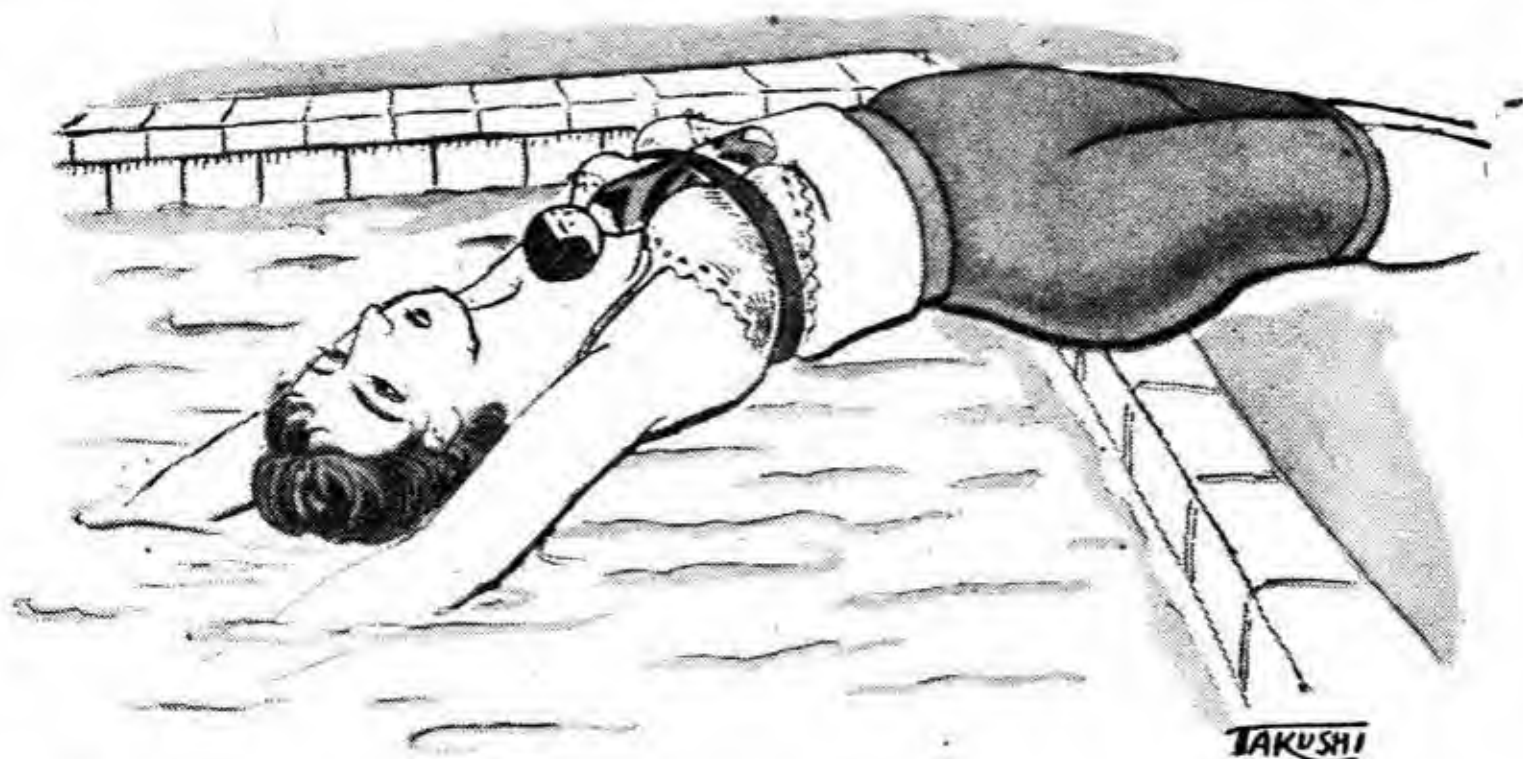
「幾。立って、このまま、こっちへお出で」
司教は彼女の胸のベルトを引絞りながら浴槽の傍へ連れていった。そして

「このまま湯に入って、首まで浸りなさい」と云った。お幾は

「あの、流し着が……」
と云いかけたが

「その流し着が水分を吸ってどんな変化を起すか、わしはそれを見たいんだよ」といって、お幾の体重をもとめせず、か

るがると持ち上げると、するすると彼女を湯



の中に下した。そして三分——五分。ややあつて

「さあ、もういいだろう」

と司教が合図をした。

「あらッ、あなた」

お幾が驚いたような声を出した。

「どうした」

「これ、スカートが縮んでしまつて、足が開きませんのよ。あれ、あなた。手を貸して」

「そうかい。じゃア引き上げてあげよう。」

そら、しっかり掴まつて」

そういうと司教は

「よいいしょ」

と引き上げた。

「ハハハハ、どうだい。好いマカートだろう」

司教は改めて妻の流し着を見廻した。温湯に浸ってぐんぐん縮んだスカートが、びったりとくっついて身体の線に密着している。裾に縫い込んだ紐が緊つて、膝頭の上の所でくびれ込んでいる。

「ああ、こんなにきつくなつてしまつて」

お幾が窮屈そうに手をスカートの裾へ伸ばそうとするのを

「おっと、まだ緩めるのは早い。ちよっと、これから軽いスポーツをして貰うんだから。いいかえ。お前、その後の浴槽の縁に腰をかけるなさい」

といいながら、ついと、お幾の傍へ寄ってじっくりと彼女を浴槽の縁へ据えろと、

「上衣はスポーツの邪魔だな」

といって、フアスナーを外して流し着の上衣を脱がせてしまった。桜色に上気したお幾の胸には、これも縮みをみせたブラジヤーの上から、前よりも一層きつく透明のベルトが彼女の胸を締めつけていて、最早その間に一本の指も入りそうには思えなかった。

司教は浴室の隅の棚から三尺ほどのゴムのホースと五寸ばかりのこけし人形を取り出した。お幾はそれを見ると、

「あらあなた、また先日晩のようになさるの？ あんなきついこと、今夜はよして」

と哀願するように言ったが

「何をいう。責めてもらわれる事を望んでいくくせに」

と事もなげにいつて、直径一寸ほどのこけし人形を、お幾の胸の、ブラジヤーの真中に当てがった。

「あッ、いやッ。胸がくるしいッ」

「だまって……」

司教は容赦なく、只でさえ強いベルトを思い切り引ツ張りながら、こけし人形を無理矢理ベルトと胸の間へ押し込んだ。

「あーッ、やめて……」

極度の胸の圧迫感に、お幾は両手で司教の腕を抑えながら必死で呻いた。

「さア、この可愛い人形を胸に抱いて、いいかい、足先をじっと押えておるから、そのまま両手を頭の上に伸ばして、上体を後に反らすのだよ。」

司教は、お幾の苦しげな表情を愉しむように見ながら、揃えて伸ばした彼女の足先を軽く踏まえた。

「あなた、もうゆるして」

お幾、そういつて胸のこけしへ両手をやろうとするのを、その手を取って

「いわれた通りになさい。さあ、こう伸ばして……」

と、そのまま上に引き上げると、くりくりと、はち切れそうに締められたブラジヤーがぐいと上方へ動いた。

「さア、後に反って」

「ああッ」

お幾は絶対絶命の呻きを洩らすと、静かに

上体を反らした。低い浴槽の縁を支柱として弓なりに反り返ったポーズは、司教の気持を満足させるに充分であつた。収縮しつつけるスカートで、脚部をきっちり緊めつけられ、胸を締めたベルトを更にこけし人形で引絞つた異様な姿が立ち罩める湯気で量されて、何ともいえない艶かしさを漂わせている。顎を伸ばしているの頭髪は湯の中に浸っている。両腕は無論、湯の中である。そうした姿勢になるまで、司教はホースの先端で彼女の顎を突いたのだ。

「ふむ、好い格好だ。さア、これが今夜のフイナールだよ」

司教はさういつと、そのホースを水道の蛇口に取付けて栓を捻った。

「わッ、あなたッ。やめて、やめてッ」

ホースの先端から迸り出る冷たい水が、お幾の顔といわず胸といわず、まるで夕立のようになり降りそそいだ。お幾は両手で顔を覆いながら身を起そうと藻掻いたが、極度に反り切った上体は、自分の力では到底起き上れなかった。司教はパチッと水を止めると

「そらッ」

といいつて、今迄押えていたお幾の足先を急に離した。

「あッ」

とお幾が叫ぶと同時に、両脚が空に踊って彼女は浴槽の中へ落ち込んでしまった。

続いて飛び込んだ司教は、さっと、お幾を浴槽の中へ立たせた。彼女が湯を飲む間もない瞬速の動作であった。

「どうだった。お幾」

そういいながら手早く締めつけている胸のベルトをゆるめてやった。

「あなただったら、ほんとうにひどい方ね。」

お幾は、ようやく多少は楽になった胸許を押えて呟くようにいった。

「ハハハ。そんなの、まだ序の口だ。このこけし人形はお前に預けておくから、居間に持って帰るんだよ」

そういいながら人形を手渡した。そして

「おお、今夜は満月だな。もうお浪が来る時分だが」

と思い出したように言った。

「あなた」

とお幾は急に司教の腕を捉えて

「あなたは毎月十五日の夜には、お浪さんを舟に乗せて明方近くまで出て行かれますが、一体何をなさっているのです？」

と、軽い嫉妬のまじった調子で訊いた。

「あの女か。あれは禁制の犬を島に放った弟の罪の償いをさせているのだ」

「来る度にこけし人形を持って来るのは？」

「あの娘はこけしを商って生計を樹てている。あの娘にとってはこけしは何よりも大切だ。その一番大切なものを神様へお供えするのさ。あのお浪と一緒に」

「あの娘をお供えするんですって？」

「そうだよ」

「どんな方法で……あなたは……」

お幾の表情が急に曇った。

「話しをするより、今夜はお前も一緒に連れてって見せてあげよう。そのかわり、お前もお浪と同じように神に謝らなくてはいけないよ」

「ええ、連れてって下さい」

「じゃア礼拝させてやろう」

司教はそういうと、意味あり気に笑った。

真夜中の海面は、宵の内にちらついていた漁舟の灯も消えて、油を流したようにとろりと静まっていた。対岸の漁村から隣村へかけて民家の灯が横一線にキラキラとまたたいている。月は中天に懸っているが雲が多く、海上は急に明るくなったり暗くなったりした。

岩を廻ると、その海面に大きな鳥居が波の上に浮んでいる。今その鳥居の傍へ一艇の舟が静かに寄って行った。

舟の中央には堤司教が水干に鳥帽子姿で座り、両手に笏しやくを持っている。その後にはお幾が白衣に紅の長袴をはいて静かに櫓を押している。その舟の舵へきまにお浪がやはり紅の長袴をはき、上体はブラジャーだけで前向きに立っている。後からは見えないが、頸から細い紐で新らしいこけし人形を掛け、両手で幣を胸の処で捧げているのだ。

やがて鳥居の真下に着いた舟から、司教はお浪の手を取って彼女を脇柱の横棧に上らせると、一条の綱を持ってお浪の後側に跳び上った。そして手早く彼女の両手首を上横棧に縛りつけた。お浪は何もいわずに、司教のするままに身を委せている。頸から胸へ吊った六寸位のこけしがフラフラと揺れた。

お浪を鳥居へ十字に縛った司教は、舟へ戻ると今度は自分で櫓を操って、お浪の縛られている前面へ廻って錨を投げた。そして再び舟の中央に端座すると、音かに笏しやくを持って深揖した。

お幾は、そうした司教の様子と、お浪の姿とを櫓こしに坐って交互に見凝めていた。声も朗

々と祝詞を誦する司教には、まことに神に仕える者の至情が溢れているようであった。また、海の鳥居の横棧に十字に縛られて、薄眼をあけて無我の境に入っているようなお浪の顔には、苦痛の翳は微塵もなく、ただ無心に神に謝罪する随順の色が漂っていた。

折から月は雲間を離れて、この異様な海上の光景をまざまざと照らした。

お幾は、そうした状景を見ているうちに、何かしら自分が衣裳を纏っているのが、却って汚れを包んでいるように恥かしく思えて来た。今夜こうしてわざわざ司教に同行してきたのは、心の底にお浪と夫との二人だけの行動に疑いの念を抱いていたからである。だが今は、どうかして自分も神に随順する事を司教に指図して貰いたい、と思うようになっていた。

彼女はそう一ツと紅袴の紐をゆるめて、上の白衣を脱いだ。くっきりと盛り上った胸の隆起は、夕方から一刻前の浴室までベルトで締められていたとも思えず、純白のブラジャーに守られるように包まれていた。

その時、お幾はふと社殿に掲げられている一枚の絵馬を想い出した。それは縦一尺、横一尺五寸程の小さな絵馬で、比較的高い処に

掲げてあり、しかも普通の者ではその絵馬は丁度梁と他の絵馬とに遮られて見難い位置に懸けてあるので、初めは彼女も気がつかなかった。

或る日、司教を社務所へ訪ねた時、双眼鏡を渡されてその絵を克明に見る事ができたのだが、「山中常盤」と隅に書いてあるその絵

は、上半身裸形の常盤御前が山の社の廊下で紅い長袴一枚にされ長い髪を振り乱して、髭むじやらの数人の平清盛の家来に、手取り足取りされて責められている図であった。体を押えられ、両手をもろに斜上に差し上げられて、後身にのけ反っている常盤御前の白い頸から胸乳へかけて、赤顔の男が野太刀を鞘と



と、ぐいツと押し付けて眼を剥いている。小さな絵ではあったが、その常盤の顔の表情が彼女には、いつまでも忘れられなかった。羞恥と困惑と、苦痛と愉悅の入り混った複雑な気持を、その絵は観る者の心に伝えていた。

お幾は、そんな事を思い出しながらいつの間にか両掌で胸を押えていた。そして常盤と同じような姿の今の自分が、常盤にかわってあの絵のように責められている姿を想像して恍惚となっていた。

「さア、お浪を舟へ移しなさい」

司教の言葉にハツと我に還ったお幾は慌てて繯に手を掛けた。司教はそうしたお幾の姿をじっと見まもっていた。

それから一刻ほど後――

神社の広い拝殿の前に、丁度ファツションのステージの様に、露天の廊下が長く海に伸びている。そして、その端に大きな石の燈籠が一基据えてある。

舟から上った三人は、その廊下を拝殿の方へ進んで行った。

「このこけしは？」

「持っていないさ」

二人の後から、お浪がこけしを捧げるよう

にして、従った。やがて拝殿の前に着いた司教は、一隅から腰ほどの高さの八ツ足（神前に神饌を供える細長い台）を持ち出して御簾の前に据えた。そして、お幾にむかった。

「台の上に上りなさい。今夜は、そなたにも祓いの式を行う」

と、おごそかにいい渡した。

お幾の艶やかな体が、狙上の鯉のようにすんなりと台の上に伸びると、司教は袂から紐を取り出して、お幾の両手を台の足に結び付けた。次ぎは彼女の両足も袴もろともに台の足に深々と括り留めた。月は出ていたが、夜更けの拝殿はうす暗く、あられもない姿に縛られたお幾の姿も薄闇に包まれていた。

司教は幣ぬさを持ち出すと軽く一揖して、お幾の身体の上で緩るく三回、左右に振った。幣の紙幣（かみしで）と金引（麻の皮の繊維）の先端が、お幾の胸元をこそばゆく撫でた。

それが終ると幣立を台の上に置いて、その幣を立てた。それから別の太い綱を取り出すと先刻までお幾が捧げていたこけし人形を、彼女の胸の上に横たえ、その上へ綱を渡して八ツ足の台ごと彼女の体を、ぎゅぐゅと締め上げた。

「あなた……」

お幾が、思わず声を立てるのを

「静かに、すべては神の思召しだ」

と制するように言って、お浪の傍まで退いた。お幾は自分のする神事を予め知っているものの様に、無言で両手を後に廻していた。

「浪、そなたはこれから百拝の儀を行う。いいな」

「はい」

お浪は微かに返事すると深く頷いた。

司教はお浪を後手に縛り、頸から下げていくこけし人形を外して彼女の胸の上へ横一文字に当て、紐を背から胸へ斜にX型に廻して締めつけた。ういういしいお浪の胸が綱目のブラジャーの上から無残に圧しつけられて痛々しいが、お浪はじっと眼を瞑ったままである。

司教は祭壇から一尺五寸程の角柄の御幣を捧げて来ると、恭々しく一揖して膝を落し、その柄の先をお浪の胸にくびれこんでいる紐に押し入れた。

そうして置いて司教は祭壇に近づき、隅の釘を押すと梁の上に仕掛けた四つのスポットライトがパツと灯いて、祭壇を昼のように明るく照らした。無論、お幾の人身御供に似た肢体もくっきりと浮き出しになった。お幾は

思わず眼を瞑った。真上から来る激しいライトの光に、恥かしい姿を誰かに見られている様で、顔がカッカッと火照り胸が大きく波打った。

司教は、お幾の心の動揺を見すかすようにじっと見ながら円坐に腰を下した。

やが低い中臣の祓の音声^{はらへ}が社殿の床を這うように流れ出すと、それまでじっと佇んでいたお浪が、一足々々静かに歩き出した。彼女は心持ち胸を突き出すようにして祭壇の前へ進んだ。胸に支えている御幣が歩を移す毎に前後に揺れて見える。祭壇の前で膝を折って深揖すると、御幣も彼女の upper body につれて下り遂に先端が床に着いた。ややあって、後手のまま立ち上ったお浪は踵を返して、長い廊下を突端の石燈籠に向かつて、しずしずと進んでいった。こうして石灯籠から拝殿の祭壇まで十回往復するのを百拝というのだ。二往復ごとに司教は御幣を取換える。御幣の色が赤、黄、緑、黒と交って行く。

お幾は先刻から縛られた身をもがかせて、耐え難い喘ぎ声を洩らしていた。彼女の傍に立てられた幣が夜更けの風に揺れて、むき出しの彼女の肩口を、生き物の触手のようにくすぐっているのだ。勿論、司教がそれを計算

に入れて立てておいたのだ。

お幾は頻りに眼で司教に訴えているが、彼は態と気が付かない振りで拔言^{はくごん}を誦し続けている。

お浪が最後の百拝を終えて、司教の前へ跪ずいた時、司教は黒い御幣をぬいて祭壇に納めると、今度は真鍮で出来た金色の御幣を捧げて来た。毎月の神事は黒の御幣で終るのでお浪も一寸意外の顔付きになった。

「これを捧げて祭壇の前の前で、祝詞が終るまで大きく前後に振る。この御幣の揺れて触れ合う音が神託の妙音となる」

司教はそういうと、その柄をグイと胸に差し立ててお幾の仰向けに縛られている祭壇の前へ連れて行った。そして頭へ手を掛けてずーっと前かがみにさせ

「この辺りまで上体を曲げる」

というと、円坐を引寄せて坐し、再び笏をとっておもむろに

「とうかみ、えみたみ、祓いたまえ、浄めたまえ。とうかみ、えみたみ……」

と誦し初めた。

それはまことに奇異な光景であった。司教の誦声につれて、まるで憑かれた者のように

礼拝するお浪。後手に縛られている手首も、こけしで圧しつけられ御幣の柄がにじり込んでいる胸のブラジャーも痛々しい程にくびれて、激しい礼拝の仕方に息を弾ませながら同じ動作を繰り返している。真鍮の御幣が、その度にジャラン、ジャランと音を立てて空間に躍る。そして、その御幣が金属音を立てて鳴る度に、八ツ足に縛られているお幾の胸や肩に触れるのである。

お幾は永い時間、風に揺れる幣の先端でなぶられ、くすぐられて身を揉んでいたが、今また思いきり緊張した胸を中心に、大小の角片を小さい環でつなぎ合せた真鍮の御幣で引ツ掻き廻され

「ああッ、あなたッ。もうゆるしてッ」

と、思わず声に出して叫んでしまった。

司教は、お幾の声を聞くと、じろりと彼女の顔を見ながら一きわ音声を高めた。

お幾は眼尻に涙を浮かべながら

「ああッ、ああッ」

と全身を硬ばらせて身をよじた。その時、司教はすっと立ち上るとお幾の傍へ寄って、彼女の胸をこけし諸共縛っていた綱を解いた。お幾はきつい圧迫感から解放されて大きく息吐いている。

司教は、お幾の胸に縛っていた、こけし人形を三宝の上へ立てて恭々しく拝んだ後、すーと尾を長く引いて誦声を止めた。

お浪は司教の声が消える途端に二、三步、後によろめいたが、司教に肩を掴まれて、やっと立ち直った。彼女の眼は何かを逐うように異様に輝やき、全身にびっしりと汗をかいていた。

司教は、ひざまずいて金幣を抜き取ると祭壇に納め、続いて、後手の紐を解いた。そしてお浪の胸に横一文字に縛りつけていた新しいこけし人形も、お幾の人形と並べて三宝に載せた。そして水干の袖を払うと軽く一掛した。

やがてパッとライトが消されると、月は雲に隠れているのか社殿の中は暗い闇である。

夜風がさっと吹き入った時、お幾は祭壇の辺りでコトリと三宝の上で、こけし人形の倒れる音を聞いた。

長い廻廊の下まで、ひたひたと寄せていた潮が、静かに沖へ引いてゆく刻限であった。

—終—

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (9×6.5寸) 印画紙焼付
各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	八〇円
五組五枚	三〇〇円
十組十枚	五五〇円
二十組二十枚	一〇〇〇円
三十組三十枚	一四〇〇円
四十組四十枚	一七五〇円
五十組五十枚	二〇〇〇円

Y1 全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2 乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3 観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4 見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5 浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6 麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7 逆十字後手縛	(愛川悦子)

Y8 裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9 逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10 全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11 なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12 全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13 蒲団裏裸またぎ	(大塚啓子)
Y14 初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15 ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16 全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17 セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18 庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19 全裸全身軀目慢	(愛川悦子)
Y20 豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21 追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22 遅ましきヒツプ	(愛川悦子)

Y23 大の字晒し	(絹川文代)
Y24 縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25 胸のボリウム自慢	(愛川悦子)
Y26 麗人受難の巻	(益田房子)
Y27 もつこれで許して	(益田房子)
Y28 むしられたズロース	(花坂道子)
Y29 全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30 鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31 囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32 全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33 ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34 開股一番一直線	(絹川文代)
Y35 縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36 亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37 全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38 妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39 椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40 強烈第手首縛締	(田原美佐子)
Y41 ハタカ縛り人形	(絹川文代)
Y42 濃艶ハタカ縛り	(絹川文代)

Y43 あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44 全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45 後手立木吊り	(村井知可子)
Y46 全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47 全裸寝台裏恥責め	(花坂道子)
Y48 振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49 長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50 ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51 手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52 柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53 不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54 カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55 緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56 膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57 前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58 股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59 聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60 エビ責めの表情	(絹川文代)

秀 緒 の 日 記

(続)

藤 山 秀 緒



〇月〇日

菊枝の上京は遅れるらしい。お父様が、おわるいとか。私にとっても打撃。

いつもなら、今日の午後には、此の部屋で向いあって坐っているだろうに。

折角、一日お休みをとった私。でも、お昼前には起きてしまう。

デニムのズボンにゴム長を穿いて浴槽の掃除をする。この一週間は、いつもの病氣も起らず、毎日お仕事のあけくれである。

菊枝に逢っておくれをとるまいとの節制でもあった。でも、いまは無駄。

デニムの粗い肌ざわりと、ゴム長は私の節制を嘲笑うようだった。

私は、ゆうべの残り湯が、生温くよどんでいる浴槽へ、ゴム長、ズボン姿のままとび込んでしまった。

ぬるま湯に男物のワイシャツが胸まで沈む……でも物足りない。ああ、やっぱり私は乗馬ズボンに革長靴でなければ酔えないのだ。じっと考えこんでしまう

ずぶぬれのズボンとワイシャツを脱いで外出の支度。

久しぶりに今日は馬場へ行って見よう。菊枝も来ないのだし体もあいているのだから。

馬場は、某社の女優さんたちで満員。

「夕方になりますか、待ちますか？」と先生が訊く。「ええ、いいですわ。……長い間馬装したまま待たされる。」

乗馬靴の中で足がむれている、乗馬ズボンに包まれた脚部も汗で、ガバガバする。でも秀緒は、歯をくいしばって待ちつづけるのだ。

男仕立のスポーツシャツの腕をまくり、サングラスをかけ、鞭を持つ秀緒の姿は、一寸したアマゾン・スタイルだ。でも、待たされながら、乗馬ズボンの桎梏をたのしむ秀緒が乗馬服フェイシスト故に、誰にも理解して貰えない心の悩みを抱きつづけていると、この姿から察してくれる人は居ないのだ。

……私は乗馬服のまま羽田へ走った。菊枝は来ないのだけれど、行って見なければ気がすまなかったのだ。

空港の灯が、夜空に美しかった。私は、乗馬ズボン姿でロビイを歩き廻った。乗馬靴の響きが、固い床の上を、うつろに消えた。

やっぱり菊枝は来ない。お父様が、おわるいのでは、当分、来られないだろう。ああ、こんなにも淋しいものか。私は乗馬ズボンのベルトをきりきりと締め上げながら、暗いデッキの手すりに、もたれて泣いた。

夜は、乗馬服のまま寝転んだ。

〇月〇日

今は、馬装ではなかったが、喰いこむように細いストラックスを穿いて、淡い緊縛感を味わう。

銀座で軽い食事をして自室に帰る。

菊枝からの手紙が待っていた。よくもまあ毎日こんなに書くことがあるものだと思う。

私は今、こうして……。と絵入りの手紙。

跨いで踏張った乗馬ズボンと長靴の力のこもった描写。こちら

しも負けずに筆を執るが、書いては破くので、はかどらない。

菊枝は、お芝居

が出来ずに困り果てているらしい。

毎晩、あのテープをレシーバーをつ

けて聴き乍ら、乗馬ズボンに身を固

めてイライラして

いる由。いとし

〇月〇日

菊枝の手紙は、日毎に激しくなっている。

書かずには居られないのだろう。わざと激しい描写を使うのは、これを読んだ時の私の気持ちを想像したいからであろう。

絵も、乗馬ズボンの脚をふんばり、臍腑をつかみ出して歯をくいしばる様子など、目を蔽うように凄惨なタッチである。

ああ、私の影響かしら？、此の人はこんな



高倉みゆきの襲撃ポーズ

な結婚が出来ないようになったら、私は何と云って申訳けをしようか。私は、菊枝の倅せのために、此の人と絶交しなければならぬのではないか。

菊枝の激しさが、つればつのるほど、「姉」としての私には、考えさせられることが多い。……でも今の私には、菊枝と絶交することは出来そうにないのだ。

いけないと思う私自身、ある面では菊枝の手紙を握りしめながら激励しつつづけているで

はないか。

〇月〇日

菊枝と絶交しよう。

私は長い手紙を書いた。お父様の御病氣は神様が私たちの妖しい友情にピリオドを打てとのお教えに違いない、とも書いた。

菊枝の返事は速達で来た。字は、汗と涙でにじんでいた。よほど驚いたと見え、最初の一通は便箋一枚に走り書き、二通目は長いもので、それが、一緒に届いたのだった。

それが本心なら

ば私は東京へ飛んで、お姉様のお部屋の前で切腹して死ぬ、とも書いてあった。

いま私は、更にその返事を書いて

いる。私の轍を踏ませたくないのだ。冷静になつて書くつもりで、私は浴衣姿で書いています。

菊枝。気を鎮め

てよく考えて。そして倅せな結婚をして下さい。

〇月〇日

私は毎晩、乗馬ズボン姿で苦しんでいる。菊枝と訣別の決心をしたとはいえ、それは、私のフェティシズムを拭い去ることにはならないのである。

磨きあげた黒革の乗馬靴と、馬腹にあてたことさえない銀色の拍車が、電燈の光をうけて輝き、乗馬ズボンが床の上を、のたうつ、そんな光景が、夜毎につのつて行くのだ。

菊枝の乗馬ズボン姿が、私の脳裡を掠め、物凄い迫力で現われる。

菊枝は腹を切っている。壮烈な苦悶の幻影が私の上に、のしかかるのだ。

「ウーッ！」

菊枝の呻きが聞こえる。

思わず私も床にのめり、幻影に呼びかけつづけるだ。菊枝！菊枝！……。

〇月〇日

お仕事が遅くなつて、S駅を出た私は、家路へ急ぐ。

歩き慣れた道だけれど、雨が降っているの

で物寂しい。ササールコートの際を立てた私は、いつ



颯爽たる高倉みゆきの乗馬姿

もの角を曲ろうとして、ハツと息をのんだ。

やっぱり来たのだ。

菊枝も、ササールコートで、下には乗馬靴が覗いている。

「こだま」で着き、すぐに来たが、私は不在で、とりつく島もなく、雨の中を、歩きつづけていたという。

ササールコートは、ごわごわと水を吸ってまぶかにかぶったフード、スポーツ帽のひさしからこぼれ落ちる雨水が、この何時間かのどんなに辛かったかを教えてくれた。

人通りは、なかった。

二人は、どちらからともなく、しっかと手をとり合っていた。

何にも云わなかった。

私も黙って居た。

時々、ササールコートが、がばがばと音を立てたが、それさえ雨の音に打ち消されていた。二人は、やがて肩を並べて歩きだす。ずぶぬれのササールコートを脱いだ二人が心の中に別々の事を思いながら黙ってすすったホットコーヒー。私の決心が音を立てて揺れる。

もう理窟は無かった。私は二分とたたぬうちに、スラックスを乗馬ズボンに穿きかえ、

眉をきつめに引きMスタイルに変わっていた。

久しぶりの男装だった。一人のときは、いくら乗馬ズボンを穿いても、こんなに凛々しいメーカーは出来ないのだ。

菊枝も、化粧を直して、いつもの乗馬ズボンに穿きかえてしまった。

どのような激しいプレイにも堪えよう、と言う覚悟が、うかがわれた。汗や脂に汚れた乗馬ズボンが、決心の手前にためらう私の胸を昂らせた。

二人は、長い間、向い合って立っていた。お互いの姿を、思いのかぎり見つめ合ったのである。

二人の息遣いは次第に激しくなった。堰を切ったように、のめりかかったのは私の方だった。

「ああ、お、お姉様……」

「き、菊枝……。私はも、もう……」

「お、おねえ様……。私も、私も……」

互に切腹の擬態で、のたうち、乗馬ズボンの女腹切が、無限の夢をのせて二人の上に渦を巻いて飛び交う。

疲れては眠り、醒ては互の名を呼び合って夢の中で腹切りプレイにのたうち廻った。

菊枝も、私も、「女間諜曉の挑戦」で高倉

みゆきさんが着た乗馬服に身を固めている。カーキ色のこの乗馬服は、汚れも目立たず、しかも凛々しくて好きなのだ。

私にとつて、菊枝は、どうしても離れることの出来ない人と、ハッキリ知らされたとき菊枝は私の胸に顔を埋めて嗚咽していた。

きみの倅せを台なしにするかも知れない、秀緒を許してくれ、と詫びる私。

でも二人は倅せだった。

菊枝も、私とのプレイだけに生甲斐を感じているのだとも、この倅せがあるかぎり、彼女は満足なのだとも云った。

こうして二人は再び、固くく手を握り合ったのだった。

二人は男装のまま手をとりあって雨あがりの朝の街を進行した。

(挿入のスチールは、新東宝作品)

「女間諜曉の挑戦」より

「お断り」○黄色オラミ誕生(真木不二夫)並に○或る倒錯生活(西村憲一)は、締切後原稿到着の為、本月号はやむを得ず休載いたします。来月号を御期待下さい。

——冷血記者のメモから——

記 手

轢死屍体

男 佳 方 南

私が、サデイスチックな異常性格者である事を自覚したのは——そう、もう十年近くにもなるでしょうか。まだ駆け出しの新聞記者でしたが、ともかくタフネスな仕事振りを買われて、W町通信部の通信主任へ破格の栄進をした。残暑厳しい九月初めの頃の事でした。鉄道沿線の人口一万そこ／＼のこの町は、I盆地と称ばれる穀倉地帯の中心で、郡役所とちっばけな田舎街には珍らしく二つの高等学校など行政と教育機関が整備して、町の経済をうるおしている。いわば典型的な消費都市の、何のとり得もない町です。しごく平穏なところでもあり、血気盛んな

その頃の私には、もの足りな過ぎる職場の環境でありました。

それは午後十二時五十七分のことでした。——突如、一呼の鋭い列車の警笛が平穏になれつこな、この町の人達を驚ろかせました。恐怖を暗示させるような、不吉な音ででありました。

暇をもて余して、近所の子供達とキャッチボールにふけていた私の脳裏へ、とっさに『事故!』の予感がひらめいたのは、いうまでもありません。

午後十二時五十八分には、町の西側にある国鉄W駅へ、Y本線下り列車が到着します。現場へ走る直前、職業本能から振り仰いだ通信部の柱時計は、まさしくその一分前を指していたのですから、事故現場（私はそう確信しておりました）は、線路添いに、列車の進行方向とは逆へ、おそらく一キロメートルとは離れていないだろうと目算しました。この時、私はフトいままで気付かなかった不思議なことを思い出しました。普通ならば、列車が駅に到着する前には駅のよほど手前から汽笛を鳴らして到着を報ずるか、踏切などの注意をはらうはずですよ。

ころがこのW町に限って、それも下り列車だけは、いままでに汽笛を聞いたおぼえがありませんでした。後になって判った事なので、これは学校街通過の関係で多少変則的になっているのだそうです。

まあ、そんな事はどうでもいいようですが、さすがに、とっさに「事故」を暗示させたのも、この不自然な警笛に根拠があったわけです。

汽笛が耳に入ってから僅か五分後の午後一時二分頃には、私はもうW駅から直線でおよそ六百米離れた、県立W女子高等学校の裏手の、小踏切へ駆けつけておりました。

予感とはしかに的中してはおりましたが、事件に飢えて張切っていた私の期待に反して、脱線とか、転覆とか、衝突などというトピック的なものではなくって、一女学生の轢死に過ぎませんでした。飛込自殺でありました。

（人様の生命にかゝわるこのような大事を大それた喜びといふ新聞記者とは、何と因果な職業でありましょう。）

職業がら、首吊りとか、土左衛門（水死）服毒などの死体には、見あきるほど会っている私でしたが、でも凄惨な轢死屍体を見るの

は、これが最初であり、その後もいままでのところ、再遇しておりません。

この「初もの」という意識が、よっぽど強い刺激であったのと、しかも美貌の女学生と



Tak

いう噂とが、少なからず興味をひき、すっかり興奮した私は、必要以上の観察をはじめました。

九月というのに、暑い南国の初秋は摂氏三十度の水銀柱を保ち、異状に乾燥して、見通す線路の上には陽炎が燃えておりました。

飛込死体は、私が駆けつけた時には、二、三人の駅員と数人の弥次馬に囲まれただけで、警官も来ておらず、まだ一指もふれておりませんでした。

おそらく飛込場所でありましょう小踏切からは、列車の進行方向へ向って三十メートルばかりひきずられ、二本のレールの間の砂利の上へ、左手首だけをレールにもたせかけるように乗せ、頭を列車の進行方向へ向け、レールと平行に並んで、俯伏せに倒れておりました。

飛込個所から死体位置にかけて、入念に観察して行く私の眼をまず捕えたのは、ギラギラと熱っぽく光ったレールの上に、巾一センチメートル位のテープ状に、長々とこびりついている薄桃色の物体でした。

警官よりさきに、現場をくずすことは違法ではありますが、その時の私の心のはやりようは、それにかまっていられませんでした。

竹の棒の先で、その薄桃色のテープを、ちよつとつついて剥いてみると――案外柔からいんですね。そうです、丁度色こそ違いますが食べ物の「カンピョウ」の様でした。

といったって、おそらく想像はつかないでしょうが、これが何と、鮮血に染った消化器管の一部のすっきり変った姿でありました。

背中の皮を一枚残したきりで、腹部を真横一文字に押し切られた死体から、切断される時にはみ出したのがこの傷ましい結果となつたのでありましょう。肢体は列車の進行する余勢で、前記の形に放り出されたのでありましょうが、はずみにレールと列車の車輪との間にはさまって、引づり出され、レールに付着したままペチャンコに轢かれて、この形にされたものと想像されます。

それにしても、飛込個所にも、死体位置にも、出血らしい出血が見当らないのが意外でした。

やがて警官が駆けつけ、検死が始まりました。

少し蒼味を帯びたバター色の俯伏せの死体は、一見したところ傷らしいものもなく、四肢も完全に近いものでありましたので、まるで、ただの伏臥姿体を見るような感じをおぼ

えました。でも念入りに見ている私の眼には右足の五本の指だけが、そっくりなくなっているのに気付いたのです。

無論、それに気付いたのは私ばかりでなく数名の警官達も、検屍の事務的な必要性から早速に探索にかかりましたが、私も興味かたがた、勝手に手伝ってやりました。

一分か二分かでしたらう、ゴソ／＼と現場付近を歩き廻っていた私が、何気なく線路脇の叢を覗いた時、そこに拳大の蠟塊に似た異様なものが転がっているのに気付きました。妙にテラ／＼と艶っぽい色彩でありました。

本当に無意識のうちに手が伸びて拾いあげてみますと、何とそれが、いま大勢で捜している右足先ではありませんか。

別に気味が悪いとも、不潔だとも思いませんでした。色は、すでに爪の色と区別つかないままでに変わって白け、もとより体温などとはとくに消え失せ、冷い。おしほり／＼にでもさわるように、ヒンヤリとしていました。鼻にあてがうと、まだ腐臭などはきておらず、なまぐさい血の香に掻き消されながら、ほのかに乙女の芳りが残っているようで、かぶりつきたいばかりの異常な気持にかられました。強い圧力で幾分捻り加減に押し切られた傷

口は、常識的に想像されるザクロ口のような生々しさは微塵もなく、丁度私達が大幅餅を噛みちぎった時のように、傷口は自然的に上下の皮と皮とがくつつき、縫合されたような形になっていました。

私は何か非常に貴重な蒐集物でも手に入れたかのように、ただ無心に観察をしておりました。

検屍ならびに解剖は、現場に近いW農高の生物教室へ運ばれて行われました。

特に乙女への心づかいから、死体は現場の俯伏せの姿のままその上に白布をかけて戸板へ乗せ、解剖場へ運び込まれ、ここで初めて仰向けに寝させかえました。

窓に寄せかかる大勢の野次馬達を、警官が追っ払い、厳重な戸締りをした上にカーテンをひいて、いよく死体が仰向けに返される時、私の胸は一種の異様な感激におどっていました。

いま眼の前に背をみせている乙女の死体が仰向けに反えされることによって、どのようなみにくく変貌するであろうか——と、それは初めてみる見せ物への期待にも似た、その厳肅な雰囲気似合わぬような気持でありま

した。

死体を動かす度に傷口から吹き出すのでしよう。血に彩どられた戸板から、その隣に白布を敷き臨時に設けられた解剖台へ移された乙女の死体は、左手を真横に伸し、右手は鍵に曲げて拳を耳の脇で握り締め、両足を約六十度ばかり開いて、ほぼ大の字形に硬直したまま、背中とは対照的な、無残な姿を披露しました。

まさに無残という言葉は、こんな時にのみ使われるもので有りました。傷は腹部、それも中心部のあたりを真横へ「文字」に切り開いておりました。襟死特有の押し切った傷口ではありませんが、こればかりは腹の幅一杯に右端から左端まで、およそ五十糎——いやそれ以上の長さも有るでしょう。背中の皮を僅か一枚残したきりで、骨の髄に至るまで切断しているのです。しかも、先き程、戸板で運ぶ時に動かしたためでしょう。上下約二十糎もありました。体の厚みだけ傷口がパツクリ開いていました。

十七の乙女は、このむごたらしい死に、おそらく何の恐怖も持っていなかったものでありましよう。そして一瞬の出来事に、苦痛も知らずこの世を去ったのでありましよう。

能面のような美しい死顔でした。キレイに拭かれた顔はすでに血の気こそ失ってはおりますが、自ら選んだ「死」を全とう出来た満悦のためか、生き抜けなかった自分を嘲笑うためか、はたまた、一瞬の恐怖と後悔の表現の変貌か、ともあれ、片頬に微笑とも受取れる歪みが残ったままでありました。

本誌の愛読者には、随分と切腹マニヤの方がおられますが、それらの方々の中に、現実的に切腹死体を見られた方は、幾人おられるでしょうか。

私は切腹マニヤでは御座いません。

しかし、その死体をみた時、私が連想したのは切腹でありました。眼の前に眠る乙女の姿は、切腹死体の錯覚？でした。

なるほど、刑罰的という切腹は、自己の力によって、自己を死への苦痛に導くために、腹を切り裂く事を意味しているようです。

私のみた乙女の死体は、あくまでも他力によって得たもので根本的には違っておりますが、結果的には、切腹と同じ型式のものであります。

だから、切腹の實際を御存知ない、想像以外に切腹の無残さを図り知ることの出来ない方々に、その報酬が、文筆に絶するいかに無

残なものであるかを、私は優越感をもって教えさせて戴きたかったのです。

何故このような忌まわしい、血なまぐさい轢死のことを入念に書いたのかと申しますと実は先日、手持の休刊以前の本誌を再読しておりましたところ、昭和二十九年の四月号に畔亭数久氏の口絵で「鉄路に散る二輪の花」

というのが眼につきました。かつて自分の眼で現実にみた出来事の幻影をまざぐと思ひ出し、二、三の相違点はあるにしても、畔亭先生の細心行き届いた筆跡に感嘆のあまり拙い筆をとった次第であります。

解剖台上の乙女は、それから間もなく、このような事には何の感銘も持っていないであ

りましょう無表情な若い医師の手によって、微動だにしくなっている頸もとから縦一筋にメスをふるわれて行きましたが、私はその次々と変って行く乙女の姿に、十字切腹を連想しながら、己が冷血を知るともなく、魅せられたように解剖台にとりついていたのでした。ノーモア・惨死を念じながらも……。

とを命ぜられる場合があったらしい。後者の場合だと完全な自殺刑であるといえる。

形式通りの切腹刑、これは介錯そのものは打首の刑と同様であり、明らかに他殺刑の如くである。しかしこれは前にも述べたように腹を切って、健全なる我が身、我が心を自ら死に近づけ、死の準備をする。――この考えかたが重きを占めて、切腹刑を大きく自殺刑に近ずけているのである。

死刑の形態には昔から洋の東西を問わずいろいろあって、一般に知られているのだけでも絞首、斬首、銃殺、はりつけ、ギロチン、火あぶり、釜湯殺し、電気椅子等々、数限りなくあるが、死刑囚として最も楽な死は斬首であろう。一瞬にして忽ち首体、そのところを異にし即死となる。これは同じ即死のはりつけで心臓を突かれた場合と



◁考 察▷

腹を切る事 (三)

折伏下男

普通、一般に死刑といえは他殺刑の事を指すのであって、自殺刑は含まれていない。勿論現代では自殺刑というものは存在していないが、昔は他殺刑より一段軽い刑としてこれが行われていた。即ち、ソクラテスの如き毒薬刑、古代中国の自頸等は純然たる自殺刑である。我国の武士に与えられた

切腹刑は介錯という形式上からみると丁度自殺刑と他殺刑との中間に位するものと考えられる。勿論、切腹刑にも表と裏とがあつて、表の場合には形式通りに検視人の前で腹を切り、介錯人が首を落す。裏の場合には、その日のうちにとか、その夜のうちにとか、時刻を限って切腹し、果てると

比較しても、はつきりと斬首の方が苦しまぬといい得るであろう。それは断末魔の苦しみがないからである。ところが斬首はそれ程の瞬間的な死であるだけに、間際の不安というものが非常に大きくなってくる。刀を打ち降す代りに、水滴を首筋に滴下したところ、忽ちにしてその者が死んだという話も伝っている程だ。

死への準備としての切腹、これはかくの如き冷厳なる即死の瞬間の息苦しさを、当人、及び検視者にとって大きく緩和する。

それでは腹を切る痛さ、苦しさを考えるならば、他の死刑方法と比較してどうかという、切腹の苦痛は断末魔のそれではない。当人は自らの手によって、自らの思い定めた瞬間に、心を落着けて覚悟の自刃を振るい得るのだ。そして自ら死に突き進む自尊心が、斬首の瞬間を待ち望む心を誘うのではないかと考えられる。

そこには、みにくい、そして恐ろしい断末魔のうめきやあがきがない。

立会人達は、その恐ろしかるべき死刑という事実を、罪人としてではなく、立派な人間の最期として見守ることも出来たであ

ろう。

以上の考察からすれば、死刑というものが存続する以上、現今施行の絞首刑と比べて如何なものか。疑問の余地は多分にあると思うのだ。仏国にては、現在尚ギロチンによる死刑方法が行われている事からみて、切腹刑必ずしも野蛮的とは断じ得ない点もある。筆者とすれば、戦前の陸海軍に切腹刑が残っておらなかったことを、むしろ奇異にすら感じられるのである。

自殺としての切腹をみた場合、これまた毎々述べた如く、死の方法として腹を切るのではなく、死の準備をするために切るのであって、死そのものは頸動脈を切ったり心臓を刺したり、謂ゆる急所を求めて果てるのである。立派な自刃は心も形も乱さず用意周到のあとを残す。従容として死を迎える悟道の境地、これが切腹というものの真随ではなからうか。

次に単独切腹と、集団切腹について一寸言及してみたい。

単独切腹の周知の例としては、浅野長矩、滝善三郎などがあり、集団のそれでは、四十七士、堺事件、由比正雪、神風連、白虎隊等があげられる。切腹が前述のように解釈のしようによっては、刃物による安楽死的性格を帯びているようであるが現実には生やさしいものである筈がない。凄惨極まりないものであろうが、単独の場合であればそれが刑であらうと自刃であらうと、残った者は取りかたづけの問題のみであるが、集団切腹の場合にはそうはゆかない。殆んど同時に切腹することはなく、順次屠腹するのだから、あとから腹を切る者にとってさきに切った人の死及びその屍の凄烈さが心に衝動を与えることはまぬがれ得ないであらう。二人三人の場合はまだよいとしても、由比正雪の場合や、四十七士、堺事件の如くになってくると、介錯人すら足の踏場もなくなってくるだろうし、時間も相当にかかることとなる。誠に恐ろしい事である。そしてこの事が、ひいては単独切腹についても思い合され、死、という現実とは如何に恐ろしいものかと、慄然とさせられることではある。

連載第三次元小説

影の国

雪 俊 遙

第二章 吊された縞馬

全国学生女権拡張連盟、通称『学拡連』の事務所は、都心の富士ビルの四階にあった。

半年前の大手入力で、学拡連が潰滅したので表向きは女拡運動に何の関係もなさそうな「みどり登山倶楽部」の看板が掛っている。

愛子は今や、この学拡連の中心人物の一人である。

奥の狭い部屋では、委員長の三田 央子が、比較的新しい活動分子数人に囲まれて、四カ月前に中央公園で処刑された、二人の旧連盟

委員の生前の逸話を、彼女達を知っていることが得意そうな口調で話して聞かせていた。

実際、この次元の違いによって、全く外界から鎖されている国で生れ、育った若い娘達には、その次元の違いを乗り越えて進むことの出来る特殊ロケットを操って、外界に住む、同じ人種の住んでいる日本という国へ脱出しようとした先輩が、大変な英雄に思えるのであろう。

「アラ、川島さん。丁度いい所へいらつしやったわ。こちら、セントラル大学の新しいアクチーブよ。紹介します。こちらは川島愛子さん。まだ。城北高女の三年生なんですけど、学拡連の再建に凄く腕を揮った人なのよ。お母さんがやはりロケット事件の犠牲者な



の」

「まあ。じゃ、やつぱり城北公園かどこかで……」

処刑されたんですか、といいかけて、その新しいアクチーブは、流石に言葉を濁した。

「いいえ、彼女のお母さんは立派なのよ。城北

区の拡張委員の中で一人だけ最後まで拷問に屈せず、知りません、存じません、で押通したのよ。それで、公安警検の奴、本当に新しい委員だから何も知らないのかと思って、とうとう最後に一旦釈放してしまったの。だけど、その時はもう遅かったのよ。警検で受けた拷問の傷がもとで間もなくなくなってしまうたの。それで、彼女がお母さんの遺志を継いだっていうわけよ」

「マア。素敵ね」

新しいアクチーブ達は、純真に目を輝やかせて愛子を見た。感動しきっている目だ。

愛子は黙って目を逸らせた。この人達は、年は私より上だけど、私ほど人生のことを知っていそうもないわ。

「ねえ、川島さん。この人達が、セントラル大学に新拡張を作りたいておつしやっているんだけど、貴女が連絡を取って、指導して行って下らない？。これが、この人達の住所なんですけど」

「ハイ、お引受けしました」

それから一時間程後、一人で富士ビルを出た愛子は、市内電車に乗って終点で降りた。

桜の太木が亭々と青葉を茂らせている、風情豊かな並木道に沿って十分程東へ入り、左へ曲ると、一軒の大邸宅の呼鈴を鳴らした。可愛い顔をした、ワンピース姿の小間使いが、扉をあけ、しとやかに挨拶して、奥へ招き入れた。

十畳の部屋で、庭先の池の中に直立している人間噴水を見ていると、まもなく、

「ヤアヤア、お待たせして、どうも」

渡り廊下から、大柄な一人の女を引立てて入って来たのは、かつての影の国警検署の予審判事、桜川玄太である。

「珍しいものを、お備えになりましたのね」

「ああ、あの噴水かい。これから流行するだろうが、まだ今のところは珍しいもんじやないのかな」

「人間を噴水にするなんていうことがよく出来ますのね」

「なに、わけはないんだよ。チョット仕掛をするだけなんだ。飯は喰えんが葡萄糖やビタミンの注射で栄養を補えば、結構、幾らでも生きていられるんだな」

「マア」

愛子は気持が悪くなってきた。

自分がもしそんなにされることを想像すると、いい気持でなかつ

た。

「セントラル大学にも、新拉連結成の動きがあるらしいんです」

そういつて愛子は、三田央子から受取ったメモを桜川に見せた。

桜川の目がキラリと光った。手帳を取出して、それを写している。

「私がこの人達の指導をすることになったんです」

「そうかい。じゃ、所轄の警検署に連絡して、君の仕事が変わるまでセントラル大学の関係者を逮捕しない様についておこう」

「お願いします」

「久しぶりに来たんだ。お母さんに逢って行くかね」

「ハイ、逢わせて下さい」

玄太は奥むきの用を足す小間使いを呼んで、愛子を地下室に案内する様にいった。

グリーンの透き通った羅を着た雪のような白い肌の小間使いについて、愛子は薄暗い湿った階段を降りて行った。

小さな鉄の檻があつて、愛子の母はそこに入れられていた。逃亡を防ぐ為に衣服は与えられず、赤と紺のマンダラ斑の腰巻をまとい、両手と両足と胴に鉄の環を嵌められて、鎖で鉄格子に繋がれていた。

「お母様」

呼んでみたが返事を期待していたわけではない。

彼女は命だけを助けられる代りに、もう二度と女性解放運動に加わることが出来ない様に、声帯をすっかり取られてしまっていたのである。

いわば、形なき永遠の猿轡を噛まされているわけだ。

目の前に啞にされた母を見ることは、気が変になりそうなほど辛

いことだったが、それでも結局、その方が愛子には気楽だった。声を出せない母からは、今自分のやっていることを咎められる恐れだけはなかったから――。

仕方がないと思う。

あの時、あのまま拷問を続けさせていたら、母娘四人が、本当に熊か狐の様に、吊り下げられたまま、責め殺ろされていたに違いない。現に他の三人の夫人は、処刑の前の曳廻しの時には、全身にむごたらしい傷跡が残っているのが、はっきり見えたという評判だった。母と妹とを救う為には、こうするより他に仕方がなかったのだわ――。

しかし、そう思う傍から、愛子の良心が鋭く痛んだ。

お母様や珠子の為だなんて弁解しているけれど、本当は自分が殺されるのが怖かったからじゃないの。あの時、珠子に打ち降ろされた鞭の激しさに震えあがり、恐怖の余り、母も二人の妹も失心してしまつて自分も意識が朦朧としかけていた。珠子が傷つけられるという怖れより自分自身の受けていた髪の毛吊りの痛さ、あられもない姿で吊されている恥しさの為に。

あの時は全身の重味で、頭から、ごつぱりと頭髮が脱けて、衣紋竹の様な髪枷にシツカリと挟まれた髪だけが、かづらのように宙に残り、丸坊主の身体だけが手枷、足枷、胴枷で身動き出来ぬ姿のまま、床の上に落ちてしまふかと思つた。あのまま吊されていたらきつとそうだったに違いない。

担当刑事に、棒で突つかれて真直、正面を向いたまま、ブランコのように身体が揺れる激痛。髪の毛で吊されている為に、顔は横へも下へも、少しも動かせないのだ。目も眉も狐の面の様に細く、急

勾配に吊上っていた写真を後で見せられた。あんな情ない、自分の顔とも思えない責め顔を、幾らたっぷりと見物されても、どう仕様もないのが、女の髪の毛吊りというものの宿命なのだわ。

目は、かすみ、耳の奥はガンガン鳴っていた。身体を弓型に反らせ、硬ばった口から、ほとばしる、

「キ——ツ。キ——ツ。キ——ツ」

という悲鳴だけが頭の中、一杯に響いていた。

本当は、お母様の為でもないわ。私は、あの拷問に屈伏したのだわ——。

いつのまにか市電の終点の所に愛子は来ていた。

電車は、まだ来ていない。五、六人の男女が、お互いに何の関係もなさそうに、線路の方に心待ち気な視線を投げて、たたずんでいた。愛子も、その中の一人になった。

「川島さん」

突然、後から女の声で呼掛けられた。

振向くと、セピア色の箱型の自動車から、三田次子が人懐こく笑いながら手招きしていた。

愛子は、ギョツとした。悪いところで逢ったと思った。しかし考えてみれば、桜川の家がここにあることを、三田が知っているとは思えない。何かの偶然だろうと思った。

「珍しい所で逢うわねえ。どこへ行ってらっしゃったの？」

傍へ寄ると、三田は邪気なさそうに、笑って訊いた。

愛子は、ホツとした。が、同時に又、良心の痛みを覚えた。

幾らお母様の命と引換えだとはいっても、私は、こんな良い人を裏切っているのだわ。この人のことも桜川さんに、すっかり通じて

ある。私が、学拉連ばかりか、その上の地下組織の幹部に昇進して組織のことがすっかり解ってしまったら、桜川が一網打尽に皆を逮捕して、お仕置してしまおうのだわ。その後で、私はお母様を釈放して頂いて、母娘四人が元の様に平和に暮せることになっているのだわ。つまり、この人達の命と引換えでなければ、私は幸福になれないの。何という怖ろしい運命でしょう。

内心の怖れをかくして、愛子は何気なく答えた。

「この先に伯母様の家があるんです。少しお金を融通して頂こうと思ひまして……」

実際、彼女は桜川から時々多額の資金を受取っていた。

「運動資金ね。マア、頼もしい伯母様じゃないの。でも、その方に拉連のことなんかいっては駄目よ」

「大丈夫、いってません。私達の学資やお小遣いを出して呉れているというだけで、思想的には保守派なんです」

「ベッドに鞭が吊してある御家庭の奥さんね。それはそうと、もうあんた、おうちへ帰るんでしょう。車に乗って行きなさいよ」

「ええ有難う」

車の中には、若い男が二人乗っていた、二人とも凄く固い表情をしていたが、

「学拉連の委員の川島さんよ」

三田が紹介すると、急に優しい笑顔になって、

「マア」

といった。

一人が助手席の方へ移ったので、愛子は三田と、もう一人の青年との間に座った。

運転手は若い女だった。大きな黒眼鏡をかけ、鼻が、すっかりかくれてしまう様な白マスクをして、固い表情で愛子の方など、チラとも見ようとしなかった。

何だか見た様な人だ、と思って愛子は一寸、気になった。

「この人達、皆さん、党の方の方なのよ。だから名前までは紹介出来ませんの。一寸急ぎの用事がありますから、これから党のアジトへ行く所なんですけど、廻り道して行ってもいいでしょう」

「ハイ。私がいても構わないのでしたら、どうぞ」

いいでしょう、どころか、是非、党のアジトを知りたい位だ。良心に咎める嫌なスパイ仕事でも仕事として反復している内に、やはり一種の仕事を愉しむ気持ちが湧いて来ていることが、愛子には不思議なくらいだった。



「アジトはね新町の奴隷市場の中にあるのよ。フフフ。一寸名案でしょう。誰だって、奴隷解放に一番熱心な党の本部が、外ならぬ奴隷市場の中にあるとは思わないものね。」

本部。新町奴隷市場。覚えておいて、又桜川さんに報告しなければ……。

「だけど、この頃、新町署の公安刑事が嗅ぎつけかけたと見えて、よく張ってるのよ。だから今、移転先を探している最中なんですけどね。そういうわけですから、始めての人は、奴隷でも売りに来た様な恰好して入って行かないと危険なのよ。悪いけど川島さん。アジトへ入るまで一寸の間の辛抱だから、目かくしして両手を縛らせて頂ね」

愛子は一寸びっくりしたが、三田はニコニコと、何の底意もなさそうに笑っていた。軽い不安が胸の奥を掠めて行ったが、それは今、桜川の家から出て来た愛子が、いわば自分の影に自分一人でおびえている様なものなのだろう。

ためらいがちに肯くと、三田はポケットから黒い帯布を取り出して、愛子の目の上に当てた。それから両手が後手に廻された。細い強靱な麻紐で、手首と、ひじ

と二の腕のところが、キリキリと縛られて行った。不思議な位、慣れた手付きだった。以前、公安警検で縛られた事のある愛子には三田が人を縛り慣れた女であることがピンと解った。

要所々々だけを無駄なく、ピチッピチッ、と留めて行くので、そんなにぐるぐる巻きにされてしまったわけでもないのに、愛子の二本の腕は、まるで棒にでも変化してしまった様に、後手のまま、ピクとも動かせないのだ。

要領の良いきびしい縄目は、不思議に女の心を突き崩して来るものだ。愛子は何だか、三田の、男の様にガツしりした胸に、縄目のかかった切ない身体を投出して甘えてみたかった。

目かくしの暗闇が愛子の心を一層そんな思いに誘い込むのかもしれない。車が急に停った。

「サア、ここよ。降りるのよ」

耳許に低声で囁く三田の声も、急に緊張して異様だった。

外へ出ると、男の一人が縄尻を掴んだ。三田ともう一人の青年が警護する様に、両側にピタッと寄添って来た。

敷石道を大分歩かされて、土蔵の様な、かび臭い建物の中に連込まれた。

突当って石段を下へ降りて行く。地下室独特の、湿っぽい冷たい風が下から吹き上げて来た。

一階、二階、何と地下が三階まであるのだ。

目は見えなかったが、何人もの人のいるらしいことは気配で解った。——やっとなついたらしいわ——。

ほつとしたのも束の間、衣桁の様な物を背にして立たされ、二の腕で括った縄を、吊上げ気味にその横棒に繋がれた。

「アッ、何をするの」

思わず小さな叫び声を上げると、

「フフフ。あんたこそ、桜川の邸で何をして来たの？」

ガラリと変った三田央子の男の様なアルト。アッと思ったが、すぐ表情に内心の驚愕を出してしまう程、愛子もう子供ではなかった。

「マア、桜川、さんて……、何のことかしら？」

「しらばくれても駄目よ。何だか様子が変だと思って、私達、あんたを特別にマークしていたんだから」

「……………」

「ここはね、党の査問委員会よ。あなたがここですることは、先ず第一に、自分が警検署のスパイであったことを認めること。第二にどの範囲までの情報を、幾らで売っていたか、すっかり白状すること。第三に、他のスパイの名を自白すること。そして最後に、フフツ。これはまあ、あとで宣告するわ」

「存じません。まるで狐につままれた様ですわ」

「まだ白を切る気？……………そう、それならいいわ。今、縄を解いてやるから、そしたら服を脱ぎなさい」

「何ですって。それじゃあ、リンチじゃありませんか。私達の国からそういう暴力をなくす為に、私達は運動していたんじゃないか」

皆が一斉にどっと笑った。愛子は真剣でそう叫んだのだが、考えてみれば、これはおかしかったかもしれない。何故なら、そういう

運動者を官権の暴力に売り渡す仕事にも、愛子は従事していたのだから、人を咎める資格などはない筈なのだ。

私が悪いんだから、素直にお仕置を受けようかしら。そういう気持も動いたが、やはり愛子の心は割り切れなかった。国家の拷問制度に反対する結社が、自分の組織を危うくする者に対しては、容赦なく拷問をもって臨む、というのでは、何が何だか解らなくなってくる。

しかし、解らないといえ、愛子自身の心の中は、もっと解らなかった。

さっきは、党のアジトを突止めることに、スパイとしての愉しみを感じていたのに、今は、党が手段として暴力を認めるということに、心から憤りを感じているのだ。

愛子の心は、被暴力者解放運動の闘士と、警検のスパイの二つに分裂してしまっていた。そして、その時々、状況に応じて、相反する二つの情熱のどちらもが、愛子の心の真実なのだ。

問答を繰返しても仕方がないと思ったのか、三田の手は、もう黙って、素早く、愛子の身体から制服を剥ぎとりにかかっていた。もう一人の女の手がそれを手伝っている。愛子は呆然としてされるままになっていた。党の論理と、自分の心と、二つの分裂に当面した彼女の十八才の心は、今更の様に烈しく揺れていた。世の中の裏面などは、今迄だって随分、知ったつもりでいたのだが――。

見知らない女の手が、愛子の背中を、優しい芋虫の様に這って、ブラジャーを外そうとしている。電流の様な羞恥の衝撃が彼女の体内を走って、ハツと吾にかえった。目かくしはされさいても、自分がいま、ファウンデーションだけの姿にされていることは、すぐ感

覚で理解出来た。

「いやよ。もう勘忍して」

「我々は警検署とは違うんだから、剥くのは、その辺で勘弁しておいてやろう」

正面から男の声が、そういった。若々しい澄んだ声をしている。しかし、口調の裏にはいきなり裸にしても詰らないから、暫くファウンデーション姿で虐めて愉しんでやろう、という調子がありありとうかがえた。

実際、女、殊に若い娘が、薄い小さなブラジャーとブリーフだけで立っている姿には、同性の目で見ても、妙に惹かれるものがあることを、愛子は今まで経験で知っていた。

ファウンデーション姿のまま、愛子は両手を後手に廻されて、あらわになった腕を三田の慣れきった手で、さっきの様に縛られた。何故、三田が縛り慣れた手を持っているかが解った様な気がした。

目かくしはされていても、部屋中の者の目が、突き刺す様に、憎悪の目で愛子の姿を注視していることも、愛子は感じていた。目かくしされているから余計よく解るのかもしれない。なまじ目がいっていたら、羞恥に逆上して、この様な異様な感覚は、かえって感ぜられないかもしれない。

「そこへお座り」

縄尻を引張って、三田央子が命令した。愛子は犬の様に素直に、座った。

何かが膝の前に置かれた。始めて目かくしが取られた。

大きな西洋皿の上に、黒い妙な物が一杯盛ってあった。縮こめた細い脚。幅広い翅。黒褐色の身体。長い二本の触角。油虫だ。あの

台所を夜毎かさこそと這い廻る油虫。しかも死んでいる。いやに赤っぽい。プンと生臭い臭い。茹でであるのだ。それが累々と皿の上に積んであった。どうされるのか、よく解らなかつたが、何がなし愛子はゾツとした。不吉な予感がする。

「お食べ」

愛子は耳を疑った。跪いた姿のまま思わず後を振向くと、革靴で背中をポンと蹴られた。

「お食べなさい。それが、あなたの受けるお仕置よ」

「私、猫や鼠じやありません」

「オヤそう。でも人間でないことも確かね。そうすると何かしら。」

犬かな。それとも、可愛い身体しているから小鳥かしら」

ジロリと愛子の背中に視線を投げて、

「啓子。鞭を持っておいで」

「うんと、ぶって下さい。こんなもの食べさせられる位なら鞭でぶたれた方がまだましです」

「でも、私達の運動の主旨からいえば、鞭で叩く様な残酷なことは余りしたくないのよ」

「人間に虫を食べさせるなんて、その方が、ぶったり吊したりするより、もっと残酷ですわ」

「そうかしら」

「そうです。折檻は人間の肉体を破壊します。でも心は破壊出来ません。皆の前で虫を食べると強要するのは、肉体よりも精神の破壊に重点をおいた拷問だと思ふのです」

「という、どんなに肉体を破壊されても、それで心が破壊されるわけではないのだから、絶対に虫は食べないと、あなたはいうのね」

そう念を押されると愛子は、ひるんだ。じゃあ、私はなぜスパイになどなったのかしら。あの髪の毛吊りの痛さ、苦しさに耐えきれなかつたからではないのかしら。全身の神経をむき出しにされて、灼熱され、電流を通され、ヤスリでゴシゴシ削られて行く様なあの耐えがたい激痛。肉体の破壊が精神の破壊と無関係だ、なんて、そんなこといえないわ。

「ハイ三田さん。鞭。ぶたれて一番痛そうなのを持って来ましたわ」
頭上に響く笑いを含んだ声を聞いて、愛子はオヤと思つた。聞いた様な声の人だわ。目を上げると、愛子の頭の上に、鋼鉄製の丸筥が一本差出されている。釣竿の、一番細い継竿程の太さしかなくて、しかも、三尺はあろうかという長いものだ。鞭の先が撓んで揺れている。これで力一杯打ち据えられたら、愛子の柔らかな肌にどれだけ深く鞭先が食い込んで来ることだろう。不気味な鞭だ。

その鞭を持って差出している女の、白い腕。白い顔……………。

「マア、島田さん。」

「フフフッ、やっと気がついたの。さっきの車を運転していたのは私だったのよ」

整った顔に嘲ける様な笑いを浮べて見降した。女は、島田啓子。影城北北協同の責任者として、影城北公園で処刑された島田夫人の一人娘で、学校は違うが、同じ年令なので、彼女のことを愛子はよく知っていた。

「あなたのお母さんのおかげで、母は殺され、父の工場は組合経営に移されて、私達は皆奴隷に売られ一時は随分酷い目に遇ったわ。うんとお礼をしなくっちゃ」

「違います。私の母は同志を裏切ったりする人じゃありません」

「じゃ、あなた達は、どうして奴隷にされずに済んだの？」

私のせいで、ともいえずに、愛子は黙ってしまった。

「何を黙っているの。何とかいったらどう？」

三田が声と共に鋼の笞を、愛子の、まだ少女少女した背中にピュッと打ち降した。

ペシッ。

鋭い音と共に激痛が全身をジンと貫いた。

ウツ。

と呻いて、のけぞる背へ、

ペシッ。ペシッ。ペシッ

二種か三種の間隔を置いて、鎌倉みみずが這った程の真紅のみみず腫れが、一本、又、一本、と平行に走って行く。

細い鋼鉄の笞は肉を引裂かれる様に痛い。

十回ばかり打ちのめされると、愛子はその場に倒れて、長くなつて伸びてしまった。

ペシッ。

ウウン

呻いて仰向けになると、すかさず胸許を摸られる。

ペシッ。

ウウン、

又うつむくと、今度は腰だ。

胸にも容赦なく鞭は食込む。

三田は顔を真赧にして、ハッ、ハッ、と肩で息をしながら、

「啓子。縄を解いておしまい。四つん這いにさせるんだ」
切なそうに喘ぎながら、愛子は這わされた。

後手の縄目の為に鞭から免れていた肌にも、背中から腰の方へ鞭が加えられた。

うなだれた顔から床の上に、涙の滴がポタポタと落ちる。

「疲れたでしょう、三田さん。それから私は私に叩かせて」

責め手が変ると、鞭の痛さも改った。灼く様な激痛が、情性で四つん這いのままにいる愛子の五体を真新しく、くねらせた。

ペシッ！

横殴りの丸笞が容赦なく噛みつくくと、衝撃で全身が烈しく震える。

「ムウツ。ツ、痛い」

「縞馬だわ。縞馬」

復讐の歓喜で啓子は大声を出した。

全く、四足で身体を支えた愛子の、項から、肩、背、腰、にかけて、赤い縞模様が二、三十本。美しく、平行に少女の肌を彩って、それは本当に、妖しい縞馬の仔を思わせるものがあつた。

「身体中、すっかり縞にしてやりましょう。足の裏から顔まで」

そういつて啓子は更に乱暴に鞭をふりあげた。

愛子は手足の力が抜けて、崩れる様に、コンクリートの固い床にへたりこんだ。火照った肌に冷たい床が快かった。啓子は、それでも手を休めずに、終いには踝から足の裏まで、ペシッ、ペシッ、と叩いて行く。みみず腫れの所々から赤い血が噴き出して、鋼の鞭も血で固めた様に赤い。

後半身を、すっかり縞馬にされてしまうと、もう、呻くより外に何のやれることもなくなってしまう様な、この可愛い縞馬は、ひっくり返えされた。

打ち役が男に変わって、

ペシッ！ペシッ！

男の力は又、格別だと見えて、死んだ様になって只唸っていた愛子が、生返った様な烈しい悲鳴を上げた。

ポツチャリした下脹れの可愛い顔が、蒼ざめて歪んでいる。

全身残る隅なく異様な縞馬にされてしまった愛子は、高高と天井へ吊上げられた。身体は、だらりと、店頭の魚の様にぶる下る。

三田が長い棒で、吊らされた縞馬を突っついて責める。

「愛子、スパイだったわね。あんた」

「ハイ」

かすれて消えてしまいそうな悲しい声。

「認めればいいのよ。油虫も食べるわね」

「ハイ」

「いい子だわ。外のスパイの名は？」

「存じません」

ピシーリッ。

「ヒイツ、ヒツ。本当に少しも知らないんです」

ピシーリッ。

「ヒイツ」

「本当に知らないわね」

「もう良からう。下して油虫を食わせよう。それから、今度は警検署のスパイを勤めるふりをして、我々の方に警検の情報を探って来ることを承知させるのだ。それから一休みさせて、どの程度の情報を警検に握られているか、ゆつくりと喋らせるさ。待てよ、その前に、こいつの妹達を人質にさらってあったな。あれを連れて来て、可愛い縞馬が油虫を食う所を、ゆつくりと見物させてやろう」

そんな声を、吊された愛子は、地獄の底で現世の会話を聞く様な遠い思いで聞いていた。

百回近かったと思われる鞭傷の痛さが全身にうづいて、火で焼かれている様だ。時々、スーッと意識が遠くなる。すると、その烈しい苦痛と入れ変って、法悦の様な不思議な陶醉感が来る。焼かれる身が快いのだ。それは全く不思議な感じであった。意識が回復すると、又、ズキズキと全身が痛んだ。

今こそ彼女は、地獄と極楽が相異なる二つの物ではなく、実は同一の物なのだという事を、頭ではなく、実感で、失調した感覚で理解していた。

扉があいて誰かが連れて来られる気配がした。妹達だろうと思っただが、吊された彼女の顔は下を見ることが出来なかった。出来たとしても、そんな氣力が彼女に残っていたかどうかとも疑わしい。

外界が渦巻きの様にぐるぐる廻って、視覚も聴覚もその烈しい渦の中に巻込まれ、渦巻きながら、暗い無限の水底に、ぐんぐん沈んで行った。

第三章 奴隷 愛子

「次」

舞台の中央に立った口髯の濃い大男が怒鳴ると、愛子の前にいた青年をのせて小さなケープル、トロツコがゆつくと動き出した。青年は鋼の腰帯で腰を締め上げられ、両手首を背後へ垂れて、手首にはまった鉄の輪で、腰帯に固定されていた。太いピアノ線で顎を天

井へ吊上げられていた。女の様に優しい、しかし浅黒い顔が、斜めに上を向き、踵が浮いている。そういう姿でトロツコの台の直中に直立不動の姿勢を取らされている。

トロツコの両端にはワイヤーがついていて、機械仕掛で徐々にトロツコを引張って行くので、舞台につくまでに、青年は、しなやかな鳶色の身体も、吊起された顔も、場内の客にたっぷり品定めされる仕組みになっていた。

しかも、トロツコは一台だけではなかった。広い客席の後方の三カ所から同時に動き出して来る。他の二台の上には、青年と全く同じ姿にされた二十二、三と十七、八才の女が載せられていた。

暗い場内に、照明燈の生電燈の光が六本の太い円筒を貫いて、くつきりと三人の長身だけを前後から浮き上らせる。照明燈は時々暖かい桜色に変じたり、淫蕩な青白色に変ったりして、彼等の肌にはどの色がよく合うかを実験してみせ、そして又、生の光に戻る。

やっと舞台につくと、三人は中央に集められた。場内燈が点けられて、客達に、入口で渡してあるカタログを読み易くする。奴隷をかう資力のないものも、見世物の積りで詰めかけて来ているから、



客の数は大変なものだ。中には映画演劇のプログラムの様に、奴隷市場の商品カタログを何百枚もコレクションして楽しんで

る市民もいるのだ。そういえば今日の客の中にも、自分も奴隷でありながら、仕事をサボって見に来たらしい、若い男女も大分、目につく。

トロツコが戻って来ると、今度は愛子が、その上に載せられた。

水平の台の両端に四角い鉄の環がついている。大道具の係員が、そこへ細い鉄棒を差込んで固定した。両足を無理に上げられて、短い鉄鎖で足輪と環とを結び合わされた。両手も上げられて手首の腕輪を棒に括りつけられる。トロツコは幅が広いので、小柄な愛子は、手足をピンと伸しても、まだはり裂けそうに痛かった。思わず「チー、ウツ」

と呻いてしまったが、一番後の座席の客さえ振向こうともしない、それもその筈、舞台の上では、若い娘が、後向き四つん這いの姿で嵌合された鋼の腰帯についた鎖を外されている所なのだ。

「カタログにもある通り、この子の名は山岸田鶴子。星園高女を首席で出て、内閣統計庁で、我国に何台と算える程しかない、電子計算機の係をしていた程の才媛だよ。身長五尺四寸。体重十六貫。しかも眼鏡こそかけているが、顔はこの通り、可愛らしくてしかも氣品を漂わせた絶世の美女だ」

いいながら、せり売り係の筈が、田鶴子の美しい背をヒタヒタと叩いて、前向きにさせた。色白の立派な身体が、鋼鉄の腰帯姿のまま髪の毛を揃んで立上らされた。客席の後の三本の照明燈が、焦点を合わせて、六十キロワットの明るさで、田鶴子を超満員の客の前に煌々と照し出す。

トロツコの上に隣になったまま、愛子は身の縮む様な思いだった。何十分の後には、私もあれと同じ姿で、あすこに立たされているの

だわ。

尖端を切揃えて房々と肩まで垂した愛子の頭髮の先が、太い綱で括られた。その先に石が一つ縛って吊された。石の重量に髪の毛がんと下へ引張られるので、もううなだれることも出来ない。

トロツコが動き出して、照明燈が愛子の身体を浮上らせても、愛子の、下腹れの頬と、受け口の小さな唇を持った可愛い顔は、軽く上向きに起されて、皆から、たつぷりと賞味されるのだ。戦慄の様なおびえが愛子の心に走った。その心を一層おびやかすかの様に、髪から吊された石が、背中にどつどつと荒く当る。

六十五万。七十万。七十八万。と、田鶴子をせっている客の声が観念の目を閉じた愛子の耳にも響いて来る。

この国では、安い奴隷なら三万か五万でも買えるのだから、これは、かなりの高額である。あんな素敵な女の人の後で、せり売り台に立たされたら、私なんか、一体幾らの値がつけられてしまうかしら、愛子は急に妙な不安を覚えた。

あんまり安い値でせり落されたら嫌だわ。こんな姿にされた後でも、そんな虚栄心が残っていることが不思議だった。

「百万」

声と同時に、市場中が湧き返った。愛子も思わず目を上げた。

哀れな姿を、白っぽい照明燈の光の中に輝やかせて、せり売り台に立っている山岸田鶴子が、眩しいほど素晴らしく見えた。

せり売り台は、ゆつくり廻っていて、その上に立っている奴隷はあらゆる角度から観察される様になっていた。吊られて斜に上向いた田鶴子の丸い顔の上に、屈辱の涙が二筋、光っていた。

数十分後。愛子は田鶴子と全く同じようにせり売り台の上に追い

上げられた。せり売り台は、まだ廻っていない。つまり、せり売りは、まだ始っていないのだ。縛られてもいないのに、愛子は両手をびったりと脇につけて、指先までピンと伸し、踵を上げて爪先で立った姿勢を崩さなかった。この姿勢を一寸でも崩すと、せり売り助手の答がピシリッ、と飛んで来る。

「この子が奴隷に売られた事情は、一寸変っていて面白いよ。この奴隷はね、奴隷制度反対の女権拡張党の秘密黨員なんだ。じゃあ、こんな所に立たせておかないで、同じ姿でも、中央公園のお仕置台の上に立たせろ。とお客さん方、思うだろう。その通り。そうするべきだ。若し彼女が警検の手で縛り上げられたのなら、ですよ。ところがだ、彼女を縛ったのは警検ではなかった。女権党の査問委員会だったのさ。というのは、つまり彼女は、公安警検が党に潜り込ませたスパイだったからだ。査問委員会は、それを逆用して彼女を二重スパイに使った。ところがですよ、この頓間な娘は、そんな複雑怪奇な仕事を手際よく捌く能力なんか、とても持ってやしないんだ。警検へ行つてよ、これこれ、こういう事になってしまいました。が、私はどうしたら良いでしょう。と聞きやがったよ。警検が、それでは、こうこうしろ。と指示したら、又、党へ来てそれをそっくり報告している始末さ。それで党幹部が呆れちゃいました。この娘は単純な密告者で、とてもそれ以上の才能などありません。と言つて、党へおいといったら危険で仕様がな。いっそ奴隷に売っ飛ばして、その金を党の軍用金に使った方が余程マシだ。ってんで、人質の、これなる妹二人、珠子、美喜子もろともに、奴隷商人の手に引渡したわけさ。今の山岸三姉弟も、一番上の兄が事業に失敗して借金が返せないばかりに、債権者に、二人の妹と一人の弟を差押え

られて競売されたわけだが、全くの話がサ、上が甚六だと、下の弟妹は酷い目にあいますねえ」

「クッ、クウッ。クウッ」

せり売り台の上で愛子は泣き出した。掌で涙を拭おうとしたら、すかさず、ピシリッと笞で打たれた。

せり売り台は舞台の前に、丁度エプロン・ステージの様に張出し、二尺程高くなっている。舞台で珠子と美喜子の腰帯から両手首の錠を外させているせり売り係の目の前に、愛子の頑丈な鋼鉄の腰帯でしめつけられた背中があるのだ。そこには薄桃色の笞跡が既に何本もついている。愛子のいたましい笞跡を気持良さそうに見やうと、せり売り人は巧妙な商品説明を続けた。

「マア、こんな愉快な曰く因縁のついた女奴隷は、そうさらにそこから辺に転がって、いや笞打たれて、居ない筈だよ。競売に取りかかる前に、もう一ついいことを教えておこう。この子は珍しい特技の持主なんだ。電子計算機を扱えるなんて言う様な高級な特技じゃないけれど、誰でも持っている特技じゃありません。この子はね、油虫を食べるのが大好きなんだ。女権党では昔から裏切者には油虫を食べさせてリンチする。この子も査問委員会で泣き泣き食べさせられたが、それ以来、すっかり好物になったのだと言うから、先ず珍しいタデ食う虫ですね。私が思うのに、こういう子は接待用の小間使いにしたらどうだろうね。さっきも山岸田鶴子を買ったのは、大きな機械工業会社の用度課長さんだったけど、今日のお客さんの中には、まだまだ社用族がおるでしょう。こんな子を一匹、会社の応接室に備えておいたらどうでしょうね。上等の商用を持って来たお客さんの前に、この子を土下座させて、どうしてこんな姿になっ

たのか、愚かな自業自得の身上話をすっかり、自分の口から喋せるのさ。喋り終わったら油虫を一杯やって御ほうびに食べさせる。油虫を食べる奴隷なんて珍しいから、お客さんは相好を崩して喜びますよ。商談成立、間違いなしさ。顔も御覧の通り、男なら誰でも一寸虐めてやりたくなる様な顔の持主だ。どうです。これなら百万円だって高くはないでしょう」

羞しさに愛子は全身が震え、必臓が停る程驚いた。奴隷に売られてしまった以上、せめて高値をつけられることが、奴隷としての誇りだと思うのだが、こんな変な特技で値が上ったって、ちっとも嬉しくない。それに、あの、思っただけでも吐気を催す程嫌々押しつけられた油虫が、私の好物だなんて。妹達にだって、羞しくて顔も合わせられやしないわ。

でも奴隷商がああいうのだから、私を買った人は、きっと本気にして、又私に食べると言うに違いないわ。オオ、嫌だ。でも、その時は、私は、もうその人の奴隷なんだから、幾ら弁解したって聞いて貰える筈がないわ。かえってそれを口実に、一層酷い折檻を受けるだけだわ。奴隷商人が、油虫が好きだと言ってしまえば、私が幾ら、本当は嫌いなんです。と言っても、主人になった人は、奴隷商人が嘘をついた、と言って怒ったりしないで、本当に好きになるまで、私を仕込むだけよ。奴隷商人の言ったことが違っていたら、訂正は奴隷の身でしろ、という諺が昔から私達の国にはある位なんですもの。

愛子は大声で、

「そんなことをさせられる位なら死んだ方がましです」と怒鳴ろうかと思った。しかしその時、足の下でモーターの唸る

音がして、無情な台は、愛子を爪立たせて静かに廻り始めていた。

「四十万円」

太い男の声がした。暫く場内はシンとしていた。悲嘆のどん底に突き落されていたにも拘らず、愛子はその声を聞いてホッとした。

母がしつけに口八釜しかかったので、愛子は此の年まで一度も奴隷市場を覗いたことはなかった。この国では、良家の子女は奴隷市場などに足を踏入れるべきではない、とされていた。愛子の女学校友達の中には、お母さんに鞭打たれたために、わざと学校の帰りに奴隷市場へ行つて、プログラムを机の上に置忘れて宿願を遂げていた不良少女が居たが、その頃の愛子には理解出来ない感覚の持主だった。

しかし、奴隷の大体の値段位は知っていたから、オチャッピ顔で、中肉中背、少し身体が貧弱に見える、十八才の自分は、先ず四十万円に売れたら最高の出来じやないかと思っていた。その値を最先につけられて、どう間違つても、もうそれ以下に売れる可能性はなくなったのだから、ホッとしたのは当然であるかもしれない。

愛子の身体が半回転して、客席に、背を向けた時に、次の声が掛つた。

「四十一万」

「五十万」

すぐに最初の声が応じた。

「五十一万」

「六十万」

他の客は皆、シンと静まりかえっていた。客席に二人だけ、どうしても愛子に御執心の男性が居るらしい。言うまでもなく、女奴隷

にとつては、それはやはり嬉しかった。

「六十一万」

「七十万」

一人は大変なお金持で、もう一人はそれ程でもないか、そうでなければケチンボであるに違いない。十万単位の景氣よい買値でせつてくれる人の方が慕わしい気がしたが、でもそんなにお金のある人なら、きっと我儘で大変な暴君じやないのかしら、と考え直した。ケチンボの方が大切に思つて、少しは優しく扱ってくれるかもしれないわ。

それっきり場内はシンとなつてしまった。台ごと愛子の身体は三回廻った。客席に背中を見せられる度に、舞台の上の妹達が感嘆の目で見上げるのを、愛子は姉らしい誇らかな氣持で見下した。

「まる三回廻る内に次の声が掛らなければ、七十万の人の手に渡りますよ」

せり売り人が、お決りの注意をしている。それでも場内はシンとしていた。ケチンボさん、とうとう諦めたのかしら。愛子は何だが残念な氣がした。

三回目真正面に向くと同時に、

「よし、七十万円。売った」

せり売り人が竹の筥で愛子を力一杯、撲った。意外な値がついて内心ホクホクしていることが、そのビシリッという筥の響で誰にも解つた。

「ヒューッ」

と泣いていたが心の中は、それどころではない。今度は暴君の手に渡されるのだわ。

せり売り台から降されて、サーヴィスの鉄鎖と鉄環を手足につけられた。足鎖の先には鉛の分銅、鋼鉄の腰帯の前に小さな鍔がついていた。その姿で舞台裏へ連れて行かれると、会計係に金を払っている買主の姿が目に入った。

「まあ、明さん」

愛子は驚いて、久しく逢わない従兄を見た。

「どうだい、この健康そうな体格。これで十六だとは、とても見えないだろう。それに、生れて始めて目のあいた赤ん坊の様に、目に入るものすべてに驚いている様な、パッチリした新鮮な目」

せり売り台には珠子が立たされたらしい。その消え入りそうな姿が目に見え様だ。明は連れて来た部下の男に愛子の鎖を渡すと、又、客席へ走って行った。

朝、下の妹の夢を見た。置屋の半玉に売られて行ったという美喜子が、畳を敷いた広い部屋で、置屋の主人から芸を仕込まれている夢だ。

「これがグライダー吊りだ。よく覚えておけ」

桜川玄太が、置屋の主人になっていた。淫らな笑を浮かべながら天井の梁から吊した美喜子の身体を前後に振らせている。

美喜子は両手をピンと拡げて、青竹に手首と肘とを縛りつけられている。太いロープが胸と胴とに巻きつけられてグライダーの様に十の字になった美喜子の身体を平に保っている。いつも二本に編んでいる頭髮は細い紐で引張られて、胴を吊ったロープに結びつけてあるので、色の浅黒い、細面の美喜子の顔は、小さい顎を突出して水平の身体と垂直に起きている。もう一つ垂直に起きている部分が

あった。両足である。膝まで一直線に伸された美喜子は、膝の裏に短い青竹をつけられて、膝頭の上下をしっかりと縛られ、そこから爪先までは膝の上に垂直に立っていた。ふくらはぎの下と足首とを、しっかりと縛り合わされた、スナナリ長い少女の脚が、グライダーの垂直尾翼なのだ。

「美喜ちゃん、もう少し辛抱していてね。今にきっと姉さんが助けに行っておけるからね」

夢の中で愛子は心に、そう叫んでいた。

目覚めると、女中部屋の小さな窓にかけた桜色のカーテンが朝陽で赤らんでいた。

少し寝坊した様だと思って、台所へ飛んで行くと、明の妻の富子が、六人の女奴隷を指図して、朝飯の仕度をもう八分通り仕上げていた。

顔にも身体にも、娘々した可憐さがまた一杯残っているこの新妻は、島村家の主婦の代々の習慣で全部、革で出来ている三尺程の長さの鞭を手にして、揚板の上に立っていたが、善良そのものの性質なので、嫁入って以来まだ一度も、御飯仕度の時間に、遅刻して来たり、仕事を怠けたりしている奴隷を、それで鞭打ったことはなかった。

その代り、彼女の傍の壁には、黒板が掛けてあって、鞭打たるべき過失のあった奴隷は、その名前と罰点とを書き込まれる事になっていた。

愛子が困って、仕方なく、おどおどしながら入って行くと、富子はチラと柱時計を見やって、黒板に愛子の名を書き込み、三十点と書いた。愛子と視線が合うと、黒い大きな童女の様に澄んだ目に、

済まなさそうな表情を浮べて笑った。

他の奴隷女達は、愛子の名の外に、誰の名も記していない黒板を見て、仕事の合間に、袖を引合って笑った。彼女等は皆一様に、親類の娘で、しかも家族中で一番心の優しい上の娘の芳江付の奴隷と



して、ことごとくに特別扱いされている愛子に、女らしい反感を感じて、憎んでいるのだ。

ほんの一例を上げると、今、忙しそうに広い土間で立働いている女達は、皆、歩行に不便でない程度の長さの足鎖をかけられ、足環には余り重くない分銅を結びつけられていた。残酷好きの下の娘和子付の奴隷などは、殆ど裸同然の姿で、膝環に脚環、首環から胴環までかけられている程だ。が、愛子はそんな枷具類は何一つ付けていなかった。芳江が、そういうことの嫌いな娘だからである。

食事の時間は、六時半と決っていて、若しそれまでに出来ない、今度は監督の富子の落度になることになっていった。しかし、他の家などで時々聞く様に、女奴隷達が意識的に仕事をサボって、憎い主婦の身体を家長の鞭の下に晒す、という様な反抗は、この家には余りない様である。

居間へ芳江の食事を運ぶと、愛子は女中部屋に自分の食事を持って行って、一人で食事した。狭くて陽の当たらない物置みたいな部屋だが、奴隷の身で一部屋をあてがわれているのは、ここでは愛子だけなのだ。

他の奴隷達は、平常は、夫々の主人の部屋に繋がれていて、用を足したり、暇潰しの慰みものになっていたりしたが、部屋に居てはいけない時には、大概台所に繋がれていた。

和子付の奴隷のマコなどは、いつも部屋の真下の縁の下に犬の様に繋がれている位だ。同じ両親の血を受けた姉妹でありながら、芳

江と和子がどうしてこう正反對の性格の持主なのか、愛子是不思議で仕様がなない。

ノックもせずに扉をあけて、マコが、色の黒い、ミッキー・マウスの様な顔を突出した。

「愛子さん。お食事が終わったそうです」

一応丁寧な口は利いているが、小さな顔に喜色が溢れている。珠子と同じ、まだ十六の小娘だそうだが何となく奸倭な感じがする。いつも和子に虐待されているので、心がねじくれてしまったのかも知れない。

マコを喜ばせることなどは我慢のならないことだったので、愛子は出来るだけ平気な様子で立上った。

「アラ、ソウ」

庭下駄をはいて表庭へ廻ると、居間の濡縁の前の敷石の所へ立った。

食事を終えた家族の者達は、テーブルの前へ座ったまま、こちらへ顔を向けている。女奴隷は三人宛、庭の両側に座っていた。

敷石と沓脱石との間に筵が一枚敷いてある。愛子は一礼してその上に座った。屈辱で身体が震えた。この家に来てから始めてお仕置を受けるのだ。

「愛子は今朝の飯の仕度に遅れたそうだな」
明の声である。

「ハイ。申し訳ございません」

「何分遅れたんだ」

「三十分です」

「ウン。それはどういう罰に値するのだね」

「ハイ。一分に付一回として、三十回鞭打たれるのです」

「解っているね。愛子はうちの親類の娘だが、芳江が結婚でもして独立したら、自由にされるかもしれないが、今はやはり奴隷の一人なんだからね。他の者の手前、どうしても特別扱いするわけに出来ない事もある。解るね」

優しく諭す様な口調である。

「ハイ。覚悟は出来ております」

「ヨシ。では輝子。俺の部屋から鞭を持って来い」

覚悟はしていても、流石に胸の潰れる思いだった。

島村家の様なこの辺の旧家では、昔から、奴隷を折檻する時に使用する折檻台というものが備えつけられてあって、その台に奴隷の足と手を固定して身動き出来ないようにさせ、鞭で叩く風習があった。新町新田という名前が示す通り、この辺は、首府の町の一番郊外に当たっていて、まだ田畠は大分残っている。そこで使う奴隷の仕事の能率が悪い時に、畦道や農場の隅で、運び込まれた折檻台でそういう体刑を昔から行って来たからである。

比較的、裕福な自由市民の娘として、今まで一度も、他人の前にそんな姿で立たされる、などという羞しい思いをしないで育った愛子も、ここ数カ月来、公安警検署で、女権党査問委員会で、奴隷市場で、散々に辱しめられて来たので、始めの時程、大勢に見られながら折檻を受けるという行為に対して烈しい屈辱を感じはしなくなっていたが、それでも今日はやはり羞しかった。それは、親類の家族達の前にそんな姿をさらさなければならぬ、という異常な境遇が、この憐れな女学生の屈辱感を新鮮にしていたからであろう。

「お兄様。今日は学校で体操があるのよ。可哀想ですから、軽く叩

くだけで勘忍してあげて下さい」

賢い芳江が、すぐ愛子の気持ちを察して助け舟を出してくれた。

「駄目よ、そんな不公平なこと」

和子が、我儘な末っ子らしく即座に口を出した。

「でも、明さん。学校のお友達に、愛子さんが芳江の奴隷だと解ったら、芳江だって困るでしょう。お仕置するのは仕方がないとしても、日曜日に延期したらどうかしら」

兄妹の母親が別案を出した。愛子の伯母に当るこの人も、実の姪が情ない姿で仕置される姿は見たくはなさそうだ。

「いいえ、いけません。奴隷をそういう風に仕置するのはこの辺の旧家なら、どこの家でもやっていることです。若し愛子が足腰も立たなかったら、学校を休めばそれでいいんです」

芳江の祖母に当る老寡婦が、目を陰気に光らせてそう主張した。その眼附から考えると、どうやら老人は、家風の厳守ということよりも、この爽やかな朝陽の中に、可愛い顔の哀れな犠牲者をピシピシと容赦なく鞭打つという派手な見世物の方に、ずっと熱意を感じている模様だ。

富子は、つつましやかに沈黙を守っているし、明と父親の民治氏も黙って考えている。

「でも、お祖母様。学校が……」

「学校、学校って何ですか。大体あなた達が奴隷なんかを甘やかすからいけないんです」

愛子は悲壮な決心をした。

これ以上、言合いをさせていたら、伯母と芳江までが、目上の者に逆らった罰を受けねばなくなるかもしれない。

「芳江お嬢様。いいんです、もう。愛子がいけなかったのでごさいますから、規定通りのお仕置をお受けするのが当然でございます」

愛子は、立上って仕置を受ける身仕度を始めた。氣負い込んでいたので、恥しいなどと考える前に手がどんどん動いていった。しかしファウンデーションだけを残す姿になると、張り詰めた心も一寸たじろいだ。

素肌に早朝の空気が冷たい。

愛子は一寸目をつぶった。ここでためらっては、折角の私の犠牲心も無意味になるわ。

又、目をつぶる。

幾ら氣負っていても、自分から折檻台の手枷足枷に嵌めるなんてことは仲々出来ないものだ。

富子附の奴隷の輝子が、手枷足枷の錠をはめるため傍に立っていた。

ここで一寸折檻台の説明をしておこう。この折檻台は移動に便利のため、極めて簡単に出来ているが、とにかく、手と足を台に固定するとうつ伏せになったまま、身動きも出来なくなるのだ。

「サ、愛子。今ぶつわけじゃないんだから、そんなに固くならないで真直ぐ身体を起して、両足を開いて、この枠の中へ入れなさい。さあ、早くするのよ。両手は揃えて、一緒にこの輪へはめるのよ。なにをぐずぐずしているの」

愛子は屈辱に顔を火の様に火照らせて言われた通りにした。

「愛子。台につけと言われてから固定されるまでに十二分もかかっているわ。罰として、丁度同じ時間だけ、そのままの姿でそこにじっとしていなさい。輝子はね、鞭を愛子の口にくわえさせてやりな

さい。それでもう自分の席へ戻っていいわ。何ヨ、愛子。大きい癖に泣いたりして」

愛子は、この家で一番怖い御主人は、確か美喜子と同じ年の筈のこの小暴君だということをやっと知ったのである。血を分けた伯母の一族の前で、折檻台に固定されたままに十二分は本当に長かった。

やっとお許しが出て、又和子の指図に従って、まず痺れたようになつた口から鞭をとつてもらつた。

「富子。監督はお前だから、お前叩きなさい」

「アラ。私は、困りますわ」

「じゃ。芳江の奴隷なんだから芳江だ」

「私だって、いやです」

「そんなら私にひっぱたかせて、お兄様」

「まだ和子は順番じやない。お父さんどうぞ」

「ウン」

民治は嫌に重々しく威厳をつけて、老人に

「お母さんからどうぞ」

「いやわたしは心臓が弱いでな。お前おやり」

「そうですか、では」

初老の域に達した氏が、いやだという筈はない。重々しく、下駄をはいて庭先におり立った。

愛子は観念した様に目を閉じた。

ピュッ。ピュッ。

身構えて、二、三回素振りをくれている。

犠牲のふくよかな頬肉が、蒼ざめてヒクヒクとけいれんした。こ

の伯父は武道の達人として聞えていた。手練の腕で力一杯打据えられたら、刃物で切られた様に千切れてしまうかもしれない。

身体が、ぶるぶると思わず震えた。冷えきつた身体にはブツブツと鳥肌が立っている。恐怖と羞恥と寒冷に原因する震えだから、小柄な身体の表面を、複雑な震えが走る。ジロリとそれを見やって、「寒そうだな愛子。今すぐに、ホッホッと火照って来るほど暖かくしてやるからな」

島村氏は、そう言つて

「ハッ」

掛声と共に、ピュウーッ、と鞭を振下した。

ピッ。

短く鋭い鞭音が高らかに鳴って、朝の静寂な邸内の空気を震動させた。

ムウッ、と口から洩れた呻き声を、愛子は、齒と唇とを噛み合わせ、途中で飲込んだ。

「ハッ」ピュウーッ。ピッ。

「ハッ」ピュウーッ。ピッ。

少女はたおやかな全身を妖しくくねらせて、一鞭ごとに身を揉んで苦しんだが、呻き声一つ立てなかった。只、黙って身をくねらせるばかり。

愛子は健気にも決心したのだ。この親類の人達を喜ばせる様な、浅間しい悲鳴。呻き声。泣き声。そんなものは絶対に口の外へ出さまいと。それが、親類の家で奴隷としてお仕置される、自分の惨じめな境遇に対して、今の愛子に出来る、せめてもの哀れな抵抗なのだ。

白い背中に、あのいつかのような赤い縞馬模様が何本も浮き上って来た。

「今度は胸だ。こっちを向け」

愛子は再び前向きになった。涙が頬を伝う。ピッ。

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰

大手札判 (印画紙9×13型)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

9	8	7	6	5	4	3	2	1
股間に映つた後手	鏡に映つた後手	後手足しはり	後手猿ぐつわ	海老責しはり	高小手猿ぐつわ	床間の飾り物	海浜に於ける緊縛	柔肌に強烈な荒縄
(須川令子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(佐賀美智子)	(佐賀美智子)	(須川令子)	(須川令子)

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
鎖しはり晒責	股間しはり正面	女学生制服しはり	尻立後手しはり	開股しはり	猿ぐつわの魅力	トイレでの縛り	立木野外しはり	緊縛横臥	足湯椅子ゼメ	いたぶり	帆立しはり	強烈な椅子ゼメ	逆さ本吊りゼメ	後手吊りゼメ	股間しはり後手	逆エビ責め	高小手しはり	変型足しはり	松樹後手しはり	くさりゼメ	薄羅の後手緊縛	
(萩千恵子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(川辺砂登子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(村田那美子)	(厚狭春江)	(伊吹真佐子)	(春日ルミと伊吹)	(萩千恵子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(同右)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(加賀利江子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	(加賀利江子)	

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

二の腕に焼付く様な衝撃を受けて、思わず呻き声が洩れる。
「アッ。アア」
顔をそむける暇もあらばこそ。鞭は愛子のポツテリした下脹れの頬に、ピューウン、ピューウン、という恐ろしい唸りと共に乱打された。

(以下次号へ続く)



(カット・佐次郎・画)

ミ ス 奴 隸 宣 言

鷹 取 仙 吉

復刊以前より毎月愛読しておりますが号を追うての充実発展ぶりには、心から御慶び申し上げます。

何といっても、本誌の大きな特徴の一つは巻頭を飾る豪華な緊縛フォトであります。これは他の雑誌では、日本広しといえども、他誌に絶対に見ることの出来ない特徴であります。これあるがため、毎月本誌を求めている人も多いことだと思います。

私の知人の一人は、毎月二冊宛購入して丹念に口絵を切り抜き一冊の立派なア

ルバムを作り上げていました。

川端多奈子君の頃より考えてみますに、当時全裸体で縄を打たれた姿が殆どなかったことなど思い返えますと、誠に今昔の感に堪えぬものがあります。

尤も既に発刊以来十年近い（正確にはよくわかりませんが）歳月の流れを思えば、今日の進歩も当然のことかも知れません。

勿論、その間に於ける関係者各位の並々ならぬ努力も忘れてはならない事であると思います。その点には、私も大いに敬意を表するものでありますが、ここに敢て緊縛フォトに

対する苦言を呈し、本誌の将来の発展のため一つの提案をしたいと思ひます。

私は芸術家ではありませんので、今までの写真の芸術的の良否については勿論なんらわかりません。又、花羞しい乙女の肌をむきだしにして縄目の姿を衆目に晒すモデルの努力も良くわかります。

それにも拘らず、私は毎号写真を見る度に淡い失望と落胆とを重ねてまいりました。理由は簡単です。それはモデルを余りにも甘やかした写真が多いからです。中には、感嘆に値する写真も決して少くはありません。しかし、多くの写真は、縄目を受けた女の表情には、殆ど悲しみも、そしてあきらめもありません。殊更名前があげませんが、中には薄笑いさえ含んでいるような女すらあったようです。

今迄の私の記憶に残っている優秀な作品は愛川悦子（敢て呼び捨てにします）の『乳房に喰い込むコード』です。

あの豊かな乳房にギリギリとコードが見えなくなる程喰い込んで押しつぶされた乳首が激しく息づいているような真に迫った写真は仲々立派なものでした。

このように責めに徹した写真をどしどしと

発表して頂きたいものです。或は分譲品の中に素晴らしいものが沢山あるのかもしれませんが、私は残念ながら雑誌の口絵だけしか見ていませんので、口絵を見た範囲内で批評しているのだということを御承知下さい。

私は以前から考えているのですが、モデルの女性達に対し、モデル嬢とか何々嬢などと呼ぶのは大反対です。名前などは呼び捨てで結構、いや名前などはいらない。彼女達は少くともモデルとして縄を打たれて、その裸身をマニアの前に晒す時は、女奴隷又は哀れな女囚に過ぎないのです。だから、名前等不必要だと思ひます。

たとえ彼女達が社会的に如何なる生活をしていようと、又モデルとしての立場に如何なる理由をつけようと、私は彼女達を一個の人格を持つ人間としては見ない心算です。いやしくも、緊縛ポーズという祭壇に登ったからは、彼女達は人間の一切の権利を剝奪された女の奴隷です。そして、彼女達がより完全な女奴隷であることによって、あの緊縛フオトは更に一層の輝きを増すことであろうと思われまふ。

ここで私の特に強調したいことは、奴隷に人間並な名前なんかはいらないということ

す。一度、緊縛モデルになった以上は、人間社会に於ける名前は抹殺されて、「女奴隷〇〇番」或は「第〇号」と番号や符牒だけではないわけです。人格を持った人間ではなく、一個の女奴隷なのです。遠慮や同情や甘やかしは禁物です。もっとも苛酷に、そして冷淡に扱うべきです。

奴隷に笑顔は絶対に必要ありません。彼女達には、鎖と鞭があれば、それで十分です。涙の出る程ギリギリと強烈に縛り上げて、縛ったら、それだけで止めないで頬でも脇腹でも、思いきり捻りまくって、苦痛や苦悶の表情の出たところをカメラにおさめて下さい。

或は仰向はに蹴り倒して、胸の上や又は腹の上を土足でふみにじり、そうして思わず女奴隷が悲鳴をあげたところを写真にとって下さい。又は思いきり横面をはり飛ばして、顔をそ向けてしかめた女奴隷の一時の表情をとらえるのもよいでしょう。

どうか今後は、彼女達を甘やかさないで、奴隷として、思いのままに責めあげた写真で巻頭を飾ってもらいたいと思ひます。

勿論、モデルの中には女奴隷たることを欲しない人も何人か居りましょう。そんな人達は此の際やめてもらって、本当に女奴隷とし

ての地位に甘んじて、自分の苦悶と屈辱の浅ましい姿をマニヤの眼に晒すことに満足する者のみでやって頂けたら、毎号の本誌がどんなに素晴しくなることでしょう。

そして、私は此処に一つの提案があるので。それは、彼女達に今までモデル嬢として人間扱いされてきた償いとして、改めて奴隷宣言をして貰うということです。

奴隷宣言といっても別にむずかしいことはありません。

両手を鎖で天井から吊し（爪先立つ位に）首から胸へ木の番号札をぶらさげるのです。

そして、その脇に、

「私は今までは〇〇〇子です。今後は女奴隷第××番です」

と書いた紙を肌にくべたりとはりつけて一人写真をとるわけです。ずらりと女奴隷が番号札を首からぶらさげて並んだ恰好は、さぞ見事なことでしょう。

若しも女奴隷が不足なら誌上に「女奴隷の募集広告」など如何ですか。

例えば、

「女奴隷募集、一ポーズ壹萬円、但し絶世の美女に限る。全裸鞭打あり二十才まで」

「如何なる屈辱にも堪えうる女奴隷を求む。

一ポーズ千円、汚物責あり、年令不問」

「若い同性に仕える女奴隷を求む、三十才から三十五才まで、一ポーズ百円」

等々、想像するだけでも心楽しくなると思えます。要するに今までの緊縛ポーズを一歩前進させて、強烈な責めを併用して新たな境地を開拓して頂けたら、文献誌として更に一段と貴重な存在になるものと信じます。

そのためには、どうしてもモデルの奴隷化ということがあるようになってくるのです。

モデルが「このポーズは嫌だ」「こんな責め方は嫌だ」などと自分勝手な事を言い、又周囲の者も、これをいたわる気持を起しては到底、その真価を発揮するような豪華な絵巻物を繰りひろげることが無理ではなからうかと思われまふ。

そうして、彼女達の奴隷化が成功し、あらゆる屈辱と苦悶の泥沼の中にたち廻り乍ら喘ぎ続ける頃、私は全読者に依る「ミス奴隷コンテスト」を提唱したいと思ひます。

一年間の誌面を飾った女奴隷共の中より読者の投票に依り最高得票を得た者を、ミス奴隷として表彰し、その投票者には賞品を贈るのです。勿論、賞品には金はいりません。金よりもミス奴隷の責苦に涙せる写真の方が、

読者諸氏は遙かに満足するでしょう。

ミスに当選した女奴隷には、百萬円位の賞金を与えて此れを遇する必要がある。その賞金はマニアの中の有志から拠金させるのです。ミミちいマニアも多いでしょうが、中には一人でポンと百万位出す人もあることと思います。それ位の熱意がないことには決して斯界の発展は望めません。なにしろ、一般化していない数の限られたグループなのです。から、一人は最低一万円位は出すべきです。多い方は五百万円位迄なら結構です。

尚、成績の悪い奴隷達は、予め罰則を設けておいて、下位より順に思う存分のお仕置をするという設定も面白いと思ひます。

然し、余りに下位の奴隷達を虐待すると逃げだして姿をかくす恐れがありますから、そのようなことのないよう、一年契約として全額、又は半額のモデル料を前渡しの上、契約書を出さしておけばよいでしょう。

これは奴隷飼育費として予算に計上しておくのですが、前渡しである以上、早速この資金は入用なので、今からすぐ「奴隷飼育資金募集」を企てては如何ですか。一口千円として、何口でも申込ませるのです。

こうすれば私の提案も決して実現不可能な

ことではないと思います。私は早速、些少ですが五百口、五十万円申込みたいと思います。

早々に実施されては如何？
月に一度、その精励ぶりを誌上において勤

評され、顔も知らぬ飼主の叱声におののく美しい女奴隷。素晴らしいではありませんか。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第十七項

仏映画「狂乱のボルジア家」

シネマスコープ天然色

フィデス・プロダクションII

独オムニア共同製作

主演 ジヤック・セルナス、アルノルド・

フオア、ベリンダ・リイ、フランコ

・ファブリッツイ

監督 セルジオ・グリエコ

原名《LUCK ECE BORGIA》

ルクレチア・ボルジアといえば、西欧では悍婦の一人として有名である。中世の伊太利亚で権勢並ぶ者なく、淫蕩池に流れる如く、

ゆくところ権謀術策に満ちていたボルジア家の当主チエザレと妹リクレチアの物語である。我国で千姫がよくルクレチア・ボルジアに擬せられるが、彼等兄妹の生活の豪奢、絶対的な暴政は、到底、他にその類を求めるすべとてない。

兄チエザレは酒池肉林に溺れ、強奪、侵略は日常の事とされていた。妹リクレチアは出戻りであるが、その不倫の犠牲者を街に漁り、用済みとなれば、刺客を放って殺害して悪業の噂を封ずるのが常であった。

以前、マルチイヌ・キヤロルの主演でクリスチアン・ジャックが監督した「ボルジア家

の毒薬」も同一の物語であるが、当時、本欄が可成り大きくその映画を扱った筈である。けれど、その淫靡、色欲、悪虐、豪奢に於いて此の作は、前作に数倍勝っていると思われる。

ベリンダ・リイという前進の異様な個性を持った女優は、少々高貴さが不足するとはいえ、充分にこの世紀の悍婦を再現している。

私共がこの作品の中に、具体的に拷問や、前作の如き人狩りを期待するとしても、その予想は裏切られる。けれども、ルクレチアという、少くとも先天的にドミナの系列に属する女性像によって、精神的なマゾヒズムは十分に満足されよう。ここに描かれているのは安上りのセットの中で語られる貧相な宮廷物語ではない。ドミナが必要とする莫大な浪費の背景に裏付けられた絢爛たる淫蕩的な、そして同時に、森厳な神秘性さえも含まれたドミナ伝である。質素に涉らせられる極東の皇室と全くその軌を異にした、酒、金、時間、叡智、不倫、そうして才能の惜しげのない大乱舞とその瞬間的な蕩尽が述べられる。その上

暴虐を以って鳴る兄チエザレさえも、ルクレチアの支配から脱することは出来ずに居るこの特異な世界に注意を喚起することも亦、私達にとって強ち無益とは思えない。

(本作中、フランス語台詞のため、チエザレはセザール、ルクレチアはリュクレスと呼ばれているが、本項は原名に従った。)

復刊第十八項

英出版物「サンキウ、アイ・プリフ
アアー・ライオンズ」

パトリシア・バートン女史著

ウキリアム・キムバー出版社刊一九五六年

PATRICIA BOURNE: "THANK

YOU, I PREFER LIONS."

英国で唯一人の女性ライオン使いとして有名な、パトリシア・バートン(フランス読みではブルヌ)女史が、十七才にして如何なる経過でその高名を得たかを語る自伝である。私は本書を最近知って、早速、英国キムバー社から取寄せた。

彼女は、ヨークシャイアの貿易商の娘として生れた。彼女は高等教育をうけたが、その大部分の時間を鞍の上で過した。ほど乗馬好きであった。又、彼女はクラシック・バレエを習ったが、此の事は後年、父の死後、彼

女が母を養う為に職業的にバレエ・ダンサーとなった時に十分、役立った。同時に乗馬の有能な技倆は、彼女に著名な裸馬の騎手としての地位を、もたらした。そして、騎手としての彼女は、ふとした機会に、——曲馬上演中に示した彼女の勇氣と沈着さ——名猛獣使いとして有名であったアレフレッド・カート《ALFRED COURT》に認められ、彼自身の手導によって、有能な調教師としての第一歩を踏み出させたのである。そして二十年の間、彼女の名声は頓に上った。今や彼女は野性を持った猛獣の心の底を読みとる事が出来る。どちらかという、人の心を読みとることが出来る以上にである。

書物は、タワー・サーカスの騎手として、ウィーン、国立馬術学校のアンケル大尉の一座に在籍した当時から始まる。そして、彼女の転身の機会となる事故からカートの申出をうけ、母の許しを得て単身、パリのカートを訪ねてゆくテストとしてライオンに近づき、美しいブローニーの森を散歩し乍ら、彼女の生涯の方向が決る。彼女は、観客によい印象を少しでも与える為に、絹のシャツ・ブラウスと純白のキュロットと、しなやかな乗馬靴を注文する。第一回の公演で人々はこの新

らしい女調教師に拍手を送り、新しい道は人々から支持をうけたことを悟る。私達は、この一冊の中に、COPENHAGEN;

TIERGARTEN, HAMBURG; LUNAPARK, PARIS; DRESDEN; ROMA; OLYMPIA, LONDON; OLYMPIA, PARIS; SEVILLA; BORDEAUX; BERLIN そして BERTRAM MILL, FRAU SARRASANI, BAPTISTA SCHREIBER (SWEDISH CIRCUS) VIOLETTA D'ARGENT 等の名を発見するが、これらの名は彼女がその名を馳せた欧州の都市と、そのサーカス劇場の名であり、又サーカス興行主と女調教師の名である。

この書物の中で、興味を惹く部分は、ヴィオレッタ・ダルジヤン嬢(フランスの女猛獣使いで、アルフレッド・カートの対役)の烈しい懲戒と動物の虐待、そうしてその為に起る彼女の劇的な惨死事件、パトリシア・ブルヌが出演衣裳について書いている部分である。

私達は、すでに現代ソ連に数名の女猛獣使いのいるのを知っている。人民名誉芸術家である彼女達についてさえ、中々資料は集まらないのに、ここに英国に現存する美しいブル

又女史を発見することが出来たこと、それからこの様にくわしい自伝が、一九三〇年代から現代に至る彼女の出演写真七枚を含んで入手出来ることに、新しい喜びを感じることが出来るよう。

復刊第百十九項・

仏出版物「美女と野獣」

ジャン・ブウレ著

トラン・ヴァグ社刊

《LA BELLE ET LA BÊTE: JEAN BOULET.》

近着の写真入豪華本であるが古代より近世現代に至る各種の「美女と野獣」とを列挙例示している。中でもキング・コングによって代表される猿類と美女、フランケンシュタインによって代表される怪物と美女が注目される。我国に於ける無残絵の狙う効果と共通なものを変えて、その中に、思想と意図を探りアルラウネ伝説とその美しい再現である「妖花アラウネ」(独映画Ⅱ主演エリヒ・フォン・シュトロハイム、ヒルデガルド・クネフⅡ此の作は前に紹介した。今は亡き名優シュトロハイムと独乙の顔癩と呼ばれたタネフとの演ずる現代の神秘劇は病的な興奮を我々に伝えた。魔力を以って全男性に臨む現代のヴァ

ムピールは殆んどあらゆるマゾヒストにとって、いや健全であると自ら信じている人々の心の中にもサディスティンへのほのかな曙光を投げかけた。)や、最も近代的な大衆芸術の一つと考えられるに至った「サーカス」に題材をとり、当代の最高のドムティウス(女調教師)であるレニングラド国立サーカス座のマルガリイタ・ナザロヴァ女史と彼女の虎を紹介している。(ナザロヴァ女史についてはソ連モスフィルム作の映画、「サーカスの芸人達」についての本欄の前出紹介を参照されたい。同女史は現在、国家的保証によって最高の援助を与えられているソ連の国立サーカス座の人々の中のイリナ・ブルジーモヴァ女史やタマラ・ブスライエーヴァ女史と共に、最高の評価と名誉を持っており、且三人の中では一番若く、前身バレエ・ダンサーである為に出演の際の動きが最も魅力的であり美しいとされている。彼女はライオンを使わず、虎だけで出演する。西欧諸国のジャーナリズムに採り上げられる回数も彼女が一番多い。猶、最近の本欄中のソ連映画「虎使いの娘」にスタンド・インとして出演しているの

で併せて参照せられたい。但し、この方は本邦、未公開作品である。)

現世的でないもの、想像上の巨大な怪物は古来、人々に反抗(ワグネル作品中のジイクフリイト)崇敬(未開人種に於けるトーテム崇拜)恐怖と征服(我国、八頭八蛇伝説)信賴(我国、大国主命と白兔と鰐の伝説)などを与え、感じさせて来た。その影響は、遠くエジプトにスフィンクスを造らせ、我国や中国の唐犬にその跡をとどめている。そして映画の発明によって怪物の再現は甚しく容易となった。フランケンシュタインもキング・コングも、その所産である。特に興味を惹くのはアルラウネに於いては、掲載されて居る写真は檻の中のゴリラと、その前に立つクネフとであるが、このゴリラも彼女と同じくシュトロハイム扮する老教授の実験の産物であるという点であり、フランケンシュタインや犬人の場合は、女性はある偶然の機会から怪物に遭遇するのであって、先天的には何等の関係もないという点と、美女は必ず受身の形でのみ現われて、怪物の獣性の犠牲になるという点であり、又、ナザロヴァ女史の場合は、野性の自然な獣類を捕えて調教し、女性は全く支配的な位置にあるという点である。これら全く異った遭遇の発起点は、当然その関係を描く作品にも支配をつづけるのであるが、ハ

ブラボーSADO 特・第三集

難波

武雄

特別な例として「キング・コング」(米映画)で、特定の女性に対してのみ服従するという場合もあるがV獣的な、野性的な且、強力な怪物側が勝利を収めることはない。常に女性側よりする温情、強権、鞭、其の他の強制手段又は死によって怪物が敗れ去るのである。一つの変形として、メキシコ映画の「獣人ゴリラ男」や日本で製作撮影された米画「双頭の殺人鬼」などの如く、分身による救済の例もあるが、このような場合は極めて少い。ただジャン・コクトオの名画「美女と野獣」での、

「変身」による解決の極めて秀れた実例もあるが、此の場合は魔法によって化身された王子が旧に復するので、全くの変身とは云えない。この様に解決の形、手段に至るまで、美女と野獣との面白い結合は限りなく探し出すことが出来、且、サド・マゾヒズムに対しても興味のある多くの事例や暗示を与えるのであるが、この様な主題(特に「美」の観点からする考察が多い)によって、本書の如き豪華本が作製せられることは、まことに珍らしい。以前(一九五七年)に「映画に於ける幻

SADO特・第三集は、私達縛りマニアを大いに満足させる最近での最大のヒットだと思う。

四馬孝氏描がくところの二十数枚の画は、氏のつきざるアイディアと、見る者をして怪しいまでもあの夢幻の世界へ引きずり込んで行く様な巧妙な筆致は、氏の面目躍如たるものがあり、讀辭の声を送りたいものである。

私達、縛りマニアの描いている夢を、あますところなく画き、尚その夢たるや、理詰の可能な範囲で描かれている点、心をゆすぶられるものである。

グラビヤ写真は、ヴァラエティにとんだ点では最大のヒットで、編集者の労苦に感謝し

想」『Fantastiques aux Cines』という巴里版の書物が上梓されたが、その一部分で同一の主題に触れていた他、他に近來、この種の書籍存在を筆者は知らない。敢えて拙速乍ら御紹介する次第である。

以上

《原綴配列順》

king-kong
Frankenstein
Arlaune
Erich uon Sfroheim
Hildegard Kneff
Vampire
Domptieuse
margorita Nazarova
mas-film
Flyna Burgimova
Tamara Buslayeva
R.wagner; Siegfried
Totem
Sphynx
yeau Cocteau.

たいものである。

この号での絹川文代嬢の写真は傑作中の傑作である。

「狂花の戯れ」モデル・三木敬子、浜本喜美。この二人の演ずるプレイは、よく真に迫っていて、特に縛られる方の女性が、痛々しいまでの、はかない抵抗を表わしながら縛られていく姿がよく写されている。かわいよいよいモデルさんである。(名が知りたい)

「タイトルの冷感」「白蝶の不安」モデル・田原美佐子。田原嬢は新人らしく、まだ縛られ方も未熟で、情感に乏しく、縛り方もその為かピンとこないものがある。

「共通の戦き」モデル・絹川文代、大塚啓子。久しぶりの連縛である。面白い構図であるが、二人一緒に縛ったのもほしかった。七、八人の女性を一堂に縛ったままこの様にいろ／＼と写して見るのも面白いものが出来るのではなからうか？題して「近代歌麿八人縛り」とでも。

「華鼻受難」モデル・絹川文代。鼻責めマニア垂涎のものである。鼻のはさみ責め、ペンチ責め、ドライバー責め、タバコ責め、タバコ、クリップの同時責め等、誠に賑かである。可愛いそうなのは絹川嬢。上半身以下は余り写っていないが、何だか頼りない縛り方である。もっとも緊縛の上、この様な責めをしては、絹川嬢も泣き出すであらうが……。

「流れ落ちる美線」モデル・絹川文代。両手吊りの写真。絹川嬢の誇る曲線が、なだらかな美しさで相俟ってよい。惜しむらくは上半身だけであることである。その為に吊し責めの半分に興味がそこなわれている。「友愛の表現」モデル・愛川悦子、春日ルミ。二人の物凄いまでのプレイである。さすがの愛川嬢も春日嬢にかかつては、お手あげの態。

「哀美抽出」モデル・花坂道子。この人独得の雰囲気のある写真である。何ともいえない可憐な縛られ方。観念の眼をとじ、次ぎのお仕置きを待っている様な、ふれればたおれる風情、いつ見ても一服の清涼剤である。両足を縛ったのも入れてはしなかった。この人も影が薄い様だが、もっとこの人の写真をのせていたきたい。ファンである私に免じて。

「レインコート」モデル・大塚啓子。小説を思い出す様な写真。全身をレインコートでガシガシ濡れながら見たかった。

「泥まみれの青春」モデル・大塚啓子。全身泥まみれの凄惨な大塚嬢の写真である。泥にまみれ、荒縄に縛られ、小石を抱かされた野外写真で、珍しいものである。欲をいえば、もっと両腕の上に締め上げ、大木にでも吊れば面白いし、縛りつけただけでも見たかった。みにくくなかったのは撮影者の功績大といわねばならない。

「スポット・ライト」モデル・絹川文代。両手、両足の縛りの大写真である。非常にマニア向きの面白い写真で、両手、両足をガンジガラメにして縛ってある。両手は三重にも太縄をかけられ緊縛されている。足も同様である。もっと親切心があれば、この全体を見せて、それから各部分の縛りの大写真があればもっとよいと思う。

さて最後に絹川嬢のものであるが、「ひとばしら」竹の柱に縛られたもので、全身を縛

ったものと、上半身だけのものとある。この写真はこの人の一番悪いと思う表情ばかりで折角の縛りもだいたなしの恰好。

「美貌の憤悶」長襦袢の上から三重に縛られたもので、右頁下と左頁上のはバックを真黒につぶして人体を浮きぼりにしたものであるが、写真的にも素晴らしい、傑作である。右頁下のうつ伏せになって両足を揃えて上にあがっているのは、どうして足も縛って両手にその余りの縄をかけなかったのだらうかと思う。折角足をまげているのだから。

「苦痛への階段」角のとがった、階段上でのポーズで絹川嬢も苦しかったと思うし又撮影者の労作の一つである。

「厚遇の座席」丸いテーブル（和風）の上に着物姿で緊縛されたものである。絹川嬢の最近の写真は、縛られ方が巧くなったが「脱し得ぬ拘束」に至っては、ほんとに巧い。シュミーズ姿の高手小手で、拘束から脱しようとする種々の動きが彼女の表情と相俟って素晴らしいものである。アップがほしい。

以上、色々と駄弁を書き並べては見たものの、K誌独得の妖艶さの中にもエレガントを失っていない写真集は、けだし世界でも類がないと確信している。まだ見ていない方には是非、一見をお奨めするものである。

(終)



話の屑籠

辻村 隆

伊勢湾台風を真向に受けたI君に、早々に見舞状を出したら、漸やく数日前、返信が届いた。一瞬にして襲った冠水で、名古屋の筏川添いの彼の家は、あっと云う間に押し潰され、綺麗さっぱり根こそぎやられたそうで、彼が過去十数年間、営々として貯めたコレクション始め、百冊近いK誌も、すべて無に帰してしまった。最近号はいざ知らず、再び求め難い旧刊号もあるだけにIの嘆きは一通りではない。幸い全員無事で何よりだったが、そうになると、流れて帰らぬ彼の蒐集品が殊更に残念でならないそうで、彼の心情を察し

て、私も出来得る限り箕田氏とも相談して、何とかして上げたいと考えている。

Iだけでもあるまいが、私達この道の同好者の、蒐集欲の強さは又格別で、私自身でも他の本は心易く人に貸しても、本誌だけは滅多に貸した事がない。紛失されたり、私の書いた雑文に対して、兎や角、批評されたりするのが、わずらわしいからである。

映写技師の彼が、その職業を悪用?して、本誌の為に度々提供して呉れた縛り映画シーンのフィルムの一コマも、当の映画館自体、未だに冠水の有様では、ここ当分は望めそう

もない。彼に頼んだ、新東宝の「九十九本目の生娘」のカットも恐らく駄目に違いない。

この映画ほど強烈に縛りに終始した映画はなかった。探偵作家、大河内常平の伝説めいた小説の映画化であるが、最後のシーンまで数えて見ると全部で七シーンもあった。

冒頭、山窩の老婆が蔓様もので町の青年二人に皮肉に喰い込むほど強く縛られて駐在所までの山道を引曳られて行く。青年達の仲間の娘二人が老婆に攫われたからだ。(1)

伴れのキャンブの娘二人は、いけにえとし

て、山窩の部落で半裸で柱に後手に縛られ、滝に打たされている。容赦なく縛って頭から全身に滝水が注ぐので、娘の一人の三原恭子は苦しげに眼をつむって頬を引きつらせている。(2)

彼女達は火入祭で、九十九本目の妖刀に、そそぐ乙女の生血をしほりとられる事になっている。

火入祭の夜のシーンは圧巻である。娘二人は濡れてべっとりとした体になつわりついた破れたシユミーズの姿で、たかだかと後手に縛られて太い樹の枝から吊されている。娘達の足は地上から二、三米も離れて吊り下げられ、その足許には生血をしほる二つのカメが置いている。

吊られた彼女達を囲んで、山窩共の異様な踊りと祭典が長々と続き、その間、彼女達をアップにロングに堪能するほど写し出してくる。彼女達の胸には、体の重みで縄が深々と喰い込み、演技ではなしに、真実、苦しげに顔を歪め、眼を閉じている。映画で十分間に、なんなんとする吊りシーンであるから、恐らくこの撮影中、彼女達は、どれほど吊り下げられていた事であろうか。三原葉子の、あのみにくく歪んだ顔は、最早、スター以前

の顔である。

山窩の長が、刃を抜き、娘達をぐさりと刺す。娘の腹から腿を伝って、どろ／＼と鮮血がツボに滴り落ちる。次いで、もう一人の娘も――血まみれてダラリと吊り下った二人の死んだ娘の姿を長々とカメラは執拗に追っている。(3)

裏話では、尚、この吊り下げる前に、水車に逆さまに縛りつけて潔めるシーンがあったそうであるが、娘が水車の廻転につれて、逆さに縛りつけられたまま、水車の水を鼻から、口から浴びるシーンは余りにも残酷すぎるというので、カットしたらしい。曲谷守平監督も、よくどこまで思い切った事をしたものだ。グラマー三原葉子、又辛い哉である。

結局、三原葉子は、せりふらしい台詞もなしに徹頭徹尾、縛られ、責められる事に終始したわけで、それでなければ裸で溪流に戯むれるシーンであったりして、これは残念乍らロングであったが、新東宝らしく、グラマーと縛りを売物にしていた。

次いで、この火祭を覗き見した二人の村人が捕えられ、一人は空高く大木の梢に磔けられ、一人は太い枝から逆さ吊りに吊られて殺される。この逆吊りの男の縛りは足首に巻いた太縄だけで、垂れ下った頭が地上、数米の高さにあった。随分、高いところから逆吊りにされていた。(4)

更に、この悪習を止め様とする神官が山窩に捕まり、これも亦、首を蔓で縛り、雁字搦目に縛って荒々しく引きずられてくる。(5) 山頂で神官が結局、彼等の為に、ずた／＼に斬り殺されるが、これも縛ってあった。

(6)

殺した二人の娘の血はけがれていたもので妖刀は失敗し、九十九本目の妖刀の、いけにえに村の巡査部長の娘が狙われ、さらわれる。急拠、火入祭が行われ、地上に倒れた娘は轟々と太縄で後手に縛られ、例の太木に縄を投げかけて吊り上げる。娘の足が地上を離れ、ばなつかせた両足が、ぐん／＼と吊り上って行く。殺された二人の娘と同じ姿に吊り下った娘の足許にカメがおかれ、正に首長の刃が突きささる／＼とした一瞬、警官達に救われる。(7)

私は異常な昂奮で息をつめ、私の前に座っていた母娘らしい二人連れは掌で顔を蔽ってショックにたえかねていた。

いうなれば、これは最愚劣映画の烙印に代って、本誌推薦映画と申すべきシロモノで、

謹しんで、監督氏にK誌賞を捧げたいほどのものであった。

それに引換え、本誌非推薦映画は、角田喜久雄原作の「恋慕奉行」の映画化作品「千鳥の印籠」なるシロモノである。

私は、この稿にも再度に亘って、東映映画化を喜び、甚だ期待していたのであるが、出来上がった作品は換骨脱縛(胎に非ず)。これでは原作者の角田氏も御気嫌を損ねるわけである。伝奇小説の粋は微塵もなく、老優片岡千恵蔵の凡々たるチャンバラ映画に過ぎない。原作のあの強烈な責め、全篇に及ぶ縛りは一体何処へ影を潜めたのか——。脚色者は勿論、監督佐々木康も何ともまあ、愚につかないものを作ったものだとはッ当りしたくもなる。

最後に一シーン、御義理の様に縛りらしきものがあるが、これなど問題外である。

手当り次第、週刊誌やら雑誌を読み漁っていると、大なり小なり縛りが出てくるから奇妙である。週刊新潮に連載の、小島政二郎の「女難」など、この作者が何を思ったか、誠にきわどいものを書き出した。本誌向きのもの

のである。時代に迎合したものであろうか。それでも流石に文が流暢で、矢張り大家の風格は保っている。

琉球生れの奴之助と云う唐手のすごく強い男が主人公で、作者には悪いが、余り描写が見事なので一寸引例して見よう。(第一話「八重山おとめ」より)

兄貴の古波蔵の無理女房のおたまが、弟の奴之助と、ねんごろになる。奴之助は二十の青年、おたまは十八才——。

「……………おたまは、健康な男らしい、胸毛の生えた胸に顔を埋めて、うれし泣きに泣き出した。「やわら」で鍛えた分厚な胸の上に、おたまのきしやな体を抱き上げ乍ら、

「月は美し十三日、処女美し十七歳——

奴之助は好きなウタを低くつぶやくようにうたい出した。——」

(中略)

「と、突然枕を蹴られて、ハッと我に返った二人の前に、目をむいた古波蔵が突つ立っていた。不覚にも、二人は(中略)縛られていた。

立ち上ることも出来ず、すわってはだけた前をかき合やすことも出来ず、思わず二人とも顔を赤らめないではいらなかった。古波

蔵の目の下に、醜い姿をさらすより外に仕方がなかった。

「覚悟はしているだろうな」

そう言ったかと思うと、古波蔵は足を上げて二人をその場に蹴倒した。音を立てて倒れたおたまの横顔を、彼は憎しみを込めて素足で踏みにじった」

(中略)

「二人はやがて別々に手足を縛り直されて、庭へ引き出された。

奴之助は桑の木に縛りつけられ、彼の見ている前で、おたまは着物をはがれて腰巻一つにされた。彼女の足を縛ってある細引きは、地面に打ち込まれた杭に縛りつけられていた」

(中略)

「よし。返事をしなければ、この鞭で体から聞き出すまでだ。」

ピシーリ、おたまは息の根が留まったかと思つた。痛さに背中を丸めて悲鳴をあげた。いつの間にか、町の人達が大勢集つて、この折檻のさまを楽しげに見物していた。島では、こういうことは、公開の場で行ない、だれでも見る権利があるとされていた」

(中略)

「鞭を加えられる苦しさに、彼女は小さな声で答えた。返事をしろと言いながらも、返事をされては鞭打つ嗜虐の楽しみを奪われるので、彼は苦い表情になった。」

「どっちが先に手を出したのだ？」

「……」

鞭打つ機会がきた。美しい裸の女が、細引の一尺の範囲を右に左に逃げまわる。が、結局は打ち据えられる哀れさに、見物の人たちはかえって戦慄の快感を味った」

(中略)

『ピシーリ、また鞭が彼女の背中に振り下ろされた。その時、

「もっと奥のことを聞け」

と、見物の中から半畳が飛んだ。ドッと笑い声が起った。

「兄さん、姉さんはあなたのおかみさんじゃありませんか。笑いにしないで下さい」

奴之助がじれて叫んだ。

「生意気いうな。笑いにしはだれがしたんだ？」

鞭が打ちおろされる前に顔をそむけたので、耳からアゴに掛けて紫色に「ト筋はれ上った。……」

二人は汐が満ちると姿を消すサンゴ礁の上

に手足を縛られ、足に重い石をくくりつけられて捨てられた。これが不文律になっている。奴之助はこの危機を脱し、日本内地に亘って、嗜虐と色道修業をつんで行くのであるが……。

読んで見て、生々しく、不義をした男女のリンチのさまが、まざまざと浮き彫りにされているのは、流石、大御所、小島政二郎氏の筆だけはあると思った。

×

×

先だって実施した撮影会と座談会は案の定、申込まれた方が多く、約五十人許りお断わりしたと箕田氏が言っておられたが、撮影会だけなら別であるが、座談会を伴った場合、到底これ程の人数は無理でもあるので、今回お目にかかれなかった人達は本当にお気の毒でした。

モデルは予定したベテラン愛川悦子嬢が急に身体の調子が悪くなって欠席したため、結局ニューフェイスの館典子嬢一人ということになってしまったが、典子嬢はファッション・モデルの現役というだけに容貌容姿とも満点縛られることは経験はないそうだが、ポーズのとり方などもうまく、私など、反って喜んでた。秋のそろそろ肌寒い季節に加わえ、

モデル嬢がヌードに、まだ一度もなかったことない人だけに持参したワンピースの着衣の儘の縛りで御不満の方もあった様だ。

これから野外はシーズンオフでもあるし、諸賢の御熱心さに箕田氏も、来春は座談会抜きの撮影会だけやろうと言うことに決定したらしい。但し、費用が相当かかるので、今回のように全然、会費なしということは、むづかしいとの話であるが、会費次第では、愛川、大塚、絹川の現在、活躍中の三人のモデル嬢の競艶と云うことになるかも知れないと、今から愉しみにしている。

×

×

箕田氏の許へ、よくマゾの女性から便りが届くが、いじめて欲しいとか、責めて欲しいと女性名であっても、それに返事を出し、それではとなると、男性であったり、冷かしであることが屢々である。それが珍らしくも真正銘の女性から返信料つきで手紙が来た。今から十日程前である。(以下原文のまま)

「私くしは御誌を読みまして、突然お便り致します二十八才になるマゾの女です。一度結婚致しましたが、わけあって夫と分れ、現在独身中です。本当に虐めていただけたらと思いい、主人からさんざんいじめられたり、縛ら

れたりした事が懐しくて、もう一度あんな目に逢って見たいと思います。独りでは仕方ありませんので、夏は人が寝静まってから二階の物干に出て、始めに両足を自分で縛り、それから両手を口を使って前で縛って物干台で転がっています。蚊に喰われるのをじっと我慢していると自然に泣けて来ます。又雨が降ると、同じ様にして、いつまでも濡れるに任せて、そして、独りで責められる気分を出しています。それで男が私くしをどの様にしてもいいと思い、日が暮れて茶臼山公園に行き、ベンチに夜遅く腰かけていますと、学生

が三人来て私くしをとり巻き、何をしてるねんと云いました。私くしが黙っていますと、学生の一人が、こいつパンパンやでと云いましたので、私くしは「違う」と云いました。私くしはそこで、思い切っていじめて欲しいと言いますと、学生が「こいつちよっと変たいやな」と云って、何か相談していました。が「ホンなら虐めたらう」と云って、二人の学生が私くしの手足を押えて動けぬ様にして、残った学生がビニールのバンドをズボンから抜いて私くしのおしりを始め撫でる様にたたきました。「もっと強くして」と私く

しは叫びました。「かめへんな」と学生は云って、それから本気で叩きました。疲れると、又違う学生が、おしりから背中まで、一面腫上る程たたきました。私は気が遠くなりそうで、こんな事をいつもしてくれたいと思います。お願いですから、私くしを一度使って、モデルでも構いませんが、えんりよなく本気で縛ったり、叩いたりしていただきたく思いますので、お返事を必ずお待ち申します。

編集部様御許へ

風 谷 雪 乃

レポ

「夫婦善哉」

S・好 久

先頃の月曜日。夕食後遊びに来た近所の娘さんを交えてトランプ遊びをしていたら、その娘さんの姉さんもやって来た。姉さんは二十四の未亡人で、十九の妹さんと二人で生活しているとかで、わたしの家内と親しいのだが、家内とは雲泥の違いともいえるほど美しい。

その未亡人の出現に座の空気が変わって、トランプはやめて、雑談に花が咲き、わた

しは横手に押しやられた格好になった。音を小さくしてあったラジオが、例の、蝶々雄二の「夫婦善哉」というのを始めると、妹の方が、皆を制して謹聴の態度をとらした。仲々この夫婦のオノロケ番組は娘さん達には魅力ものらしい。わたしは、それを聴き入る三人三様の表情を興味深く思っ

て観察していたが、その内にハツとなって聴き耳を立てた。

以上のようなマゾ女性の大変な手紙である。文面や文字から考えて、さして教育もないが、箕田氏は若しモデルに使えぬ女なら、少々年はとっていても拾いものと、騙された気で折返し返事を出したら、待ち受けた様に速達で応答があった。これは本物かも知れないと、私に連絡があったので、当日、箕田氏と共に待つと、間違いない約束の正午きっかりやって来た。

事実私も箕田氏も幻滅を感じた。正しく、女性であるが、瘦せてギスギスの目方は十貫匁程の小柄な吹出ものだらけのお粗末な御面相の女性である。ヤレヤレと思ったが、まあ

……で、どんなことを書きましたか、その手紙に……（雄二氏の問）

……あのう、あなたに縛られたいって書いてたんですよ……（出場の若奥さんの答）

……（とたんに満場のドヨメキ、拍手）……ホホウ、そう書きましたか……私はあなたに縛られたい……フーン、エエ文句ですナア……（雄二氏）

という問答が飛び出したのだった。（多分、聴かれた方も沢山にいられることだろう）私はドキリとしながら未亡人の横顔を咄嗟に伺った。未亡人は美しい顔に笑みをたたえていた。妹さんの方は、素晴らしいワ、ともいいたげに、これも笑いながら聴いている。

何でもない事だ。その意味たるや、まことに深長なものがあるだけのことで、普通一般の若い人がやりとりするラブレターに違いない。けれど、わたしは、一瞬ゾッと身が絞られるように感じた。

これが放送劇ならそうは感じなかったろう。この場合は、このやりとりにセリフの台本がないからそう感じたのだろう。

その意味の違うことは当然ながら、若い奥さんの声で、突然、縛られたい云々の語がとび出しただけに、妙になまなましい感じを伴って、わたしをギクリとさせたので

あろうと思うが、胫に傷りを持つわたしはどきまぎしてしまった。

表面上、強いて皆と調子を合せて笑いでゴマカシはしたが、誠に奇妙な気持であった。

このオノ、ロケアワーは済んだ。

「あーア、面白かった」

娘さんが、スイッチを我物顔に切った。

美しい美亡人が、あわててその無礼をたしなめる。

「いいのよ、キミちゃん（娘さんの名）いつもこれを聴いてんの？」

家内がいうと、未亡人が

「表彰状ものヨ、聴取賞を貰ってもいいくらいなのよ」

「そりゃ、私だってお年頃よ。早くいい人をめつけて縛られたいワ」

「マア、この娘ったら……」

「姉さんだって、まだ若いんだから、早く縛って貰うヒト探さないヨ。ネエおじさん（不満乍らわたしのこと）だれか、めつけて上げてヨ、姉さんをガンジガラメにするヒトを……」

「キミちゃんッ！」

未亡人の美しい頬に赤味がさした。

私は、またまた、大声で笑って何かをゴマカさねばならなかった。

それでは一度ということで、行きつけの旅館に行くことにする。

到底モデルに使えそうもないから、まあ喜ばしてやろうと、事務的に、一度でコリコリと云う奴をやろうと、彼女を行儀よく座らせ、顔と両腿がつくほど体を折り曲げさせて、丁度四つに畳んだ恰好で犇々と縛り、二人して鴨居から吊り下げて見た。体を、ぐるぐると廻して吊った縄を一杯によじり、手を離すと、勢よく彼女の体は空中で旋回する。

ローソク責め、ゴバン責め、風呂場で水責め、浣腸と様々に行なってサーピスをしている様で一向に面白くもなんともない。反って二人ともヘトヘトに疲れ、物足りなそうな彼女を帰して、顔を見合わせ苦笑した。その後うるさく箕田氏に大同小異の手紙が一週間にあげずくるので彼も閉口している。典型的マゾの彼女を御す志望者は居られませんか——顔が拙く、十貫匁足らずの痩せ女を承知の上で……。

×

×

晩秋の快よい日が続いている今日此頃——この稿の掲載が一月号——既に一九六〇年に足をつっこむのかと思うと妙な気になる。

（三四、一〇、二六、この項終り）

懸賞募集〔告白と手記
と体験〕原稿入選作品

〔告白の記〕

振袖と後手への偏執

田村清彦

このような告白の記を投稿するには、相当の勇気と決断力を必要といたします。なぜならそれは、自分の異常性を自ら公表することだからです。私は、ずいぶんためらいました。しかし、ついに意を決して、この私の偽りのない告白と体験の記録文を皆さまの前に出すことにしました。

私は、大学院博士課程で医学（内科）を専攻している者です。その点に関するかぎり、別段に珍らしいことをしているわけではありませんから、外面的には、一見、他の青年と

変らない学院の徒にしか見えないことでしよう。

ところが、どうしたわけか、私には、幼少時から、事、女性のことについては、普通の人々が抱いているような正常な関心が全くないのです。私は、私の小学校、旧制中学校、旧制高等学校の各時期を通じて、友だちと談笑するさいに、話題が通常の男女関係のことになった時など内心では、ひどく狼狽しました。私には、一般的な興味や好奇心が全然なかったからです。私は、長ずるにしたがい、いつのまにか交友間においては自分も一般、普通人と同じような関心や願望を持っている

かのように装い、話の焦点を合わせて行くすべを身につけましたけれども、そこまで馴れるまでには、心理的にたいへんな苦心をしてまいりました。

ところで、私のこの特殊な欲望——女の和服美、なかならず、お正月などにおける振袖の晴着姿への限らないあこがれと、そのような清純な乙女が後手に縛られている姿を眺めて胸をときめかすという、この特殊なリビド——が、いったい、いつのころから私の血の中に芽生えたのか、それが未だに、私自身にもわからないのです。私は、十代の少年の日から今日まで続けて日記を書いてきました。

それの中には少年のころの私が、自分のこの異常な興味、性癖が、いったい誰から遺伝したのか、あるいは何によって触発され啓発さ

れたのかということへの、はがゆいばかりの疑惑の想いを切々と綴った手記も見出されます。その文は、今から十数年も前に書いた



四

ものですが、今読み返して、今もなお解けないこの自らの「生得の謎」について、改めて思うのであります。

私は、人の前で、口に出すことができないいくつかのことばを有しています。それらのことばは、事実、二十九歳の今日まで、人の前では一度も口にすることはありません。けれどし平然といえないということは、それらのことばについて、私が格別の関心を寄せている証拠なのでもありましょう。そのことばというのは、「おび」「おびあげ」「おびどめ」「おびじめ」「はんえり」「ふりそで」「おたいこ」「たもと」「ながじゅばん」など、女の着物に関連をもつ一群の単語と、「うしろで」「しぼる」「しぼられる」「くる」「くくられる」「なわめ」「めかくし」「さるぐつわ」「とらわれ」「ろうや」「とじこめられる」などの単語群とです。数学の勉強のときに、「括弧でくくる」ということばを口にすることさえ、私にはなんだか面映ゆい気持で、いい淀んだくらいでした。今でも、これらのことばを声に出すことには、内面的に大きな抵抗を感じますので、いったことばはありません。

二

私は、英国首相マクドナルドらの首唱により開かれたロンドン軍縮会議の最中に京都市に生まれました。

思えば、小学校入学以来、あらゆる学科において、私の成績は抜群でした。京都育ちの私はK大学医学部に入学し、ここで医学のほかに、英、独、仏の三カ国語に磨きをかけました。英語の方は学部時代から通訳をしていました。インターン終了後、私は大学教授を目指して大学院に進みました。

その間、私の姉がピアノと踊りを習っていたことも手伝って、ピアノ、作曲法、和声学、対位法、地唄、箏曲、日本舞踊、茶道、華道等の芸術にも、私なりに相当年月にわたっての、かなり深い研究を進めてまいった関係上、恋愛の機会に恵まれ、今日まで、いずれも教養も高く容貌や容姿もきわだって美しい数人の良家の乙女たちとの清らかな交際を持って来ております。いろいろな条件を総合したさいの価値が最高であると考えられる清純な、そして秀れた女性や美貌の女子学生との美しい交渉を数多く持ち得て来ているという点で、恐らく私ほどに恵まれて幸福な青春

を呼吸した人は極めて稀にしかないと存じます。

そのことに関するかぎり、私は満足すべきであり、わが青春に悔なしといえると思います。

三

ところが、その幸福に比べて、この私のもつアブノーマルな欲求が満たされることは少なかったのです。

私には、私が少女を後手に縛った経験はありません。幼いころには、お祭りの日に、自宅の二階で赤い着物を着た近所の遊び友だちを大きくってから家庭教師に行った家の親戚の女子高校生をとというように。私は今日までに、じつに九人の乙女に対してそれを試みました。その一人一人について、今も私は名前も顔も、はっきりと記憶しております。

しかし、二十歳以上の良家のお嬢さんであって、知的な、または音楽を通しての、もしくは、ともに映画やダンスパーティーに行くという程度の都会人的な交際をしている相手のひとに対しては、私はどこまでも正常な知性人として接するのほかはありませんでした。

——私は、

彼女たちは、たとえば、「振袖」「縄目」「囚われ」「後手」「猿轡」「縛め」などの用語および意味に関してどのような観念を抱いているのだろうか。そもそも彼女たちは、小説や漫画や映画や歌舞伎の中に出てくる「人を縛る場面」を、どんな気持で観ているのだろうか。彼女たちは「縛る」ということは、手の自由を物理的に奪うということだと割り切り、それ以外に何らの意味も価値も認めてはいないのだろうか。それとも、そのようなドライな考え方のほかに、何か或る特殊な、ウェットな感触を以て見ているのだろうか。さらにまた、彼女たちは自身が、しとやかな振袖姿で後手に縛られた場合、どんな気持を抱くであろうか。縛られ、口には、さるぐつわをはめられ、縄尻を取られて引っ立てられ、牢屋に監禁せられた時に、彼女たちの胸裡に生じるであろう心理や気分のデリケートな陰影の隅々をまで知る方法はないであろうか……。

といったようなことについて、詳しく知りたい、教えてほしいという強い内心の欲求を持ちながら、あとに述べる令嬢のことを除け

ば、彼女らとの会話の中で、まだそれらのごとに触れてみたり、質してみたりしたことはありません。

私のような男は、どうやら生涯を孤独と哀愁の中に送らなければならないように宿命づけられて、この世に生まれて来たのではないでしようか。私には、私の知る限りにおいてすべての学友も男も女も老人も青年も私の両親も私の姉弟も健全正常な心理の持主のように思われてなりません。それに対して、私は自己のフェチズム——この言葉は、政治学ではフェチッシュ（物神）を尊ぶ思想すなわち物神崇拜といっています。この語の政治学上の意義についての詳説は省きます。医学的ないし心理学的な複合観念としての意義は周知のところでありましょう——と、美しくて気品高き乙女の捕われ姿への強烈な憧憬（私はこれを決してサディズムの一種だとは思っていません）とが、私の希求と結びついていくという事実、いな、私の希求そのものである私の希求のすべてであるという事実を認めないわけには行かないのです。私の場合、欲望や恋愛の本性は肉欲である、とはいえないわけです。ああ、それは、なんと悲しい事実なのでありましょう。そしてまた、それは、

なんと安全な欲望であることでしょうか。

したがって私は今も純潔です。私の異常心理を解剖するために、私はかつて、精神分析学（Psychoanalysis）の創始的、かつ代表的な学者たるドイツのフロイド（Freud）・ユング（Jung）・アドラー（Adler）らの精神分析学説についても読みましたが「解釈」は不成功に終わっています。そうして、なおも、私の純潔は保持せられていくのです。

私だけが、どうしてこんな人間として生まれて来たのでしょうか。ほんとうに不可解なことです。

四

小説の挿画や映画の場面などについても関心をよせてきたことはいうまでもございませう。また、たとえば、昭和二十八年の八月や昭和三十一年の四月に、学会のために東京へ行った時、私は浅区六区の各劇場にはいり、ストリップショウなどを見たものでした。しかし、私はストリップには興味はなく、ほんとうは、ひたすら、美しいお姫様の後手の縄目姿を求めてやまなかったのですが、この願いは、ついにかなえられることなく帰落しました。

なお、今、ふと思い出しましたが、昭和三十年五月の鴨川踊り（先斗町、歌舞練場で）の中で、幕があくと振袖姿のお姫様が胸にも縄をかけられ、木の根本に後手に括られてうなだれて坐っており、それがやがて立ち上ると縄目姿のまま十五分間くらいも踊り、最後に黒い鼠が現われて縄をかみきってくれるという舞踊ソロが上演せられたことをお伝えしておきます。後手首も、きっちりとかくってあったことを、あの踊りを見たすべての人が記憶しておられると思います。

私が日本の時代映画を見に行くのは、チャンバラがすきだからではありません。姫君や武家娘の、美しい振袖姿が見たいからなのです。若い娘の匂うばかりの気品を湛えた着物姿を見ると、胸騒ぎを覚える私なのです。胸高く帯をしめた美少女の和服姿を目のあたりするときは私は、なんとなく恥ずかしく感じまたその鮮烈な映像が心の底にまで沁み、眼に痛いようにすら感じます。

京都の娘さんたちは、お正月や踊りの会やお茶の会やお花の会などに、こよなく美しい和服姿を見せてくれます。それを見る時の私の心臓は、あやしく高鳴り「あの着物や帯にさわってみたい」「あのひとの両手首をつか

んで背中中の帯の上へねじまわしてみたい」と空想するのです。

また、「女の人は洋服を着ている時と、着物を着た時と、きつと心の内面の状態に相異があるにちがいない。男にはわからない、なにか、女だけの心の秘密とでもいうべき、或るものが微妙なニュアンスを帯びて、あの長い袖や帯の内部にかくされているのではないだろうか……」とも考えるのです。

母や姉の読む婦人雑誌の付録として、豪華な色彩写真をふんだんに入れた和服裁縫に関するデザインブックがいたりすると、私はそれを、いちはやく見つけ、こっそりと自分のへやへ持って行って、憧れをこめて、その本の一頁一頁に眺め耽ることもあります。

五

今日までの私の体験については詳らかな記録を持っています。次の機会にそれを発表させて頂こうと存じております。

私を最もエクサイトした、一生忘れることのできない体験といえば、ピアニスト（放送にもいくたびか出ています）で、しかも花柳流の名取りであり、純白で清純な肌、豊かな頬、優しいなで肩を持ち、たぐいまれな美貌

と容姿に恵まれたブルジョアの令嬢（昭和十二年生まれ、現在女子大生）とのことです。昭和三十年一月三日の夜、当時高校生であ

ったその人は、自分の家の十畳の奥座敷で、袖のたいへん長い華やかな着物に、白銀色の帯を高く締めた姿で、「松の緑」を五回ほど



電蓄のレコードでけいこしました。私はレコード係をしながら鑑賞しました。祇園会館での発表会のための最後の仕上げとしての練習なのです。その夜は、その人の両親も二人の女中も不在でした。下鴨の広い屋敷の中に、私と、その人と、一匹の犬と一匹の猫とがいただけだったのです。踊りのおさらいをやめて、二人はタンゴを二、三度踊りました。振袖姿の少女とホールドした私の心臓はあやしく動悸を打っていました。その柔かい着物独特の手触りと、かぐわしい黒髪の香りとは、全身に滲みわたるような懐かしさと、胸のうずくような切ない思いを呼びました。それから、向い合って坐り、お茶をのんで休憩しました。

それから五分ほどのちに、隣の鏡台のあるへやで、ああ、とうとう私は、この令嬢を美しい振袖姿のままで、実際に細引で後手・高手小手という文字通りに縛り上げてしまったのです。

お茶をのんでから、彼女は、ふすまを開いて、隣の六畳の部屋へはいって行ったのです。そこには、大きな古い二面鏡の鏡台が置いてありました。彼女は鏡の前にきちんと坐ると衿と帯のあたりをなおし、長い袂の内側

をととのえていました。私は、部屋のしきいの上に立って、それを眺めました。その姿や挙措は、日本の若い乙女の優美さを強烈に示しているように私には思われました。ふと見回すと、その部屋の隅には、三枚の布団がたたんで置いてあり、その上に、布団を包んであったらしい大きな緑色の風呂敷がたたんで乗せられ、その上に長い長い、白い木綿の細縄が無造作に置かれていたのです。

私は、どきりとしました。私の心の中では「今こそ遅疑逡巡するな」という声がしました。私は、きちんと坐っている彼女の後に、膝をつく、彼女の胸を軽く後から抱き、思い切っているようにしました。

「直美さん、今、ぼくがしたいと思っていることをしても宜しいでしょうか？」と。

彼女は、

「あなたのしたいこと？どんなことですか？」といいました。

「ぼくは、あの紐で、あなたをくくってしまいたいのです」と、おそろおそろいいますと彼女は、「まあ」と小さくいい、やはり、じっと坐ったままで、鏡を見たまま、なにもいわずに不審そうな表情を示しました。

私は電気に打たれたような早い動作で、へ

やの隅の縄をもつてくると、彼女の背後から彼女の膝の上の両手の手首をつかみ、彼女の背中にもつくらと結ばれている帯の上に捻じ回しました。彼女は「痛いわ、離してください」といいましたが、積極的な反抗も見せず半信半疑の中途半端な態度のままでいてくれました。私は細引を二重にして、それをまわす彼女のふくよかな胸にまわしました。その瞬間の私の経神の異様な昂ぶり方は、まことに筆舌では尽せません。私は、つばをなんどものみ、まったく命がけというような心理状態で、一生けんめいになっていました。後手を厳しく括ってから、なお多く残っている縄を、また彼女の胸に左からも右からも強く回し、力をこめて背中で固く結び終ったその時の私の狂乱状態は今も忘れられません。両方の長い袂がこの美少女の膝の両側の畳の上に垂れていました。彼女は、ひしひしとくくられて行くあいだ、黙って下を向いて少し身悶えしながら、自らの胸にかけられた縄のあたりを見ていたのです。

縛られ終った時の彼女の姿とポーズは、まことに完璧なものだったのです。私が、いつも夢に描いた理想のイメージそのまま、私の目の前に現実に示されたのでした。振袖姿

後手姿、縄目姿、捕われ姿、そしてそこに流れる、えもいわれぬセンチメント……、胸の帯揚げの上には六本の縄が、きっちりとかかり、胸の丁度うしろの帯の上で両手は高く、くくりあげられていました。

その時、彼女が上体をくねらせながら、

「……へんなことをするひと……」

「縛らなくても私は逃げたりなどはいたしません……」

「どうしてこんなことをなさるのですか」

「異常だわ！」

といった、この四つの言葉が、今も鮮やかに私の耳の底に残っています。

私は、どきどきする胸を抑え、声をふるわせながら、

「『どうぞおゆるしくださいます』といいなさい」

といいました。彼女は、そのとおり三度繰り返しました。しかし、その声は感情のこもらない事務的なものでした。そこへ、外出中の彼女の父からの電話がかかり、廊下で鳴る電話のベルの音に驚いた私は、大急ぎで縄を解きました。彼女が縛られていた時間は、今考えると、二分間ないし三分間くらいだったでしょう。彼女は坐ったままで、「ひどいひ

と」といいながら、両手首をなでていました。私は、彼女の背後から肩越しに、小さな

声で「ごめんなさい」と、そっと囁きました。電話のベルは、まだ鳴り続けていまし

地獄の釜

正木 真 龍

私の住居の真向いに、すぐ裏手を流れるドブ川にのり出すように、曲芸的格好で持ちこたえている破れ家がある。不思議に先日、の台風にも倒れず、住人の居た頃から、消防署の善処勧告にも手の施しようもなかったボロ家だが、家より先に住人の方が倒れて、はや一年余り、今は空き屋だ。

ここに居を構えていたのは、八卦のセンセイだった。独得の横柄さがあって近所の人からは「変り者」と敬遠されていたが、どういう訳か、私の家には気易く押し付けて来て、長々と怪気えんを上げ、私達夫婦を煙にまいてしまうことが際々だった。この八卦センセイが相当強度のサド患者だったのだ。私もその反面は充分自覚しているが、外面にはオクビにも出してない積りだ。が、それをこのセンセイ、得意の占いででも見破っていたのか、少くとも私に対してはサド的言動を弄すること、甚だ派手なモノがあったのだ。

八卦だけでは喰って行けないとかで、奥さんが住込仲居をしていて、月に一、二遍帰ってくるのだが、その度にこの破れ家から、悲鳴が湧き上って附近の人の噂の種になっていた。いつかの夜、余りにその悲鳴が激しいので隣家の人が私を呼びに来た。「あなたはよくツキ・アイをなさっているのだから」という理由で、特に激しいその夫婦喧嘩を止めろというのである。私には察しがついているから、言を左右にしながらぐずづいていたが、強つてとのことで遂に腰をあげざるを得なくなった。行ってみると案の定だ。戸を叩いたのが私だと分るとセンセイは戸締りを外して招じ上げたが、奥さんが後手にしばられて、破れ畳に転がされ、センセイがその横でシヨウチュウをやりながら、棒切れで時々ヒツパタク。悲鳴はその都度とび出すのだが、どうも振り降す腕の力の入り具合に較べて悲鳴の方がオーバーに過ぎる感じだった。「センセイ

女た。浴は廊下へと立っていききました。私は索漠とした空虚感に襲われていました。

六

それから数日して、私と彼女は、また彼女の家で会いました。彼女は、「わたくし、あんなことをされたのは生まれて初めてですわ」と微笑しながらいい、「わたしには、あなたのようなことが、どうしても理解できませんわ」ともいいました。彼女は完全に健全な乙女のようにでした。マゾヒズム的美的感覚は持ち合わせていない様子でした。私は失望するとともに、相手の顔を、まともに正視することができない恥ずかしさと、ひどい自己嫌悪とに駆られ、それから一カ月ほどを毎日憂鬱な気持ちで暮したものでした。

一昨日、祇園の弥栄会館で、クロイツァー豊子と近藤孝子のピアノ演奏会が催されました。私の隣の席の娘さんは、両方の袂を自分の膝の上に重ね、うなだれて聴いていました。私の熱い血が全身を駆けめぐりました。そして、その清楚な姿を、時々横目で盗み見しつつ、私は、私のこの特異な欲望や好みに適応しうる女性と結婚することができたら、どんなに仕合せだろうかと考えていました。

もう少し静かに出来ませんか？」私が、その様子をしばらくみてから切り出すと、「すみません、あの、外へ聞えますか？」と奥さんの方がいった。聞えますか？ もないもんだと苦笑すると、初めて羞しそうにした。私にしばらく姿をさらしていることは余り羞しくないと思える。センセイが私にトロンとした眼付の笑いを投げて、樺切で「ソレみる」とばかり奥さんをグイと突く。これは痛かったらうと思うのだが、「クツ」といっただけで悲鳴はあがらなかった。私はなんだか馬鹿々々しくやり切れない気持ちになって、とめるセンセイを振り切って早々に引き揚げた。

こういう状況を絶えず妄想している自分が、あの打ってつけの実態を目前にしながらも、どうしても心が踊らなかつた。荒れた家で、すすけた電灯のもとに、後手にしぼり上げられた女が打たれて、悲鳴と共にもがく。全くお誂え向きの設定なのに、そこには鬼気のみが漂い、日頃の夢につきもののロマンチックな美観というものを見出すことが出来なかつたのだ。

その翌日の夕方、その奥さんが昨夜の注意に対して礼に来た。打って代った羞しげな風情である。明るい電燈のもとで消え入らんばかりの奥さんは仲々捨てたものでは

ない。職業柄こざっぱりとしているし、美人とはいえない迄も、まあまあである。私はこれが昨夜のみにくい被縛者と同一人か、と疑ったことを覚えていた。——その時、奥さん曰く、「ホントにタクには困ります。顔をみればすぐあれですもの。あの家は地獄の釜です。私、お店が休みのときでも帰ってくるのがホントに嫌なんですけど、やはり帰らない訳にも行かないし。これも前世の因果と諦めて、死ぬ思いでこらえてるんですノヨ。貧乏は仕様ありませんけど、せめて、タクのある病気だけでもなおってくれましたら……アノ、ご近所の人にはただの夫婦喧嘩だったと……お願いします」涙を浮べて訴える様子は私には意外だった。マゾだろうと簡単に割り切っていたが、神はそうそう都合のよい組合せをしていないらしい。その奥さんの話しぶりから考えて、マゾを隠しての体裁とはどうしても受けとれなかつた。私は余計不可解な気持ちに襲われたものだ。この不可解さは今だに尾を曳いている。

あの奥さんは、その後どうしているだろうかと時々思う。

センセイ昇天以来、空家のままのあの「地獄の釜」は近く取壊されるそうである。

作

創

三十郎の恋

蒼

野

礼

四五日前の夕方、私が縁側に座机を持ち出して、桃色の夕明りに原稿を書いていると、唐柴の庭木戸が幽かに軋んで、名和三十郎が痩せた長身をふらりと滑り込ませて来た。音を忍ばせて近寄つて、私を驚かすつもりだったらしいが、どっこい、私の耳は敏い。振り返って顔を見たものだから、バツが悪そうに一寸顔赭くして、

「まるで剣客のように油断がないですね」

「ひさしぶりに顔を見せといて、そんな挨拶ってあるか」

私は笑って、ペンを擱くと、障子越しに部屋に居る妻を呼んだ。

「めずらしい人が舞い込んで来たぜ」

「舞い込んだ、とはひどいな」

縁側に腰を降ろして、綺麗な桃色に夕映えした空を仰ぎながら、

三十郎は苦笑した。

「こんなところで原稿を書いていたら、眼を悪くしませんか？」

「するかも知れないが、しかし私はたそがれが好きなのでねえ……」
障子をあけて妻が顔をだした。

「あら、ほんとにめずらしいお客さんね。お元気でしたの？」

「はい、おかげさまで」

と、一つ叩頭して、三十郎、珍らしく、

「奥さんもお元気そうで、お美しい」

「へえ、お世辞をいう道を知っているんだな」

「——お世辞ではありません」

真顔になって、私を睨むように見て、「美しいですよ、実際」と

いった。

「あらあら、どうしましょう」

さっきまで、私は妻を馬にさせて、私たちのいう『騎馬責め』を加えていたので、妻の顔には、白い生えぎわのあたり、まだ汗が薄く光っていた。女を責めたことのある人ならば誰でもそう感じるだろうと思うが、責められて苦痛にあえぐ顔も美しいが、許されたあとの、髪を乱し汗をかべた疲労の表情も、凄艶といった感じがあって、いい。

妻は髪形のくずれを気にするように、それとなく手を当てて直しながら、

「三十郎さん、奥さんお元気？」

「別れましたよ、とっくに」

こともなげに意外なことをいうので、私も妻も一瞬、気を吞まれて相手ののっぺりした長い顔をみつめた。

私は書きかけの原稿をしまい、

「とにかく、上りたまえ。上でゆっくり話を聴こう」

「なに、別段大したことではありませんよ、ははは……」

笑いながら、三十郎、すばり、すばり、と雨でもないのに穿いているゴム長を脱いで、ひよろりと縁側に立った。

名和という姓は彼がでたらめにいつているのであって、本当は安部である。安部三十郎というのが、ちゃんとした戸籍名である。

彼は物心ついて以来、『三十郎』という名前に多大の羞恥の思いをするようになり、人から、

「名は？」

と訊かれるのが苦痛であった。

「……三十郎」

彼の言葉に依ると、消え入りたげに、その都度答えていたという。おのれの名前に対して、幼少から一種の劣等感を覚えていたわけだが、だんだん長ずるに及んで、彼は自分の姓名を戯化するようになった。

名和三十郎。

即ち、名は三十郎、にひっかけたものだ。

三十郎という名前は、何もおかしい名ではないと私には思えるのだが、当人は殊更悪ふざけして、『名和三十郎』を自称している次第だ。そう戯化するだけ、大人になってもなおしつこい劣等感にとられていくわけだろう。

九州長崎の生れで、二十八歳、私より四つ下の男である。

もっとも、私が彼を識った当時は、まだ彼はH大の三年生で、長髪をポマードでべったりかため、ズボンの折目を終始気にかけているような、一寸見には、にやけて映る青年だった。知った場所は浅草の猿川の家である。

猿川の家——といえば、ああ、あの責め具屋かと、都内に住むマニアの中にはうなずかれる方も多いことだろう。実に多種類の責め具を自家製造販売し、『青炎会』の本部でもある。本誌九月号に書いた拙稿『青火宴レポート』は、このマニアの集いである『青炎会』の集団責め―野外宴と称うが―の模様を、そのまま写しとったといってもいい。ついでにいうと、これには余話があって、「怪しからん、無断でモデルにするとは！ 蒼野のやつ、除名だ！」会長某氏、相当息まいたそうだが、除名通知にはまだ接していない。

会規で厳禁している『不倫行為』に抵触しない限り、会長独断でそうたやすく除名できない筈だ、とここで遠いところから吠えておく。それにしても、五十余名の男女会員中、いまだ誰一人として破戒者が出ないのは、よろこばしいとともに、我々マニアが、等しくその精神は清純であることの証左として、世間一般の偏見に抗したいものだ。

思わず余談にわたったが、さてその猿川の家で、あるとき、偶々三十郎と私は行きあったわけである。

そのとき私は妻をつれ、責め具の一つである特殊な木馬を買っために、わざわざ練馬の奥からタクシーでやっていたのだが、岩乗な鉄の輪鎖や、鉄の手枷足枷の附随したそれを見ると、急に怯えた様子になって、

「……勘忍してよ……あなた——」

いままでどおりに、柱に縛っての責めをして欲しいと、妻は懇えた。

「バカ」

私が叱りつけているところへ、もう一組の男女が、陳列室へ這入って来て、つかつかと私たちの方へ寄って来た。一見バーのマダムか料亭の女将風に見える中年増の大柄な美人で、つれの男は学生服を着た痩せたひよろりとした男で、髪をべったり七三に分け、のっぺりした長い顔が、ちよいと気障な感じで映った。

二人は、これも同じく幾つかの木馬を仔細に検分していたが、

「これが恰度よさそうだ。乗ってみろ」

「はい」

どう見ても年上な筈な女が、素直な返事をして、その豊満な体を木馬にあずけた。妻はふと顔をそむけて、小声でまた、

「……いままでどおり柱に縛って、おつなり蹴るなりなさって——ね、お願い……」

妻はまだ二十二歳で、結婚して日が浅く、新妻の初々しい感じが、その細身の肢体に強く匂う頃である。いわばその初心な胸の中に、やっとマゾの芽が萌え出た時期で、怯えためらう気持の方が強いのも、実は無理もなかったのである。

「ねえ、靴でお蹴りになってもいいわ」

私の気持を損じまいと、殊更そんな提案をする彼女の心を私は可憐に思いながら、奥でさっきからビールを飲みつつづけている猿川を手を拍いて呼んだ。

「あの、一番手前の木馬を貰おう。明日中に届けてくれよ」

私が代金を払っていると、大学生の伴れの女が猿川の傍に来て、

「明日、午前中までに配達して戴けない？」

手の切れるような真新しい紙幣を、鹿皮のバッグからひきぬきながらいった。男の方はと見ると、向うで革鞭を手にとって弄っていた。

「三十郎さん、いい鞭があったらついでに買いましょ」

と、女が呼んだ彼の名前は、たいへん覚えやすかった。

翌日の午後、私が庭の芝生で妻に縄跳びをさせているところへ、表に車が停まって、そのブレーキの軋みは、たしかに猿川の小型トラックだと思ったが、

「ごめんください、そうのさん——」

と玄関で呼ばる声は、若くて、猿川の声ではない。第一猿川だっ

たら、ごめんくださいなど神妙な挨拶をいうような男ではない。いきなり、ずかずか上り込んで来るのが、いつものことである。

はて？ おかしいなと思ひながら、私は妻に小休止を命じて、玄関へ行ったわけだが、ドアをあけると、黒い詰衿服の背のひよろりと高い男が、



「昨夜はどうも——」

といって、人なつこく笑った。

「いやあ、貴方は昨夜の……」

一度見知ったら、容易に忘れっこのない、のっぺりした長い顔である。

約束した午前中に木馬が届かないのに、猿川に電話したら、酔っぱらっていて車の運転ができないというので、仕方なく自分の方から出かけて行って、奴の車で木馬を運び、ついでに貴方の木馬も運んで来た、と彼はいった。

「それはどうも。猿川の奴、まったく仕様のない奴だ……」

私はすっかり恐縮して、彼と二人してトラックから木馬を降り、家へ抱え運んだ。

妻にいいつけて、果物に冷たい牛乳を添えて出すと、彼は一そううちとけた態度で、

「名和三十郎という者です。よろしく」と、名乗って、

「ほんとうにこれを御縁に、これから御

交際を願いたいですね」

「それはこちらこそです。一体に我々偏奇者は、世間的に孤独なものですからね」

「妻の千絵子です」

と、妻がいった。一応微笑をこぼして会釈したが、妻は、内心わざわざ木馬を運んで来た三十郎を恨めしく思っていた事だろう。

「——失礼かも知れないけど、昨日一緒に見えていたあのお伴れの方は？……」

私は訊いた。

「あの女ですか、あの女はですね、新橋のKのマダムですよ」

「……Kというところ？……バーですか」

と、私はその店を思いだした。

「知ってますよ、あのバーではだいたい前に飲んだことがあります」

それで、そのKのマダムとはどんな関係にあるのかというところが、私の関心事であったが、そのことに一寸触れると、名和三十郎は言葉を濁して答えなかった。

私と三十郎は、それから約小一時間程くさぐさのアブ談義に花を咲かせた。私たちは非常に愉しい気分で、さまざまな責めの方法やその効果について論じ合った。かたわらで、妻は神妙に耳を傾けていた。

「今頃はマダムが木馬の上で泣いていることだろう」

帰りしなに、彼はそういつて笑った。木馬に乗せ、手足に枷を嵌めて、そのまま出て来たという。あの豊艶な女が、誰もいない部屋で木馬にしばりつけられている姿が、髣髴と目にうかんだ。

三十郎はうまい運転ぶり、たちまちそのトラックの姿は町角に

消えた。

家の中へ戻ると、私は早速、妻を木馬に乗せて華奢な細腰が折れるほどに、太い輪鎖でぎりぎり巻締め、両手足をがっちり鉄枷で施した。

「ああ……」

こんな目にあわされると知っていたら、貴方と結婚はしていないわ……不意に涙をこぼして妻はいった。

「そらっ、一つ」

バシッと鞭が鳴り、悲鳴が妻の口からはとばした。私は鞭を振りつけ、やがて妻はもはや悲鳴を挙げる気力も失せていった。

名和三十郎という大学生は、その日、以後、ちよいちよい家へ遊びに来るようになった。あの長い顔が、朝早くや或いは夜遅くなどに突然あらわれる。まったく時間にお構いなくふらりとやって来て、時には朝めしと一緒に喰ったりする。一碗のめしに、生卵を三つも落して喰うのには驚いた。私などには生臭くてとても喰えたものではない。

「三十郎さんは、つきあえばつきあうほど面白い方ね」

その頃には妻もすっかり彼に馴染んでいて、彼の一举一動をことごとく笑いの種にするふうであった。

元来、私は人ざらいだが、この名和三十郎こと安部三十郎には、所謂ウマが合うというのか、最初から好感が持てた。私は物識り顔をした人間が最もきらいだが、三十郎は凡そ反対の、少しはぶつたところがあってもいいと思うくらい、妙に嬰兒のように無垢な面がある。

「Kのマダムとは別れちゃった」

ある日、来るなりそういつて、ほっほっほほ……と変な笑い方をしたが、

「別れちゃったんですよう……」

哀しみを訴える如くいつた。

「なぜ?——」

「好きな人がいるから、別れたのです」

「……相手にそんな人ができたの?」

「馬鹿な」

自分に好きな女性がいるから、それゆえに、マダムと別れたのだという。

「君の方から別れておいて、悲しいの?」

「ええ。こんな気持ち分りますか?」

「——分らぬでもないが……」

一体、君の好きな女性というのは何処の誰だと訊くと、

「それは訊かないでください」

「訊くなといえは無理に問いもしないが……」

「おっしやいよ、三十郎さん。ねえ、どこの方? 水商売の人?」

横から妻がいつた。

三十郎は、かぶりを振った。

「じゃあ、娘さん?」

三十郎が、ますます悲しい顔付になるのを見ると、

「訊くのは、およし」

私は妻をたしなめた。三十郎ももうそのことには触れず、つとめて話題を変えたふうだったが、その日は帰るまで日頃とは違って彼

は元気がなく話の合間に、ふいと物思いに沈むような様子があった。一体に明るい性格の男だけに、その淋しい影は、いっそう哀れな感じがした。

「相手は、どこの方だろうね」

彼が帰ったあとで私たちは話し合ったが、さっぱり推測は、つかなかった。

そんなことがあってから一年ばかり経って、三十郎は深草佳永子と結婚したのである。仲人は私たち夫婦がした。

深草佳永子は三十郎と一緒に、しじう私宅へ遊びに来るようになっていた女性である。長身美貌、銀座の「銀河系」というキャバレーのダンサーであった。

三十郎が、はじめてその女性を私宅へ伴って来たとき、私と妻はてっきりこの人が三十郎の意中の女性であろうと察した。三十郎の顔には、想う女の心を得た幸福な輝きが宿っているように見えた。実際、彼は浮き浮きとした調子で、彼女を私たちに紹介していた。

深草佳永子はそのとき簡単に自分の経歴を述べたが、それによると上海で生れ、少女時代をそこで過したという。

「上海には私も長くいました。特務機関だったのです。今ではもう役に立つこともありませんが、拳銃射撃なら一寸、人には負けないね」

つい馬鹿な自慢をすると、座に笑いを呼んで、少し固くるしくなっている感じの、妻と彼女の態度がほぐれてきた。後で知ったのだが、妻と彼女とは同齡であった。

「三十郎君、この人とどうして知り合ったの? 「銀河系」へ通っていたのかね?」

キャバレー遊びをしているとは、一度も三十郎はいったことがなかったので、案外、人の悪い奴だと睨んだ顔で訊くと、

「いいえ……三十郎さんとは、あの……」

彼女の方が答えかけたが、なぜか、いい淀んで頬を染めた。

代って、三十郎が説明したところは斯うである。

佳永子が「銀河系」で働くようになったのは、つい最近のことです。それまでは、新橋の例のマダムの店の「K」の、住込み女給であつた。マダムの部屋は中二階にあつて、当時K三十郎はそこに起居して学校へ通っていたのだが、その二人の部屋のすぐ隣りの部屋に、佳永子は寝起していた。住込みの女給は彼女一人であつた。

三十郎がマダムの妖艶な肉体を撲つ鞭のひびきも、マダムの苦痛にあえぐ声も、佳永子の耳に届くばかりではなく、責めを許されたのちのマダムの介抱を、彼女はしなければならなかつた。最初は神経衰弱になるようだったという。眠いのを忖えて、二時間も三時間も湿布をつづけねばならない。

マダムは、これは察するにマゾにもサドにもなる傾向の女のように、やがては、温和しい佳永子を責めるようになった。まず最初、佳永子に自分の介抱をさせることからはじまり、佳永子が幾らか馴れたところで、木馬に縛って軽く平手でぶち、或る程度マゾ化されたところで、本格的に鞭を用いて責めを加えだしていった。責めたあと介抱一つしてやらない。佳永子は小部屋で苦痛に泣きながら赤くはれ上った肌を、一人で湿布した。

佳永子を責めるのは、三十郎が留守した折を見はからつてすることだったが、いくらマダムが隠していても、一つ屋根の下のことである。所詮、隠しとおせるものではなかつた。ある日、木馬の上で

泣き叫ぶ佳永子の可憐な姿を三十郎は目撃した。

と、ここまで彼が語ったとき、私は言葉を挟んだ。

「つまり、そのときから君はこの人が好きになつて、あのマダムと別れる氣になつたんだね」

「そ、そうです……」

今思うと、このとき彼がどうもって答えたのは、照れくさいためから氣持が上つたのではなく、嘘をいう心苦しさの所為であつたろう。私は露、嘘とは思わず、

「三十郎君と一緒になせそのとき貴女も「K」を出なかつたの？」と、佳永子にいった。

「……」

「貴女だって、彼が好きではなかつたのですか？」

「——好きでしたけど……」

「マダムがね、出て行ったら殺すといつてね、この人を脅してたんですよ」

だから、自分がマダムに掛合つて、この人を今の「銀河系」へ鞍替えさせたのだ、と三十郎は説明した。

少々長くなつたが、深草佳永子と私たちの初対面の次第は以上のようであつた。

二人の結婚式の仲人をしたと先に述べたが、実はもう既に彼等は自由ヶ丘のあるアパートで同棲していて、三十郎は大学へ通い、佳永子は夜、西銀座の豪華な「銀河系」へ勤めに行つていたわけだが暇さえあれば二人して、はるばる練馬の私の家まで足を運んで来るのだった。

私の家は前は広い道に面し、裏は背戸畑になつていて、近所が遠

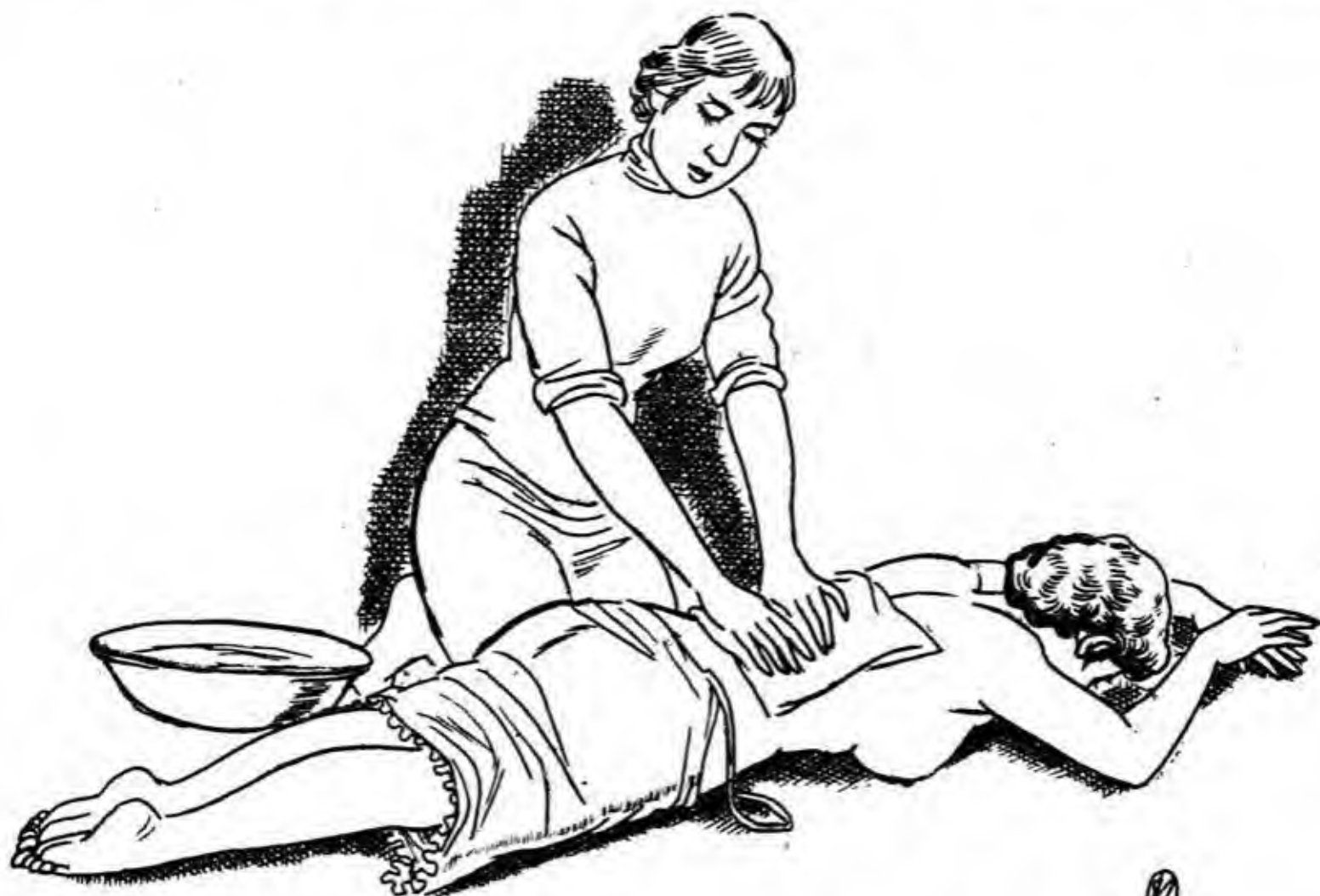
い環境にあるから、私が責めるとき、少々妻の悲鳴が高くても、人の耳につく心配はない。

一方、三十郎たちは両隣が壁一重のアパート住居であるから、「思うように責めることができません……」

と三十郎は、かこつのであった。佳永子にしても、生ぬるい被虐感に、豊熟したマゾ心理は不満を覚える様子であったが、これはあからさまにはいわない。

いつしか、私の家が、二人のプレイの場になったのは当然な成行といえた。我々マニアは、世間を狭くして生きているふうだから、相身たがいと思うところは強い。私は乞われるままに三十郎と佳永子に部屋を供し、木馬を使用させ、鞭や責め針や浣腸器までも貸し与えた。

柔かな肌に鋭く喰い込む革鞭のひびき……三十郎の気合声……嫋々とした佳永子の泣声……うめき……不意につんざく悲鳴……叫び



……その異様な空気が、襖一重越しにびりびりつたわってくると、流石に原稿を書く私の心は落着けなかった。縁側の藤椅子に倚って、しずかに読書している妻も、眼は自然活字から離れるらしく、

「あなた、お馬ごっこしない？」などと提案するふうであった。

「お願いよ、ぶちまわしてえ」

私の側に来て四つ這っていう。私が蹴ると、どさっと前のめりに倒れて、

「もっと蹴って、もっとよ……」

妻のマゾの開花も、決して佳永子よりおくらしているものではなかった。

その年の暮になって、私は神田でばったり三十郎と出会ったことがある。

「いかがですか」

と、私にラッキーストライクを奨め、ひどい風に苦心してマツチを擦りながら、

「今日は貴方に相談があつて、今

から行こうとしていたところですよ」

私は煙草に火を点けて、

「それは恰度いいところで逢ったものだ。しかし、なんだね、その相談というのは」

「ま、珈琲でも飲みながら……」

三十郎は近くの喫茶店へ私を案内して行って、その相談とやらをいったのだが私には、まったく相談される資格のない就職問題であった。

長崎の彼の実家は其地のいわば名門の由で、父親は連続、県会議員を勤め、会社の二つ三つも持っているのだから、故郷に帰りさえすれば、三十郎はおよそ就職の心配なんかする必要はない。しかし彼は、次男でもあることだし、卒業したらこのまま東京で就職して、生涯、東京に住みたい意向なのである。ついては、どこか就職口の心当りがいいのか、と私にいうのであった。

私には、とても受けかねる相談である旨答えると、三十郎は失望の色をあらわに見せ、溜息をついた。

「佳永子さんをつれて国に帰るのが、いちばん穩当ではないの？」

私は、いい、

「とはいえ、君たちとこれほど親しくなって別れるのは、私も淋しいのだが……」

「東京を離れたくありません」

「東京の空気に染まったら、誰れでも——とくに君たちのように若い人は、一そう去り難くなるんだらうね」

「もっと別な理由もあります」

「……なんだね、それは？」

「一緒に映画でも観ませんか」

三十郎は質問を、はぐらかして椅子から立上っていた。

翌年の三月に、三十郎は無事卒業すると、彼独力の奔走が効を奏して、E硝子会社に就職がきまった。そして、深草佳永子と正式に挙式することになり、双方の両親が来京して、T会館を式場にえらび、三十郎の強つての希望で、私たち夫婦が仲人の役をつとめた次第である。

天下晴れて夫婦になったのちも、私のところへ繁々と訪れることには、いささかの変わりもなく、三十郎は猿川貴具店から新しく木馬を買い入れて、私の家に置き、佳永子を責めるのだった。

もうこの頃になると、佳永子のマゾヒズムは圧倒的なものになり、私たちの見ている前で責められるのを飲んだ。

「ねえ、ごらんになってえ……」

机に向っている私の袖をひいて、いう。三十郎は三十郎で、佳永子が私と妻をつれて来るのを、隣の間で木馬に腰掛けて、煙草を喫いながら待っているふうである。

「奥さんも、ねえ、見てよ」

と、彼女は妻にもいう。その都度、私たちは、たがいの仕事を中止して、彼女のあとにしたがうのだった。

三十郎の責めは少し変っている。

まず、佳永子にバケツに水を汲んで来させて、佳永子の責める箇所を、とっぷり水に漬らす。

「……つめたいわー」

背中を向けて、バケツに掛けた恰好で、佳永子が白いからだをな

よやかにくねらすと、「まだまだ、じっとしてろ」鞭をしごきながら、三十郎は笑う。

「いまに鞭で熱くしてやるからな」

「……お……お願い、はやく、ぶって……」

「三十郎さん、もう、ぶってあげたら」

横から妻が口出しすると、「だまっっている」私は叱った。妻は甘えて、

「あとで、たと罰をちようだい」

妻の肌も色白だが、佳永子の肌も青いほど妖しい白さである。その肌が、鳥肌だって顫えだすと、

「かんにんしてえ——」

たまらず、佳永子は立上って、かたわらの木馬にわれから身を投げて、

「鞭を……早く……」

「よしよし」

三十郎が近寄って、手にした黒い革鞭の柄をつきつける。佳永子は眸を閉じて、それに唇を寄せた。

がちやがちやと、か弱い背中を巻き締める鉄鎖が非情な音を立て、ついで両手足に岩乗な鉄枷が嵌められると、佳永子は木馬の背に固定され、一寸の身動きもならない仕組みである。

「鞭を——鞭を——」

寒さに声を顫わせて、皮膚を熱く焼く鞭打ちを佳永子は願うが、三十郎は焦らして、なかなか鞭を振わない。

やがて、三十郎の手で大きく振られ、うなりをあげて発止と肌に炸裂する鞭の効果が、いかなものであるか、今更にまた述べるのは

かえって愚であろう。

そんな工合にして二年有余の歳月が過ぎ、我々の交際は、けだし身内的な親密の濃さがあった。——と見えたが、どうしたことか、ここ二カ月、ばったり三十郎夫婦は姿を見せなくなっていたのである。どうしたのだろう?という疑問と、淋しさを、私と妻は等しく覚えていた近頃であったのだ。

その三十郎がまったく突然に、庭先からふらりとやって来て、しかも「女房とは、とくに別れました」と意外なことをいう次第である。

臨時増刊号

「青い廃院」

定価二百円（送共）

長篇サディズム小説の決定版、残部僅少、まだお求めにならない方は、此の際売切れぬ中是非お申込の程を。

四馬 孝画「青い廃院」画廊（巻頭口絵）

○美貌の人 ○美女誘拐 ○苦悶する美貌 ○踊り責め
○屈辱の責め ○廃院の中 ○モデル責め ○救出

弓沢俊二郎作、四馬 孝画

「青い廃院」

永山久美雄作、杉原虹児画

本文内容

「与那国奇談」

私は驚きながら、兎も角、彼を部屋に招じ入れて、座布団をすすめ、

「かりにも僕ら夫婦は君たちの仲人だ。一体どんな事情で、あれほど愛し合っていた佳永子さんと別れたのか、くわしくいつてみたまえ」

少し、きびしい語気でいった。

「……なあに、あいつなんか、はじめから愛してなんかいやしませんよ」

「——本気でいうのか」

「三十郎さんたら……」

妻もあきれて、長い顔を睨むように見た。

「ば、ぼくには、好きな人がずっと前からいるのです……ずっと前から……」

声を願わせた三十郎はいった。

「……………」

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

女性

『切腹風景十二態』

(9×13センチ)印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢

略号(せふ)

「す……好きな人がいるから、Kのマダムとも別れ、……佳永子とも愛情がさめてしまうのです……東京に残りたかったのも、

実はその人がいるためです……」

「誰なの? そのひと?」

「奥さん、僕は前に水商売の女か? と訊かれたとき、かぶりを横に振りました。佳永子は水商売の女です」

「……じゃあ、一体だれなの?」

その妻の手を掴んで、私は木馬へひき立てて行き、無理矢理に木馬の上に縛りつけた。人の前でぶたれるのは、いやと泣いていう妻をしり目に、私は三十郎の手に鞭を握らせた。

「三十郎君、一度だけ君の好きな女を責めるがいい」

彼の好きな女とは私の妻にちがいなかった。思えばここ二カ月、姿を見せなかったのも、他人の花を見ることの苦痛のゆえであつたろう。慕う相手が人妻である苦しさは、かつて私にも覚えがある。三十郎は満身感動の色を示し、妻の体へ鞭を振るった。

(了)

輝美切腹

大手札型(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札型(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

女性自刃三態

大手札型(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札型(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

お仕置を

求める乙女

藤 川 力 行

私は現在、間借に等しいアパート生活を強いられている。短期転勤という冷酷な社会があと二カ月程も私を妻子のもとに帰してくれないことになっている。すまじきものは宮仕え、とか。……ぐちはともかく、ここにレポートしたいことは私の居室の隣部屋に住む二人の女性の内の一人のことである。

二人共、私と同じ社の事務員だが、もともと私の居室はその一人のものを、私の特殊事情を汲んで貸してくれているのだ。その理由

からか、公私共に気易くつき合っている。共に二十才の同窓の由であるが、番茶も出花的魅力のみに頼っている——という感じの明るい娘さん達である。

さて、この二人が、先日、会議で少し遅くなって帰った私を、待ち兼ねたようにしてやさきに「喧嘩」と感じた。坐をしめてから改めて訊いてみると、喧嘩には違いないのだが、それが「お仕置をしてくれ」「そんなことは

出来ない」という争いであることに、私は自分の反面をみすかされたのかと思ってドキリとなった。しかしそこは齡の功？ 紳士の面を強く押し出し、ふてぶてしく坐り直して、裁判官面よろしく、そのいきさつの説明を求めたものだった。

二人は——かりにA子とB子としておこう。

——常々仲が良い。その仲の良さが気易さの限度を誤ったらしく、B子が、A子宛に配達された郷里の青年からの封書を好奇心の余りA子より先に開封してしまったのが原因だそうで、二人は急に気まづくなったが、素直に非を認めるB子を、A子は許す気になっただけ。ところがB子が、「懲戒してくれなければ嫌だ」と云い出して「もういいから」というA子に執拗に迫るのだそうである。

B子曰く「いけないいけないと思いつながら好奇心に負けて、こんなこと仕出かしてしまつたのだもの、何か罰を受けなければ、許してやるといわれても私の気が済まない」と。

誠に理に合ったような合わないような純情さである。私はA子と同様に困った。と同時に、胸の隅で立ち騒ぐ何物かを感じない訳にはいかなかった。



「で、どうしたら気が済むというの？」
「だから何か罰を……」

日頃、明朗な彼女がうつむいて、しおらしく云う態度に私はA子の顔を見た。A子は自分が泣き出しそうな顔で私を見守っている。

「罰というの？」

「……………」

B子はチラッと顔をあげて、無言のまま又すぐうつむく。

私は益々血の騒ぐのを感じた。口に出していおうか、いうまいか。——しばらくは自分の出すべき言葉に戸迷った。

「A子さんが、これ程、もういいっていいんじゃないか」

「でも」

「一体、どうすりやいいの？ くくって松の木へでもブラ下げて欲しいの？」

私は思い切って口に出してみた。体中が力

——と火照るのを感じながら——。

するとどうだ、B子が、うつむいたまま、小さくコツクリするのだ。私は眼を疑ってA子をチラッと見た。A子の表情は大して変わらず、依然として「困ったワ」という顔つきである。

私は、にわかに大胆になった。やってやれという気持がポツ然と湧き上って、強力な魅力と変った。

「ヨシ、君達の部屋へ行こう」

立ち上る私に従って、二人の女性も立ち上った。特にB子の態度には、いささかのためらいもなかった。

娘の住いらしくキッチンと片づけられている部屋の中央に立って、私はA子に何か紐を出すように云った。

「ホントにククルの？」

A子に眼を丸くして顔をみつめられると、私は思わずドキリとなった。ためらうA子にかわってB子が自身でタンスの抽出から色とりどりの腰紐類を取り出して私に

差し出す。私とA子は再び顔を見合せた。

B子は二人の間に神妙に正座している。

私は、ままよとばかりに腰紐を捌いて、B子の背後に廻った。A子はもう何もいわなかった。

B子は後に廻った私を、肩越しに眺めただけで、無言で両手を自ら背中中に組んだ。私はカーツとなって夢中でしばらく出した。

「B子さん、痛い？」

A子が心配気に訊くのを、B子はうつむいてしばらく乍ら、首を横に振った。

私は後手に拘束されたB子を立たせて、タンスの前に行かせ、その一番上の環に紐の余りと留め、直立の彼女の両足首まで固定したのだ。A子は坐ったまま見ていた。

私は、しばらく終ると少し離れてB子の姿を眺めてみた。私が念願していた女性の哀れな姿がそこにあった。観念しきった、というより、自ら望むようにしてしまわれた若い女性のお仕置の姿が。しかし、私はA子の視線が自分に集中されているような気がして思うように振舞えなかった。

「可哀想ネ。B子さんて変ってるワ、そんなに迄責任を感じなくていいのに」

A子が誰にともなくいった。私は何か居たたまらない気持ちに襲われた。

「後で解いてやって。これで気も済んだろうからネ」

私は、とめるA子を振り切って自室へ逃げるように帰った。もっとB子の姿を觀賞したい気持ちを無理に押えて。

お蔭でその夜は容易に寝つかれなかった。

翌朝、洗面場でB子に逢った。彼女はケロリとした顔で朝の挨拶をした。そして一言、

「昨夜はホントに騒がして済みませんでした」

とつけ加えてニコリした。多少は羞かし気ではあったが、それはしばらくそのものに対するものかどうかは疑問だった。却って私が面映い気持ちで一杯だったのだ。そこへA子も出て来て、私に云った。

「ゆうべネ、困りましたワ、仲々解かしてくれないの。まだだ、まだだって。解かないと私だけ寝る訳にいかないでしょう。とうとう、二時迄よ。眠くって、眠くって、まるでどちらがお仕置されているんだか、サッパリ判りませんでしたワ」

「済みません」

横でB子がイタヅラそうに笑う。

「それにしてもククルなんて、およそ非現代的な懲罰方法ネ」

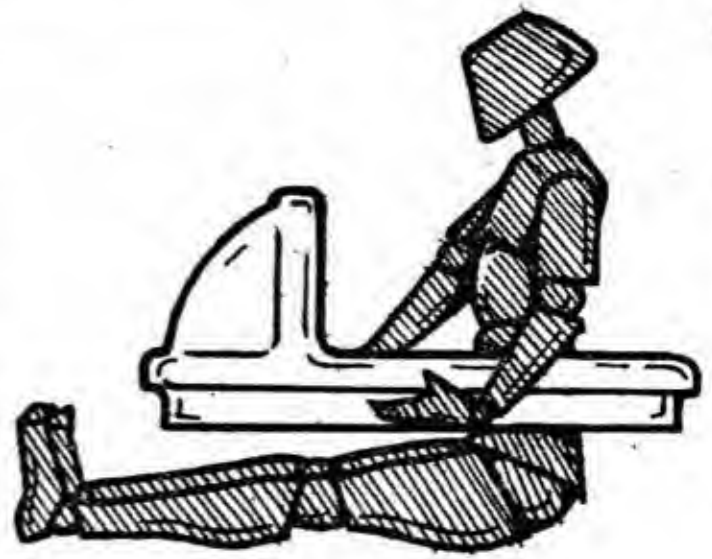
「映画なんかでよく見るけど、原始的だわ」二人はクツクツなさそうに他人事のように囁き合う。横で聞き手の私には嘲弄ともとれる痛い言葉だ。

私は何か奇妙な立場に赤くなつて逃げ出したくなった。洗面器片手に入つて来た向いの部屋の御夫婦が救いの神となつて、その話は打切られた。

それにしても昨夜中、私を考えさせたB子の態度は解せないものだった。私はあれから気をしずめて色々と推測してみた。そして、B子をマゾの素質ありと結論し、この偶然に喜びを感じ、二人だけのプレイを想像し、本格的縛りの実現を期待し、その具体的方法迄を計画したものだった。それが一度に飛散してしまふような感じしか受けないB子の淡泊な、朗らかな態度なのだ。

私は謀略に掛つて自己の秘密を嗅ぎ出されたような気がしてならない。

お仕置を強請する女性、縛りを簡単に享受する乙女、そして非現代的と平気で笑いとばすB子は、やはりマゾではないのだろうか？



愛好者の記録

(マニアのノート)

とやま・かづひこ

(116)

汚 れ 水

「チヨットオ、あのコ、またチコクじやナイノ。ズルイわ!」

「そうよ。毎日々々何やかやいって……」

「私達をナメてんのよ! 今日こそやつつけちやおうか」

女子更衣室の前で、女の子たちがガヤガヤ騒いでいる。

ズルイコ、といっても、子供ではない。こと

し二十二歳のレッキとした青年、配達課の雇員、Y君のことだ。

この課の女性たち十人ほどは、毎朝交替で掃除当番が廻ってくる。Y君も雇員の悲しさで、女の子並みに掃除の義務があるのだ。

にもかかわらず、当のY君は、やれ腹が痛かったとか、おふくろが急病だったとか、何かと理由をこしらえては、この義務を逃げ廻っていて、女性群からマークされていたワケである。

このごろの若い女性には、男顔負けの勇敢な人が多い。

例によって、当番をスッポカして、悠々と出社してきたY君、待ち構えた彼女達のために、ウムをいわさず、茶沸し場の物入れ用床下に押し込められ、揚げ板でフタされておさえつけられてしまった。

この床下物入れは、深さ一メートル、幅は二メートル程もあるから、湿気臭いのと、冷たい暗ささえ我慢すれば、横になっている分

には入っておれるだろうが、余り居心地のいい訳はない。

「とうとう、つかまえたやつだ」

「まるで、ネズミじやナイ……」

女性軍は足下に捕らえたフ、ラ、チ、な、ヤ、ツの哀願を感じて、踏みしめる揚げブタに力をこめながら得意げにお仕置の相談をしている。

その内の一人が、掃除の後のバケツを持ってくる。中にはドロドロの汚水が一杯。

一人が、巾の狭い揚げブタの一枚だけをはずして、Y君の頭を曳き出す。

「アンタ、これからは私達を馬鹿にしないと誓える？」

「お掃除をサボらないか！」

「私達の命令を素直に諾くか！」

「今までのこと、手についてあやまれ！」

口々にわめくのを、Y君はクヤシそうに聞いている。初めのうちは頑強に口をつぐんでいたが、目の前にズラリと並んで取りまいてある脚のそのハイヒールのつま先におびやかされ、鼻をつままれたり、こずかれたりした揚句に、

「いやというなら、これぶっかけるワヨ！」

と、バケツの汚れ水をつきつけられ、やりかねまじき勢いで責め立てられて、遂に女性

軍の軍門に降ってしまった。

「もしも嘘だったら、このバケツに頭をつっこましてやるから……」

女性軍の最後の宣告がそれだった。

——汚れ水のお仕置。なんとなくコプロのにおいを感じさせる。十月のはじめ、かづひこが、偶然、親しく見聞したK雑誌会社でのオフィスに於ける実見記。

(117) 花を折る

……「花を折る」ぐらいなことは知っておいてもらいたいというのが女性登山家のいい分。「花を折ってくるわ」といって、彼女は草の中に入ってゆく。この時、「じゃぼくも花を取ろう」とか、「花を折るなんて山の道徳を知らなすぎる」なんてやっていたのでは、二度と女性を誘っても登山には同行してくれない。花を折る」とは、山の用語でお手洗い行きの別名。夏山ブームの折から参考までに。

——「週刊新潮」より——
女性の悩む必要事を、こうロマンチックに表現するのは素敵だと思う。

(118) 容器

家に入りの牛乳屋のご主人が、先日なげいていた。

「保健に注意するのは結構だが、検尿を必要とする」と医師にいわれると、牛乳瓶を利用して運ぶ不心得者がある」そうである。

そういえば、咄や小説の中でも、ドンブリや酒瓶で間に合すというような場面はチョコチョコお眼にかかる。

ハナシだけなら笑っても済まされようが、万一これが事実なら、牛乳屋のご主人がなげくのも無理はない。

しかし、しかしである。若き美しい女性が利用されたものならば……と、かづひこは内心想ったものののだ。大体、かづひこは「容器」というコトバ自体に、もうある連想を感じてしまうのだ。

アメリカの漫画映画で、つかまえたギャングを台所で大口をあけさせ、その中へメイドがゴミを捨てる『人間デスポーサー』の面白い場面があったのを思い出すが、口にすべからざるものを、口にすること、なぜにこうも楽しく、かづひこには感ぜられるのだろうか。



沼 正三 だより

(真木不二夫氏に) 遂に「黄色オラミ」が再登場しましたね。

拍手を送ります。這い雄畜の案も良い。いずれは黄色のハイ・オラミが普及して、全メリール人の尻の下に一匹宛下駄代りに這うことになるのでしようが、先が楽しみです。挿絵(ことに初めのもの)も仲々良く、同様な四肢を備えた私の畜人犬にもこんな挿絵を欲しかったと羨んだことでした。まだどんな珍種が出るか? そういえばネリリに買われた八五号はまともな餌を食べているだろうか? それともオラミ飼料自体に新機軸が出るのか?……とにかく、これからの一号一号に読者としての張合が出て来ました。どうか大長篇に仕立てて下さい。

(麻生 保氏に) 森本氏・原氏・天泥氏を、別々の人の様に思っておられる様ですが、同一人です。文章から見抜けませんでしたか。——このこと、御本人が秘匿しておられるのなら、私が筆にすべきではありませんが、以前、私からの指摘に答えて氏自身筆名の由来まで語っておられるのです(KK通信一五号、二八年一月二月)

あなたは本誌の旧号を集められただけで、KK通信を入手なさらなかったのでしょうか。

それで思いついたのですが、女性乗馬党のあなたに、KK通信一四号に載った東京のR子様の文章を一部転載してプレゼントとしましょう。

最近東京では女性の乗馬愛好熱が一段と激しくなっていて参りました。山中湖、軽井沢、蓼科高原など乗馬クラブのあるところ颯爽とした乗馬姿の女性の多いことに驚かされます。……そこで同好の人たちと乗馬を始めるようになった動機について語りあったところ

- (一) 運動欲が十分満される
 - (二) 占領感、支配感が満足させられる
 - (三) 日頃使用しない筋肉に快い疲れを生ずる
 - (四) 長靴、拍車、鞭といったものが白日の下に思いきり使用できる
 - (五) 男性の前を通ると注目されると共に男性を支配したような感じが起る
 - (六) いうことをきかぬ馬をピシピシ鞭うつのが楽しい
 - (七) 自転車と違い相手が生物だけに一層愉快である
- といったものでした。要するに——女性の支配欲のハケ口には乗馬が一番よいというようなわけでした。——

これは乗杉喜代子様の「ダイアナ夫人」以前で、ちょっと似ていますが、R子様は二九才とありますから、乗杉様とは年齢が違う様です。とにかく、あなたに紹介申す値打ちはあるでしょう。ちなみに、私が手帖新稿第三章で軽井沢と書いたのには——あなたの非難を蒙りましたが——このR子様の文章もあずかっていたのです。

雑 報 欄

三〇九 清水正二郎『アメリカ情痴物語』前に紹介した(二八〇)

『エロスの航海』と同題の色道修行ものだが、日本の美少年が進駐軍の将校夫人に玩具にされた一夜が忘れられず、渡米するという設定で、白人女性への受身的態度に一貫しているので、マゾ的読物として面白い。「SSSの丸ハンカチ」(ハワイ銀座)では、白人美女のドライブの同伴をするが、山の中腹でストップさせた彼女は、大きな罐詰の空罐を彼に持たせ、運転席の前にうずくまれと命令する。そしてそのあと、外へそれを捨てに行かされる。とやま氏の「愛好者の記録」二三番「ポータブル尿器」にも出ていたアメリカ風俗だが、奉持の奴隷勤務までおまけがついている。「被虐の夫人」(アロハ・ハワイ)では、夫を虐待する夫人が出る(被虐という表現は誤りだが)。「反対夫婦」では、男装の妻と女装の夫の家庭生活が扱われる。更に逃げ出した女から主人公は追いかけて、自動車の中でリンチされる。全く女のいいなりになって次々と奇妙な経験を積むところは、ゴータの「鞭の女達」でミクロスが女から女へと苦勞を重ねるのにも似ている。ただ、この人の作品では、主人公は常に男性能力を失わず、女性への奉仕がこの方向からばかり捕えられている感じのする点が、高級マゾヒストには不満であろう。

三一〇 同右続編「火の遊戯」(週刊実話特報三四・一一・六)
これもいずれ一冊になるのだろうか、本号は特にマゾ的なので紹介

しておく。主人公は国際スパイ団に脅迫されて、コロラドスプリング市の軍部関係ポストの女秘書に玩具として売られる。彼女は、もと日本進駐当時に日本人奴隷を飼っていたのを彼によって再現しようというのだ。「私の知っているタダヒコはどんな苦しいことでも我慢しましたよ。むしろ私が痛い目に合せれば合せるほど喜んだものでした。」宿舎へ連れ帰るのに彼は裸の儘だ。「奴隷は着物を着る必要はない」「だって、これじゃ自動車に」「誰があんたを座席に乗せるといった。」……ズボンのバンドの鞭を空中でピューッと振って追い立て、車の後ろのボンネットの蓋をあけて、彼を荷物と一緒に入れてしまう。そしてやがて宿舎の彼女の部屋に入る。「ここは女だけの宿舎なのよ。だから男が入っているのが分ったら、大変なことになるのよ。でも、部屋の中には、みんな黒人か、支那人か、奴隷の境遇でも別に不満をいわないような男を、そっと飼っているわ」女秘書は彼に「自分の体に、白人では、とうてい、いやがってやらないような奉仕」を強制しながら、「いいわね、あんたは私の奴隷なのよ」と強調する。そして出勤の時には、主人公の足首に革輪をはめ、鎖を下し、鉄の鎖でベッドの足に固定してしまう。勿論着物や靴は取られたきりだ。夕方に二人の友達を連れて帰って来る。鎖につながれた「裸の洋生の回りを囲んで三人の女はまるで猿でも眺めるように、その体の批評をしたり、餌の代りに、パンをちぎって投げたりした。」拾わないでいると、女秘書はバンドで鞭うつ。仕方なく様々の狂態を演ぜねばならない(手帖旧三五項「犬にされた将軍」でソルチョコ伯爵夫人が友達の前でパシャに犬吠えさせる場面を想起する)。その中、前の恋人タダヒコに対してやった「火の遊戯」を始める。「日本人の世界的に我慢強い、驚く程の忍耐

力を見せる遊戯」とは、お灸のことだ。タダヒコが「当時は神様より偉かったアメリカ婦人の御機嫌を取るために」教えたらしい。……大変長い抜萃になったが、この調子で白人女性の奴隷たる場面が続く。奉仕が強制されるだけで、男性として描かれないのも、この人としては例外的だが、嬉しい点だ。まるで本誌の小説を読んでいるような気のした一篇であった。いや、白人女性の寄宿舎には、どの部屋にも有色人の男が裸で鎖に繋がれて犬の様に飼われているのだが、「白人ほど人権が確立していないから、どんなことをしても世間からとがめられない」のだというあたり、そのまま手帖一七章の植民地化妄想の一頁の様ではないか。

三二一 ビエール・ルイス作、千葉順訳『私の体に悪魔がいる』

これは二八六『女とあやつり人形』の別人訳本。

三二二 守矢佐智子『娼婦の眼』 男には皆被虐の素質があるのか、といった文章に続いて、「馬乗りになって私は両掌を男の首に巻いてぐいぐいと力を入れる。……」といった描写がある。だが、それだけのこと。

三二三 南博『母性からの逃走』（近代文学鑑賞講座『谷崎潤一郎』所収） この人の谷崎論の稚劣を以前、雑報一六二で嗤ったことがあるが、今度のは大体、合格点といえよう。優等生の答案で、新しい見方はないが……。

三二四 城戸礼『颯爽早業娘』 ぞ存じ娘三四郎もので、貸本屋に並んでいる。『はりきりスカート娘』『電光山猫娘』『空手のお姐ちゃん』など同種作品が多いが、合気道の達人で空気娘とよばれる女主人公が開巻劈頭から馬に乗って登場するこの新作を代表的にあげておく。ただし、麻生保氏の喜ばれる様な雰囲気のものではない。

い。私自身も好かない。

三一五 黒井紋太『灼熱下の性病検査』（エロチック・ミステリ別冊宝石九二号） シリア捕虜收容所長の妻なるフランス女のサディズム。本誌前号一二四頁、原氏時評百十三項作品の無断邦訳。

三一六 川口松太郎『サロメの白粉』（別冊文春六九号） 全盛の人気女優の小間使代りになって巡業先の楽屋で体に白粉を塗る仕事をさせられた少年が、後年、彼女に再会する話。パジズム（侍童願望）的な憧憬の心理が良い。

三一七 南条範夫『残酷物語』 雑報二六七の作品が入ってるので。その他のも、題名に背かずサド派向きの内容が豊富。

三一八 山内大介『黒い大陸』 手帖で度々触れて来た南アフリカ連邦や中央アフリカ連邦の囚人労働の実情など、現地で見て来た人のルポルタージュとして有益。

三一九 奥野信太郎『男が女で女が男』（週刊現代三四・一〇・四・うきよくずかど欄） 異装倒錯者の群れとの接触を語る。雑文に過ぎぬが、筆者が筆者故、資料的に信をおけよう。

三二〇 犬養道子『世界放浪記』（サンデー毎日連載中） 九月二七日号「その部屋に鍵がない」は、黒人ボーイが私室の鍵代用をするという素晴らしい内容だが、手帖新稿二二項に引用したから、省略する。その他面白く「ゲタッチョ家の奴隷」はエチオピアに今も奴隷売買の現存することを語る。

三二一 「女は車に弱い」（週刊実話十一月九日号） 大きな道具が自由になる大型機械性、九〇キロで尿意が緊迫して来るというスピード性、女体への影響の大きい動揺性の三理由が「女が車に弱い」理由としてあげられているが、そのまま女性乗馬にも通じるで

はないか。

女性自動車運転手は女性騎手に比して、一面において貴族性その他で及ばぬ（然し、アメリカなどと異り、現代日本では女性で運転できるのは自家用車を持てる階級であるからドミナとしての資格ではそれ程失わない。）けれども、他面、近代的な発刺さでは却って優る面もあって、要するに、乗馬女性の現代版としての意味をマゾヒストに対して持っているといえる。右の文にも、車の前をよこぎる青年にわざと衝突させてギョッとさせるのが楽しいという、女性ドライバーの加虐心理が触れられてあったが、そこまで進んだものでなくても、日ごろは淑やかな女性が車を運転していると気が荒くなるという一般現象があることを指摘しているのは、九月二九日、毎日夕刊コラム「運転台の女たち」。

三二二 「私たちはスラックスとセーターで勝負する」（週刊女性三四・一〇・二五） 「静かなるブーム・男のおしやれ」（週刊

明星一一・一） 「女の牙城に踏み込む男性デザイナー」（週刊実話三四・一一・一六） 類似の記事その他にも多し。女の方がボーイッシュスタイル、マニッシュスタイルと男に接近する一方、男性が心理的に女性化しているのが現代である。この辺の考察は手帖新稿二三章ないし三〇章に詳論する予定である。

三二三 南村蘭「美加留夫と三人の奴隷」（裏窓一二月号） 割いたブドウの実を浴槽に満し熱いブドウ風呂に入るドミナが、あがつてから、そのブドウを奴隷の飼料にすることにし、手を使わずに食べさせる場面がある。「仇討三鞭風呂」（手帖旧四九項）の類想の一つ。他に「天井に氣いつけなはれ」に人間馬情景窺視の条がある。

三二四 内村直也「華族女房」（日本教育テレビ一月一日夜）

有島一郎の成り上り富豪の夫が水谷良重の華族出の妻に誘惑され剩え逆に辱められる。モリエールの「ジヨルジュ・ダンダン」の翻案である。なお、舞台劇では、越路吹雪と岸田今日子の好演で評判だった「女は占領されない」（三島由岐夫脚本）の一場面で、河瀬大臣が妹を通じてエヴァンス中佐邸への接近を策し、隣家の垣根越しに妹を話させる為に踏台になって背中を提供するところがあったが、マゾ的動機と無縁のせい、感興は生じなかった。

三二五 映画で、剣斗士の反逆は前号、原氏の時評で触れられたから略す。テンペストはプガチョーフの乱を扱ったものと聞く。「大尉娘」の映画化というだけでは、大した期待はできないが、女帝カタリナ二世にどの様な風貌容姿が登場するかは楽しみである。女帝はプガチョーフを熊の檻に入れたといわれる（雑報一四八参照）。まさかそのシーンはあるまいが……。

◎マゾ・フォト焼増並にモデル募集の件◎

本誌十一月号及び十二月号誌上に於て、マゾ・フォトの焼増に應ずる旨の広告をいたしました。申込者が非常に僅少でありますのでマゾ・フォトの焼増は、十一月末を以て一応中止いたします。尚、マゾ・フォトは各種撮影してあります故、希望者があるようでしたら、機会を見えいずれ焼増の求めに應ずることに致します。マゾ・フォト出演のモデル募集は、今月号発売と同時に打ち切ります。次回の募集は来春三月頃の予定です。いずれも、その節は誌上にて広告いたします。



秋の縛られ女優達

映画通信

大河原珠樹・記

久しく旅に出ていて映画鑑賞も意に任せぬ状態でしたが、ようやく元へ遷り得たので、九月中旬以降の鑑賞作品から、再び紹介させて戴きたく思います。あるいはどなたかの既報の分と重複があるかも知れませんが、どうぞ宜敷く。

▽榛名ばやし・喧嘩鷹

(東映)

大川恵子

旅鳥佐久の新助と恋仲の芸者静葉が、横恋慕する悪親分に捕えられる。後手のグルグル巻きにされ、更に猿ぐつわもされるが大川恵子では鉄火な味が出ないので、雰囲気は、いささか弱い感じ。

▽富嶽秘帖・完結篇 (東映) 山東昭子

秘宝の在所を描いた能面の片われを拾った山の娘お甲が、これを狙う一味に捕えら

れ、残り半分の行方を責め問われる。半袖胴衣に短袴の軽装で後手に縛られ、二、三回、笞打たれるが、彼女はまだ若すぎて体も細い方だから、胸に巻かれた縄目がひどく痛々しい印象を受けた。

▽銀座旋風児 (日活) 白木マリ

四悪人の素姓を調べる二階堂に惚れたマダム・マキが、四悪人を裏切ったために椅子に縛りつけられる。白いスーツ姿で胸に三巻程縄がかかり、手首は背板の後で縛られているが、余り魅力ある縛りではない。

▽九十九本目の生娘

(新東宝) 三原葉子、他一名

岩手県の山中で、二人の女が山の一族に捕えられ、シュミーズ一枚で柱に縛られた後、大樹に後手縛りのまま吊り下げられ、斬り裂かれて生血をとられる。鬼気迫るような場面、しかも長時間である。

更に、矢代京子が同様に捕われ、浴衣姿のまま柱縛りで滝にうたれ、続いて樹の枝に吊り下げられる。後手に縛って吊られる時、腕きにつれてクルクル廻るので後手がかんじがらめの縄目がよくわかる。本吊りなのだから、さぞ苦しかったことだろう。

▽大岡政談・千鳥の印籠

(東映) 中里阿津子

大岡越前守の落し子お柳を、越前の失脚を狙う津田兵部が、人質として捕えてしまふが、発見されぬように胸と膝頭を太縄でグルグル巻に縛ったお柳を天井裏へ吊り上げて隠す。この吊り上げのシーンをハーフショット(中景)で撮っているのが、本当に吊り上げて行く迫力あるさまがみられ、特にホツレ髪彼女の彼女の苦悶の表情に実感があり、痛々しい。彼女はTVの「風小僧」シリーズでも支那服姿で後手縛りをみせてくれたと記憶する。

▽百万両五十三次

(東映) 長谷川裕見子

輸送中の黄金を狙う女賊、陽炎のお蓮が護送の侍に捕われ、仲間と共に庭先きに曳き出される。いきな横巻髪で後手に縛られても、フテブテしくタンカをきる。中縄で四、五巻き胸から背へ廻して手首を縛ってあるのだが、肝じんの手首は帯の下で、縄目が隠れているのは大いに不満。

▽はやく紋三郎

(東映) 大川恵子

納屋の中に後手縛りで閉じこめられる。

▽快傑黒頭巾・爆発篇

(東映) 花園ひろみ

船室で型通り縛られて座っていた。

▽魔笛若衆

(大映) 浦路 洋子

後手で胸は二巻程度で連行される。

▽紅あざみ

(大映) 毛利 郁子

長縄絆姿で後手グルグル巻にされながらも、盛んに毒づく場面あり。

▽ジャン有馬の襲撃

(大映) 弓 恵子

冒頭の刑場シーンで、後手の柱縛りで目かくしをされ銃殺される。他に奴隷の拷問場面がある。

▽姫夜叉行状記(松竹)

佐乃 美子

肌着姿で柱へ立ち縛り。失神まで笞打ちを受ける。縄目はかなり強く、胸から脚を縛っており、すく味がある。又、筋書中、女優名は不詳ながら戸板に縛りつけられて池に浮ぶ女がワンカットある。

▽双龍暴れ雲・前後篇

(新東宝) 万里昌代 池内淳子

前篇では男装の池内淳子が、後篇では野生女の万里昌代がそれぞれ後手で折檻される。グラマー万里の縛りは魅力がある。

▽濡れ髪三度笠 (大映)

淡路恵子 中村玉緒

二人とも後手、中縄で淡路は四巻、中村は三巻。縄尻は柱へつながれ、平凡ながら比較的長時間映し出される。

▽江戸ッ児判官と振袖小僧

(東映) 美空ひばり

荒縄で四巻ばかり胸にかけられ後手で、押入れの中に閉じこめられる。ラストシーンで捕物陣に包囲され、再び縄をかけられて連行される。

▽お染久松・ふり袖日傘

(東映) 女優名不詳

後手に猿ぐつわ。縄は太く、猿ぐつわは日本手拭。座敷に転がされていた。

ついでに予告となると、「薄桜記」Ⅱ大映Ⅱで新人の真城千都世が後手で柱に縛られ、猿ぐつわもかまされるらしい。他にも四人の女が、サバ折りに縛られ(逆エビ責めのことかも知れない)て水漬けの拷問をうけたり、磔刑にされたりするそうである。

「お七捕物帖・ふり袖小判」Ⅱ東映Ⅱでは中里阿津子が、またまた縛られた姿をみせてくれるらしい。

「懸賞愛読者原稿」入選作品

呪法切支丹吟味

小 河 内 瀑

○ サ タ ンの 船

「……あ！ 又、あの船が入って来た」

「御領主さまの、捕物船じや……」

「むごたらしい捕物が、いまに始まるぞ」

「切支丹狩りか？」

「そうよ。おぬしはまだ見たことがないのか？ サタンの船の捕物騒ぎを……」

「旅に出ていたので、知らんのだが」

「間もなく見物できようが、それはひどいものじや。只、縛ったり

捕えたりするだけではない……」

「話には聞いているが、切支丹に帰依した者達は手向いもせず縛られて、むごたらしい扱いを受けると却って悦ぶそうなの？」

「切支丹の開祖というのが、そういう死に方をしたからだ。刑場で磔にかかったそうなの」

「生を呪い、死を喜ぶ邪教だというが……」

「桑原々々。こんな話はせぬ方がよい。信徒と間違えられたら一大事だからな」

漁師、商人、浪人、農夫、等が足を停めて沖を眺めながら、そんなことを囁やいていた。

寛永六年、早春の或る日——肥前国島原半島の南端、国之津の港である。

いま、この港へ入ってくるのは、領主松倉豊後守重政から派遣された一艘の軍船であった。船中には百人余りの捕吏が乗っており、その指揮者を多賀主水という。

多賀主水は島原三奉行の中でも最も残忍な男であり、殊に切支丹信徒を憎悪すること甚だしいものがあって、切支丹迫害史上に名を残した人間である。

この切支丹狩りの軍船を、サタン（悪魔）の船ともいう。信徒達がそう呼んだのである。「サタンの船」が国之津へ現われたのは、これが初めてではない。

寛永二年十二月に、多賀主水ほか二名の奉行が捕手三百人をひきいて港へ着き、司教代理フランシスコ・パセコ以下十人の男女を捕縛したのが最初であった。

パセコはポルトガル人で、当時、日本管区長の重職にある宣教師だった。

日本管区長とは、日本国中の全教会の最高指揮者ということの意味する。

このパセコが島原領に居たということは、松倉家の安否にもかかる一大事であった。松倉重政は爆弾をかかえていたようなものである。重政がその危険を悟ったのは、寛永二年の四月に参観交代で江戸へ赴いた時であった。新將軍家光が切支丹を甚だしく憎悪していることに初めて気が付き、狼狽したのである。それ以前の重政は切支丹に対して寛大穏和であり、時には保護者ですらあったのだが、「伴天連の総大将」を領内に置くことが家光の知るところとなり、

「島原六万石は改易、重政には切腹を……」という処分が下りそうになったので、俄かに態度を変え、苛烈な迫害者へと豹変したのであった。

元来、島原は切支丹大名として知られる有馬晴信の領地だったのを、大阪の役の軍功により元和二年に重政が拝領したのである。従って領内には切支丹信徒が数多い。

「邪教徒は一人残らず、必ず絶滅いたしますれば……」と、重政は平身低頭して家光に誓い、松倉家の安泰をはかった。

以来、戦慄すべき数々の迫害が続いて——四年目である。

多賀主水のひきいるサタンの船の恐ろしさは、もはや幼児でさえも識っていた。

○ 忠義と迫害

捕手達にとって、切支丹狩りほど容易な捕物はない。

全くの無抵抗である。男も女も、みずから進んで縛を受けるのが常であった。

捕縛されて満足の微笑を浮かべる者がいる。

縄をかけられて感謝の祈りとなえる者もいる。「我も切支丹なり。縄をかけ給え」と名乗って出る者もいた。

その上、これもいつもの場合と同様のことだが、賞金を目あての密告者が手引きをしたので、「探索」という程の苦勞も要らぬ有様だった。

百人の捕手は次々と信徒の家に乱入し、またたく間に男十七人、女十二人を捕縛して数珠つなぎとした——。

「えい！ 静まれ！ 黙らぬか！」

多賀主水は鞭を烈しく振るって、信徒達を威嚇した。彼等が声を合わせてとなえる、得体の知れぬ祈りが腹立たしいのである。

鞭を受けた信徒達は、すぐに立ち直って再び一斉となえるので効果は全くない。

「……気遣いどもめ！ 今にみておれ。思い知らせてやるわ！」主水の眼は血走っていた。主命を完うする為だけとはいえない、執念のようなものがその表情には有る。

三十七才——少壮気鋭である。中肉中背、とからうじて云い得る程度の体軀だが、気性の激しさは無類であった。肉の薄い顔に、異様な輝きを放つ眼と、への字型に歪曲する唇が目立つ不気味な容貌である。慈悲の心などは、過去の或る時期において完全に振り捨てて来た男であった。迫害の鬼と化すことが、この男の生甲斐なのだ。

一息いれて、主水は密告者に訊ねた。

「金助。アンドレア太兵衛と申す者の家はどこだ？ 案内せい」

金助と呼ばれた男、流れ者の無頼漢である。通り名を阿呆陀羅金助といい、前身は坊主だ。

女犯も殺生戒も平気でおかす破戒無残の悪僧くずれで、今は密告と人買いが本職という、大変な奴であった。

「……へい。この村はずれの、大榎の下に家が有って、夫婦二人とも呆れ返った切支丹でございますよ。亭主の太兵衛は大阪の落武者……何でも以前は石田三成の小姓だったとかいう噂が有り、そりやあもう、根っからの邪宗門で」

揉み手でもしそうな卑しい笑いを浮かべて軽薄な冗舌を弄しながら先に立って歩く。

捕手達も前進を開始したが、それは異様な行列となった。

捕われた者達の背に烈しく鞭が鳴る——。

鞭を持たぬ捕手は、縄尻を振って打ち叩く。

「こら！ グズ／＼するな！」

弱腰を蹴られて地へ倒れた娘がいる。その儘ズル／＼と引きずられ、砂塵が舞い上った。

必死に起き上ろうとする娘の身をもがく有様が面白いと云って、下卑た笑い声が上る。

首縄をかけて乱暴に引きずり、犬のような扱いをしてみせる捕手もいる。

人妻らしい女の衿へ六尺棒をさし込んで胸の辺りを小突きまわす奴なども有った。

思い／＼に様々な方法で責めさいなみ、辱かしめながら行進をするのである。

見せしめの為の虐待であり、彼等の「役目」の中に入っている行為なのだが、民衆に見せること以外にも目的は有った。

將軍家から派遣された隠密が領内に入りこんでおり「切支丹をどう扱うか？」と眼を光らせているからである。

寛永三年の六月に、長崎奉行水野河内守が切支丹に関する四箇条の布令を出したことが有る。その中に——

一、切支丹ころび申す者の借家に切支丹宗旨の者を置き申さず候故、野山に小屋を懸け居る由に候。松倉豊後守領分へ追払はるべき事。

という一項が有った。松倉家の切支丹対策がどの程度のものであるかを試す意味が有ったのである。油断些かも許されないのだ。

保身に懸命な重政は徹底的な迫害を命じた。つまり、多賀主水や捕手達は「忠義」を行なっていることになる訳だが――。

○ 死者に鞭打つ

「真鍋太兵衛、妻、世津、神妙にせい！」
主水は気負いこんで声も鋭く叫んだが、目ざす二人は騒ぎも取乱



の捕手が二人へ飛びかかって行った。

両腕を背に捻じ上げ、高手小手に縛り上げる。ギリ／＼と締め上げて、捕縛が終る迄、二人は何の抵抗も示さなかった。

「歩け！」

手荒く小突かれて、ヒョロリと前へのめった女の顔を見て主水が――思わず眼を疑った。

しもせずに、静かであった。

捕物騒ぎを知らぬではない。

三十一才の良人は教名をアンドレア、二十三才の妻はイザベラという、ともに堅固な信仰心を持った夫婦であった。祭壇に向かつてひざまずき、最後のものとなるかも知れない祈禱を捧げていたのである。

「おのれ！ 不敵な邪宗門め！ それ、召捕れい！」

主水の叱咤に、太兵衛が答えた。

「これはまた、物々しい。われら、お手向いは仕らぬ……」

静かに立ち上って、振り返った。

「小癩な奴！ 縄打てい！」

下知を待つ迄もなく、十数人

(……信乃！)

名をよびそうになって、声をのみこんだ。まさに、瓜二つである。だが、眼の前にいるこの女が、信乃であろう筈はない。

主水が最も愛した女の名が信乃である。同時に、それは最も憎い女でもあった。

七年前に屋敷の若党と不義密通を働いた美貌の妻が信乃だ。

姦婦姦夫を取り押えた主水は、怒り狂い、加虐の限りを尽した。

そして三日目の夜、吊り責めにかけて儘で放置しておいた二人が舌を噛み切って死んだのである。覚悟の上の相対死であった。

以来、主水の性格は一変したのである。

悪魔奉行の名で呼ばれる、残忍な男となった。罪有る者に対しては寸毫の容赦も、微塵の仮借もしない。吟味には拷問を好んで用いた。

切支丹狩りに熱中するのもその為である。切支丹信徒は国禁を破る天下の重罪人であり、彼等を加虐することは主君への忠誠ともなる。自己の執念と職務とが、これ程に合致する事柄は他にない——主水は、信乃に似た美貌の女切支丹を捕らえたと知って、不思議な笑いを片頬に浮かべた。そして、云ったのである。

「女。神妙である。おのれらが宗門の教えより見るならば、定めし天晴れな振舞いなのであろう……」

女は、微笑を浮かべて答えた。

「……デウスの御心に従い、良人に従いました迄のことでございます」

「左様か……だが、儼とても敗けはせぬぞ」

主水は冷酷な表情に戻って、命じた。

「この者の着物を剥ぎ取って縄掛けい！ その上で引き立てるのだ！」

一瞬、女の白い顔に苦悩の翳が走った。

だが、女は素早く心の乱れを整理したもののように、静かに臉を閉じた。長い睫毛の美しさまで、やはりこの女は信乃に酷似していた。

縄を解かれ、身に付けたものが次々と引き剥がされても、その美貌はついに苦悶を見せなかった。

輝やくような白い肌に、無残な捕縄がからみ付く。手荒く縛られながら、女の体が前後に揺れた。

「……女の身で、恥とは思わぬのか」

冷やかな主水の声である。

「御存分に……なされませ。いましめの縄目とても、パライゾへ向う身には礼服となりまする」

さすがに声は細く、語尾は震えたが、それでも女の口調には、不退転の決意がうかがわれた。

「……世津。よくぞ云うてくれた。この上も、何事が有ろうと、ひるむでないぞ」

太兵衛が非痛な眼の色で励ました。

「おのれ！ 不逞な！……よいわ。いまに必ず泣き声を上げさせてみせよう。それ引っ立てい！」

○ 夢 魔 妖 恋

島原城下の切支丹牢へ送られた国之津の信徒達は、到着の日から早速、はげしい拷問を加えられた。

水責め、吊り責め、いぶし責め、木馬責め、逆さ吊り——ありとあらゆる種類の拷問が連日行なわれた。

男には極度の苦痛を、女には最大の辱しめを——というのが多賀主水の方針である。

夫婦を責める場合には、良人の目の前で、妻を大勢の非人(乞食)に弄りものにさせようとした。

「パライゾ……」

「ゼズス・キリスト！」

「サンタ・マリヤ！」

そんな言葉で祈り、耐え通す者が多かったが、堪り兼ねて転教する者も数名いた。

主水は、真鍋太兵衛と世津の二人を特に執拗に責め続けた。

パセコなきあとの国・津の信徒の指導者が太兵衛だったからである。指導者を転教させれば、囚人達の結束が弱くなる。

これは前例が幾つも有る有効な方法だった。だが、この夫婦はどんな責苦にも屈辱に耐え続けた。

世津を裸形にむいて厳しく縛り、公開の場所で拷問にかけたことも何度かあった。

然し、主水は、世津の体を非人に与えることだけはしなかった。何故か躊躇を覚えて、実行に移せないのである。

「仮りにも武士の妻女だ。やはり手段は選ばねばならぬ」という名目を胸中に設けたが、それは自分の心をいつわる口実であった。

不貞の妻の面影に酷似した世津の美貌と、見事な身体に、主水は奇妙な恋情を覚えはじめたのである。

役目一筋に生きて来た鬼奉行の主水に、私情が初めて動いた。

一夜——妖しい夢の中で世津の艶麗な姿態を思いの儘にした主水は、眼醒めてから軽い狼狽を覚えた。

(不覚な！ この儂が邪教徒の女の色香に迷うとは！)

舌打ちして起き上り、苦渋の顔となった。

(おのれ！ 切支丹女め！ 妖術をしかけて儂の心を……)

闇の中を思わず睨む——。

(敗けはせぬぞ。責めるのだ！。責め抜いてくれよう。まだく責め方の工夫が足らぬ。女め！ 明日こそは……)

と決意したのである。

翌日——主水は牢屋敷の庭へ全部の信徒達を引き出させた。

前の年から耐え続けている信徒もいるので総人数が五十四人である。

「真鍋太兵衛と、妻世津の二人をまず責める。覚悟はよいか」

獄吏が信徒の群れの中から二人を引き出した。主水の坐る牀几の前に引き据える。

「世津。いつもの責めと思うなよ。どうじや、見事、耐え通してみるか？」

「畏れながら……」

世津が顔を上げた。

「イザベラとお呼び戴きとう存じます」

「おのれ！ 教名にて呼べと、この主水に申すのか！ 不敵千万な

……獄衣は無用じや。剥ぎ取ってしまうがよい」

下知に応じて獄吏が世津の縄を解き、囚衣を引き剥いだ。

陽光の中に女盛りの雪肌が匂ったのも束の間、強靱な縄目が犇々とかけられ、極限まで引き締められて、括り猿のような浅間しい姿

となった。

女は眼を閉じて顔を伏せ、身を前へ折ろうとしたが、縄尻を引かれて、それは不可能となった。太兵衛が天を仰いで何事かを祈った。

信徒の群れの中からも一斉に祈りの声が流れ始めた。

「夫有る身が、見苦しい姿じや。それでは婦道が立つまい」

「……身は辱かしめられても、心までは穢されませぬ」

「しかと左様か？ そうではあるまい。肌を人眼にさらすことに、身も心も馴れたのであろう。外道の女め！」

一瞬、女の頬が血の色で染まったのは、何を羞恥したのであったろうか――。

「答責めは百の数をもって限りとするが、今日は限りなく打たせるぞ、それでもよいか！」

「……御存分に」

世津は静かに答えた。

「ええ、打て打て！ 休みなく打ち続けて息絶えるとも止めてはならぬぞ！ たとえ死すとも更に打つのじや！ 十日、二十日、いや骨が微塵に碎ける迄、打って打って、打ち続けい！」

主水は唇をふるわせて激しく叫んだ。

○ 怪 僧 浄 海

一刻近くも経った頃――。

世津は見るも無残な姿となって、なおも笞を受けていた。

黒髪は乱れに乱れて顔を掩い、肌は鮮血で彩られている。

獄吏は疲れると次の打ち手と交代して、機械のように瞬時も笞が

停まることはなかった。

呻吟の下から祈りを唱え続ける世津は、超自然の生命力でも得たかのように見えた。

不意に、太兵衛が眼をみはって叫んだ。

「おお！ せ、世津！ そなたの頭に光輪が宿ったぞ！ うるわしい光が、輝やいている。皆の衆も見えてやってくれ。世津はデウスに召されるのだ！ パライゾへのぼるのだ！ うるわしい光りの輪だ！」

躍り上るようにして、縄尻を持つ獄吏を一間余りも引きずったのである。

「ああ、光輪！」

「まるちる（殉教）の栄冠じや！」

「パライゾ！」

「ゼズス・マリア！」

「がらさ（聖籠）は表われたぞ！」

五十余人の信徒達も、狂喜して口々にそんなことを叫び始めた。

そればかりではない。獄吏の中にも、世津の頭の周辺から後光がさしているのを見た者が有って、畏怖の囁きが交わされたのである。

「ええい、静まれ！ 静まれい！ 騒ぐ奴は斬って捨てるぞ！」

主水は牀几から立ち上って、刀を抜き、威嚇を試みたが、無駄であった。

異様な興奮が巻き起って、渦となり、拡大されて行く――

その時である。

「喝ッ！」

と、大地も震動するような声を発した者が有った。

いつの間に現われたのか、饅頭笠に墨染めの衣、眼光爛々として鋭い、年の頃は三十前後の一人の雲水であった。

それが、左手で数珠を振りながら、右手に持つ木の杖で、世津の頭上の辺りを横なぎに、

「とおうッ！」

宙を裂く音を立てて、烈しく払ったのである。

「妖魔の幻術、破れたり！ どう
じや切支丹ども！ もはやこの女
に後光はさすまい！」

破れ鐘のような声で大喝した。

——不思議にも、その場は沈黙に
還ったのである。後光を見た獄吏
が数人、瞳を凝らして世津を見守
った。

「……消えた」

「いや、幻だったのだ……」

と云い出す者がいた。

主水は、雲水に近付いた。

「御坊……」

「何でござる」

「いずこから参られたか？」

「行雲流水。氣随氣儘に行脚をい
たしおる身なれば、いずこよりと
もお答え出来申さぬが、生国は武
蔵でござる」

降三世明王

「御尊命を承わりたい」

「浄海と申す生ぐさ坊主、改めて名乗るほどの者でもござらぬ……」

……これにて御免」

踵を返してスタ〜と去りかかるのを、

「あいや暫く。お待ち下されい」

主水は真剣な声で呼びとめた。



「何か御用かな？」

「それがし、島原奉行、多賀主水と申す者。御坊に是非とも御教示願いたき儀がござる。何卒、当地にお滞り下されい」

「切支丹調伏の術に就いて……でござろうな」

「いかにも。只今のお取り計らい、まことに感服つかまつった。切支丹は御坊にとっても憎むべき凶敵でござろう」

「左様……」

「されば、当地に在ってお力ぞえを戴けまいか？　お願い申す」
辞を低くして、主水は真剣な表情であった。

○ 調伏の呪法

「愚か、愚か……愚法でござるよ。そのような責め方では、切支丹どもの鉄心を挫くことなど到底叶いますまい」

浄海は主水の意見を真っ向から否定して憚らなかつた――。
奉行役宅の奥座敷である。

浄海と主水の間には、何やら古びた仏画が掲げられて有った。

「何ゆえに愚法でござろうか……」

「されば……切支丹は責苦を甘んじて受け、刑死をも欣ぶものでござる。捕われる前から答打ちには馴れており申す。良人は妻を鞭打ち、果ては我れと我が身をも鞭打つ切支丹の荒行、デシピルナとか申す呪法を御存知か？」

主水は頷いた。

デシピルナとは、荒縄などで血の滴たるまで我が身を打ち叩き、コンチリサン（痛悔）の呪文を誦える修業で、牢内の信徒達がそれを行なうことすら有ったのだ。何処からか捕縄の切れ端などを手に

入れて叩くことも有り、獄衣で笞を造った例も有った。

「憎しみにまかせて、力の限り打ち叩くなどは、かえって切支丹に欣びを与えることとなり申す。打たれる者も見ざる者も、やがて夢見心地に酔い痴れて、陽の光りや灯影にさえ幻を見るものでござる……」

「すると、先刻のあの後光は？」

「もとより、狂うた眼にうつる幻でござる」

「然し、信徒のみならず、牢に働く者達にも見えたということ、でござつたが……」

「愚かな者の集まりには、まま有ることとでござろう。狂うた心は人から人へとうつりやすいものでござるよ」

浄海の説くところには、いささかの淀みもない。主水は圧倒され、また、良い味方を得たと思うのだった。

武蔵——というから江戸かも知れぬ。名の有る名僧智識の仮りの姿、とも思えるのだ。

それに、浄海の出現ぶりは、幻術の力をかりたものとしか思えなかつた。

門番を問い糺したが「僧形の者など通した覚えは全くない」というのである。

「……切支丹共を打ち伏せるには、何とすればよろしいのか、お教え下され」

主水は奉行職の威厳も捨てて、教えを乞うのだった。

「さればでござる。伴天連の教えに邪悪無残な呪法が有る如く、仏界にも修羅道地獄の修法というものが有り申す。責め問うには五大明王。苛責の場には八大地獄あり。数に不足はさらくない」

「と、申さるると？」

「例えば……等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、炎熱地獄、極熱地獄、無間地獄、の八つを八大地獄と申すが地獄の恐ろしさを詮じ詰めて一口に申せば、何でござるな？」

「はて？……」

「お判りにならぬか？ 地獄の苛責には死というものがござらぬ。責めを受ける者は、既に現世において死を得たる亡者ばかり。すなわち、永劫に終ることなき苛責の恐ろしさでござる……」

「お言葉、尤もながら……然し、切支丹は生命ある人間でござる。それを、いかにして永劫の苛責へ追い込んだものか……」

主水は、いぶかしげな眼付きとなった。

「法は有り申す。等活地獄の責めを加わえるのでござるよ」

「等活地獄の責め……」

「左様、この地獄で責めに遇う罪人は、苦痛の余り息が絶えんとする時に、涼風が吹き起って蘇生の快を得る、故に繰り返して新らしい苦しみを受けねばならぬ。その都度、その都度甚だしい責め苦に呻吟する。……責めの極限は夢うつつとなつて快にも通ずるが、等活地獄はそれを避けて責め申す。お判りかな？ 絶え間なき責めを愚法と申したは、この理を踏み外しているが故でござるよ」

と、浄海は結論したのである。

つまり、主水のような責め方では、信徒はやがて心気朦朧となり苦痛を感じなくなり、恍惚とさえなる。責められる者が幻聴や幻視を起こし、更に群衆心理の不思議さで幻覚が波及して行く——それは逆効果を招くだけのことだ、と云うのである。

「なるほど……」

主水は深く頷いた。

○ 降三世明王

翌日——

再び牢内の信徒達は、縄を打たれた上で庭へ引き出された。責められる者は、やはり世津であった。

獄衣を剥ぎ取られて、腰布一枚のまま高手小手に縛り上げられたのも、前日と同様であった。

只、捕縄のかけ方が、更に厳しくなった。

「構わぬ。三寸縄に縛れ！」

と主水が命じたからである。

三寸縄とは、後手に組み合わせた手首を最大限に上へ吊り上げ、首縄までの間隔が三寸程度になるまで縄尻を締め上げる縛り方である。近松門左衛門の「雪女」中に「三寸縄に括り上げ、云々」と有るのがこれで、縛るだけでも拷問に等しい。

世津は、海老のように体を折って必死にこの縄目に耐えた。然し、それだけでではない。主水は更に、

「吊れ！」

と命じたのである。

牢庭の一隅に、樫の太木が有った。その枝へ太綱を通して、世津を地上二間ほどの高さに吊り上げたのである。

苦悶して、世津の身体は宙に回転した。

「パライゾ！」

「サンタ・マリア！」

吊られた世津も、見上げる信徒達も、一斉に祈りを始めた。

だが、まだその次が有った。

世津の真下に枯草や枯枝が積まれて、火が放たれたのである。

たちまち、メラ／＼と赤い炎が拡がった。

「フラテル（兄弟）の皆様、今こそイザベラは、魂をデウスにゆだね奉り、パライゾへ旅立ちます……」

世津が苦しい声で、別れを告げた。

「デウスよ、デウスよ、主にとこしえの栄えあれ——」

そんな文句の讃歌が、信徒達の間から流れ始めた。

肉が霊にそむくのか、世津の唇から苦しい悲鳴が洩れ、回転が激しくなった。

太綱が振じれ、また、戻って、世津の黒髪は尾を引いて躍った。

火は、その肌を焼くほどに強くない。吊り上げた高さも火刑としては適当ではなかったが、信徒達は知っている。

長崎では弱い火による火刑が行なわれているのである。長時間の苦痛を与えてから、ゆっくりと焼き殺す方法であった。

その時——浄海が姿を見せた。

左手に一枚の仏画を持ち、右手には数珠を握っている。

仏画は「降三世明王」描いたものであった。不動明王、降三世明

王、軍荼利夜叉明王、大徳威明王、金剛夜叉明王、を五大明王と云い、中で、降三世明王の靈験こそは、切支丹調伏に最も適する——

と浄海は主水に語ったのである。

絵に描かれているその姿は、まことに奇怪なものであった。

四面、八臂。三眼忿怒。六本の手に、鈴、箭劍、三叉戟、弓、捕縄を持ち、中央の二本の手は合掌させている。足の下には男女二神を踏み敷いている——という凄絶さである。

熱氣を受けて絵が揺れると、それが生きもののように怪奇な動きをみせる——

「女。どうじゃ？ 苦しかろう。辛かろうが！」

と浄海は大声で呼びかけた。

「……辛うございます」

「ならば転べ。縄を解いてやるぞ」

「転びませぬ。うつし身の苦しさを超えて、天国の安楽を求めます」

世津は、キッパリと云い切り、黒髪の蔭で微かに笑ったようであった。

「愚かな女よ！」

浄海は絵を足元に拡げて置き、合掌の姿勢を造った。その口から異様な呪文が洩れ始めた。

○ 等 活 地 獄

「……蘇叫婆、爾蘇叫婆、叫、縛日羅、叫発叫！」

それを何度もくり返して唱える。降三世明王の理法にかなった呪文がこれである。

世津の苦悶は俄かに烈しくなった。身をよじり、首を振って呻吟する。

火勢が強まった為も有ろう。だが、浄海のと見える呪文に苦しめられているようにも見えた。

間もなく、精神と肉体の忍耐が極限を超えて間もなく世津の動きが鈍くなり始めた。

「パライゾ！」

「アヴェ・マリヤ！」

信徒達の祈りの声が一際高まった。

「……よし。火を消せ！ 早くせい！」

主水の下知である。

獄吏が十数人、一斉に水をかけた。

等活地獄——

それを主水は実行に移したのである。

「……あ、何を、何をされます！ この儘、お焼き下さいませ！
もし！」

意識を失う一步手前の世津が、事態を知って絶望的な請願を試みた。パライゾの入口から俄かに引き戻されることを哀しむ声であった。

然し、それは主水や浄海の思う壺だ。

彼等は勝利者の満足を表情に浮かべて、世津を木から降ろし、縄を解き、冷水を頭から浴びせたのである。

「無慈悲な！」

世津は身を震わせて、嗚咽した——。

そして、一刻の後——再び世津は三寸縄に縛られた。

木へ吊られ、火がたかれる。

「……蘇叫婆、爾蘇叫婆、叫、縛日羅、叫発叫！ 蘇叫婆、爾叫婆、叫、縛日羅、叫、発叫！」

浄海の呪文——

苦悶する世津の顔には、痛覚からくるものとは別な動揺が有った。狼狽と云ってもよい。世津は迫害者の意図を知ったのである。

もはや、苦痛に耐えることは、莊嚴な意味を持たなくなった。殉教

に通じることのない苛責は、戦慄すべきものであった。

世津の両眼から、涙が溢れた。

「ひっ！、苦しい！……くるしい！」

明らかに、それは悲鳴であった。弱点を突かれた者の切ない呻吟である。

「ふふ、苦しいか？ だが、転ばずともよいぞ。堪能するまで苦しむのだ。泣け、喚めけ！ お前達の神はどうしたのだ？ その苦しみを見捨てるのが切支丹の神の心なのか？ 一向に救いには参らぬようだの……」

浄海は快心の笑みを浮かべた。

やがて——又もや火が消された。

三度——四度——五度——。

六度目の責めが始まったのは、既に夕暮れの頃であった。

「……世津！ 勇気を持つのだ！ サタンの智慧に屈してはならぬ！ ひるむでないぞ！ 堪えるのだ、堪えてくれい！」

太兵衛は、押し潰されたような声で悲痛に励ました。眼が血走って、人相さえも一変していた。そして、必死に祈る。

「おお、デウスよ！ 吾等が主よ！ ここに主の慈愛の眼を注ぎ給え！ 願わくば我等が地へそそぐ生血によって、数多くの信徒をこの土に発生せしめ、日本全国に充ち満たし給え！」

「ゼズス・キリスト！」

「サンタ・マリヤ！」

信徒が、一斉に誦和して祈る。

——と、不意に、厚い雲を裂いて、薄暗い天地の間を一条の稲妻が走った。

雷鳴が轟き渡り、突風が吹き荒れた。
青白い閃光が大地を照らし、凄惨な世津の姿を浮き上らせた。
「おお！ 奇蹟が起るぞ！ 世津、喜べ！」
主水が狂喜して叫んだ。
沛然と、大粒の雨が降り始めた。



「おのれ！ 小癩な妖術！ 蘇叫婆、爾蘇叫婆、叫、縛日羅、叫、発叫、！……」
浄海の呪文も必死の声となる。
だが、みるみるうちに雨は勢いを増し、車軸を流すような強さとなって、滝の如くに大地を叩いたのである。稀に見る大雷雨であった。世津を苦しめる火は完全に消えた。
降三世明王の画像は、裂け散って地上を流れた――。

○ 人柱

「雨は天地自然の現象。驚ろくには当らぬことでござる……」
と、浄海は「奇蹟」を否定した。

ともかく、等活地獄の拷問法が有効であることは立証された。

早速に牢屋敷で工事が始められた。庭に吊り責めの台を十本建てるのである。

それが完成した日から、一度に十人の信徒が火責めにかかれるようになった。

信徒達は、苦しみにのたうつ

た。

五日間に転教をした者が二人あった。だが世津と太兵衛は、幽鬼のような面影となりながらも、更に耐え続けた。

「根氣くらべでござる。この拷問の恐ろしさが切支丹どもへ知れ渡った暁には、何層倍もの偉力を持つことになるでござろう」

と、浄海は力説したが——或る日、突然、重政から主命が下った。

「ならぬ！ 早々にあの拷問を取り止めい。いつ迄も、何を致しておるのか！ 万一、等活地獄の理法とやらが、江戸表へ誤まって伝えられた場合は、何とする！」

と重政は主水を叱責した。殺さぬように責める——という方法は誤解を招きやすい、というのである。

「仮りに転教者が出たとしても、それが何じや？ 何の利益が有るというのか！ 構わぬ、殺してしまえ。皆殺しにせい！」

重政はヒステリックに叫んだ。

主水は処刑の方法を思案した。

丁度、その頃。長崎奉行水野河内守から三百四十二人もの切支丹が、島原領へ送りこまれてくる——という出来事が有った。

「頑強な信徒ばかりを集め、松倉家に拷問を依頼する……」というのだが、これもやはり、重政の切支丹政策を試すためにしたことに相違なかった。

収容する牢が足りなかった。とりあえず、嚴重に木の幹へつないで留置をしていたが、脱走事件でも起った場合は一大事となる。

急拠、牢屋敷をひろげて建て直し、牢の数を増やさねばならなかった。

將軍家や長崎奉行の執念深い底意地の悪いやり方に、重政は腹を

立てたが、といって拒絶も出来ない。

主水は、その普請の責任者としても忙殺されていたのだが——そんな時である。浄海が案を出した。

「主水殿。牢屋敷の新らしい塀の高さは、一丈二尺だそうでござるの？」

「左様。將軍家よりの御差図にて、その高さに定まり申したが……」

「江戸小日向の宗門改奉行、井上筑後守殿が構築された切支丹牢の塀の高さが、やはり一丈二尺でござった。それと等しくせよとの含みでも有るのか……」

「なるほど。して、浄海殿は、その切支丹牢を見たことが有るか？」

「有り申す。塀には三段構えの忍び返しがあり、嚴重なものでござった」

「ほう……」

「いかがだな？ 主水殿。塀の中へ国之津の信徒達を人柱として塗り込めては……」

「なに人柱？」

「いかにも。井上筑後殿も塀の中へ切支丹を数名塗りこめたと聞いている。それをその儘踏襲されてはいかがじや？」

「うむ。これは、良いことを聞いた」

主水は、すぐさま心を決めた。一丈二尺（四メートル弱）の土塀の中へ生きた儘の信徒を塗り込める。信徒達は白骨と化した後も永久に侵入者を防ぐべく土の中に立ち続けるのだ。これは皮肉な着想の処刑法であった。

○ 奇怪な普請

橋、堤防、城、等を築く時に、神の心を和らげるため、水底や土中に人間を生き埋めにする「人柱」の法は、すなわち難工事に際しての人身御供である。

人身御供——というからには、何等かの意味で「選ばれた者」を埋めるのが普通である。汚れを知らぬ乙女、純真な童子、工事の責任者の家族、等がそれだが罪人に、その役をさせる例も無いではない。

例えば「北窓瑣談」という古書に——

唐土の赫連勃が城を築きし時、築地など甚だ丈夫にこしらへ、錐をさして、入る事一寸なれば、其の作りし人を斬りしとぞ。それ故後迄も残りし也。昔、清盛兵庫の築島を作りし時、潮の来たりて作り上げたる嶋を崩せば、其の作りし人を海中へ沈め殺せしとぞ。是を人柱入れたりといひ伝へり。実に格別むつかしく、大なる普請をするには、それ程の残忍の事も行ひ、厳しくせざれば、成就しがたかるべし。

と有って、落度のある者を人柱に立てる場合も有るのである。

この牢屋敷拡張工事の場合は、特に難工事という程のこともないのは無論だが、もはや理窟ではない。要するに土据の普請と処刑とを同時に行うことに意味が有った。

土台石の上へ四十数本の柱が立ち並んだ。

その柱へ信徒を括り付ける。後手に柱を背負う形に縛り、全身を雁字搦目とした。

そして、足元から土を盛って行く——。

百人余の左官職が領内各所から召集され、この不気味な工事に就いていた。

「今こそ殉教の時はきた……」

「パライゾ！」

「パライゾ……」

督励する牢役人の声と、信徒の祈りと、職人達の掛け声が入り混って、昼夜兼行、戦場のような有様となった。

奇怪無残なその工事が終りに近付いた或る日のことである。

大半の信徒は、既に全身が土中に隠れ絶命していたが、工事の遅れている部分にはまだ顔だけを土の上に出している信徒も有った。その数の中に太兵衛と世津の顔が見えているのは、主水が故意にそうしたのもあったろうか——。

そんな時、浄海が普請場へ姿をみせた。

「太兵衛、世津、今日が最期だぞ！ 往生柱の抱き心地はどうじや？」

勝ち誇って、大声で呼びかけながら悠然と歩いて来たのである。生き残っている数名の信徒の口から、意外に強い声の祈りが流れ始めた。

その時である。突然、異変が起った。

激しい地震がおこったのである。偶然に起った——といってしまう。ええそれ迄だが、その結果が只事ではなかった。

浄海のいた場所で、まだ乾き切っていない土塀が五間ほど、不気味な音を発して裂け、崩れながら倒れたのである。

逃げるひまもなく、浄海はその下敷となってしまうた。

「ギヤア——ッ！」

怪獣のような悲鳴が上った。

塀の上部に植え付けた、忍び返しの、巨大な釘のような鋭い鉄棒が浄海の咽喉から胸へかけての数力所を、完全に貫き抜いたのである。

即死であった。崩れた土の間から、浄海の両眼が白眼をむき出した儘、凄惨に虚空を睨んでいた――。

重政は主水に命じて、生き残った人柱の信徒を土中から掘り出させ、牢へ戻した。

さすがに恐怖を感じたのであろう。

この年の七月下旬、長崎奉行水野河内守は、竹中采女正と更迭した。

新奉行の竹中采女正は、これ迄の誰よりも残忍な迫害を、着任早々から始めた。

長崎、島原、大村の各信徒を、島原半島の中央に在る温泉獄（雲仙獄）へ送って責めたのである。

噴出する硫黄の熱湯を信徒の肌へそそいで転教を強いる――という方法だった。

イザベラ世津も、その拷問を受けた一人である。言語に絶する拷問を受け続けること十三日間。全身が腐爛し、体力が全く衰えても、遂に耐え通したイザベラという年若い人妻がいたことは、切支丹殉教史上に明るい事実であり、迫害の途中に不思議な奇蹟が起ったことも伝えられているが、――それはまた別な物語りである。

(終)

新人モデル大名刺判緊縛写真集

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子
略号(みい)

敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて、もだえぬく……。

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 田原美佐子
略号(みろ)

初々しい裸身が縄で自由を奪われながらも美しい女体構図を描いて……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 岩井 和子
略号(みは)

まだ稚き柔肌にまといつく縄目は、痛々しいまでに苛烈であった。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子
略号(みに)

艶やかな色香に満ちた滑々とした餅肌も縄にくびられて哀れな表情……。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子
略号(みほ)

縄と縛の祭壇に上った、白いいけにえは、観念の眼を閉じていた……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代
略号(みへ)

一糸まとわぬ白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……。

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代
略号(みと)

黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出して光りにはえる。

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 絹川 文代
略号(みち)

この厳重な身動きも出来ない後手しぱりと、剥がれたズロースとは……。



マゾヒズム百景

馬場好男

第26景 サジズムの女

私が学校を出てはじめて社会に出た頃の事だ。私と同じ課に或る女性、即ち、その会社での先輩がいた。此の女性は私より一つ年上で、顔も美人の部類で性格の強い女性であった。よく私が馴れない仕事で帰る時間が来ても仕事が終わらない為、残業をやっていると、彼女がそれをみてくれ一緒に遅くまで手伝ってくれたものである。社内でも彼女は古参株で、戦時中で男の余り居ない時だったので、なかなか巾をきかしていたものであった。私は初め、彼女を姉に接する様な気持ちでみていたが、次第にそれが初恋という形で私のハ-

トをゆすぶり出し、彼女と一緒に仕事をしている事が一番楽しいものに思え、つまらない戦争など早く終わればいいと、当時にしてはよからぬ考えをもったりしたものである。然し私の方で恋心がますます燃えたのに対し、彼女の方は至って冷静で、事実、全く弟をみる目でしかなかった様であった。

やがて敗戦となり彼女も私も、それ〴〵動員の身だったので郷里に引揚げたが、手紙だけは一年位、逢いたい〴〵と続けたものであった。私が彼女に惚れぬいたのは、非常に男勝りで、そのふるまいが私の心の奥深く芽生えているマゾの気持を実に楽しくゆすぶってくれていたからだ。だが、そのうち文通

も途絶え、私もいつか彼女の事は忘れる様になっていったが、別れてから四年目になって、思いがけなく彼女の手紙を受取ったのだ。

それには御無沙汰して申し訳ないという事から始まって、実は結婚して三年になるが、どうも夫とウマが合わず現在、別居生活をして実家に帰って来ている。こうして独り静かに日を送ってみると何だか貴方が、とてもなつかしいというのだ。私は此の手紙をもらうとすぐ返事を書き、又彼女からも来、忽ち十通以上をやりとりしたが、彼女の手紙は、いつも夫への不満を述べ、もう男は、こり〴〵といった事さえも書いてあった。勝気な彼女の事だから、よく他の連中がいった様に、確か

に結婚生活はムリだったとみえ、手紙に「夫と私が喧嘩をしても、最後には夫は暴力を振い、どんなに私がいなくても所詮、女の身ではそれに勝てず、フラ／＼になるまで撲られる事が毎日の様で、その口惜しさは今、こうして別れていても、いつか仇をとりたいたと憎悪にみちている」等と書いて来たりもしたものだ。処が私が大体、フェミニストでマゾ愛好ときているから、男のそんな暴力は最低のもので、むしろ別れたのは賢明だった。

此の上は早く完全に離婚すべきだ」とか「僕は女性に暴力を使う事は大嫌いだ」とか、とにかく自分のマゾ癖をかくして、ああでもない、こうでもないと書いていたのだが、いつか又、文通が絶えてしまった。

以後、三、四回、思出した様に手紙が来たが、彼女は一度、前の夫の処に戻り、その後正式に離婚した上で、再婚したがやはりうまくゆかず、その時も男の暴力を非常に憎らしげに書いていたから、ゆく／＼で彼女は夫の暴力の洗礼をうけていたものだった。そしてつい最近、約三年ぶりに又、此の彼女からの手紙を受けとったのである。

現在、三十才も年の違う六十四からなる処へ再々婚？（もっと再がつくのかもしれない）

しているが、生んだ事のない子供がみんな成年だし、年代の違う爺さん相手ではとても味気なく、又、非能率な生活にあけくれる身が悲しいというわけなのである。

私の方も勿論、既に妻ある身だし手紙は会社に来るので事なきを得ているが、性こりなく私も又、彼女に初恋の故だか何だか判らないが返事を書き、忽ち十通近い文通を短時日の間に交したのである。

そして此の間に、私が書いた一通の手紙に彼女がひどく共鳴し、かつての名画「モロッコ」の中の名セリフを、ずっと上廻って言葉も違うが、十三年前に逢っていたのに残念だった。貴方と暮したら私の人生は違っていた、という様な事をいつて来たのである。私は手紙にこう書いたのだ。

夫婦はいつも新鮮でありたい。夫は妻を信頼し、妻は夫を尊敬するが、それはあくまでも社会的な場合で、二人きりになったら、その信頼と尊敬の上に立脚した気持を、うんとはぐして結びあいたいものだ。判りやすく云えば、夫が妻を自分の背中に跨らせて部屋中を這い廻ってみたりしても、お互いが楽しければ、妻に威張ろうとする夫のカラ意地や、夫に対してもハダカになれない妻、お互いが

虚勢を張って人間性を論じるより余程いい。自分は此の頃、マゾヒズムと云うものを（之を説明して）始めは馬鹿にしたが（此の性癖をかくさねばならない処に、我々の悲劇がある）今では、むしろ、こういうものにこそ男女社会の平和があると思う、等と得手勝手なごたくを並べたのである。

処が之に彼女が共鳴したのだから全く思う通りにならないもので、考えると彼女は本当のサジストかもしれないのだ。むかしの抑圧された社会で、然も女の身では、それもままならず成長し、嫁ぎ相手を得られなかった訳だ。私も又、自分の性癖をかくしていたのでお互いにノーマルな顔をし乍ら、右と左に別れてしまったものらしい。

貴方の手紙で、今まで私を苦しめた男を一人／＼思い浮かべては彼等を縛りあげ、馬のりになって半殺しの目にあわせていたが、今ではそんな事より憎しみを持たない貴方を馬にしたり、或は膝下に組みついて笑いさざめきたい気持です」と最後の手紙では書いて来ている。

東京と四国の文通とは云え、いつか再会してプレーが現実化出来たら、と、淡い夢を持っている。

撮影会兼読者座談会



緊急モデル撮影風景と

女体責めの種々相について

語る

△出席者▽

本誌側

箕田京二、辻村隆、館典子（新人）

（愛川悦子、身体の支障のため欠席）

読者側

A、西山敏郎（四九）大阪

B、桜川直三（三八）大阪

C、堀江 充（三二）和歌山

D、三輪克正（四〇）兵庫

E、安達 伸（二九）東京

△日時▽

昭和三十四年十月十五日午後一時

△場所▽

大阪市南郊、温泉旅館 Y 荘

―（文責）― 辻村 隆 ―

○

本年三月二十七日、有志相集って読者座談会を開催しました処、全国の読者から多数の参加希望者がありまして、その詳細は六月号誌上に発表しましたが、その後引続き、前回に洩れた方や、座談会記事を見られた方々より、やいのやいのと催促され、ここに秋の撮

影会を兼ねて座談会を開催しました。

十一月号誌上にて参加者を募りました処、

今回は撮影会を兼ねているということで、予

想外に多数の方からのお申込を頂きました。

中には長文の嘆願書を送られた方や紙幣を封

入された熱心な方もありましたが、なにしろ

当方の予算にも制限があり、マニアの特異な

会合でもありますので余り多数の御出席があ

りますと、出る話も出ず弾む話も白けがちに

なりますので、洩れた方には申し訳ありません

が、左記の五名の方に出席して頂きました。

そのかわり、次回開催の節は誌上には参加者を募集せず、今回お申込の方々の中から選んで御出席して頂く予定ですから、何卒悪しからず御勘弁下さい。

尚、今回出席を予定しておりました愛川悦子嬢は、急に身体の支障が起りましたので残念ながら欠席しました。

△読者側出席者略歴▽ (御本人の承認を得た事項のみを掲げます。但し氏名や地名には若干変更を加えた個所があります。)

○西山敏郎氏

前回の座談会にも出席された唯一の人、カメラは玄人はだしの腕前で、是非、撮影会にだけでもという強い執心だったので特に再度出席して頂くことにした。大阪府下、河内長野市、私立大学講師。

桜川満三氏

大阪市内生野区に在住。読者としては新顔の方であるが、前回に申込のときに遅れてはすれた為、直接購読者となって今回は速達でイの一番に申込んだという熱心さを買われて出席者の選に入った人。鉄工所経営。

堀江 充氏

サラリーマン、和歌山市内より約二十分に行ける加太に在住。キャンプと旧要塞地帯

で有名な友力島への発着地である。家に一男一女。夫人は一度流腸告白で投稿されているが、元看護婦だそうである。

三輪克正氏

兵庫県姫路からわざわざ出て来られ、前夜大阪で一泊された。前回にも申込まれた非常に熱心な愛読者でパチンコ屋の御主人。その傍らスタンドも経営しておられる。本妻の方とは別居中で現在は専らスタンドのママムの方へ御執心の方である。

安達 伸氏

東京麻布にお住いで激しい恋愛の末一年前にゴールインした目下アツアツの新婚夫婦。カメラに凝っておられ相当のコレクションの所持者でもある。御尊父は某大会社の重役。その大会社に籍はあるが経営者見習いという結構な御身分で青春の楽しさを満喫といったところ。新妻は妊娠六カ月の由、日航機で気軽に来阪された。

○

南大阪にて落ち合った一行は、軽い昼食をすますと、モデルの館典子嬢を加えて私の運転するトヨペットと箕田氏の運転するヒルマの二台の中型乗用車に分乗、一路国道二十六号線を南下、担々たる舗装道路を秋風を切

って快走する。

流石十月も半ばともなれば車外をよぎる空気の色にも秋の色は濃い。夏場は海水浴場として賑った浜寺、羽衣附近も、今はもうすっかり時期はずれでさびれて、堤防越しに白く砕ける波の音が潮の香にまじって車内にまで漂ってくる。会費不要で食事の心配までして貰ってドライブとはツイテいるという言葉が囁やかれる。

一時少し前、Y荘の門を潜って車は前庭へと滑り込む。撮影会に庭園を利用するため特に予約してあったので他に客はないので庭に面した大広間に陣どって、各人持参のカメラを取り出して撮影の準備におさおさおこたらない。

館典子嬢は別室へ準備のため引き退ったので、それまでY荘自慢の庭を各人思い思いに散歩を初める。裏には山を背負い数千坪の山あり川あり池ありの閑静の庭は、目の下に大阪湾を眺めて風光全く明媚である。

本日、唯一のモデルとして参加された館典子嬢は、現在活躍中のファッション・モデルだが、特に本誌の緊縛モデルとして志望してきたという変り種の本年十九才の女性。簡単な化粧に持参のワンピースを着た典子嬢が庭

へ現われたので、紅一点の華やかな色彩を加えて俄然、色めいてきた。

愛川悦子嬢が参加しておれば、ヌード緊縛の方を担当して貰う予定であったが、彼女の生憎の故障で今更恨めしく思った。確か一同の中にも、愛川嬢のあの豊満な肉体に縄をかけてみたいと期待しておられた方も相当あったようで、とりわけ東京の安達氏などは如何にも残念そうで、愛用のアサヒペンタックスにフィルムをつめ乍ら、しきりに箕田氏に愛川嬢のことを聞く始末である。

私個人としては、既に彼女達は幾度となくフィルムに印しているので、本日出席者のように左程でもなく、寧ろ、館典子嬢の均整のとれた近代的な容貌に十分魅惑を感じ、撮影意欲にかられていたのであるが……。

野趣豊かな庭園を背景として、彼女を囲んで数人がシャッターを切った。フラッシュンモデルをしているだけあって、カメラフェイスといいカメラ度胸といい満点である。

緊縛女体の撮影について初経験の人も多いのか、或は最初だから遠慮しているのか、誰も縛りには手を出さないの、自然、女体緊縛のお株は私に廻ってくる。どうも着衣のままの縛りは私も勝手違いで些か苦手だ。衣服

の乱し方なんか、中々むつかしいものだ。

彼女が第一回目に着用してきたのは、花模様のワンピース。皺よったり汚れたりしないかと、ひやひやして縛ったので、どうも思いきり縛れなくて緊縛感が出ない。でも、まあ松の根方に立たして後手縛りでポーズをとらせた。各人思い思いに四方から狙いをつけてシャッターを切った。私はハイライトをつけてるのにストロボのデイルイト・フラッシュを二発、一発はカメラの左側から、一発はモデルの左側の頭上から発光させた。

本屋の座敷から、仲居さんが廊下に現われて、「まあ」と呆れた顔で眺めているのに辟易しながら更に松の木の間へ座らせて数種のポーズをとらせる。

「まあ、いやね、仲居さんが、こちらを見ててよ……」と館典子嬢が当惑げに、私の方を向いて囁やいた。箕田氏がライカを首からぶらぶらさせながら走ってきて、仲居の方へ片目でにらみつけたので、仲居氏はそうそうに退去した。「さあ、始めた、始めた」の声に一同元氣を得て、盛んにカメラを活動させる。



乱射乱撃、まさにフィルム製造会社の笑いがとまらぬという消費ぶりである。オブザーバーの注文で、いろいろのポーズや表情をとらせる。樹立の中に仰向けに寝てほしいという三輪氏の注文に、典子嬢は、「それなら、服装着換えてくるわ」



と立ち上ったので、私は後手の縄を解いて猿ぐつわの手拭をはずすと、逸早く、座敷に戻った。ここで十分間の休憩。フィルムを入れ換える者、撮影済のフィルムをギャジツトバッグにしまう者。中にはフードを落したといて庭の中を這い廻る者など、次のチャンスにおくれまいとして雑談する者もない。

私はゆつくりと煙草に火をつけて腹一ぱい

煙を吸い込んで秋空へうんと吐きかけた。ストロボを装着したマミヤレフ・プロフェシヨナルは中々調子がよく、万が一のスペアに持参したローライ・オートマツトも荷物になりそうである。一〇五ミリの標準と一三五ミリの交換レンズでも十分ヒケのある庭園だから大変、楽だ。室内だったら八〇ミリの広角を用いるところだが、なんといってもライカ判のスピード性にはかなわない。

今回の参加者の持っているカメラも殆んど35ミリカメラでペンタ式一眼がやはり今のはやりのようだ。二眼レフはすっかり凋落してしまった。三脚にレフを据えてうつすというようなことはアマチュア向きでないからだろうか。然し、私たちから見ると、手持で小型カメラをふりまわされると、一寸恐ろしいような気がする位だ。

やがて典子嬢は、身体にぴったりとつけた華やかな色彩のタイトのワンピース姿で現れる。肉体の線がぐっとよく出て、ハダカにしたら、どんなに素晴らしいだろうかと想像させ

られる程だ。

「初めは四方からとりかこまれて、上ってしまっただけ、一寸慣れたから……」

「じゃ、この松の樹の枝から吊ってでもいい」「あら、そんなのはいや——、だって痛いでしょう。そんなことなさらなくても、只縛るだけじゃ駄目なの？」

ただ縛るだけじゃ、チツとも面白くないんだ。と言いたいところだが、この娘、身体は一人前以上に発育しているが、まだ十分にネンネらしく、とても私達の希望している段階には達していないらしい。箕田氏も、撮影会にこんなカマトトを何故持ち込んできたのだろう。或はベテラン愛川嬢をオトリに、あわよくばマゾ飼育法の第一歩でも施そうとしたのか。余り馴れ過ぎると興味の無いものだが、撮影会には、飼育済の方がやり易いことは事実だ。

「まあまあ、無理もないんだよ、皆さんの気心だって知らないんだし、初対面で、そういう注文したって可哀想だよ、初めから、何んでもOKという様な娘は、反って面白くないもんさ。それでいいんだ——」

箕田氏が、さすが自分の眼鏡にかなって連れてきたモデルだけあって、しきりにとりな

している。

典子嬢にしてみれば、見知らぬ衆前で、これ位、いろいろと縛られて周りから写真をとられたら充分だと思つていたに違いない。

勿論、私と箕田氏が、十二分に飼育法の行き届いたモデル嬢相手に、あの手この手と緊縛するのは訳が違う。今日は、緊縛女体撮影法の第一歩、最もオーソドックスなやり方でいいわけである。——というようなことを考えていたが。

併し、出席した人々は、如何にも愉しげに満足しきった表情で、しきりにポーズの注文をしては撮りまくっている。彼女に緊縛メイドの愉しさは求められなくとも、彼女の近代的な美貌と、理智性に富んだ挙措動作が、こよなく、この人達の眼を愉しませたのである。事実、これ位美貌のハイティーンの娘を着衣の上からとはいつても、自由に縛り上げ猿ぐつわをかませて、いろいろにポーズをとらせて写真にとるということは、普通では一寸出来ない企てであるに違いない。

箕田氏の言では、撮影会というので特に第一級の何の色も染んでいない無垢の人を選んできたのだそうだが、或る意味では、それが成功したといえる。いやにモデルずれした厚

化粧の女や、ヌードずれのしたあばずれ女では、この新鮮な魅力は出て来ない。

豆しほりの手拭で猿ぐつわをかまして、庭石の上に座らせて、さまざまなポーズをとらしてみろ。ああでもない。こうでもない、と四方から声がかかると、典子嬢はその度にイヤな顔もせず、不自由なタイトの膝をよじらせてポーズを変える。

「ああ、猿ぐつわがとれるわ！」

余り鼻の上をきつく締め上げたので、手拭がずり下ってしまったのだ。十九の娘の口から「猿ぐつわ」という言葉が吐かれると、妙に艶っぽく聞えるから不思議だ。この娘、猿ぐつわなんて言葉、いつ頃から覚えやがったのかな、と思つたりする。

今度は鼻の上から咽喉元まで大きく掩つて力いっぱい締めつけて猿ぐつわをし直してから、私は縁に憩っている箕田氏の傍へ寄つて「これだけのいい身体をしているのだから、せめてシユミーズだけか、もう一つきばってパンティだけにでもなつてくれればねえ」

私が慨嘆する様にいうと、箕田氏は、「ハハハハ、馬鹿に彼女のハダカが拝みたいらしいネ、今日はあれでいいんだよ。いずれそのうち、ポツポツ教育してゆくさ。しかし

彼女の身体は素晴らしいよ。先日、ナイロンの水着一枚で撮ったんだが、現像が出来たら見せてあげるよ、顔といい体つきといい、ミス・キンパクというところだね。第一肌が素晴らしいきれいでネ……」

「おいおい、じらすような事はいわないで欲しいな。それでなくとも、じりじりしてるんだからナ……」

「まあまあ、そう急くな急くな。いずれ絹川や大塚、愛川に代つて、あの館典子の素晴らしい肉体を曝け出した緊縛フォトが口絵を飾る日があるよ。今迄のモデルだって皆始めは、ああなんだ。それを段々に仕込んで、愈々使いものになる迄には、随分の手数と費用をかけているんだよ。君もそんなこと位承知の筈じゃないか。絹川君にだって、はじめは、どんなに無駄なフィルムを使ったとか——、現像しないで放つてある最初の頃のフィルムがワンスとあるよ。ローマは一日にしてならず、というところかな——」

彼女が草臥れたとでも言ったのか、モデルを真中に囲んで、一同がぞろぞろと私達の方へ戻ってきた。

「どうです？、皆さん方、まだ撮りますか」私が一同に向つて声を掛けると、皆は、こ

れで終りになるのかと、名残惜しそうに、銘々に、まだフィルムが残っているとか、僕のアイデアでもう一つとか、仲々モデルを放しそうにない。

「どうだい、貴女はまだ疲れない？」

「ええ、もう少し位なら。それに、まだ持ってきた洋服がありますから、着換えてまいりましょうか」

そう言いながらも、彼女は手首についた縄の跡をしきりに擦っている。

「じゃ、もう二、三十分。新しい洋服を着換えたとところで、最後のしめくりとゆきましようか。」

箕田氏の発言で、水に還った魚のように、一同、ソワソワ、ニヤニヤ。フィルムを巻き上げ、露出計をあわてて取り出し、などしてあわただしい空気に皆追われるように庭に位置を占める。一寸した緊張のひととき。

お化粧を仕直して一段とあでやかさを増した典子嬢は、グレイの無地のワンピースで清楚な姿を現わす。

「これは仲々きれいだ」という声が誰からもなく呟やかれる。

「今度は猿ぐつわなしで、その美しい顔を入れよう」という一同の提案で、桜川氏が典子

嬢の背後に廻って縄をかける。一同、順番に縄をかけて貰ったが、中々思うように縄がさばけず、結局、最後は私が縄尻の始末をした。縛り直したりするような結果になってしまったが、桜川氏は案外、落ちついて、ゆっくりと念入りに縛り上げてゆく。

苔むした庭前で、思い思いにシャッターを切ってゆく一同。私も、皆の邪魔にならぬよう、そこは長焦点レンズのお蔭で遙か背後から、モデルの前がひらけた時を狙ってシャッターを切る。ストロボの充電時間を考えても私には、これ位が適当だ。

そのうち、西山氏が

「私は、やはり猿ぐつわがあった方がいい」

という希望なので、氏自らに猿ぐつわをかませて貰う。ここで西山氏の構図で一しきり撮りまくる。本誌の読者にも一度も

誌上でお目にかかったことのない館典子なるニューフェイスを目の前にしたのだから、あとの現像のことも考えずにシャッターを切りまくるのも当然かもしれない。このモデルの新鮮さという点では、誰も彼も満足したことだろう。

使用したフィルム三五ミリ六本が最高で、いずれも二本乃至三本は消費したというのだから、その乱射ぶりも想像されようというものだ。三時から座談会に移る予定だったのが、既に四時近くになっており、この儘では、座



談会の時間が少くなるので、漸やく一同に撮影の方は終って貰うことにする。

館典子さんにも紅一点として座談会に残ってほしいという私達の希望であったが、宝塚の自宅まで帰るのに余り晚くなつては、という事で引き取って貰うことにした。

ここで一同、自由の時間となつて、Y荘自慢の岩風呂の大浴場に浸り、五時より八ミリ映画会に移る。東京の安達氏、姫路の三輪氏は共にY荘に一泊するというので、終電車ぎりぎりまで御輿をすえることに一決した。

○緊縛八ミリ映画上映

「緊縛女体の悶え」 △旧作▽

(モノクロ一〇〇呎)

「女体縛り方教室」 △旧作▽

(モノクロ一五〇呎)

「うごめく女体」 △新作▽

(カラー一〇〇呎)

「吊し責めの女」 △新作▽

(カラー一〇〇呎)

旧作は春の座談会でも上映したもの。

新作二巻は、何れも絹川文代の豊麗な肉体を画面一杯に躍動させた最新作で、何れもカラーである。

○女体緊縛フォト展示

四切フォト 十葉

八切フォト 三十葉

大中判フォト 三百十葉

右のフォトを順次回覧

○安達氏提供フォト展示

キャビネ判 四十六葉

座談会

「女体責の種々相について」語る

八ミリの緊縛映画の鑑賞と女性緊縛フォトの展示を終つて、別室へ移ると、そこには既に夕食の食膳が並べられてある。

各人名札の席に座つて、箕田氏の簡単な挨拶のあと、ビールがコップに注がれて乾杯、和気あいあい、大阪湾でとれた新鮮な魚に舌鼓をうちながら、座談に入つていった。

(尤も事実上の座談会は、撮影会や映画鑑賞或はフォト展示の間中、既に始まっていたといつてもいいのだが、その間の雑談は省いて夕食後の座談の中、公開に支障のある個所を除いた部分をアレンジして記事にします。)

同氏の好意により特に回覧

○西山氏提供八ミリ映画鑑賞

「いけにえ」 モノクロ二二〇呎

同氏の撮影モデルは、席上で発表しなかったが、細君であつたそうだ。(後日の通信によつて判明)

辻「西山さんは今回で二度目だけど、前の座談会と比べてどうですか？」

西「何回やってもいいものですね、この雰囲気は——。毎月一回位はやってほしいもんですが、どうも会費なしでこんなに歓待されては恐縮というより尻がこそばゆくなります。選ばれた私達はいゝのですが、他の読者に叱られませんか。いつもいうんだけど、学校の教師なんて内攻的なものでしょ、だから、偶にはハイド氏になつて、思いきり羽根を伸ばして見たい。まあ、そんな事でしような」堀「先程の先生の映画、えーと、題は何んだ

つけ、そうそう『いけにえ』でしたか。女の人の顔が判つきりうつらなかったでしょう。わざとあんな大きな猿轡したんですか。まるで顔一面蔽われている様で、折角の主人公の顔が判らず残念でしたよ」

三「まだ若いんでしよう、二十五、六かな」

堀「もう少しいいってるでしょう」

△辻村註V（実際の年齢は三十九歳になっておられる）

西「御想像に任しときますよ」

安「でも、よくあれだけ撮れたです

ね。全然、驚いちゃった。あれを見せて貰っただけでも東京から飛行機でぶっ飛ばしてきた甲斐あったですよ。凄いね。まったくイカしますね」

西「いやあ、そうあんまり褒められると照れ臭いですなあ」（笑声）

辻「やっぱり、シナリオかコンテのようなものをつくったの——」

西「思いつきもありましたけど、簡単なコンテは考えましたね」

辻「一人称映画というのかな、あれは——」。



カメラのレンズが眼になって追っている。たしか昔、洋画で『湖の女』というのは、あの手法でしたね——」

西「近頃はテレビのドラマの中なんかで時々やっていますよ。テレビは確かに参考になりますね。限られた視野で、簡単な装置で、狭いスタジオでテレビはかなりのものを出していますからね——」

△辻村註V

（『いけにえ』のストーリーを簡単に紹介しておきます。大陸の民家の風景、バックの土

堀に漢奸とか東洋鬼のスローガンが書かれてあって、地上に太い一本の杭が打ち込まれてある。一人の女が腰布一枚の姿で首枷を嵌められて杭の後側で両手をコードのようなもので縛られている。顔面一ぱいに掩う猿ぐつわ。女の縛られているシーンを側面やバックよりカットを重ねて、手首の縛り目や苦痛にゆがむ顔の表情、或は乱した足などをクローズ・アップしてある。殊に、手首をぎっちり括られて空をつかむ指の動きは、丹念に狙いをつけている。画面に鞭が飛んで女はのたうち廻る。肩から胸へかけて鞭跡が大きく写る。恐怖に脅える眼の超クローズ・アップ。瞳孔に剣をもって立ちはだかる男の姿が写っている。双刃の剣が乳房の上に徐々に刺し込まれてゆく。苦悶に歪む女の上半身。剣を引抜かれた後からドロドロと血がながれる。ペンチ様のもので乳首をぐいと挟むと、ギリギリとひねってゆく。女のはいているモンペが缺でズタズタに切り裂かれ、臀部に鞭が飛ぶ。



「こゝで場面が変って、首枷のまゝ、女は四つ這いになって、手足を鎖でつながれて這っている。髪の毛は荒縄で縛られて引っ張られている。時折、膝に飛ぶ鞭。」

更に場面は一転して、木は写らないが、バックは小山のシーンで、女は両膝に殆んど頭がつく位に身体を折り曲げて丁度Zの字のような恰好で太い縄でグルグル巻きにされて吊るされている。画面に太い男の腕があらわれたかと思うと、女の体を揺さぶる。髪の毛に重石がぶら下っている。地上にパンすると、

る。燃えしきっている薪の前に乱れ髪の毛の首が転っている。」

西「一見して凄い様ですが、タネ明しをするとなーんだといわれる。鞭はクローズ・アップしてあるでしょう。おしりをぶつところは、あれは実はネクタイなんです。だから全然、痛くないんですよ。剣は演劇部の小道具にあつてネ、ゼンマイ仕掛けで押すと柄の中へめり込むんです。剣をぬいたあとは、チュープ入りのソフト・チョコレートを通してあるんです。」

薪が吊り下った女の真下に積みかさねられてある。燃え上る瞬間。次第に煙を上げて遂にはメラメラと焰を出すに至る。吊られた女の姿にカメラは移って苦悶のたうつ。

青龍刀が画面いっぱいになり、女の首すじに当てられる。刀が一閃す

安「全然わからないなあ——」

西「Z型に吊るとモデルには余り痛くないし永続きするんですね、髪の毛に縛った重石ははりばて。それから焚木の燃えるのと、女を吊つてあるのとは、別々の場所です。本当だとたまらないよ。打ち落した首は勿論布切れにかつらをかぶせたものに過ぎないんです」

三「ペンチで乳首をくびつてるところがありましたがね、ありや痛いでしような——」

西「いきなり急撃にぐいとやると、たまりませんかね、じわじわ加減してやると、さして痛くない。あのシーンは十二コマに落して撮ったんです。」

安「ウーン、もう一度見たいなあ」

辻「駄目駄目、こんな調子じゃ、ちっとも先に進まない」(笑声)

桜「先生——、モデルがあれだけ、よく辛抱しましたねえ。いや、あのモデルは全く無形文化財だよ。是非、紹介して下さいよ」

西「……………」(笑って答えず)

安「先生は、どうして雑誌に書かないんですか。惜しいもんだ。僕なんか、小説や作文にはヨワイ方で、からきしなだけど……」

西「書きたいと思うことは時折あるんだが、仕事の方が忙しくてね。それに、僕のハイド

氏はほんの一部で、やはり日頃は九十パーセントまでが、日常生活に追われているんだ。月給は安いしね——」

辻「それじゃ、先生の話は、これ位として、堀江さん、少し……」

堀「女房がいつか投稿したらいいですね。私は少しも知らなかった」

箕「小説という程のものじゃなかったが、読者通信に毛の生えたような告白文でした。それも便箋に細かい字でギッチリと丹念に書いてね。今でも覚えている」

辻「その文中に、御主人たる貴方の事が、さかんに出てくる——」

堀「怒ったですよ、女房のくせに莫迦なこと書くなってネ」

西「一体、何ですか、それ？」

辻「浣腸ですよ。今夜集まられたうちで、浣腸に興味ある人居ますか？」

堀「本誌には割合と沢山のってるけど、矢張り全体から見ても、そう多くはないと思うが」

箕「一概にそうともいえませんが、それ単独というより、いろいろの傾向と混って、一つのアクセサリというのですかね、例えば、若く美しい婦人から浣腸されたいというマゾヒズム、若い女性に浣腸してやりたいという

サディズム、浣腸器具に対するフェティッシュというのも案外多い」

辻「堀江さん、貴方は一体どうなんですか。奥さんの投書では、貴方の方が積極的のように書いてありました」

堀「自分のことになると、中々いい難しいですな——」

箕「いゝじゃないですか、ザックバランに、いずれも皆さん、夫々にこれから話してもらうんだから」

堀「あれは、女房の奴、随分脚色してるんですよ。もともと看護婦だから、エネマシリンジとか、イルリガートルだとか、むつかしい名前を書いています、私は始め全然知らなかったんです。女房が腸の蠕動運動が弱って、夏のことでしたが、四、五日も通じがないというもんだから、それなら浣腸でもしたらどうだといったままで、唯それだけの事なんです



すがねえ」

三「で、貴方が奥さんにしたの——」

堀「そりや夫婦ですからね、それ位のことはいたしますよ」(笑声)

辻「事実は小説ほど奇ではないということですか——」

桜「その奥さんの文、何年の何月号にのっているんです？」

堀「忘れしましたよ。又知っていても、一寸いえますね。どうしても知りたいなら、箕田さんからでも。どう、覚えているでしょう。

僕は他人ごとのつもりで聞くだけだから、一向にピンときません」(笑声)

箕「あれは多分に羽村京子の文章の感化をうけてるネ。どうせ貴方の買われたうちの本を留守中にでも読んで、浣腸を美化し妄想して書いたんでしょう。併し、貴方が知らずに御本人だけ独りで浣腸を愉しんでいる様に書かれてあったけど、そのことについては御存知ないんでしょう？」

堀「出鱈目だとばかりはいいきれないんですが、それにしても、あれは極端だね。大体二立の水をエネマシリンジで浣腸

したとしても、独りでやるには、こりや相当時間がかゝると思うんだ。子供も二人いるしね。無理じゃないかな——」

辻「じゃ、縛りの方？」

堀「その方は、ときたまというところですか、やるとしても——」

辻「その、ときたまというやつを聞きましょうか——」

堀「そう僕ばかり責めないで下さいよ。一寸お株を廻して頂いて、いずれ後程、ゆっくり僕の

告白は御披露するとして……」

辻「それでは、こゝらで安達さん。東京から折角遠いところをわざわざ、おいで下さったのだから、旅の恥はなんとかっていいいますから新婚ホヤホヤのところを一つ、話して下さいませんか」

安「僕の家は麻布で、自分でいうのも可笑しいが、チョットした厳格な家なんで、何やかやと凄くきびしいんです。だもんだから、女房を貰う時も両親がひどく反対したんです。オヤジの会社のタイピストなんですから、オ



ヤジにしちや面目丸潰れってわけですね。身分が違うとか、すったもんだしましたが、結局、僕が強引に押しきってしまっただけです。そんないきさつで結婚したものですから僕の発言権といへますか、愛情といへますか、相当、物をいってしましてね、最初はとっても驚いたようですが厭だというのを無理にふん縛ってしまいましたよ。どうだ、僕の女房らしくするかってね。僕と一緒になった以上、今迄の恋愛期間中は男女同権でも、一旦、結婚してしまえば、僕の奴隷になるんだ

なんて、一寸無茶でしたが——」
辻「大変な旦那様だが、女房教育は満点ですね。で、それから……」

安「なんといっても、好きで一緒にになったんだから、そこは違えますね。女房も、すぐ判ってくれました。だって、あとはズンと可愛がってやるんだから——」(笑声)

桜川「そりや、酒乱の夫が理由もなく叩いたりするのは、わけが違う」
安「それからは、凄く協力的で

……」

辻「凄く——ねえ。凄く君の言葉がうつってしまったよ。——（笑声）つまりだ。スゴク綺麗な人なんだね、一目惚れする。先程の写真の彼女、そうなんでしょう」

安「あッ、見破られちゃったか、（笑声）——実はそうなんです。そうと判りや、何だか恥かしいけど、バリバリ写真に撮っちゃいましたね、暗室で一緒に焼くんです。『あらッ、この縛り方凄いわね』なんて（声色がうまく一同笑声）女房が自分の縛られた写真を眺めているんです。この本もずっと参考にして縛ったりするけど、まつとうには到底、四馬孝の絵のように、いきませんね」

三「殆んどが無理と違いますが。私は今、一寸した理由で家内と別居して、姫路の駅前通りのスタンドのマダムと一緒に暮してゐるんですが、まあ、そのマダムを仮に宏子としておきましょう。何んでも以前、同棲していた男が相当なサジストでね、宏子はいつの間にかすっかりマゾに仕込まれていた様です。まる一日、雁字搦目に縛られて押入れに放り込まれていた事など、さらにあった様です。宏子の商売にもよりましようが、元来が水商売だけに、多少は疑ぐられても仕方がない様な素

振りもあって、男の嫉妬心をあふり立てたのでしよう」

辻「貴方も、そのマゾっぽいところに、ぞっこん惚れ込んだというわけですね」

三「まあ、そういう事も考えられますね。私自身、今でも宏子にフト浮気されていないかなあ、と不安に感じるときもある位ですから男に惚れっぽい尻軽の女に違いないんですが、妙に男心をひきつける魅力を持った女なんです」

辻「それで、その宏子さんと、どうしてお知り合いになられたんです」

三「それも、今から考えれば、宏子の浮気性と、ちらりと覗かせたマゾ気質からですね。体よく云っていますが、本当は以前の男から私が宏子を奪った様なもので、それだけに、

又いつか、誰かにとられやしないかと、そうした気持が、私のサド性に拍車をかけ、一方宏子はマゾですから、私のそんな態度をけしかけるようなことばかり仕出かしましてね」箕「昨日と今夜、二晩もこちらへ泊るのは大分心配でしょう」

三「店の娘を一人手馴づけて監視させてありますが、近頃はいささか神妙なので、虐めにくくて、むしろ浮気めいた事のあった方が、

ネタが出来ていいんですが……」

辻「それは負け惜しみ——」

三「本音ですよ。私が激しく責めれば、それだけ、むしろ愉んでいるといった女ですからね。一寸目を放すと何か原因をつくる。この間も、よその男から来た手紙をわざわざ見てくれといわんばかりに、筆箱の抽出へしまつてある」

辻「演出効果万点、女の中で浮気性の女は一番面白いといえますからね」

三「しかし、どうせ、こんな関係は長続きしないと思うと、こちらもやるだけ楽しんで飽いた頃、誰かにバトンを譲った方が、反ってサバサバしていゝかもしれない。そんな目下の心境ですね」

西「それで、三輪さんの虐め方といって、具体的にいうと、どうなの、やはり縛り、それとも責め？」

三「責められて喜んでいる様な女ですから、もう無茶苦茶ですね。段々ときついものになってゆくのは自分でもわかります。電気洗濯機の本棒が丁度手頃の檻の様でして、この中へ十五貫近い宏子を押し込め、釘を打って本当に蓋をして、水道からホースを引いて、ジャアジャア掛けてやりましたが、こんなこと

位では屁古たれません」

西「やはり、その時その時の理由をつけて責めに入るわけですか」

三「そう、わけもなし、ということはありませんね。浮気の相手を言えってことはよく使います。或る晩など、むっくりと肥えている宏子の腹に麻縄の細いのを巻きつけて、思いきり絞り上げました。蜘蛛の腹のようにくびれて、麻紐はすっかり姿を消してしまいました。だが、これには流石にこたえたとみえて、音を挙げました。浮気の相手を訊ねましたが、はっきり返事をしません。それどころか『これだけは勘忍や。外の仕置なら、何んでも辛抱する』と言いますので、灸責めにしてやったことがあります」

辻「フーム、灸責めにネ、そりや面白い」

三「声を立てられぬ様にダスターを口に押し込んで、その上からタオルでしっかりと猿ぐつわをはめ……」

箕「マゾ女に猿ぐつわ。これは、息がきぬ位にきつくやるという。それから……」

三「ベッドの四隅にうつ伏せにした宏子の手足を強く括って、大きな灸を臀にすえてやりました。脂汗をにじませて、グッと熱さをこらえているところは見事なものでした」

安「灸責めは肌にさえ痕が残らないんなら、素晴らしいアイデアがあるんだが……」

桜「灸跡がみにくいでしょう」

三「自分ですえたのか、以前の男にすえられたのか、肩や腰に灸跡があるんです。私は尻軽女の尻へすえてやりましたかね」

桜「相当大きいのを？ さぞ熱がったことでしょう」

三「なにしろツボもへったくれもないんですから、ピンポン球ほどもあるもぐさを糊でへばりつけて火をつけてやりました。煙が蒙蒙と部屋に立ちこめ壮観なものでした」

辻「話は変わりますが、大阪でも最近ヌードスタジオが大分増えてきて、中には緊縛モデルもいるとききますが——」

桜「私は市内のスタジオは全部廻ってみました。全然ありませんね。Tスタジオの白人のモデル、あれだけは顔も身体も立派ですが他のは、フィルムが勿体ない位のザコばかりですね」

辻「スタジオ廻りをして、がっかりさせられるのがオチだね。その白人というのは、どこの国の人？」

桜「白系露人とかいってました。年齢は十八、一度撮ってみる価値はありますね」

安「東京じや随分、多いんですよ。いゝものあるかわりに凄いのが居るそうですよ。大体がコールガールなんかになっちゃってしまっているそうだけど……」

桜「K新聞やM新聞に目を通してしていると間違っていたら失礼、僕の主観だけど、いかがわしそうなものが随分とあるネ」

辻「いかがわしそうなところが、いいじやないかね」(笑声)

安「万事、金次第ですネ。僕ルノーの車持ってるでしょ。ドライブに誘うと電話一つで女が来るんです。始めて逢った同志二人でもって、ハマ辺りへ九〇軒位でぶつ飛ばすんです。銀座のお姐ちゃんスタイルの可愛い娘でした。が、月並じや面白くねえから、なんか変った事をやるうじやねえかと持ちかけたんです。どうせ一日買われた身体だから、いいさと簡単にOKです。車の前の荷物入れに忍ばせた鞆には、たんまりと縄がつめ込んであるし、フラッシュもカメラも手廻しよく放り込んであるというわけだね。よし来た、とばかりママのナイトクラブで程よく気分を出して、それから僕のアジトへってわけさ」

辻「アジトっていうと、何かそんなところ知ってるの——」

安「グループの悪友、結婚前のネ、断っておくが、これはすべて結婚前の話ですよ。唯今はモッパラ女房オンリーなんで、これは愛する女房の為にも一言いっておかなきゃネ。この悪友が、僕をこの道へ誘い込んだベテランで、又凄い奴なんです。よし来た仲公、任しときな、とハリ切って、いきなり女にネツカチーフで目かくししてしまった。目かくしされると、何をされるかわからないんで不安なんです。僕は女に片手は握らしてあるんですから、まあ、その方は心配ないんですが。」



奴は女の腰のあたりを蹴りつけてころがしたんです。ころころと転ったところを、足の爪先までキリキリ縛り上げて、柱に括りつけると『今夜はこれで遊ぶんだよ』と、子供がよく玩具にしているY字型の木の股にゴムをつけたパチンコ、あれでね、

塩豆を玉にして三米ばかり離れた場所からパチパチ当てるんです。あれだって、結構痛いんだ。当り所が悪いとヒイヒイ悲鳴を挙げるんです。当たった後が、丁度蚊に喰われた程に赤くなって、ポチポチの斑点だらけ。おへソを中心にマジックインキで円を描いてヘソの中心が大当り」

辻「仲々面白い遊びですね。その悪友というのは、芸術的なセンスもある——」

安「マジックインキといえば、八色揃えたやつで、女の体中に落書きをしたことがある。こ

れは、なかなかとれないってネ、鎌倉辺りでも、此の年は女の体に絵を描くのが流行ってたそうだが、僕等はその尖端を行って誤です。勿論、お面だって手加減しやしない。眼のふちをぐるりと赤丸を描いて、ヒゲを生やした図なんて、ふき出したくなる」

辻「相当なものだね、ネリカン行きだよ」

安「だけど、女房を買ってからは、随分とおとなしいですよ」

三「今のうちはね……」

寅「こゝら辺りで、堀江さん、どう？」

堀「大分、喋り易くなった様ですな、今日は流腸に興味ある人はいない様だから、縛りの方でゆこう。といっても、東京のボンボン程悪いことはしていないけど……」

安「そんな言い方はないですよ——」

堀「それは冗談ですよ。ところで僕の女房との事だが、流腸はいわば一種の被虐に通じると思うんです。僕も潜在的なサジストだったが、結婚当初、とても女房を縛ったりなんて考えもしなかったね。箕田氏の便りが女房宛に来た時、実はドキンとしたんです。それまで、僕は単なる一読者に過ぎなかったんですからね。これはいけると、内心ワクワクしてたんですが、何故黙って投稿なんかしたんだ

と、怒るいゝ口実が出来たわけで、まあ、こんなところから縛りに移行していったということですね」

箕「お膳立はすっかり出来ていた——」

安「だから、面倒臭い事は一足飛びに、本縛りに直入しました。こんな趣味を持っている夫の一面を知ってくれた、ということだけで百万の味方を得た思いでね。浣腸には、こっちは一向に興味がないので、その当時は縛りオンリー、縛りのプレイに没入したっていうわけですね、物珍しさもあって——」

辻「今は?……」

堀「今は何か卒業したって感じですよ。家内の妊娠した時、産み月に、妊婦を逆吊りにして出刃をとぐ安達ヶ原の鬼婆の絵の構図通りにやってみaitと思いましたが、さすがに思いつくだけで逆吊りなんて、とても出来っこありませんね」

西山「伊藤晴雨氏は妊娠の逆さ吊りというのを実際にやって写真にとっていますね、変態資料」とかの口絵に載っていたのを覚えています」

堀「安達さんの奥さんも妊娠中だそうです何かプランがあたりですか?」

安「僕は人間マイナス零才の記録というので

すかね、段々と膨れてゆく腹部の状況をカメラに納めるつもりをしていますか——」

辻「どちらへ転んだって悪趣味だなあ。こんな座談会をやるから、前の様に『週刊男性』あたりに書かれたりする——」

西「辻村さんも、その事で一寸反駁しておられましたね。私はそんな雑誌は一度も読んだことないんだが、十一月号の話の屑籠で初めて知りました。あれ一体どんな事なの?」

三「辻村さんの言われる通り、他人の褌で相撲をとってるんだよ。本誌の内容はあゝだこうだと引例を長く書いて、チョッピリ意見めいた事を書き添えてある——」

辻「その底意は見えていitる。そんな悪いものなら長々と引用しなくてもいいわけだ」

三「絹川嬢の緊縛写真なんかのせてね。あれは盗用にならないんですか——」

箕「公然の盗用だね。(笑声) 無料の広告と思えばさして腹もたたんよ。宣伝になって助かった、といえば馬鹿らしくなって載せなくなる。やつつけたつもりでいるのがね」

西「絹川嬢といえば、このところ大活躍ですが、フェイスといいスタイルといい、近來出色の人ですね。表情に難点という人もあるが、私なんか、この人は好きだね」

桜「僕もこのモデルはいいと思う。今日の館さんね、この人もよくなるんじゃないか」

西「しかし、本誌の編集も大変でしょうね。僕等には全然興味のない事でも、凡ゆるアブの面に広範囲に亘って、読者の意見も聞かないといけないのだからね」

桜「褌なんか全然だからな。横村とかいう人の抹香くさい小説、あれを面白いといitてる読者もある。通信欄で随喜の涙を流してitるんだから、すきずきだと思ふナ」

西「切腹もピンと来ない、女斗美や褌ものもいわば同性愛の変型的なものを考えるネ。それにマゾ小説の家畜人ヤプーも我々門外漢には、しんどかった」

辻「あれはあれで力作ですね。あのボキヤブラリーの抱負さには、我々到底、足許へも及ばないものね。あれだけの人がサド派にも現れないものかと羨ましい位だ」

箕「こゝら辺りで編集についての希望といitたことでも一つ——」

三「これは僕の希望ですけどね。毎月号に四馬孝先生の口絵が載ってるでしょう。一枚一枚は素晴らしいアイデアと女体悦虐の極致を描き出していますが、関連性がないものだからすぐ忘れ去られてしまうと思うんです。四馬

先生の口絵を絵物語式の読物にして貰えたら書かれてある絵のそれぞれの奇妙不可思議ないろいろの道具や貴具がイキイキと生きてくると思うんですが——」

辻「絵描きと小説家とは別ものだし——」

三「いや、小説という程の大層なものではなくとも、特に特集号の何十頁とある絵は、そのまま、簡単な説明だけでは、勿体ないと思うんです。大体登場する女性は、いつも同じ様に描かれているんだし、描く人のイメージを綴っただけでも、いゝと思うんですけど……」

箕「絵の方はほとんど描いてくれますが、文章の方は弱いんじゃないかな。辻村君あたりに助太刀して貰うといゝんだが——」

桜「本誌も段々と稀少価値が出てきた様ですね。昭和二十八、九年頃の、定価百円から百四十円の古本が、二百円以上で売られているよ。しかも、よく見て買わんと、中の写真のいゝところが切られていたりしてね」

西「昭和初期の犯罪公論の様な、稀少価値は高まりつゝあるのは確かだ」

安「さっきの編集への希望ですが、各月号のグラビアの写真、あれをもう少し増やして貰えると嬉しいんですがね。小出しにしないでドシドシ載せてほしいですな。あれだけを目

当てに買ってる人もある位だから——」

堀「本誌の方針でしようが、分譲写真には素晴らしいのが沢山あるのだが、雑誌自体の口絵となると案外物足りないフォトが多いんじゃないかな。分譲写真とせめて同程度のものを誌上にのせて欲しい。これが僕の希望です」

箕「いや、これはどうも——」

堀「第一級品は分譲品に廻して、のこりのカスだけを口絵にするのと違いますか」

箕「そんなことはないヨ。まあ、口絵用、分譲品用として撮るとする場合も、ないことはありませんが、概して口絵に使うものは着衣のものが多いということ。これは店頭に並べられることを考えれば当然でしょう」

西「八ミリの方が一向にその後音沙汰なしですが、費用は少々高くついてもよいから、八ミリ緊縛映画撮影会を毎月一回開催してもらえたら、と無理な望みを抱いています」

辻「私もそういう機会があったらと願っている一人です」

三「撮影会もだが、僕は会合の方がいゝな、座談会といった大げさなものじゃなくて、雑談会といった程度で、編集部の人を囲んで夕食でも一緒にする——」

堀「記事にしないでね……」

西「そうすりや、何んでも喋れる」

桜「そんな会だったら毎日でもいい、然し、編集部の人とはたまらんね。不良中年の相手をさせられちゃ。(箕田氏へ向って)じきじき逢いたいという人も多いでしょうね」

箕「はじめのうちは誰にでも逢っていましたが、それじゃ何にも出来ない。参ってしまったが、今度は誰にも逢わない、ということにして逃げをうった」

桜「で、本当に誰にも逢わない？」

箕「誰にも逢わない、といっている丁度いゝ加減ですナ。夕食を御馳走するとか、モデルを紹介するとか、なんだかんだといって引っぱり出されるから結構逢っていることになるナ」

西「私達も今日の御礼に、一つ箕田さんと辻村さんを招待して、記事にしないということではハメをはずしましょうかな」

三「賛成、賛成」

辻「では、大分話もはずみましたから、この辺りで終りとして、あとは銘々御ゆっくりハメをはずして頂きましょう。有難うございました」

(おわり)



読者通信を拝見して私のような拙筆のものに、期待をかけて下さる読者が多くいらっしゃることに心から有難いと思います。大きな感激に包まれております。打明けて申上げれば、魔教園の中絶的な完結は病の故で御座います。此処、半年来、激痛の伴う病気に罹り、過労とか飲酒は絶対に禁じられております。原稿を書いて夜更しをするとは一番悪く、途端に三日ばかり呻吟せねばならぬ状態で、女を呻吟させてばかりいた文を書き綴ったが故の酬いかもしれません。今、医者にかかり、徹底的に

根治しようと努力致しています。糧を得る本来の仕事も、そのような事情の為に専心出来ず（会社勤めではありません）気ばかり急いでおる状態です。加えて、住居の移転やら血縁間の問題やら魔教園の執筆中に、いろいろと事件が累積し、沼氏に指摘されましたように構想自体が乱れて、皆様に多大な御迷惑をおかけ致しましたことを重々お詫び申し上げます。暫くはじっくりと想を練り、検討して（と口巾つたく云つても、大したものは書けそうにもありませんが……）編集部の方々の御許しを得ましたら、病気の治療を待つて筆を把つてみたいと存じております。今後共、読者諸兄姉の御鞭撻をお願い申上げる次第です。

（土路草一）

初めて誌上を借りてお便り致します。私は本誌を手にしてから四年ぐらいいになります。三十五才の女装マニヤ、いや、むしろ女性化願望者です。今まで何か恥しい気持もあったり又、恐しい感じもあったりして誰とも交際出来ませんでした。が思い切ってお便りするこゝとに決めました。その意味で十一月号の東京、新井様のお便りは嬉

しく拝見いたしました。出来れば一度、ぜひお会いしたいと思えます。御連絡の方法をお考え頂きたいと存じます。私は本当の意味での女装して外出したことはありません。専ら、スラックスにシャツ・ブラウス程度で外出をいたしております。家庭では、やはりスカートは目立ちますのでスラックス・スタイルで過しております。私のこうした性癖には妻も容認しておりますが、近所の手前もあるの、で只、あまり目立たない様にしておひしといっております。出勤の朝、先ず、お化粧です。コールドで下地して薄いカラー化粧をいたします。

◎写真特写引受◎

特別に変つた着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。

（返信料同封下さい）

ひおねがよいいたします。始めて通信室に入れていただき。多くの誌面が女性の責に充てられているのを、いつも残念に思っている私は、特に男性の責めに深い興味を持つてゐるのです。最近号の菅良太氏の創作は大変、面白く読みました。が、通信の中で菅氏が述べておられたカットの部分が惜まれてなりません。さそり責め等、どのようなものかと思つて、色々こじつけてみますが一向にピンと来ません。元来、文才がありませんので、他の方のように空想を文学化する事など思いもありません。私も敗戦当時、身に覚えのない事でソ連軍の取調べを受け拷問されたことがありますが、思いたつて書いても、なかなか上手に書けません。かといって本誌上に名筆を振られた三根耕二氏、嶽取一氏、青葉慎一氏、また現在の健筆を揮われる植村泰氏の各文章の迫真的描写には、まったく感心するばかりです。なにとぞ菅氏におかれても、多少のカットに怯ま

（横浜 虹生）

れることなく、私たちのために力作を発表されんことをお願いいたします。なお、菅氏は映画に興味深い方と思われませんが、私も同じ趣味でウイリアム・ホールデンと三船敏郎のファンでもあります。ホールデンの縛られたのは見たことありまんが、三船は二、三縛られる映画があり、柳生武芸帖、双龍秘剣では縛られて木に吊るされるシーンがあつて忘れられません。ずっと以前のことになりましたが、たしかこの欄で青葉氏のように記憶していましたが、口絵に一頁でも男性を、縛りや責めでなくともよい、オーソドックスなものを望んでおられました、困難なこととみえて未だに実現に至りません。しかしながら、かつて掲載されたような映画のスクリーンならば誌上に掲げること、さほどむづかしくはないと思われまふ。そのつもりで、ちよつと考えましても昨年、公開されました。憲兵と幽霊の中山昭二が拷問されるシーンとか、前記「柳生武芸帖」また例のセシル・B・デミル作品「十戒」の中にあるジョン・デレックの拷問、チャールトン・ヘストンが全身、鉄鎖で拘束された部分などが思い出されますし、着衣

のものならば一層多いに違いありません。私の処では映画が遅いのですが、近頃、観たものでは、鞍馬天狗の片岡栄二郎の吊し責め、紅あざみの本郷功次郎の吊し責め等がありましたし、外国映画でも何か見つかることでしょう。目新しい提案でもありませんが、梶孫一氏なども、きつと何か好いスチールをお持ちの筈、一度御検討下されば、嬉しいと思います。また、私のような傾向の方は絵をお描きになつて自ら慰めておられるらしいですが、恥しいことです。私は絵心の方は、さっぱりで、重労働をしているせいか筆を持つと手が小刻みに動き、細かく描こうと思えば、なお妙なものになつてしまひ、今は諦めてしまひました。男の縛り絵、責め絵が、ほとんど見あたらない昨今どなたか同好の方で私のアイデアを絵に書いて下さる方は、いらつしやらないでしようか。(北海道 小谷生)

○ 思い出の活動写真と芝居。中学生時代、帝キネ?五月信子、森静子の四谷怪談での吊り、大学時代ではダニエル・ダリユーのデビュイ作?仏映画「暁に帰る」のイヴニング姿の手錠。近作に至っては

既に豊年万作型で多言不要。どんなにか楽天地時代(千日前)天勝奇術、ショーの内の事、辻野良一が花月劇場での時代の事をお知りの方は、お知らせ合いたしませんか?詳細にしてホントの事は旧作「ボクの責め方」を(一)から再読して下さい。(勿論、あれは約半分ぐらいの発言であり、その中、又半分しか載っていないのですが)私の云わんとする事は、ほぼ、おわかりになると思います。昨今は、京都祇園で舞妓を二人育成中で、近い中にフオトもお見せいたします。勿論、アフレコではありませんが。8ミリ・ワイドカラー・トイキーで、云うなれば、このオッサン手を焼いておりやすデス。近頃マニア・レポートも本格的狂人が多くて肌寒いですね。私は熱と力積極的の内にもホンワカ、フンワカ理性とコモンセンスで、ムード第一でやっています。ムードだか

らといつて空想ではなく断じてリアルリストです。私自身が街頭で可能の範囲ですが(勿論、夜の都心ビルの谷間で)縛りと、はだしを續けているので何とか他の人達の実演を——と、それが今の念願です。室内のものは十分、所見済です。で、貴殿もし街頭での所見ありましたら、マニア同志のよしみでお洩し下さい。山川様へ。

(E・I生)

花坂道子緊縛フオト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

○ 編集部の皆様、読者の皆様、お元気ですか。いつも楽しく読者の便りを拝見しておりますが案外切腹ファンは少いようです。小生は女体切腹の大ファンです。白いふくよかな肌に刀を突きさし苦痛に耐えている女体を想像する時、えもいわれぬ桃源境をさまよいます。女体切腹は女性にとって最も神聖な最高の被虐性ではないでしょうか。十一月号の考察「腹を切

る事」は小生の待ちに待っていたものでした。次号が楽しみです。藤山秀緒氏の記事も大歓迎です。皆様の御意見を、どしどしお出し下さい。(兵庫 T・O生)

○ 本誌の素晴らしい発展は、全く我々マニアの心を、満足させます。殊に絹川文代嬢、大塚啓子嬢等のグラビアでの御奮闘は全く頼もしい限りです。しかし一方、新人で強烈なマゾ或は妖艶なサドのモデルが現われて来ないのは淋しいことです。次々と新しいモデルの方のラオトも掲載下さる様、編集部におねがいいたします。(Y生)

○ 秋風が身にしみる頃となりました。編集部のみなさま方にはお変わりございませんか。さて早速乍ら臨時増刊、サド特集号第三集を入手、拝読しましたので一言申し上げます。初めに表紙面の面白さは先ず敬意を表します。ついて四馬孝氏画集は、いつも鋭い女体美をみせて居られる氏の筆画、中で

も「股裂きの実験」と「猿ぐつわとタバコ責め」は非常に面白く拝見、又「森の中のサラン」は、かつての新東宝映画「九十九本目の生娘」を目のあたりに思い浮べて女の苦しみを連想するのに十分でした。この映画は大切な処は原作より多少カットされておりました。が、捕われて太い縄で縛り上げられる女体は、猿ぐつわこそありませんでしたけれど、観念した女性の美が溢れておりました。この意味で氏の「森の中のサラン」は大いに満足です。つぎに写真集を拝見しまして、総体的に素晴らしい主モデルの絹川文代嬢が、いつも変らない素晴らしい縛られ姿、そして数々の美しい画面を飾っておられるので感謝申し上げる次第です。次に「佳音一尾」「脱し得ぬ拘束」の二集面には、彼女の縛られた姿を大いに堪能いたしました。前者は白い猿ぐつわと黒の洋服、足の曲線美は面白く、「脱し得ぬ拘束」では反対の白玉の猿ぐつわと白いシユミーズが、とっても印

写真 三態

(ハリツケ) 略号(はり)

大判判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

絹川文代緊縛姿態集

大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

象的で、黒と白の調和が素晴らしいと存じます。大きく開いた太股、観念した苦しみの表情、それもよく撮れています。ただ欲を申しますと、猿ぐつわを、もう少し小さく且つ固く噛ましたら効果は一層光るだろうに思います。今後とも大いに期待しています。つぎに新人かそれとも前から居られたのか、よく存じませんが、田原美佐子嬢の「タイトルの冷感」は、おとなしく観念している表情が溢れており、縄の掛け方、不十分なれども薄い白いシユミーズ姿は頂けますし、体の線も、よい人のように思われますので今後大いに期待しております。浜本、三木両嬢の「狂花の戯れ」を見ますと、残念なことに小生には、どちらが三木嬢か浜本嬢なのか、わかりません。猿ぐつわも十分噛ましており、苦しみの表情も上手ですので、これらを期待しているモデルです。

大塚啓子嬢の「泥まみれ青春」は少々惨酷でした。さぞ痛かったろうと思いますが石を抱かせるとはいやはや、全く啓子嬢に御同情申し上げます。豊満な体の人ですので辛抱も大変だったでしょうが、この人は他の責め姿があると思えますから、余り痛めつけなくて頂きたい。愛川悦子嬢に今度は期待していましたが緊縛美が見られずが入に入れられた女体の、ぐるぐる巻きを見せてくれましたが、この太縄の掛け方を、どのモデルに於きましても望んでおります。余りごちゃごちゃ縄をかけない方がいいのではないかと、小生は少くとも、こう申し上げたい次第です。花坂道子嬢「哀美抽出」は大変よく出来ております。家庭でも、このぐらゐの遊戯はあるのではないかと、これは小生だけが思っている夢想なんです、とにかく道子嬢

れることなく、私たちのために力作を発表されんことをお願いいたします。なお、菅氏は映画に興味深い方と思われますが、私も同じ趣味でウイリアム・ホールデンと三船敏郎のファンでもあります。ホールデンの縛られたのは見たことありませんが、三船は二、三縛られる映画があり、柳生武芸帖、双龍秘剣では縛られて木に吊るされるシーンがあつて忘れられません。ずっと以前のことになりましたが、たしかこの欄で青葉氏のよう記憶していましたが、口絵に一頁でも男性を、縛りや責めなどともよい、オーソドックスなものを望んでおられました。困難なことをみえて未だに実現に至りません。しかしながら、かつて掲載されたような映画のスクリーンなら雑誌上に掲げること、さほどむづかしいとは思われず。そのつもりで、ちよつと考えまして昨年、公開されました。憲兵と幽霊の中山昭二が拷問されるシーンとか、前記「柳生武芸帖」また例のセシル・B・デミル作品「十戒」の中にあるジョン・デレックの拷問、チャールトン・ヘストンが全身、鉄鎖で拘束された部分などが思い出されますし、着衣

のものならば一層多いに違いありません。私の処では映画が遅いのですが、近頃、観たものでは鞍馬天狗の片岡栄二郎の吊し責め、紅あざみの本郷功次郎の吊し責め等がありましたし、外国映画でも何か見つかることでしょう。目新しい提案でもありませんが、梶孫一氏なども、きつと何か好いスチールをお持ちの筈、一度御検討下されば、嬉しいと思います。また、私のような傾向の方は絵をお描きになつて自ら慰めておられるらしいですが、恥しいことです。私は絵心の方は、さっぱりで、重労働をしているせいか筆を持つと手が小刻みに動き、細かく描こうと思えば、なお妙なものになつてしまい、今は諦めてしましました。男の縛り絵、責め絵が、ほとんど見あたらない昨今どなたか同好の方で私のアイディアを絵に書いて下さる方は、いらつしやらないでしようか。(北海道 小谷生)

○ 思い出の活動写真と芝居。中学生時代、帝キネ?五月信子、森静子の四谷怪談での吊り、大学時代ではダニエル・ダリユーのデビュイ作?仏映画「暁に帰る」のイヴニング姿の手錠。近作に至っては

既に豊年万作型で多言不要。どんなに楽天地時代(千日前)天勝奇術ショーの内の事、辻野良一が花月劇場での時代の事をお知りの方は、お知らせ合いたしませんか?詳細にしてホントの事は旧作「ボクの責め方」を(一)から再読して下さい。(勿論、あれは約半分ぐらいの発言であり、その中、又半分しか載っていないのですが)私の云わんとする事は、ほぼ、おわかりになると思います。昨今は、京都祇園で舞妓を二人育成中で、近い中にフオトもお見せいたします。勿論、アフレコではありませんが。8ミリ・ワイドカラー・トイキーで、云うなれば、このオッサン手を焼いておりやすデス。近頃マニア・レポートも本格的狂人が多くて肌寒いですね。私は熱と力積極的の内にもホンワカ、フンワカ理性とコモンセンスで、ムード第一でやっています。ムードだか

らといつて空想ではなく断じてリアルリストです。私自身が街頭で可能の範囲ですが(勿論、夜の都心ビルの谷間で)縛りと、はだしを續けているので何とか他の人達の実演を——と、それが今の念願です。室内のものは十分、所見済です。で、貴殿もし街頭での所見ありましたら、マニア同志のよしみでお洩し下さい。山川様へ。

(E・I生)

○ 編集部の皆様、読者の皆様、お元気ですか。いつも楽しく読者の便りを拝見しておりますが案外切腹ファンは少いようです。小生は女体切腹の大ファンです。白いふくよかな肌に刀を突きさし苦痛に耐えている女体を想像する時、えもいわれぬ桃源境をさまよいます。女体切腹は女性にとって最も神聖な最高の被虐性ではないでしょうか。十一月号の考察「腹を切

花坂道子緊縛フォト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

る事」は小生の待ちに待っていたものでした。次号が楽しみです。藤山秀緒氏の記事も大歓迎です。皆様の御意見を、どしどしお出し下さい。(兵庫 T・O生)

○ 本誌の素晴らしい発展は、全く我々マニアの心を、満足させます。殊に絹川文代嬢、大塚啓子嬢等のグラビアでの御奮闘は全く頼もしい限りです。しかし一方、新人で強烈なマゾ或は妖艶なサドのモデルが現われて来ないのは淋しいことです。次々と新しいモデルの方のラオトも掲載下さる様、編集部におねがいいたします。(Y生)

○ 秋風が身にしみる頃となりました。編集部のみなさま方にはお変わりございませんか。さて早速乍ら臨時増刊、サド特集号第三集を入手、拝読しましたので一言申し上げます。初めに表紙画の面白さには先ず敬意を表します。ついて四馬孝氏画集は、いつも鋭い女体美をみせて居られる氏の筆画、中で

も「股裂きの実験」と「猿ぐつわとタバコ責め」は非常に面白く拝見、又「森の中のサラシ」は、かつての新東宝映画「九十九本目の生娘」を目のあたりに思い浮べて女の苦しみを連想するのに十分でした。この映画は大切な処は原作より多少カットされておりましたが、捕われて太い縄で縛り上げられる女体は、猿ぐつわこそありませんでしたけれど、観念した女性の美が溢れておりました。この意味で氏の「森の中のサラシ」は大いに満足です。つぎに写真集を拝見しまして、総体的に素晴らしい主モデルの絹川文代嬢が、いつも変らない素晴らしい縛られ姿、そして数々の美しい画面を飾っておられるので感謝申し上げる次第です。次に「佳肴一尾」「脱し得ぬ拘束」の二集面には、彼女の縛られた姿を大いに堪能いたしました。前者は白い猿ぐつわと黒の洋服、足の曲線美は面白く、「脱し得ぬ拘束」では反対の白玉の猿ぐつわと白いシユミーズが、とっても印

写真 三態

(ハリツケ) 略号(はり)

大判印刷紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

絹川文代緊縛姿態集

大手札型印刷紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

象的で、黒と白の調和が素晴らしいと存じます。大きく開いた太股、観念した苦しみの表情、それもよく撮れています。ただ欲を申しますと、猿ぐつわを、もう少し小さく且つ固く噛ましたら効果は一層光るだろうに思います。今後とも大いに期待しています。つぎに新人かそれとも前から居られたのか、よく存じませんが、田原美佐子嬢の「タイトルの冷感」は、おとなしく観念している表情が溢れており、縄の掛け方、不十分なれども薄い白いシユミーズ姿は頂けますし、体の線も、よい人のように思われますので今後大いに期待しております。浜本、三木両嬢の「狂花の戯れ」を見ますと、残念なことに小生には、どちらが三木嬢か浜本嬢なのか、わかりません。猿ぐつわも十分噛ましており、苦しみの表情も上手ですので、これらを期待しているモデルです。

大塚啓子嬢の「泥まみれ青春」は少々惨酷でした。さぞ痛かったろうと思いますが石を抱かせるとはいやはや、全く啓子嬢に御同情申し上げます。豊満な体の人ですので辛抱も大変だったでしょうが、この人は他の責め姿があると思えますから、余り痛めつけなくて頂きたい。愛川悦子嬢に今度は期待していましたが緊縛美が見られずが入に入れられた女体の、ぐるぐる巻きを見せてくれましたが、この太縄の掛け方を、どのモデルに於きましても望んでおります。余りごちゃごちゃ縄をかけない方がいいのではなかと、小生は少くとも、こう申し上げたい次第です。花坂道子嬢「哀美抽出」は大変よく出来ております。家庭でも、このぐらゐの遊戯はあるのではないかと、これは小生だけが思っている夢想なんです、とにかく道子嬢

の姿は頂けます。最後に、なつかしい旧号時代を偲びつつ「緊縛モデル夜話」を拝読いたしましたことを申し上げ、筆をおきます。各モデルの方々の緊縛美を切に求めて止みません。(岩谷栄二郎)

私は白足袋に強い愛着を感じます。しかし紺足袋、黒朱子、色別珍には何も興味ありません。新しい白足袋にのみ心を魅かれます。小学校の五年生の時、学芸会で私は商人の役をやり、盲導の着物、角帯、前垂れ、白足袋の恰好で出ました。その後、町会の結成記念で演芸会をやることになり、私も女の子の姿になり出演しました。このことが後年、生活上の変化を与えたのです。その時、私は女に生れた方がよかったと、しみじみ思いました。色々美しい着物を着られるし、お化粧も出来るのと子供心にも感じました。私は生

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

或は明紫かグリーンのコートを着て蛇の目の傘をさした方に心をひかれます。でも、このような人は少いですね。男の方でも、和服に角帯をしめ、白足袋で草履をはいた人、下着にシャツやモ引を着てない人、身長が高く、がっちりした人か中ぶとりの人が好きです。同好の方のお便りをお待ちしております。(泉生)

世界画報、本年五月号に「一家を支えるママの髪」として特写が載せられていましたが、これは練習によって得られたものですが、この写真から連想せられるのは非常にサディスティックなものだということです。サン曲芸団のサン夫人は、天井から下った綱に自分の髪を縛りつけ我身は宙に浮いて、その重みのために眉毛がつり上り頭髪の生際は脱げんばかりになっておりました。頭の皮が剥がれないものだと思心するばかりです。どうか誌上にも、このような毛髪の宙吊りを載せて下さる様おねがいいたします。(K・S生)

私の「エネママニヤ」なる告白文を十月号に載せていただきまして誠に有難うございます。上手な

【G】組 緊縛フオート

判紙焼付	一枚一組	一五〇円
中画焼付	五枚一組	六〇〇円
大印	十枚十組	一〇〇〇円
G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

挿画を作って頂き、妻と二人で「これが僕、これが前だよ」と大笑いしてしまいました。あの文中ダマリン式浣腸器と私が書いたのは、ダンマン式浣腸器の間違いでした。お詫び申し上げます。読者通信でも何人かの人達が書いておられるように私も心から浣腸特集号の発行を望んでおりますが、どうも到底、実現が望めそうもありませんので、私は今までのバック・ナンパーを買い求め、浣腸関係の記事のみ切抜いてスクラップ・ブックを作りました。それでも結構

六、七十編の告白文や小説、通信等が集り、大いに満足しています。読者の方の中にも文通希望者が大勢おられることと思いますが、お互いに住所が分りませんので文通が出来ないのは非常に残念です。何んか良い方法はありませんか。

(清水暗星)

都会に出て来て初の冬ですが編集部及び全国の諸兄の皆様は御変りない事と思います。僕の拙い文を十二月号に早速出して頂いて、とても嬉しく思っております。しかし乍ら、同好の友を得るため文通や交際をしたいと思っておりますが、住所が記載されておられませんので、どうしたらそれが実現出来るのか分りませんから御教示下さい。同好の方々の多いのには気を強くしましたが、右のようなわけで少なからず落胆したことは事実

です。十二月の、黄色オラミ誕生と「無頼の海」は、とても興味がありません。サドとマゾ、ホモと女装、権とアクロバット等々に、異常な関心を寄せる僕だけに、もっと沢山の男性の記事や写真を載せて下さい。僕と交際して下さい。人は僕の良き理解者であり協力者であると思つて嬉しく思います。お便り下さい。それから、清水ふんどし男、様、八王寺、柿沼吾郎、様、A・T生、様の御交際を望みます。清水ふんどし男、様には僕の緊縛写真を差上げたいと思つています。八王寺、柿沼吾郎、様、アクロ、キヤルマタ、タイツに関心ある僕に、御集めになつてゐる総ゴムのキヤルマタ、タイツをわけて下さい。A・T生、様はマゾだそうですが、僕でよかつたら貴方様を完全なる奴隷として僕に服従させたいものです。僕は

女体『浣腸風景十二態』

(9×13cm) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

女体浣腸連続フोट

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 愛川悦子嬢

○浣腸フोट

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

サド傾向もありマゾ傾向もあります。何れも反対の立場を考えると単なる片方のみの傾向の方より変つた事が出来る自信があります。研究のために、よろしく願ひします。いづれにしても夢で終らず実現したいと思つております。今後とも、よろしくおねがいします。(瀬戸裕)

小生は、ここ三カ月ほど前から本誌愛読者ですが先日、数年前の旧号を購入しました。最近のものに比べて当時の方が積極的で充実していたように思います。勿論、個人の主観です。又、中途で一時休刊された様子等、色々な事情はあると思いますが、唯、いえることは昔の方がサド、マゾの割合が公平に掲載されていたように思います。最近のは殆んど九割がサドのものです。これは、私のようなマゾには全く残念なことで、読者数はサドの方が多いでしょうが、サド的のものには他にも読物があり(勿論

相当程度が落ちるが)マゾ的なものは本誌の意味で本誌だけで、且マゾには熱心な人が多いのですから、せめて二、三割はマゾものをに入れて頂きたい。次に左記のような写真を、是非おねがいしたいと思ひます。二十九年七月号の写真「被虐モデルの出現を待つ……」は全く素晴らしい。この写真と同じようなものを、この次には、もう少しカメラ・アングルを低くして但し、望遠レンズ使用のこと(普通だと足ばかり大きく実感が薄くなる(高さ五十センチぐらいの処から)そしてモデルの視線は、はつきりとカメラに向けて丁度、写真を見た時、自分が跪いて頭を上げると、上から冷い視線を浴びたような感じを受けるようなものをおねがいします。尚、前記号の同じ左頁の方の写真では相手の男の姿がないのが残念です。今度は、あのようなもので男の姿を入れて下さい。又、写真は、もう少し鮮明にして貰いたいと思います。以

上、勝手なこと申し上げましたが是非、おねがいします。尙、最近週刊誌等に悪質な中傷記事がありました。我が方の貴誌に対する信頼と支援に、どうか自信を以て進んで下さい。終りに貴誌の発展を心から祈ります。(東京A・H生)

○ 姫馬痴人、鞍良人、湖田平雄、

沼正三、馬場好男、東京のT・S生、東京の三上伏夫様へ。秋いよいよ、たけなわとなりました。皆様方、益々御壮健、ほんとうに芳賀の極りに堪えません。わたし事世にも得難いマゾ男性を悦虐の対象に飼育することが出来、そしてそれを自分の奴隷として思うがままに責め、さいなみ、且、プレイすることによりまして、得もいわれない恍惚の陶酔感を味わっているのだと思います。この中から私の悦虐の体験を私のまづい挿画と共に、しばしば発表して来たのをごさいます。掲載して頂くことが出来ませんので、とても残念に存じております。でも、わたしは今後、日頃の男性マゾ諸氏の絶大な要望に応じて発刊されるでありましようところの「マゾ特集号」「馬化白書全集」「KKスクラッブ集」等には必ず掲載していただ

いて全国のマゾ男性の上に君臨いたしたいと存じておりますから、皆様の御尽力によりまして一日も早く「マゾ特集号」「馬化白書全集」「K・Kスクラッブ集」等、マゾものが挿画、又はフォト入りにて発刊されますよう、衷心よりおねがい申し上げます。

(三木恵子)

○ 愛読者の皆さん、お元気ですか。私も本誌あれば、毎日を楽ししくおくることのできる者の一人です。先日、「緊縛写真と緊縛画集」を手にし、その素晴らしさに、益々本誌への愛情を深めた次第です。欲をいうならば、以前によく見ることのできた「猪吊り」が最近みられなくなることが少々さびしい様な気がするので。こんな風に書けば、私が大変なむごいしうちを好む者の様に思われることだろうと考えますが、決してそうではありません。これはマニヤのコレクションとして、いろいろのものをはしがるだけのものなのです。私自身は、今のところ、肉体的にはあまりひどくなく、きずつけない程度で、むしろそれに精神的な屈辱を加えたプレイを好みま

甲斐仁参案「涙のダイヤモンド」 略号 (なみ)

四馬孝画

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○ 胃の洗滌

○ ヒマシ油責

甲斐仁参案「涙のダイヤモンド」 略号 (かん)

四馬孝画

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○ 申し責 ○ 苦悶のコルセット ○ 浣腸責

よくひかれるせいか、鼻いじめやお隣いじめ等には大変興味を持っております。その他アームス(浣腸のプレイを含めて)にも大いに関心をもっております。誌上では「足フェチと責」の山川正人氏や「浣腸の記事に寄せて」の岡崎春江さんなどは、とても心強いような気持で読ませて頂きました。私は足にも関心があります。それ以上に女性のほっそりとした、あのくびすじに対する愛着がつのいのです。愛読者諸氏は如何ですか。古川裕子さん、今どうしていらっしゃるでしょうか。本誌上に登場し、あざやかなマゾ女性の印象をなげかけていった「すばらしい人」。誌上のあなたに、泣きたいような、せつない想いで接したのも、おそらく私だけではありません。

○ すまい。今、この広い空のどこでどんな風にいらしていらつしやるだろう。心からあなたの幸福を祈ります。絹川文代さん、貴女はすべての魅力をもっている人。「美貌汚辱」は私を長い間、夢の中に遊ばしてくれました。乳房の清純さすらつとびた脚線の美しさ。貴女は、どんな有名スターよりも魅惑にとんでいきます。ぜひ、一度誌上に、何かを書いていただけたらと思うのですが如何でしょうか。

(広島 沢木雪二)

○ K誌の発展、大いに喜んでおります。多くの読者の方から、もっと積極的な声の読みますが、矢張り編集子の云われる様に現在の行き方が一番良いのではないかと思います。絶対休刊のないよう

続刊して頂き私達の夢をかなえて下さい。横浜の山上武一氏の御意見賛成です。縛り方四十八手の図解等は是非お願いしたいものです。私はサド・マゾ両方持っている者です。同好の方文通御願います。東京新宿の古屋喜代子氏、大阪の黒山憲三氏、光沢登志子氏お便り下さい。(大阪 山田武一)

○ 小生は貴誌を初めて拝見し(臨時増刊号SADO特集第三集)多分の興味をひかれたのでお便りします。グラビアの緊縛写真は仲々िकास出来栄えですがと思いましたが。小生の好みから云えば、絹川文代嬢の「脱し得ぬ拘束」が最も気に入りました。特に股をひろげてふんばった正面像と立て膝をした処。柱にしばりつけられていたのはつまりませんでした。「友愛の表現」「狂花の戯れ」といった二人出のは案外つまりません。全然、力が入っていない感じがします。やはり、かえって一人のポーズの方が迫力が生々しく出せるのではないでしようか。絹川嬢「流れ落ちる美線」はワキ毛がもつと毛深いいと良いのですが。画は着想は良いのですが、もっと精密な線のこまかい描き方をしてほしいと思います。

ました。さて、小生の傾向としては、サド或はマゾ的要素は薄くフエチズムのほうが強いです。それも女のズロース腰巻専門というフエチとしては、最も初等科的正統派です。それで写真も、そういう方面を強調したものを少し加えてほしいのです。以上、感じたままで。(村山生)

○ 美加輪生に一言おわびいたします。十一月号誌上にてお呼びかけいただきましたが、やむをえない事情により指定の場所へ行くことができませんでしたので誌上にておわびいたします。なお後日をおためてお呼びかけ下さい。ただし、時間を午前中にしていただきたい。美加輪生の通信には、小生とイメージが同じであるとありましたが、若干の相違点がありますので参考までにのべますと、小生の場合、婦人下着にあこがれはもっています。あくまで女性に強制されて着用するという点です。よって下着の平常の着用とか蒐集等はいたしません。パンティやメソスバンドを女性によって着用を強制される点に屈辱を感じる次第です。したがって新しいものよりも、汚れた下着を着用してお仕置

緊縛フォト新作発表

大手札型印画紙 焼付
各組三枚一組 二五〇円

聖壇の裸女

△モデル

絹川文代△

開股三番勝負

△モデル

大塚啓子△

カーテンの翳

△モデル

大塚啓子△

開股三番勝負

△モデル

大塚啓子△

艶姿色模様

△モデル

絹川文代△

浴場の欲情

△モデル

大塚啓子△

開股三番勝負

△モデル

大塚啓子△

いけにえ

△モデル

絹川文代△

開股三番勝負

△モデル

大塚啓子△

のぞき見

△モデル

絹川文代△

開股三番勝負

絹川文代△

をうけることを好むしだいです。次に編集部にお問い合わせいただくことがあります。それはマゾフォト出演希望者は申込んで下さいとの記事がありました。この場合、出演希望者は大阪迄出向くのですか、それとも出ばっていただけるのですか(たとえば東京、名古屋といった地点に)その点について誌上にておしらせ下さい。出演を申し込みたいが大阪迄出ていくのでは無い点でまよっている人(小生もそうです)もあるかと思いま

○ 特集号、普通号共、最近登場の絹川文代嬢は全く素晴らしい人です。すので、おしらせ願いたいと思います。出張願えれば小生も出演したいと思っています。(名古屋 酒井二三夫)

△編集部より△どのような名演技をされる大スターか存じませんが、お脳の方が一寸ヨワクないかと心配です。それに多額の出演料を請求されても困りますから謹んでお断りしておきます。

美貌とその姿態は、今までにない
雰囲気を出しています。やはり写
真は、美しさとアイデアが生命な
のですから、モデルの方も先ず美
しいということが大切です。絹川
嬢は、その点、身体のだの部分を
とってみても、瑞々しい美しさに満
ちています。妖艶、可憐といった
言葉が、その全身から、ほかほか
と匂い出しているといっても過言
ではありません。私は誌上に颯爽
として登場している絹川嬢に全く
参ってしまいました。サド特集号
のグラビアでいえば、巻頭の椅子
に座った縛られポーズの脚線の美
しさ。輝くばかりの脛の白さ。華

美受難に於ける、眼、唇、いため
つけられた鼻、すべて神々しいば
かりの美しさに満ちています。脱
し得ぬ拘束の後手にしぼられた手
首、指の美しさ。今までに、これ
ほどの緊縛モデルの美しさという
ものを見たことがありません。ど
うか、一度でもよいから、自分の
手で絹川嬢を縛り上げてみたい。
いや、そういう機会を得たいもの
だと念願します。絹川さん、この
私の切ない願いをきいて頂けませ
んか。お返事お待ちいたします。
(神戸 左海生)

野原美喜夫様、私の名を覚えて

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号
しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号
しん2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号
しん3)

☆全裸縛り(略号
しん4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号
しん5)

五枚一組 三五〇円

☆股間しぼり(略号
しん6)

四枚一組 三〇〇円

いて下さって感謝に堪えません。
さて早速、本論?に入りまして、
旧号の「禪美作品」からアイデア
やイメージを拝借して構成した私
の「脱腸帯幻想(又は画想)」を
御紹介しましょう。三十一年十二
月号「少年期」(母と子の手紙)
より――。相撲団のけいこ場
では、十四・五才の者ばかり成長
盛りの少年力士達の猛げいことが展
開されている。六尺、又はズツク
の固いまわし只一本だけの裸身が
烈しくぶつかり合う。投げ倒され
ては起き上り、起きては投げられ
て、受身の訓練や、スタイル(特
に禪美をよく見せる為の)の矯正
をきびしく施されている少年の息
は荒々しく、はずんでいる。又、
特別の柔軟体操でアクロの様な姿
態を強制されて、あどけない顔を
苦しそうに紅潮させる者、まわし
をかけなおされている者等々……
と、突然、お座敷からの電話で、
けいこ中の「少年力士」花吹雪、
は名指しで出頭を命ぜられる。直
ちに入浴させられ、汗まみれの全
身を洗い清め、からだ中すみずみ
迄オイルで磨きあげられてお座敷
まで連れて行かれる。途中、再び
けいこ場の中を通らなければなら
ない。同輩達の不審と好奇を混ぜ

た視線が、オイルでつや出しされ
た「花吹雪」を一齊に迎送する。
座敷の中央に半円を描いて、親方
客(私の分身?)専属の写真師
が三人で何事か打ち合わせており
部屋の前、ふだんはまわしな
どを入れる竹のみだればこには各
種の矯正用のバンドや革帯が並べ
られてある。命ぜられた如く不動
の姿勢、大声で自己紹介をさせら
れると親方から、そこにある(と
指して)各種矯正帯を着締して写
真に撮られることを云い渡される
ためらいがちの「花吹雪」の尻を
平手で打って「万才開股」の姿勢
をとらせると、先ず脱腸帯が下腹
部にびつちりと締められて早速撮
影が開始される……。更に次々と
着脱させられ、或いは種々の動作
やポーズを命ぜられ乍ら、みるか
らにのびやかな成長期の少年の光
沢ある姿態は幾葉ものフィルムに
収められて行く……。脱腸帯では
室内撮影が終わってから着締のまま
戸外へ連れ出され、屈伸、開股、
歩行、走行、跳躍等の動態までも
詳細に撮しとられる。こうして、
カメラの前に全身を余す処なく露
呈させられている十五才の少年力
士「花吹雪」の、可愛らしい丸顔
は、すっかり紅潮して羞恥の様が

ありありと浮き出ている。きれいに刈ってさっぱりとした坊主頭が一そうの、ういういしさを感ぜる……。(杉俊夫)

風の冷さが身にしみる様になりました。皆様、如何お過ごしですか。一人の友もない小生にとっては、やるせない毎日です。宿直の時間ぞ眠れぬままに自縛で慰めてはいるものの実に味気ないものです。名古屋に来てから早や一年を過ぎ友を求め続けましたが駄目でした。小生はSよりMの方なのですが、年も三十を過ぎて居るので仲々同性の良き友が見つかりません。と云って女性的な同性ではイメージが湧かず、ままにならぬものです。先日、テレビで武芸帳の捕縛術を見た時は、いささかショックを受けました。渾一本の青年が亀甲縛りになって画面一杯に写し出された時は、体中がジーンと熱くなりました。公共性の強いテレビであの様な場面を見られ様とは想いもありませんでした。あの日、以来もし自由になるならあの道場へ行って毎日あの様な縛りの実験台になりたいものと夢を見たりして居ります。小生は身体は立派ではありませんが、もし名古屋近辺のS

の男性の方が居られましたら御連絡下さい。小生もある程度、地位もある立場なので、決して御迷惑は掛けぬつもりです。海老責め、逆吊り、御望み次第です。少し位では音をあげぬ自信はあります。名古屋のS様、貴君の御希望に添えたと存じます。是非一度、御会いしたいと存じます。ではK誌の益々発展されん事を祈って筆をおきます。(瀬戸市 宇野)

テレビは家庭向けなので、縛り場面は少いが、中には秀逸なのがある。「風小僧」の主人公が少年の頃のもので、玉緒(女優名不詳)ですが最近も出演している)と風小僧が、吉田義夫扮する長者に捕われ、白鳥の玉の行方を問われ拷問される。吊し責め、焼け火箸、鞭打ちと続き、後手に縛られ石抱きの責めに合う。角石が乳の高さまで重ねられても、悲しげな表情だけなのはリアリズムに反するが更に鞭で背中を打たれて、玉緒が「お母さん」という音色はよかったです。少し古いが「フロンティア」で、白人の女と子供がインディアンに捕われ、前手縛りで馬に引っぱられ、ひきずりまわされる場面があった。NHKの「ニューヨーク

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

- | | | | | | |
|------|-----------|-----|--------|------|------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | モデル | 佐賀美智子嬢 | 三枚一組 | 二五〇円 |
| ES2 | 全裸悦虐集 | モデル | 須川 令子嬢 | 四枚一組 | 三〇〇円 |
| ES3 | 腎 羞 | モデル | 佐賀美智子嬢 | 三枚一組 | 二五〇円 |
| ES4 | 酒宴の弄者 | モデル | 佐賀美智子嬢 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES5 | 脱がされる娘 | モデル | 須川 令子嬢 | 五枚一組 | 三五〇円 |
| ES6 | あわや寸前 | モデル | 佐賀美智子嬢 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES7 | 剥れたスロース | モデル | 佐賀美智子嬢 | 五枚一組 | 三五〇円 |
| ES8 | 乙女のすべて | モデル | 花坂 道子嬢 | 七枚一組 | 四五〇円 |
| ES9 | 女学生の縛り | モデル | 須川 令子嬢 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES10 | 緊縛のベッドシーン | モデル | 佐賀美智子嬢 | 六枚一組 | 四〇〇円 |

物語」のシリーズの「失踪した証言者」とかいうので、ギャングの以前の情婦の若い娘が、誘拐され取壊し中のビルに監禁される。場面は短い、後手で肘、手首をきっちり合わされ、胸にかけた左縄がYの字になって手を縛り、足首にも縄をかけられ転がされていた。構図的な洋風の縛りの美しさがあつた。「怪傑黒頭巾」月影銀エ門の娘(女優の名をしりません)の(で)が役人に捕われ、蛇を使って責められたりする。たいしたことなし。ただやたらに拷問という言葉がでてくる。また子供や老婆が責められる場面があつたが、この方は鋭い。捕われた銀エ門の手下の裸体にくいこんだ縄は本縛りであつた。そのほか、形だけの縛りなら、時代劇のシリーズによくある。映画に移って「決戦オレゴン砦」はボスターだけ。中味は白人の女、守備隊長の夫人がインディアンから殺されかける場面だけでつまらない。「熱砂の女盗賊」がよかった。女優はエレン・スチアイトが、バルシャ地方の王侯の姫に扮する。男と共に女盗賊から吊しにあう。男は棒を使って腕を一直線にして吊され、エレンの手首

を縛られ吊される。演技的にリアリズムにかけるが、準推薦に属するだろう。そのほか姫の侍女が寝台に縛られ、足の裏を鞭打れる。つかまつた半裸の女盗賊たちが足首に鉄の鎖をかけられ、鎖は木の棒につながれていて、熱い砂の上に寝かされていたり、戦闘に傷つき出血している女盗賊の首領が殴られたりする。天然色シネマスコープ。男性責めでは「暴れ者」の

ランカスター、鞭打の執行器具が陰惨である。この映画ではジョン・フォンテンの看護婦が少年のお尻にペニシリンを注射をするシーンもある。ニュースにも面白いのがある。毎日ニュースの四〇〇号前後ぐらいの間に、腹部に穴を開け支鏡を入れて生きた人間の内臓を撮映している。肝臓や腸が写しだされ、呼吸の度に小腸のぬらぬらした塊がうごめく。腹切マニアや

内臓に興味のある羽村京子さん、いかがでしたか。(文川絹夫)

東京の皆川波留子様へ—私は現在、東京の或る商社会社に勤めておりますが、切腹に深い関心を持つてゐる者でございます。十月号誌上に掲載されました貴女の「女性切腹についての雑感」という記事を読ませて頂きまして非常に感銘いたしましたので、私の感想を申し述べさせて頂きたいと思ひます。貴女は「本当の切腹」という項で「形を主にした切腹では、形の美しさによって切腹を批判し、腹を切ることが主になっていると思われ、主には批判しなければならぬ」といわれ、畠山勇子女史の切腹等は「見事な切腹といえるかどうか」とおっしゃつておられますが、私も貴女の御説には全く同感でございます。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円

復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切▽
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切▽
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円

復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦唐第二集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第厳重包装の上急送申し上げます。御送金はなるべく現金書留か振替を御利用下さるようお願いいたします。

ます。女性が身だしなみよく切腹するためには当然、腹を切ることは二次的なものとなり、見事な切腹など出来るはずのものではありません。切腹を主体として見たときには、畠山女史の切腹等は決して見事な切腹とはいえないと思います。少くとも見事な切腹というからには、下腹部を十分に露わにし、そして深さは必ずしも腹壁を切断するまでには至らなくても、少くとも筋層の表面位までには達しており、しかも女性の場合ならば、少くとも二十五センチ以上は切り裂いていなければ見事な切腹とはいえないと思います。左脇腹まで真一文字に切れば、普通の体格の女性の方ならば、少くとも二十七、八センチは完全に切れる筈です。次に二項の「切腹の実験」の最後に「五分位までの深さの切腹なら、切腹しようと覚悟した人にとっては、それほど苦痛ではあり得ない事を確信いたしました」と、いつておられるのに、三項の「切腹の分類」中、「本質的切腹」の中で「本質的切腹では女性の場合、脂肪層が厚いので、広い範囲に引き廻すには浅い切腹でもかなり苦痛をとまうでしょう」とありますが、これはどういう意

味でございましょうか？浅い切腹が貴女のおっしゃる通りに、傷が脂肪層に止どまっているものであれば相当、大きく切っても苦痛はほとんどないのではないのでしょうか。逃れられぬ切腹願望から短刀で切腹したある女の人（当時二十五才）を知っておりますが、その人の話によりますと「短刀がよく切れたせい、刺した時も切る時も何の苦痛もなかった。むしろ厚い脂肪層を切つて行く時の気持は何に例えようもないほどいい気持ちだった」とのことです。その女の人は、五分の深さで約二十八センチも切つたのです。これだけの切腹をしたのにもかかわらず、何の苦痛もなく、むしろ非常な快感を覚えたということは結局、貴女の実験から得られた結論と符合しているように思われます。下腹部は他の部分と比較して表面の神経が粗であるために、貴女がおっしゃるように上腹部よりも感覚が鈍であるためだろうと思います。従つて苦痛を伴う切腹を望む場合は、どうしても筋層に届く程度の深さまで切らなければならぬということになると思います。次は切腹時の姿勢ですが、貴女も、そしてお友達の方も共に立腹を望んでい

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札（9×13）印画紙焼付

凌辱 略号（れん）

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号（よく）

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号（あめ）

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号（まき）

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号（きよう）

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号（ふさこ）

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号（くもん）

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号（もん）

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号（せつ）

3枚1組 二五〇円

行燈（アンドン）

愛川悦子 略号（あん）

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号（いた）

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号（ねや）

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号（ふと）

3枚1組 二五〇円

らつしやるのは、貴女がたの体の状態から考え自然だと思ひます。五尺位の背丈で体重四五—五〇キロといへば割合、肥つていらつしやるでしようから、座つて切るよりも立つた方が下腹部は張りがついて切り良いと思ひますし、両手切りの見事な切腹をする姿勢としては申し分ない姿勢であると思ひます。ただAさんは「下帯をした場合は、正座でもよい」ということをおつしやつておられますが、これは大変な発見であると思ひます。このことに關しましては一度誌上を通じて発表させて頂きたいと思つておりましたこととござい

ますが、問題は下帯の締め方です。Aさんは男の人が帯をしめる時のようなしめ方をされると書かれておりますが、そのようなしめ方をいたしますと、勢い、下帯が腰骨の上部にかかりますので下腹部の露出をさまたげるきらいがありま

す。下帯は必ず腰骨の少し下の方をしめた方がよいらしいのです。そういたしますと下腹部は全々邪魔されずに十分に張り出すことが出来、正座しますと下腹部は理想的に切りよくなりま

す。こうしますと刃を脇腹へ突き立てます時は左手の親指を以て左腰骨の直ぐ

内側のあたりを強く押しながら左方へ引っぱり、息を吸つてお腹をふくらまし刃を突き立てますと、五分位は楽に刺す事が出来ます。片手切りの場合は、このまま引けば良く、両手切りの場合は、一度刺した後に左手を添え刺し込み、そして右へ引き廻せば良いのです。そして、用います下帯はガーゼの様な細くて柔らかいものより、なるべく、女の方が帯の下へしめる、しっかりとした紐のようなもので二巻きに堅く締めた方が、この目的に適います。この方法は貴女ばかりでなく切腹なさろうとする女性の方の皆様に おすすめしたい方法です。切腹は、やはり張りのある下腹へ刃の先をブスツと垂直に突き立てた方が良く、この時の気持が切腹する時の大きな魅力の一つだと思ひますが如何でしょう。ともあれ、お二人が万全の準備と正確さを以て、お互いの腹を実際切り、貴重な実験をされたその熱意と勇氣には全く感服いたしました。又、何か御意見がありましたら、どうかぜひ又、お聞かせいただきたいと思います。

北原純子様へ、九月号の通信で

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第嚴重包装の上急送申し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

御病氣だったことを知り、案じております。現在では誌上で再び筆に接することができ嬉しく思いますが、しかし呉々も無理をなさらないで下さい。東氏も述べられておられるように御自愛第一、そしていつまでも愉しいムードを持つ佳い作品を発表して欲しいと念じております。藤山秀緒様へ、ブレイの烈しさに嗜血をなさったそうですね。大したこともないと思つしやつたものの、何んという愚

行かと私は腹立たしく、また悲しくなりました。貴女は孤高の悲劇を求めていらしやるのかも知れませんが、貴女のお蔭で人生の前途に光明を見出した人も厳存する以上、その貴女が自分の恣意から生命をすりへらすことが許されるでしようか。KKが存在する以上、女の生活は貴女だけのものではなくなつた筈です。貴女は生きなければならぬのです。貴女に力づけられた人達の先頭に立つて、貴

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

女自身は苛酷さに哭くような運命の中で、その命ずる処に従って生きなければならぬのだと思ひます。夜毎のブレイをやめてはと申しません。加減しろとは云えませんが、しかし、苦い生命を不必要に害わないように身体だけは大切にして下さい。もともと云いたいことがあるような気がしたのですが、これだけしか書くことがないように思ひます。本当に健康には御留意下さる様、お祈りします。(近藤一)

私の、つたない告白「マゾの散

歩から」を誌上に掲載させていただきまして有難うございます。実際に掲載されるとは思つていなかったもので、頁をめくりながら割烹着姿の挿画を発見して、びっくりしました。嬉しいやら恥ずかしいやらです。あの時は走り書きで文章もいい加減でしたが、大変よく直つております。ただし、エプロン購入の処では、経験からいうと女店員はオロオロしないので、むしろ積極的です。こちらはフエチとかマゾとか意識するわけですが、一般の女の人は男がエプロンしても「奥さん孝行でいいわ」なんて

申します。実は、今日もエプロンをして買物にいったのですが「いわ。男の人がエプロンをしてもちつともおかしくないわ。うちの人も、そのように手伝つてくれるといいのだけだね」なんていわれました。アメリカでは、男のエプロン姿なんか、そんなに珍しいことではないのでしよう。二カ月位前の毎日新聞に、新婚夫婦の揃いのエプロンの作り方なんていう記事がありました。そして、それには実際に夫がエプロンをして台所で手伝つてゐる紹介と、近い中に結婚するA子さんの話として、結婚したら、お揃いのエプロンを作りたいなんて談話がありました。このようにエプロンは現在では男が使用しても、おかしくないようになりました。ところが仮に女の下着を着ているのを見つかると思つて、態じやないかといわれると思うのです。私はエプロン・フエチです。先日新聞に、男こそスカートをつけるべきだというような話が出ておりましたが、私たちフエチには面白い記事だと思ひます。又一度春日さんを囲んでマゾ派の座談会なんか計画できないものでしょうか。(中瀬一夫)

特集号並びに普通号にて、私の希望するところを早速かなえて下さいましたのに、今日までお便りを延引いたしましたことを平にお許し下さいませ。さて十月号より掲載されています「或る倒錯生活」は、私は感謝感激、胸をつまらせ愛読させていただいています。別に私は女装するものではありませんが十分、その素質を持つてゐると思ひます。西村憲一氏が今後長く筆を揮われんことをおねがいします。尚主人公であるリエさんの御写真を御送附下されましたらこの上なく光栄に存じます。一度お会いしてお話したい位ですがしかし、それもありません。何故ならば私は養子なるが故です。私が一寸でも外出すると義父母たちが、なかなかのけんまくです。私は小心故、直ぐ、ちぢみ上り、その後は全く外出しません。それが現在の私を作り上げたのかしれません。私は自分の心を打明け、延は本誌以外にございませぬ。なにぞ、私のこの気持をお汲みとり下さいませようおねがいいたします。尚、週刊男性なる不良週刊誌に氣遅れせず益々、御発展下さるん事をお祈りいたします。(久米 森成生)